

リリカル龍騎ライダーズinミッドチルダ R—18

ロンギヌス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『リリカル龍騎ライダーズinnミッドチルダ』の18禁版です。

通常版の方を読まないとよくわからない部分があると思うので、できれば先に通常版の方も読んで貰えるとありがたいです。

※更新される内容次第で、タグも追加していく予定。

※サブタイトルに『IF』と付いている話は、通常版とは繋がらない内容になります。

※『☆』が付いている回が陵辱系、付いていない回が和姦系になります。

※通常版の作品タイトル変更に伴い、こちらもタイトルを変更しました。

# 目次

|                            |        |     |
|----------------------------|--------|-----|
| 二宮×ドゥーエ                    | IF     | 1   |
| 健吾×ラグナ                     | IF     | 9   |
| 雄一×ルーテシア&デイエチ              | IF     | 24  |
| クアットロ                      | IF (☆) | 45  |
| 湯村×ティアナ                    | IF (☆) | 54  |
| 二宮×溟                       | IF     | 64  |
| 夏希 (美穂)                    | IF (☆) | 78  |
| スカリエツテイ×フェイト               | IF (☆) | 100 |
| 雄一×メガルヌ                    | IF     | 108 |
| なのは                        | IF (☆) | 124 |
| アインハルト                     | IF (☆) | 141 |
| 雄一×デイエチ                    | IF     | 153 |
| ノーヴェ                       | IF (☆) | 167 |
| エドガー&吾郎×ヴィクトリア             | IF     | 178 |
| ダーイン×アリサ&すずか               | IF (☆) | 187 |
| スバル&ティアナ&夏希 (美穂)           | IF (☆) | 202 |
| はやて                        | IF     | 212 |
| エイミー                       | IF (☆) | 226 |
| ヴァイス×夏希 (美穂)               | IF     | 242 |
| 雄一×クアットロ                   | IF (☆) | 252 |
| 成瀬×????                    |        | 261 |
| 18禁版キャラ設定&キャラ解説① (ネタバレ注意!) |        | 274 |
| 浅倉×トーレ                     | IF     | 280 |
| ウエンデイ                      | IF     | 286 |

|                                    |        |     |
|------------------------------------|--------|-----|
| アリサ&すずか                            | IF (☆) | 297 |
| ジーク <sup>?)</sup> ンデ               | IF (☆) | 307 |
| ラルゴ <sup>?????)</sup>              | IF (☆) | 317 |
| シグナム <sup>△</sup> (?)              | IF (☆) | 330 |
| 夏希 (美穂) & ウエンディ                    | IF (☆) | 342 |
| なのは & フェイト & はやて & アリサ & すずか & その他 | IF (☆) | 349 |
| 二宮×ドウエ                             | IF     | 354 |
| スバル                                | IF     | 362 |
| 後日談集①                              | —      | 370 |
| ミカヤ                                | IF (☆) | 382 |
| 男複数×白鳥姉妹 (☆)                       | —      | 391 |
| エピソード・ <sup>???)</sup>             | 1      | 407 |
| エピソード・ <sup>???)</sup>             | 2      | 414 |
| エピソード・ <sup>???)</sup>             | 3      | 424 |
| エピソード・ <sup>???)</sup>             | 4      | 434 |

## 二宮×ドゥーエ IF

ミッドチルダ、某リゾートホテル……その内部に存在するプライベートプールにて、2人の男女が同じビーチチェアの上で向かい合っていた。

「本当に大丈夫なの？」

「……何だ急に」

白いシャツに黒い半ズボンを纏った隻眼の青年……名は二宮鋭介。

青いチューブトップに白いホットパンツを纏った金髪の女性……名はドゥーエ。

ミッドチルダで起こったJS事件……その裏で暗躍していた2人の男女は今、同じビーチチェアに座り込んで視線を合わせていた。ドゥーエは相手を心配するかのようない目。二宮は心外だと思わせるような鋭い目を。

「あなたも知ってるでしょう？ 私にはもう、あなた以外に頼れる人がいない事くらい」

「……何が言いたい？」

「鋭介……お願いだから、あまり無理はしないで」

ドゥーエが二宮の首元に腕を回し、正面から抱き着く。抱き着かれた二宮が不快そうな表情を浮かべるも、ドゥーエは抱き着いたまま離さない。

「私を1人にしないで……あなたにもしもの事があつたら、私は……」  
「……全く」

二宮は小さく溜め息をつき、彼女をゆっくり離れさせる。そして彼女の顎を指でクイツと上げた後……その唇に自身の唇を押しつけた。  
「——ッ!?! ん、うむ……ッ……」

唇同士の間で舌を交えているのか、クチュクチュといやらしい水音が鳴り響く。突然の行為に驚いたドゥーエが顔を赤くするのに対し、二宮は特に表情を変える事もないまま、真顔で彼女とキスを続けていく。それは愛する者同士が行うようなキスではない。ただひたすら、目の前の獲物を一方的に貪っていく猛獣のようなキスだった。

「ぶはっ……あ、う……」

「……お前に心配されるようじゃ、俺もおしまいだな」

10秒ほど経過した後、二宮の方から唇を放し、2人の舌を唾液の糸が繋ぐ。されるがままだったドゥーエが顔を赤くしている中、二宮は彼女の後頭部に左手を回し、再び顔を近付けて彼女と唇を合わせた。

「ちよ、待っ……ん、ちゅ……むう……ッ!？」

唇同士の間で舌が何度も熱く、何度も甘く絡み合う。この時点でドゥーエの思考が早くも溶けかけており、そこへ追い打ちをかけるかのように二宮はドゥーエの口内に自身の唾液を流し込み、彼女に飲み込ませる。

「ん、う……ぶはあっ」

唇が離れた後、ドゥーエの目はとろんとしたまま焦点が定まっていなかった。二宮はすかさず彼女の腕を引っ張ってビーチチェアに押し倒し、その上に跨るように二宮が押さえつける。

「ッ……鋭、介……!？」

「俺の事を理解したつもりでいるのか？ だとしたら心外だな」

「く、んう……!？」

二宮の右手がドゥーエの首筋に触れ、首から顎まで指でツウーとなぞっていく。それだけの行為が、ドゥーエの全身をビクビクと震わせた。

「俺がいつ死ぬ気で戦っているなんて言った？ こっちは元から死ぬつもりなんぞ毛頭ないんだよ。勝手な勘違いをして貰っちゃ困る」

「で、でも……」

「でもじゃない。そんなに俺の事が信用できないか？」

「!? 違う、私はただ……!!」

「お前は黙って俺に付いて来れば良い。余計な心配はしてくれな。そんな事をする暇があるなら、お前はお前のその能力を俺の為に役立てる事だけを考えろ」

「ッ……鋭介……」

冷たく、鋭い目付きで見下ろす二宮。見下ろされているドゥーエは

今もなお、そんな彼に対して不安な気持ちは消えずにいた。それに気付いた二宮はフンと鼻を鳴らす。

「……わかってない顔をしてるな」

「ツ……ああ!？」

二宮のがドゥーエの首筋に顔を寄せ、舌先でチロリと舐め上げる。ドゥーエの体がビクンと反応し、その隙に二宮の右手が彼女の青いチューブトップをずり下げ、豊満な乳房を露わにさせる。乳房の先端に存在するピンク色の小さな乳首も露わにされ、ドゥーエは更に顔が赤くなっていく。

「え、鋭介……!？」

「わからないなら、今からわからせてやる」

「ま、待って……はう!？」

二宮の右手がドゥーエの乳房へと移動し、指先で彼女の乳首を突つつくように触れる。乳首に与えられた小さな刺激は、ドゥーエの体を大きく震わせる。

「何だ、やけに可愛らしい反応だな。今までスパイやって来たんだろう？ その色気を使って」

「ツ……だ、だって……ここまでやった事なんか、一度もなかったから……!？」

「ああ、そういえばキスすらもさせなかったんだっけか……なら」「んひゃあ!？」

ドゥーエの乳房に二宮が顔を近付けていき、片方の乳首を唇でパクリと啜える。そして一旦唇を離し、そこから舌先でゆっくり乳首を舐め始めた。その間、二宮の右手がもう片方の乳房をゆっくり揉みだしだき、人差し指で乳首を摘まむように刺激する。

「ちゅぱ、れる……じゅるるるる」

「や、んう……はああつ!？」

唇で啜えられたまま乳首を激しく吸われ、ドゥーエの口から喘ぎ声が漏れる。その時、二宮は乳首を吸いながらも器用に右手を使い、彼女が履いているホットパンツのベルトを外し、ファスナーを降ろしてから彼女のホットパンツに右手をスルリと入れ込んだ。

「ちゅぱ……どうした？　これくらいの事が我慢できなくてどうする」

「え、鋭介エ……んむう!？」

二宮は再度ドゥーエに口付けし、口内で舌を絡ませていく。その間も二宮の右手はドゥーエのホットパンツの中に入れ込まれたまま、ショーツ越しに彼女の秘部を指先でなぞっていく。この時、ドゥーエの履いていたショーツは少しずつ濡れ始めていた。

「ちゅ、んむ、ぴちや……」

「ん、んうう……ッ!？」

ドゥーエのショーツが濡れている事に気付いたのか、二宮はそこからショーツをゆつくりずらし、今度は直接彼女の秘部を指で触れ始めた。それによりドゥーエの震えが更に大きくなったが、二宮は構わず指先で秘部の割れ目をなぞり、中指を割れ目の間に少しずつ侵入させていく。

(な、何で……こんなに上手く……ッ!!)

ドゥーエは内心、二宮にこれほどまでのテクニックで攻められるとは想定しておらず、ここまで気持ち良くさせられている事に驚愕していた。そんな彼女の意思に気付いているのか否か、二宮は左手で彼女の頭を固定したまま接吻を続け、右手の中指を彼女の秘部の奥へどんどん進めていく。彼の中指が侵入した事で、ドゥーエの膣内はきゆうきゆうと中指を締めつけており、その感触を合図に二宮は膣内を中指でゆつくり刺激し始めた。

「!?　ん、んん……んむうう!？」

ドゥーエの反応が更に大きくなっていくが、二宮は接吻したまま彼女を逃がさない。彼女の乳房に回した左手で彼女の乳房を鷲掴みにしたまま、右手の中指で膣内を更に掻き回すように刺激していく。するとドゥーエは全身を何度もビクビクさせ始め……

「んううっ!!」

電撃のような衝撃と共に、体を大きく震わせて絶頂に達した。その後はいよいよ二宮が唇を離し、顔が赤くなったドゥーエは荒くなった息を整えようと必死に呼吸する。

「はあ、はあ……鋭、介……!」

「まだ終わりじゃないぞ」

「ん、ああ……!?!」

ホットパンツとショーツが纏めて脱がされ、ドゥーエの下半身を覆う物が完全に失われた。そのまま二宮の両手でドゥーエの股が大きく開かれ、濡れに濡れた秘部を二宮に見られてしまったドゥーエは恥ずかしさのあまり視線を逸らしたくなった。

「ッ……そんな、ジロジロ見ないで……!」

「随分濡れてきたな。俺なんかの手で感じたのか」

「それは……あ、はあっ!?!」

ドゥーエの体が再びビクンと反応する。二宮が彼女の秘部に顔を埋め、秘部を舐め始めたからだ。秘部の割れ目を指先で左右に開いた後、そこから見える小さなクリトリスが二宮の舌先で少しずつ剥き上げられていく。

「いや、あ……そんなとこ、舐めない、で……ひやうう!?!」

ドゥーエが抗議の声を上げようと、二宮はお構いなしでクンニを続けた。皮の剥かれたクリトリスを舌先で何度も舐めてから唇で挟み込み、チュウチュウと音を立てながら溢れ出て来る雫を吸い上げる。そうする事で、雫の味が二宮の口内へと広がっていく。

「あ、あ、あ……はああっ!!」

二宮に女性の大事などころを舐められているという認識は、ドゥーエの体に早くも二度目の絶頂を訪れさせた。全身を震わせているドゥーエはビーチチエアに背をつけたまま身動きが取れず、そんな彼女を二宮が俯せの状態にさせた後、彼女のムツチリとしたお尻を掴んで上に高く持ち上げる。

「はあ、はあ……あっ……!?!」

俯せの状態だった為、ドゥーエの視界には二宮の姿が映っていない。しかし自身の秘部にほんの僅かに触れた熱いナニかの感触が、次に来るであろう快楽を予知させた。

「ま、待って鋭……あああっ!?!」

ドゥーエが顔を上げるより前に、二宮の突き立てた肉棒が彼女の割

れ目を押し開き、そのまま膣内へと侵入していった。その衝撃は凄まじい快感へと変換され、ドゥーエの全身にとてつもない速度で伝わっていく。

「あ、ああ、あっ……ッ!!」

「おいおい、まだ挿れたばかりだぞ。少しくらい持ち堪えてみせろ」  
「ちよ、ちよつと待つ……ひゃん!? あ、ああ、やあっ!!」

二宮はドゥーエの細く括れている腰を掴み、バックの体勢で彼女の膣内を蹂躪し始める。後ろから突かれ始めたドゥーエは喘ぎ声を我慢する事もできず、ただひたすら二宮に膣内を征服されていく。

(あ、熱い……銳介のが……私の膣内<sup>ナカ</sup>に……ッ!!♡)

「あ、ああ……はあ、ああっ!!♡」

膣内を蹂躪していた肉棒が、その奥にある子宮口を何度も突つつき続ける。そこへ更に二宮が背後から彼女の乳房を揉み続け、彼女に耐えようのない快感を与えていく。この時、ドゥーエは自分でも気付かない内に、二宮に蹂躪される快感から歓喜の表情を浮かべ始めていた。

「あ、ああ……はあ、ああっ!!♡」

「ドゥーエ」

その時、後ろから蹂躪していた二宮がドゥーエの耳元で囁いた。

「どこに出して欲しい?」

「ッ……!!」

その言葉には、とてつもない魔力を秘められていた。

その魔力は、ドゥーエを三度目の絶頂へ至らせる引き鉄だった。

その瞬間から、ドゥーエは我慢するという選択肢を完全に投げ捨てていた。

「出して……中に出して!! 私の中に、いっぱい注ぎ込んでえっ!!」

彼女が懇願すると同時に、二宮が彼女の腰を掴んで引き寄せる。それにより膣内を蹂躪していた肉棒が子宮口にその亀頭を押しつけ  
……

ビュルツビュルツビュルルルルツ!!

「あ……ああああああああああああっ!!♡」

龟头と子宮口がキスしたまま、熱く粘っこい精液が子宮内に注がれ始めた。三度目の絶頂に到達したドゥーエは背中を大きく反らし、二宮に腰を掴まれた状態でビクビク体を震わせる。

(ああ、出てる……鋭介のが、いっぱい……ッ!!)

二宮が自身の体を存分に犯してくれた。

自身の体で興奮してくれた。

自分は彼を満足させる事ができた。

(あつたかい……気持ち、良い……!!♡)

自身の下腹部の中で広がっている精液の暑さが、それを証明させている。今のドゥーエにとっては、それが何よりも喜ばしい事だった。

「ドゥーエ。俺はお前をどこにも逃がすつもりはない」

「ッ……あん♡」

二宮は後ろから彼女を抱き締めたまま、一滴残らず彼女の子宮内に注ぎ続ける。入り切らなかつた精液が割れ目から溢れ出し、ドゥーエの太股を伝って足元へと垂れ落ちていく。

「お前は俺の物だ……黙って付いて来い」

「はあ、はあ……はい……♡」

二宮はあくまで、ドゥーエの事を手駒としか見なしていない。

しかし、ドゥーエは別にそれでも良かった。

形はどうあれ、二宮は自分を必要とされている。

今のドゥーエにとっては、その事実だけわかっていれば充分だった。



## 健吾×ラグナ IF

ミッドチルダにて暗躍していたマッドサイエンティスト——  
ジェイル・スカリエツティ。

疑似ライダー“オルタナティブ”の量産という彼の野望は、機動六課の魔導師達、そしてその機動六課に味方する仮面ライダー達に敗れた事で阻止された。

未だミラーワールドのモンスターは発生し続けているものの、その後は仮面ライダー達の手で何とかミッドの街は守られ続けていた。

もし……もしもだ。

もしその戦いが終わるまで、“ある少年”が無事に生き延びていたとしたら？

これは、そんなあり得たかもしれない未来における、ほんのちよつとした一幕である……

ジリリリリリリ!!

「ん……」

早朝、グランセニック家。ベッドの上で布団に包まっていた少年……鈴木健吾は眠たそうな表情のまま、うるさく鳴り響いている目覚まし時計へと手を伸ばす。目覚まし時計の音が止まり、健吾は現在の

時間帯が朝である事を認識する。

「……朝か」

健吾はゆっくり上半身を起こそうとした……が、ここで彼は気付いた。下半身に違和感を感じる。おまけに布団も妙に大きく盛り上がっている。その原因に、健吾は何となく予想がついていた。

「うっ……まさか」

下半身から来るほんの小さな刺激に、健吾は体をビクツと反応させつつ、布団の端っこを掴んでから勢い良く捲り上げる。その捲り上げられた布団の下には――

「んちゅ、あむ……あ、ほはようへんほはん（あ、おはよう健吾さん）」

――健吾の履いているズボンを脱がし、大きくそり上がった健吾の肉棒を口で頬張っている、下着姿のラグナがいた。ラグナは笑顔で挨拶しながら、目の前でビンと反り立っている肉棒を口内でペチャペチャと舐めしゃぶっている。そんな彼女に、健吾は苦笑する事しかできなかつた。

「……またなの？ ラグナちゃん」

鈴木健吾……またの名を、仮面ライダーエクシス。

彼はかつて、ある戦いで死にかけようとしていた。

傷つき、倒れていた自分を拾って助けてくれたラグナ。

彼女はこの時、実の兄との仲に擦れ違いが生じていた。

兄妹の擦れ違いは、自分がラグナの下にいた事で起こってしまった。  
いた。

その事に気付いた健吾は、自分がここにおいては兄妹が仲直りできない  
と思う、自ら彼女の下を去ろうとした。

健吾は恩人であるラグナの平穏を守るべく、彼女に危害を加える危  
険性があった男——二宮銳介こと仮面ライダーアビスを倒すべく、  
彼に戦いを挑み……そして返り討ちに遭った。

アビスに返り討ちにされた直後、たまたま遭遇したジェイル・スカ  
リエツティ——オルタナティブ・ネオの襲撃を受け、追い詰められ  
た健吾は命の危機に瀕した。

そんな彼を救ったのが、2人の仮面ライダーだった。

手塚海之——仮面ライダーライア。

白鳥夏希——仮面ライダーフォーム。

2人の助力もあり、健吾は無事にラグナのいる現実世界へ生還する事ができた。

戻って来た直後、健吾はラグナから強烈なビンタを貰い受け……そして。

『嫌だよ、健吾さん……私の前から、いなくならないでよ……ッ!!』

ラグナが涙を流しながら言い放ったその言葉は、今でも健吾の記憶に残っている。

健吾は自ら彼女の下を去ろうとした己の行いを恥じた。

兄妹が和解できれば良いのではない。

そこに自分もいなければ、何も意味がなかったのだ。

それからというもの、健吾は命を救ってくれた手塚達に感謝し、機動六課の面々とも手を結ぶ事となった。

それは大人を信用できずにいた健吾が、初めて大人を心から信用するようになった瞬間でもあった。

ナンバーズの襲撃。

手塚と雄一の再会。

夏希と浅倉の因縁。

それぞれの戦いが繰り広げられる中、健吾はモンスターガジェットの大軍をひたすら破壊して回った。

今度こそ、ラグナ達の平穏を守り抜く為に。

もう二度と、間違った選択をしない為に。

それは決して、無傷で終わられる戦いではなかった。

それでも健吾は生き延び、グランセニック兄妹の下へと帰還した。

安堵の表情で抱き着いて来たラグナを、健吾は今度こそ、真正面から抱き止める事ができたのだった。

『ただいま……ラグナちゃん』

『お帰りなさい……健吾さん!』

そんな戦いから数年の時が経過し、そして現在に至る……訳なのだ  
が。

「朝から急にやるなんて、ラグナちゃんも随分……ッ……積極的に、  
なったね……!」

「だって、昨日は相手してくれなかったじゃないですか……ちゅ、じゅ  
るる」

この数年間で、健吾とラグナは大きく成長していた。

健吾は身長が大きく伸び、筋肉もついた事でより男らしい体つきに  
なった。かつては童顔だったが、今では爽やかなイケメン顔に変化し  
ている。

ラグナも健吾ほどではないが身長が伸び、出る所は出て引つ込む所  
は引つ込んだ、女性らしく美しいスタイルを手に入れた。また、かつ  
て失明していた左目も現在は既に完治している。

2人のそんな成長は、本来なら大変喜ばしい事なのだが……現在、  
健吾はある事で苦労しつつあった。

「う、くっ……ラグナちゃん、それ以上は……!」

「ん、ぴちゃ、れる……れほうへふは、ひっはいはひえふははい（出そ

うですか、いっぱい出して下さい)……♪」

この数年の時を経て、ラグナは健吾の事を異性として認識するようになっていた。

もつと彼に甘えたい。

もつと彼と一緒にいたい。

もつと彼の笑顔を見ていたい。

そんな気持ち日が日に増していったラグナは……ある時、なんと自分から健吾をベッドに押し倒した。

突然の事態に健吾の思考が混乱する中、ラグナはあつという間に彼の初めてを奪い取り、自身の初めてを彼に捧げてしまった。

その一件を切っ掛けに、健吾は初めてラグナが自身に向けていた異性としての気持ちに気付き、彼女の自身に対する好意を拒む事なく受け入れたのである。

それ以降、2人はこうしてセックスを行う機会が少しずつ増え始めた。しかし、セックスのやり過ぎによって健吾のライダーとしての戦いに支障が出ては流石にマズい為、現在はやり過ぎない程度に気持ちの良いセックスを行うようにしているのだ。

「じゅぷ、ちゅ、ずちゅるるる……ー!」

「ぐう、あつ……ラ、ラグナちゃん……出るっ!!」

ブビュツビュツビュルルウツ!!

「んむ、う……んん……♪」

限界に達した健吾の肉棒が、ラグナの口内で精液を暴発する。口内で発射されたラグナは一瞬驚きつつも、慌てず冷静に精液を舌で受け止め、咽ないように少しずつ自身の喉奥へと流し込んでいく。そして健吾の肉棒に付着している残りの精液を、舌で綺麗に舐め取って掃除する事も忘れない。

「じゅるる……ぷはっ。健吾さん、スッキリできた?」

「はあ、はあ……相変わらず凄い舌使いだね、ラグナちゃん。ヴァイスさんが見たら何て言うか……」

「大丈夫です、お兄ちゃんは武装隊の仕事で今日1日帰って来れませんか。お兄ちゃんにもこっちの心配はしなくても大丈夫って、予め

伝えておきましたし。ノープロブレムです♪」

(……最近のラグナちゃんがちよつぷり怖い)

ごめんなさいヴァイスさん、あなたの妹さんと気持ち良くやらせて頂いております。そんな事を思いつつ、健吾は目の前のラグナへと視線を向ける。

(ほんと……良い体に育ったなあ)

白いブラジャーと白いショーツを身に纏ったラグナの体は、その素肌が綺麗な肌色で彩られている。スラリとした細い手足や腰の括れ、この数年間で大き過ぎず小さ過ぎないサイズに成長した2つの乳房は、健吾を興奮状態に陥らせ更にその気にさせていく。その視線に気付いたのか、ラグナは小悪魔のような笑みを浮かべて舌舐めずりをしてみせる。

「どう、健吾さん。まだ続ける?」

「……散々その気にさせておいて、僕が断ると思う?」

「あつ……♡」

吸え前食わぬは男の恥。そう言わんばかりに健吾はラグナをベッドに押し倒し、思い切つて彼女の綺麗な肢体を貪る事にした。

「あ、その前にちよつと口をうがいさせてね。この状態だとキスができないので」

「へ? ああ、うん」

しかしやはり、行為中のペースを掴んでいるのはラグナである事に変わりはないようだった。

「んんっ! はあ、あ、ああつ……健吾、さ……んん……っ!」

「ちゅ、ぴちや、れろれる……」

その後、下着を上下両方剥ぎ取られたラグナは下半身を高く持ち上げられ、まんぐり返しで股を開かされた状態のまま健吾に秘部を舐めしやぶられていた。指で左右にクパアと開かれたピンク色の割れ目は、溢れ出る愛液と健吾の唾液で光沢を帯びており、プックリと剥き出ているクリトリスは舌で何度も舐められ刺激を受け続ける。

「ああ、ラグナちゃんのこと、凄く美味しいよ……ちゅる、じゅずずず」「はう!? んあ、あ、健吾さんの舌が入って来る、う……!」

割れ目の奥深くに舌が侵入していき、溢れ出る愛液を健吾が口を細めて吸い上げる。舌を入れられながら吸われると弱いのか、ラグナは身動きが取れない状態で全身を何度もビクビクさせ、それを見た健吾が唾液にまみれたクリトリスを一瞬だけ甘噛みする。

「く、んあああああつ!」「んぶ!? ん、じゅず、じゅるるる……!!」

その甘噛みで絶頂に至ったのか、甲高い喘ぎ声と共にラグナの秘部からプシュツと潮が吹き上がる。それでも健吾は秘部から唇を離さず、嘔き出て来る潮を吸い上げるようにして必死に飲み続け、潮吹きが収まってからようやく健吾が秘部から唇を離れた。

「はあ、はあ……」

「ふう……ラグナちゃん、気持ち良かった?」

下半身をベッドに下ろされ、汗だくで呼吸を整えようとするラグナ。そんな彼女の姿は実に官能的で、健吾はすぐにまた彼女に襲い掛かりたい衝動に駆られていく。

「うん……もつと、もつとして……♡」

「ん、了解」

「あ……はあつ!」

本人の許可も得られた為、健吾はすぐまたラグナを捕食しにかかると。ラグナの美乳に食いついた健吾は、ちよんと可愛らしく突き出ているピンク色の乳首を舌先で突つき、唇に挟み込んで吸いついた。吸いつかれたラグナが喘ぐ中、健吾は唇に挟み込んだ乳首を舐めながら吸い続け、右手でもう片方の乳房を優しく揉みしだく。

「ちゅぱっ……それにしても、気付かない内にだいぶ大きくなったよね。ラグナちゃんのおっぱい」

「んっ……だって、健吾さんがいっぱい揉むから……健吾さんのせいだよ……?」

「そっか。じゃあ、責任取らなくちゃね」

「あう……!」

乳首から唇を離れた健吾は、両手でラグナの乳房を優しく揉みしだきながら、彼女の首筋に強く吸いついてキスの跡を小さく残した。続けて2つの乳房にも片方ずつ順番に吸いつき、まるで彼女の体は自分の物だとも言えるかのように、彼女の綺麗な体にキスの跡をいくつも残していく。

「誰にもラグナちゃんは渡さない。ラグナちゃんの心も体も、もう僕の物だ」

「あ、ああ……ッ!」

健吾は首筋や乳房だけでなく、下半身の太股や内股にもキスの跡を残していく。その途中、仰向けだったラグナの体をうつ伏せにしてからお尻を高く持ち上げ、ヒクヒクしている秘部の割れ目にフウと息を吹きかける。

「いつ見ても可愛いお尻だね。スベスベしてる」

「んう、健吾、さ……ああっ!」

ラグナのお尻に後ろから顔を埋めた健吾は、再び割れ目に唇を触れさせ吸いついた。そのまま何度かキスを繰り返し、割れ目に人差し指を優しく突き入れて膣内を掻き回していく。

「あ、あ、駄目、イク、イツちやう……!!」

「良いよ。そのままイツちやえ」

「くう……ひやあうっ!!」

指で膣内を厭らしく掻き回されたラグナは、絶頂してお尻がガクガク震え出す。そんな彼女のお尻にも健吾によってキスの跡が付けた後、ラグナはそろそろ我慢の限界が近付いて来た。

「ん、う……健吾さん……私、もう……♡」

仰向けの体勢に戻ったラグナは、自ら股をM字型に大きく開き、少

し恥ずかしそうに顔を赤らめながらも秘部の割れ目を指で左右に開いてみせた。割れ目は今もなお溢れ出る愛液で充分に濡れ切っており、それを見た健吾もいよいよ締め行為に入る事にした。

「わかった。ちよつと待ってて、今ゴムを着けるから——」

「健吾さん」

ベッドの近くに置いてあるケースから、コンドームを取ろうと手を伸ばす健吾。そんな彼の手をラグナが掴んで制止させる。

「お願い、このまま挿れて……生でも良いから……!」

「え? でも、そのままやったら妊娠して……」

「大丈夫、今日は安全日だから……それに、念の為ピルも飲んでおいたし……!」

「……用意が良いなあ」

「それに……生の方が、すつごく気持ち良いんだって」

ラグナも既に避妊の準備は完了済みのようだ。そんなラグナに感心しつつも、健吾はラグナが指でクパアと開いている秘部の割れ目に目が行ってしまい、それと共に彼の下半身の肉棒も徐々に肥大化していく。

「健吾さん……私と一緒に、気持ち良くなろう♡」

「……わかったよ、ラグナちゃん」

こんな状況で懇願されれば、流石の健吾もこれ以上我慢はできなかった。ラグナの股の間に移動した健吾は、固くなった自身の肉棒を彼女の秘部に近付け、先端の亀頭をゆっくりと割れ目に食い込ませていく。

「じゃあ、挿れるよ……!」

「ん、来てえ……はああっ!!♡」

「く、うおっ……!!」

膣内へ一思いに挿入され、ラグナの口から喘ぎ声が漏れ出した。健吾もあまりの締め具合から思わず射精してしまいそうになったが、何とか耐えてからゆっくり腰を振り、彼女の膣内を堪能し始める。

(うわ、何だこれ……ゴムでやる時よりも、何倍も気持ち良い……ツ!!)



ていく間、ラグナは下腹部の内側に広がっていく大量の熱い精液を感じ取っていた。それから数十秒後によく射精が収まり、体力を消費したラグナは健吾の胸板に体を伏せ、押しつけられた彼女の柔らかな乳房がフニヨンと形を変える。

「はあ、はあ、はあ……んむ、ちゅぱ、れるお……♡」

下半身が繋がった状態のまま、汗だくの健吾とラグナは視線を合わせる。荒くなった呼吸を多少整え、2人は唇を合わせ熱いキスを交わす。

「ふはっ……凄く、激しかったですね……」

「ごめん。ラグナちゃんのナカ、気持ち良くてさ……」

「そ、そんなストレートに言われると、ちよつと恥ずかしいような……」

「……いや、それは今更過ぎない？」

「ふふ、そうでした♪」

健吾は左手でラグナを抱き寄せつつ、右手で彼女の柔らかい尻を優しく揉みしだく。お尻を揉まれる感覚に体をピクンと反応させつつ、ラグナも笑顔で健吾の首に腕を回し強く抱き着いた。

「大好きです、健吾さん。これからもずっと、傍にいて下さいね……♡」

「……もちろんだよ、ラグナちゃん。これからもずっと一緒だ」

2人は再び唇を合わせ、舌と舌の絡み合う熱いディープキスを続ける。甘くてとろとろな気持ちの良い感触を舌で味わいながら、健吾は心の中で誓っていた。

もう二度と、ラグナの傍を離れるような事はしない。

これから先もずっと、ラグナと共に歩み続けていきたい。

それこそが、今の健吾が一番叶えたいと思っている1つの願いだった。

「んう!? け、健吾さん……また、臆<sup>ナ</sup>内<sup>カ</sup>で固くなつて……」

「ご、ごめん……ラグナちゃん、もう1回やつても良いかな……?」

「……うん、良いよ。ラグナの事、いっぱい気持ち良くして……♡」

「ツ……ラグナちゃん!!」

「きやつ!? そ、そんなにがつつかれると……ああん♡」

……まだまだ、2人のお熱い時間も続いていくようである。



雄一×ルーテシア&デイエチ IF

お父さん。

お母さん。

いきなりこんな事を言うのもおかしい話かもしれませんが、元気に  
していますか？

俺は今――

「ん、あ、は……お兄、ちや……ああ!？」

「あ、あ、あん……雄一さ、あ……ツ!!」

「く、あ、2人共……うぐうつ!!」

「ひやああああああん!!!」

——大人の階段を登っています。

事の始まりは、あのJS事件が解決してから数年後。

管理局の下で受けていた更生プログラムのカリキュラムが全て修了した後、雄一は同じく出所したルーテシア、リハビリを終えて無事に回復したメガーヌの2人と共に無人世界『マウ克蘭』、そこから更に無人世界『カルナージ』に移住し、そこで生活していく事になった。

管理局に保護された際、雄一とルーテシアは体内の魔力を大幅封印される事となったが、それによって雄一は感情の高まりと共に魔力が暴走するような事態がなくなった為、雄一はその事に感謝し、現在はカルナージで不自由のない穏やかに暮らしている。

しかし……

『潰ス……コイツダケハ、俺ガ潰スツ!!』

『お兄ちゃん、駄目えっ!!!!!!』

『雄一、目を覚ませ!!』

『雄一さん、お願いだからもうやめて!! 雄一さあん!!!』

「ッ……また、あの夢か……!!」

あれ以降……雄一は時折だが、悪夢を見るようになっていた。

怒りの感情に飲まれたまま、憎き浅倉を手にかけてようとした時の事。

クアットロの思うままに操られ、デイエチに重傷を負わせ、親友だった手塚すらも自らの手で殺そうとした時の事。

それらを思い出すたびに浮かび上がって来る、自身を止めようとするルーテシアの悲しげな顔。

かつて仮面ライダーブレードだった時に犯した過ちは、今もなお雄一の心に罪悪感として深く根付いており、それが彼の思考をネガティブにさせてしまい、精神を大きく疲弊させつつあった。一時はアルピーノ親子からもその事を心配されていたのだが……

「心配かけちゃってごめん……でも、俺は大丈夫だから」

もうこれ以上、自分のせいで誰かに迷惑をかける訳にはいかない。そう思っていた雄一は、誰かに自分が抱えている苦しみを明かそうとはしなかった。しかし口ではそう言っているものの、その後も何度か悪夢を見続けており、酷い時には彼が好きだったピアノすらもまともに弾けなくなってしまうほどの重症だった。

そんな彼の苦悩だが、アルピーノ親子や元ナンバーズの面々などにはもうとつくに気付かれており……

「デイエチさん、心の準備はできた?」

「う、うん……ちよつと恥ずかしいけど、頑張るから……!」

「OK! それじゃ作戦開始よ!」

2人の少女がある作戦を決行しようとしていた事を、雄一は知らなかった。

「う、うん……」

ある日の夜、アルピーノ家の自宅。この日、悪夢のせいで睡眠不足だった雄一は自分の部屋で1人静かに昼寝をしていた。しかしあまり寝付けそうになかったのか、彼は閉じていた瞼をゆっくり開こうとした。

「……う、ん?」

その時、彼は下半身に何か違和感を感じ取った。下半身から感じた、ザラザラとした何かが蠢いている感覚。それが動くたびに感じられる僅かな気持ち良さに、彼はその正体を探るべく閉じていた瞼を開き切る。そんな彼が最初に目にしたのは――

「ちゅ、ぴちやつ……あ、起きた?」

「ん、れろ……おはよう、雄一さん」

「……え、ちよ、えええっ!!?」

――脱がされたズボンから露出した肉棒に舌を這わせている、ルーテシアとデイエチの下着姿だった。2人は太く大きく勃起した肉棒に顔を近付け、ルーテシアはその先端部分にキスし、デイエチは棒部分を優しく握りながら舌で舐め上げている。目覚めてから段々思考が追い付いて来た雄一は、目に映ったそんな光景を見て動揺を隠

せなかった。

「ちよ、2人共、何やって……!?!」

「んく? 何って、お兄ちゃんのこれでナニしてるの♪」

「いや、そうじゃなくて……くあつ!?!」

「ん、ちゆ、じゆるる……!?!」

デイエチが亀頭部分を頬張り、口の中で思う存分舐めしやぶるたびに雄一の体が反応する。亀頭を自身の唾液で存分に濡らし、ピクピク反応している先端を勢い良く吸い上げた。

「く、あ、だ、駄目だ、それ以上、は……うああつ!?!」

「ブビュツビュツビュルルルツ!!」

「んむ!? ん、んぐ、じゆる……!?!」

今まで体験した事のない刺激に耐えられなかったのか、雄一は簡単に絶頂へと達した。いきなり口の中で射精されたデイエチは少しだけ驚いた表情を見せるも、口の中に放たれた精液を少しずつ飲み込み、射精が終わってからようやく口を離し、口元に付いた精液をペロリと舐め取った。

「ん……苦いけど、何だろう……癖になりそう……♡」

「はあ、はあ……デイエチちゃん、まで……どうしてこんな……」

「……いきなりでごめんね、雄一さん。私とルーちゃんと一緒に考えたんだけ。雄一さんに夜這いしようって。こうする以外に、雄一さんを癒す方法が思いつかなくて……」

「え……癒すって、俺を……?」

「お兄ちゃん、最近無理してるでしょ」

先程までと違い、ルーテシアの声はトーンが低かった。

「気付いてないと思った? ここ最近のお兄ちゃん、何度も悪夢を見てうなされてるでしょ。あんなやつれた顔で自分は大丈夫だって言われても、説得力なんてある訳ないじゃない」

「いや、だから俺は大丈夫って何度も……」

「雄一さん」

雄一の言葉を遮ったデイエチ。彼女が次に発した言葉は、雄一の心をドキリとさせた。

「まだ、罪の意識を感じてる？」

「……ッ」

その言葉に、雄一は言葉を返せなかった。その反応を見たデイエチとルーテシアは「やっぱり」と言った様子で顔を見合わせる。

「雄一さん。あの時の事、私は気にしてないよ。あの時の雄一さんは、クアットロに操られていただけ。雄一さんが罪の意識を感じる必要なんてない」

「……残ってるんだよ。あの時、デイエチちゃんを刺してしまった時の感覚が、この手に……今もまだ」

雄一が見つめる自身の右手は、震えていた。かつてデイエチを刺してしまった時の感覚が。自分が刺した刃に付いていた、返り血の生暖かい温度が。数年が経過した今でも、それらの感触が彼の掌には残っていた。

「この感覚は今でも忘れられない……それに、忘れちゃいけないと思ってる。どんな形にせよ、クアットロさんを簡単に信用してしまった俺が悪いんだ。だから——」

「そうやって、また一人で抱え込むの？」

ルーテシアが雄一の右手を両手で掴み、力強く握り締める。

「ルーちゃん……？」

「前にも言ったよね。一人で抱え込まないでっつて。お兄ちゃんは今まで、ずっと一人で抱え込んできた。ずっと一人で悩んで、苦しんできた……だから今度は、私も一緒に背負うから。お兄ちゃんだけに苦労はさせないから」

「ルーちゃん、俺は……!!」

「雄一さん」

雄一が何か言う前に、デイエチもルーテシアと同じように雄一の右手を掴み取る。こちらはルーテシアと違い、握り締める力はとても優しかった。

「あんな事になるまで、私は雄一さんが苦しんでいた事に気付けなかった。私には雄一さんを責める資格はない」

「デイエチちゃん……」

「見て、雄一さん。私の腕、もう傷は綺麗に治ったんだ。傷跡1つ残らないくらい……だからもう、雄一さんは気にしなくて良い。自分の罪ばかり意識しないで、もつと先の……幸せな未来を意識して欲しいんだ」

「ッ……わからない……どうしてなんだ？ どうして2人がそこまでして俺の事を……」

「あなたが好きだから」

2人の言葉が、一字一句ズレる事なく重なった。

「お母さんを助ける為に、あなたはボロボロになってまで戦ってくれた。お母さんが目覚めたと知って、あなたは私達の為に泣いてくれた」

「自分だってボロボロなはずなのに、あなたは私の傷を心配してくれた。管理局に保護されてからもずっと、あなたは私に親切にしてくれた。そんなあなたの気持ち、私はとても嬉しかった」

「ルーちゃん……デイエチちゃん……」  
「だから……」

2人は同時に雄一に抱き着き……彼の頬に、そつとキスをしてみせた。

「お兄ちゃん」

「雄一さん」

「私はあなたを、心から愛しています」

「……良いの？」

雄一は自分の頬にそつと触れる。デイエチのぶるんとした柔らかい唇の感触と、ルーテシアの幼くて可愛らしい唇の感触。その感触が自分の頬に残っている事が、今でも信じられなかった。

「本当に、俺なんかで……」

「好きじゃなかったら、最初からこんな事してないよ」

「それとも……雄一さんは、こんなはしたない女の子は嫌い？」

2人がそれぞれ左右から雄一に腕に抱き着き、2人の胸が腕に押し付けられる。デイエチの青いブラジャーで包まれた豊満な乳房が、ルーテシアの紫色のブラジャーで包み込まれた少し小さ目の乳房が、雄一の腕に押し付けられる事でフニヨンと形を変える。2人の柔らかい乳房を感じ取った雄一は思わず意識してしまい、それに応じて彼の肉棒も再び大きくなり始めた。

「あ、また大きくなってる。お兄ちゃんのここは素直だよねえ♪」

「うっ……そ、それは……」

「遠慮しなくて良いよ、雄一さん。それに」

「!? ちよっ……」

デイエチが雄一の右手を掴み、自身の胸元まで引き寄せて左胸に当てさせる。雄一は突然の行為に驚きつつも、右手から感じ取れる柔らかい感触に思わず心が惹かれてしまった。

「私達も……雄一さんにいっぱい、触って欲しいな……♡」

「ねえ、お兄ちゃんはどうしたい？」

「俺は……えっと」

雄一とて、普通の人間であり、普通の男である。1人の美しい女性から、1人の可愛らしい少女から、このような誘惑をされてしまったは……我慢などできるはずもなかった。

「……初めてですが、よろしくお願いします」

「フフッ……了解♡」

ようやく雄一の口から洩れた本音。それを聞いた2人は、嬉しそうに笑顔を浮かべてみせた。

「ん、ちゅ、ぴちゃ……!」

「ちゅ、れろ……あむ……!」

それから数分後。部屋の電気を消し、窓のカーテンをきっちり閉め切った後、3人は全裸姿で身を寄せ合いながら熱いキスを交わしていた。デイエチとは唇を合わせた状態で舌を交わし、背が低いルーテシアには雄一が身を屈めて顔を近付け、彼女とも存分に濃厚なディープキスで交わる。淫らな水音が部屋中に響き渡る中、ルーテシアの唇から離れた雄一はデイエチを抱き寄せる。

「んっ……雄一さん、急に遠慮なくなってきたね♪」

「あ、ごめん、嫌だった?」

「ううん、嬉しい。雄一さんのやりたいようにやって♡」

「……じゃあ、遠慮なく」

「あん……!」

雄一はデイエチの腰に左手を回し込んでから、彼女の乳房に顔を近付けた。目の前にあるピンク色の小さな乳首を唇で挟み込み、舌の先端で乳首を突つくとデイエチが可愛らしい喘ぎ声を漏らす。するとルーテシアも同じようにデイエチの乳房に顔を近付け、デイエチの右胸を舌で軽く舐め上げた。

「んん!? ル、ルーちゃん……!」

「フフフ……デイエチさん、良い声で鳴いてる♪」

「あ、あ……そ、そこお……ッ!」

雄一に左胸を、ルーテシアに右胸を攻められ、デイエチは口元を押さえながら必死に声が漏れるのを我慢しようとする。しかし2人が彼女の乳首を何度も舐めしゃぶって唾液で濡らした後、力を入れ過ぎないように歯と歯で優しく甘噛みした。

「ん、それ、は……あっ!」

デイエチの甲高い声が響く。よく見ると、ルーテシアの左手がデイ

エチの股間に入り込み、陰毛の一本も生えていないそこを指先で弄っていた。雄一は乳首に吸いついている事からルーテシアの行為に氣付いておらず、雄一がひたすら乳首に吸いつき、ルーテシアが乳首を舐めながら彼女の股間を少しだけ強く刺激する。

「んあぁっ!?!」

その瞬間、デイエチが体を大きく仰け反らせ、全身をビクビク震わせた。突然の反応に驚いた雄一は慌てて唇を離したが、それに対しルーテシアは冷静な表情で笑みを浮かべる。

「ご、ごめん、痛かった!?!」

「大丈夫だよお兄ちゃん。今のは達したただけだから。でしょ?」

「……………」

ルーテシアにそう聞かれ、デイエチは今も僅かに体をビクビクさせながらもコクリと頷いた。雄一の目の前で絶頂させられたからか、デイエチの顔は恥ずかしさのあまり顔がトマトのように真っ赤になっていた。

「え、えつと……………気持ち良かったって事、なのかな?」

「ん、そゆ事。じゃあお兄ちゃん、今度は下の方を……………はうつ!?!」

直後、今度はルーテシアの方が可愛らしい喘ぎ声を漏らした。何事かと雄一は見てみると、ルーテシアの股の間にデイエチの左手が入り込んでいた。

「んんっ……………あ、あの、デイエチさん? 急に何を……………」

「ルーちゃんにお返し。雄一さん、ちよつと手伝って」

「え? あ、えつと、うん」

「え、あの、デイエチさん? ちよつ……………きやあ!?!」

デイエチがルーテシアを自身の方へと引つ張り、仰向けに倒れ込んだルーテシアの両足を掴んで自身の方へと引つ張って持ち上げる。それによってルーテシアの下半身が高く持ち上げられ、まんぐり返しの状態になったままデイエチにガツチリ押さえ込まれた。

「ちよ、ま、待って!?! 流石にこの恰好は私も……………!!」

「雄一さん。見える? これが女の子のオ○ンコだよ」

「ツ……………これが、女の子の……………」

「雄一さあん!? そ、そんなマジマジと見られたら……ッ!!」

マングリ返しになったルーテシアの秘所を、デイエチが指で左右にパツクリと開く。雄一に大事な所を見られているとなると流石に恥ずかしいのか、ルーテシアも顔が段々赤くなっていき、見られている割れ目も少しだけキュンと締まった。

「雄一さん、いっぱい舐めてあげて。女の子はそうされると気持ち良くなるから」

「い、いやちよつと!」

「い、良いの? そんな事して」

「良いの良いの。ルーちゃんにもいっぱい気持ち良くなって貰いたいから♪」

「さつき思いつきり仕返して言わなかった!」

ルーテシアの突っ込みが完全にスルーされる中、雄一はデイエチの指で開かれているルーテシアの割れ目を静かに凝視する。ピンク色の穴が見えるその割れ目は、パツクリとした小さな突起のような物が突き出ており、それを見た雄一は無意識の内にそこへ顔を埋めようとしていた。

「ちゅっ……」

「ひゃん!」

割れ目から見えている突起に、雄一が軽くキスをする。ルーテシアの体が反応している間、雄一は伸ばした舌の先端で、割れ目を上下にゆっくり舐め始めた。彼が舌を這わすたびに割れ目がヒクヒクと反応し、そこから蜜のような液体が少しずつ溢れ出ていく。

「ん、ちゅば、れろ、じゅるる……!」

「あ、ああ、あっ……お、お兄ちゃ……んん!」

雄一に大事な所を舐められている。そんな今の状況はルーテシアに興奮を与え、彼女の体に多大な刺激を与え続けていた。彼女の心境を知って知らずか、雄一はパツクリ膨らんだ突起を舌先でチロチロと突つつき、割れ目に舌を深く挿れ込んだ。そうする事で感じ取れる未知の味に、雄一はすっかりハマってしまった。

「あ、あ、だ、駄目、そこは……ッ!!」

「ぴちや、ちゅぱ、ちゅぱ、じゅるるるる……!!」

「あつ……んううううううううう!!?」

雄一は舌を挿れ込んだまま、自身の唇を割れ目に押さえつけ、まるでディープキスをするかのように激しく吸い上げる。もっと味わいたい。もっと舐めしゃぶりしたい。そんな事を考えながら雄一が味わい続けている内に、我慢の限界を迎えたルーテシアは全身を震わせ、激しい絶頂に達してしまった。

「ん、ぷはっ……」

「はあ……はあ……ッ……♡」

ようやく雄一の唇が離れ、デイエチに解放されたルーテシアが下半身をベツドに倒す。その股間は雄一の唾液と自身の愛液でびしょ濡れになっており、ルーテシアのスタイルの良さも相まって、傍から見れば実に扇情的な光景となっていた。

「どうだった？ 雄一さん」

「……凄く、良かったです」

「それは良かった♪」

「ううっ……後で覚えてなさいよお……!」

絶頂して息絶え絶えなルーテシアがデイエチを睨みつけるも、デイエチは涼しい顔でそれをスルー。今度は彼女が雄一の前に座り込み、自身の股をM字に大きく開いた。

「見て、雄一さん……ルーちゃんがオ○ンコをペロペロされてるのを見てたら……私のこども、こんなになっちゃった」

「ッ……」

デイエチは股を開いたまま、自身の秘所を指でクパアと開く。開かれたそこは愛液で濡れに濡れており、それを見た雄一は自分の肉棒がどんだん勃起していくのを感じた。

「もう我慢できない……雄一さんのオ○ンチンで、私のここ……メチャクチャにして……♡」

「……デイエチちゃん……ッ!!」

そう言われた途端、雄一は即座に動き出した。自身の勃起した肉棒をデイエチの秘所に押し当て、亀頭を少しずつ割れ目に食い込ませて

奥に挿し込んで行き……

ブチイツ

「ん、ぐううううう……ッ!!」

何かが破ける音と共に、雄一の肉棒がデイエチの膣奥まで入り込んだ。雄一と抱き合っていたデイエチの力が強まり、両手の爪が彼の背中に食い込む中、結合部からは破瓜の証である赤い血が流れ出ていく。

「く、あつ……締まる……ッ!!」

「ッ……はあ、はあ……!!」

あまりの気持ち良さに、雄一はすぐさま動き出したくらいだった。しかしそんな彼でも、僅かに痛そうな表情を浮かべているデイエチを見て、それを我慢できる程度の理性はまだ残っていたようで、彼女の頬に優しく触れながら呼びかける。

「デイエチちゃん、大丈夫……？　あまり無理はしない方が……」

「ん……大、丈夫……！　ちよつと痛い、けど……耐えられないほどじゃ、ないから……それに」

「それに……？」

「私、嬉しいの……こうして、雄一さんと……繋がる事が、できたから……ッ！」

笑顔を浮かべるデイエチの目から流れ出ていく涙。それは痛みから来る物ではなく、雄一と繋がる事ができた喜びによる物だった。それを見た雄一は、彼女がどれほど自分の事を愛しているのか、改めて思い知った。

「デイエチ、ちゃん……!!」

「ん、ちゅっ……!!」

雄一は自らデイエチの唇にキスし、デイエチもそれを受け入れる。合わさった唇の間からいやらしい水音が響き渡り、雄一の右手がデイエチの乳房を優しく揉み解し、デイエチはそんな彼を両手で愛おしそうに抱き締める。少しの間だけキスが続いた後、2人は一旦唇を離れた。

「ぶはっ……デイエチちゃん、痛みは引いた？」

「ん、大丈夫……もう、動いて良いから……!」

「ツ……わかった、動くよ……!!」

「ん、あぁっ!!♡」

デイエチの許可も出た事で、雄一はデイエチの腰を掴みながらピストン運動を開始する。肉と肉が打ちつけられてパンパンと音が鳴り、奥まで入り込むたびに膣内が肉棒を強く締め上げ、雄一とデイエチは今まで味わった事のない快感を前に呆気なく虜になってしまう。

「く、うぁっ……デイエチちゃんの膣内、凄い……!!」

「あ、うぁ、あ、あん……良い、気持ち良いよお……ツ!!」

膣内で肉棒が何度も出入りし、亀頭が子宮口をノックするかのよう  
に何度も突き上げる。雄一がデイエチの肢体を本能のままに貪る中、  
されるがままだったデイエチに近付いて来る人物がいた。絶頂によ  
る疲れから復活したルーテシアだ。

「ふうん? あれだけ私を虐めた挙句、私を放置して勝手に始めるな  
んで良い度胸ねえ……はむっ」

「んっ!? んむうううう……ツ!!」

四つん這いで近付いて来たルーテシアは顔を近づけ、デイエチとお  
互いの唇を合わせディープキスを行う。突然のディープキスで油断  
していたデイエチはルーテシアに舌で蹂躪され、その興奮から雄一の  
肉棒を啜っていた膣内の締めまりが更に強まっていく。

「ツ……また締めまりが……!!」

「ふっふくん、もつと虐めてあげちゃう♪」

「ぶはっ!! ルーちゃん、何、を……ぁっ!!」

「うわっど……!?!」

ルーテシアが指をパチンと鳴らした瞬間、天井から伸びて来た  
チエーンバインドがデイエチの両腕を縛り、彼女の体が引っ張り上げ  
られる。その反動で雄一の体が後ろに倒れた事で、両腕を天井に吊り  
上げられたデイエチが雄一に騎乗位で犯されている体勢になった。

「ほらほらお兄ちゃん、そのまま続けちゃって♪」

「んあぁっ!? な、何これ、凄い……ツ!!」

「くう……デイエチちゃん……!!」

チエーンバインドで両腕を拘束されたデイエチは、後ろからルーテシアに乳房を揉みしだかれ、下から雄一に激しいピストンで突き上げられる。まるで2人が無理やりデイエチを犯しているかのような構図になっており、それが雄一とデイエチの2人を更に興奮させた。

「ああ!? ま、また中で暴れて……ッ!?」

「ぐ、ああ……で、出る、そろそろ……!!」

「あ、出ちやいそう? じゃあそのまま中に出してあげて♪ 良いよね、デイエチさん?」

「あ、はあっ……ッ……い、良いよ、出して……中に、中にいっぱい出してえ……!!」

「ッ……デイエチちゃん!!」

下から突き上げられるたびにデイエチの乳房がプルンプルンと激しく揺れる中、我慢の限界を迎えた雄一はデイエチの細く括れた腰をがっしり掴み、奥まで突き入れられた亀頭が子宮口に押しつけられる。そして……

ビュルツブビュルルルルルウツ!!

「あ、あ、イクうううううっ!!」

子宮口に押しつけられた亀頭から、大量の熱い精液が発射された。子宮内にドクドクと注ぎ込まれて来る精液の熱さにデイエチが絶頂し、雄一もあまりの気持ち良さに全身を震わせつつも、彼女の腰をがっしり掴んだまま離さず、射精はしばらく続いていく。

「はあ、はあ、はあ……」

数十秒後、激しい絶頂がようやく収まったのか、デイエチの膈内から雄一の肉棒が引き抜かれる。デイエチの秘所からは白い精液がトロリと流れ落ち、ベッドのシーツを穢していく。

「2人共、気持ち良かった?」

「はあ、はあ……初めてだよ、こんなに気持ちの良いセックスは……」  
「うんうん、それは何よ……りいっ!」

仕返しを完了できた事で油断していたのか、今度はルーテシアの両腕がチエーンバインドでグルグル巻きに縛りつけられた。しかしデイエチの時と違い、ルーテシアの場合は雄一に背中を向けた状態で

拘束されている。そこに下半身をガクガク震わせながらも何とか体を動かしたデイエチが近付いていく。

「ん、う……今度はルーちゃんの番だよ」

「んげ、まだ魔法使える程度の体力が残って……うわ!? ちよ、ちよつと!!」

そんなルーテシアの腰をデイエチが両手で掴み、彼女の丸くむっちりしたお尻が雄一に向けられる。先程の雄一とデイエチの行為を見て興奮した為か、ルーテシアの秘所も愛液がポタポタと滴り落ちていた。

「雄一さん、今度は後ろから突いてあげて」

「ッ……ルーちゃん……!!」

「お、お兄ちゃ……んっ!?」

ルーテシアの秘所に亀頭が当たり、ヌチャリといやらしい水音が鳴る。これから自分もデイエチと同じように雄一に犯され、蹂躪される。そう考えたルーテシアは秘所がまたキュンとなったような気がした。

「行くよ……!!」

「ん……ぎ、いいいいいいっ!?」

ズブリと。雄一の肉棒が挿し込まれ、そのまま一気に奥深くまで突き上げられた。当然、それによって膣内の処女膜も破られており、結合部からは赤い血が垂れ落ち、破瓜の痛みからルーテシアが苦悶の表情で呻いている。

「ルーちゃん、力を抜いて。痛みはすぐに消えるから……ん、ちゅ」

「ん、あつ……んむう……ッ!!」

(ッ……ルーちゃんの膣内、凄く狭い……!!)

破瓜の痛みを少しでも和らげる為に、デイエチがルーテシアの小さい乳房を揉みながら彼女とキスを交わす。流石のルーテシアも早くこの痛みを消したいのか、されるがままに乳房を揉み解されては舌を交わしており、その間も雄一は膣内の締まりを必死に我慢する。

「んあつ……いい、良いよ、お兄ちゃん……早く動いて……!」

「ルーちゃん、もう大丈夫?」

「ん、大丈夫……お兄ちゃん、早くう……!!」

「ま、待ってルーちゃん、そんな風に振られたら……ッ!!」

そうしている内に痛みが引いてきたのか、ルーテシアは早く後ろからパンパン突いて欲しいと、丸いお尻を左右に振りながら雄一に懇願する。それが雄一の肉棒を強く刺激し、それを合図に雄一はルーテシアのお尻を掴んでピストン運動を開始した。

「あ、あ、はあんっ!? す、凄い、気持ち良い……気持ち良いよおっ!!」

「くあっ……膣内<sup>ナカ</sup>が、蠢いて……ッ……!!」

「フフ♪ 2人共、凄く気持ち良さそう……ん、ぴちゃ、れろ」

雄一に後ろから突かれているルーテシアは歓喜の表情で喘ぎ、ディエチはそんなルーテシアの乳房を揉みながらその小さな乳首に吸いついている。あまりの気持ち良さにルーテシアは先程までの余裕が失われており、雄一も既に2回ほど射精しているにも関わらず、どんな射精感が込み上がっていく。

「んああ!?! 奥に、奥に届いてるう……ッ!!」

「はあ、はあ……ルーちゃん、中に出すよ……!!」

「だ、出して!! お兄ちゃんの精液で……私の子宮をパンパンにしてえっ!!」

「ルーちゃ……うぐうっ!?!」

そしてまた、射精の時はやって来た。雄一は両腕でルーテシアを後ろからギュツと抱きしめたまま、彼女のお尻に自身の腰を力強く打ちつけ、奥深くに突っ込ませた亀頭と子宮口をディープキスさせた。その瞬間、亀頭が大きく膨らみ出し……

ドピュツビュクツビュツビュルルル!!

「あああああああああ……熱い、熱い

よおおおおおおおっ!!♡」

ルーテシアの小さな子宮内にも、熱い精液が大量に注ぎ込まれる事となった。下腹部が精液でどんどん熱くなっていく感覚に、ルーテシアが歓喜の表情で絶頂に至り、雄一は後ろから彼女を抱きしめつつ、彼女の子宮内に精液を注ぎ込んでいく。

「あ、はあ……お腹が、熱い……ッ!!」

雄一の肉棒が引き抜かれた途端、ルーテシアの秘所から入り切らなかつた精液がコポリと溢れ出し、彼女の太ももを通じて下にトロリと流れ落ちていく。それは傍から見るとあまりにエロ過ぎる光景だった。

「はあ……はあ……気持ち良かった……♡」

チエーンバインドから解放されたルーテシアがベッドに倒れ、雄一も溜まりに溜まった疲労からベッドに座り込んで息を整える。その隣にデイエチが移動し、雄一と肩をくっつけ合う。

「雄一さん、満たされた？」

「はあ、はあ……凄く、気持ち良かったよ。流石に疲れちゃったけど……」

「あはは……少し休もうか」

2人もルーテシアと同じようにベッドに倒れ、体を冷やさないよう布団をかける。ベッドのシーツは愛液や精液で汚れてしまっているが、今はそんな事は全く気にしていなかった。

「はあ……どうしよう、ゲンヤさんに何て言われるか……」

「大丈夫。私から一言言えばお父さんも黙って何も言わなくなるから。それにお父さんよりも、雄一さんの方が付き合いは長いし」

「そういえばそっか……デイエチちゃん」

「何？」

布団の中、雄一とデイエチの顔が向き合った。ちなみにルーテシアは疲れたのか、既に満足した様子で眠りにについている。

「ありがとう。2人の気持ち、凄く嬉しかった」

「……私も。雄一さんに受け入れて貰えて、凄く嬉しいよ」

2人は顔を近付け、優しいキスを交わした後、ルーテシアと同じように眠りに落ちていった。

この日、雄一は終始穏やかな寝顔であり、一度も悪夢を見る事なく安心して眠り続ける事ができたのだった。

ちなみに……

「あらあら3人共。昼間はお楽しみだったみたいね。今日は赤飯炊いちやおうかしら♪」

「……………」

その後、聖王教会での用事を終えて帰って来たメガーヌには全部バレてしまい、3人はしばらく彼女から存分に弄られ続ける羽目になったという。

深夜のミッドチルダ、ミラーワールド……

キイイイイン……キイイイイン……

『シャアアアア……!!』

消えたはずの悪夢は、再びその姿を現そうといていた……

T o b e c o n t i n u e d …… ?

## クアットロ IF (☆)

ミッドチルダ、とある廃ビル。

そのビルの中では……ある集団によって、淫らな祭りが開催されていた。

「おら、しっかりしやぶれ!!」

「もつと腰を振れよ、この淫乱女が!!」

割れている窓。罅の生えている床と壁。蜘蛛の巣ができている天井。傍から見るとあまりにボロボロであるこの廃ビルの中で、複数の男性が1人の女性を徹底的に陵辱していた。

「ん、んぶ……んむううう……ツ!!」

その女性の名前はクアットロ。聖王のゆりかごを起動し、ミッド中を恐怖のどん底に陥れようと目論んでいた彼女は今……こうして男達によって、無残にも陵辱されてしまっていた。抜群のスタイルを包んでいた青いボディースーツはビリビリに破かれ、乳房と秘所が露出した彼女は四つん這いの体勢にさせられ、男達に前後から肉棒を突っ込まれてしまっている。

「おお、そうだ……もつと気持ち良くしてくれよ……!!」

「ああ〜良いね、マジで締まりが良いわ、コイツのマ○コ……!!」

「んむ、んう……じゅぶ、れろ……ツ……!!」

1人はクアットロの口に肉棒を突っ込み、彼女に無理やり舐めしやぶらせる。もう1人はクアットロの秘所に後ろから挿入し、彼女の膣内をひたすら蹂躪している。その周りでは、手持ち部沙汰の男達が自分で扱っているところだ。

(ツ……どうして……どうしてこの私が、こんな目に……!!)

男に頭を掴まれ、肉棒を咥えさせられながらも、クアットロは疑問

に駆られ続けていた。何故、自分がこんな目に遭わされてしまっているのか。一体、どこで失敗してしまったのか。そんな疑問が一切解決できない中、前後から彼女を突いていた男達がピストンを速めていく。

「お、お、出る、出るぞ……!!」

「ああ、俺も出る……中に、中に出すぞ!!」

ブビュツビュツビユルツビユクルルル!!

「ツ……ん、むううううう!!」

フェラチオをさせていた男はクアットロの頭を掴んで引き寄せ、彼女の口の中で思いつき射精。喉奥に流し込まれる精液をクアットロが無理やり飲まされる一方、後ろから突いていた男は彼女の括れた腰をガシツと掴み、その膈内に大量の精液を注ぎ込んだ。注ぎ込まれた精液の熱さを下腹部に感じ取ったクアットロは、その目から涙が流れ落ちていく。

(また、熱いのが……お腹の中に……ツ!!)

「おい、まだ終わりじゃねえぞ!」

「次は俺だ。じっくり堪能させて貰うからな?」

「くっ……んああああああつ!!」

男達が肉棒を引き抜き、クアットロの秘所から溢れた精液が太ももを通じて垂れていく。そこへ次の男が肉棒を無理やり挿入し、クアットロの腰を掴んで激しいピストンを開始する。

「その次は俺だからな」

「俺はそのデカいおっぱいで楽しませて貰おうか」

「へへへ……!」

「んあ、あ、あ、はあ……ツ!!」

クアットロが後ろからパンパン腰を振られ、喘ぎ声を漏らしている間も、他の男達は自分で扱っていた肉棒を彼女の顔に向けながら、彼女の顔に向かって精液を発射。クアットロの綺麗な顔が白濁の精液で醜く穢されていく中……廃ビルの外で呑気に缶コーヒーを飲んでいた眼帯の青年——二宮鋭介は小さく鼻息を鳴らしていた。

(随分とまあ、餌に釣られる連中が多い事……ドゥーエがああ光景を

見たら、果たして何て思うのやら)

事の始まりは、逃走していたクアットロを二宮達が捕縛したところからだった。

機動六課の活躍で聖王のゆりかごを失い、自分の手札にするつもりだった斎藤雄一も救出されてしまったクアットロはその後、自身の計画を台無しにしてくれた機動六課にいつの日か復讐する事を誓い、ミッドチルダのあちこちを逃げ回っていた。

そんな彼女を発見したのが、彼女を含めたスカリエツテイ一味の計画を密かに利用していた二宮とオーデインの2人だった。2人に追い詰められたクアットロはオルタナティブのカードデツキで変身するも、二宮がサバイブ・無限の力で変身したアビスサバイブを前に成す術なく敗北した。

捕縛された彼女は二宮達によって特殊な手錠をかけられた後、とある廃ビルまで連れ込まれた。その廃ビルの内部で待っていたのが……二宮によって大金で釣られた、ゴロツキの男達だった。

『なあ兄ちゃん。この女、本当に好き放題ヤツちやって良いんだな?』『ああ。取り敢えず、その女が再起不能になるまで楽しんでくれて構わない』

『ヒュ、そりや良いねえ!　じゃあ遠慮なく!』

『なっ?!　や、やめなさい、この屑共!!　私に触るんじや……いやあああああっ!!』

その後はクアットロの抵抗も虚しく、男達は一斉に群がって彼女のボディスーツをビリビリに破き、彼女のスタイル抜群な体が男達目の晒されてしまった。形の整った豊満な乳房は乱暴に揉まれ、小さな

乳首は何度も吸いつかれた。秘所は割れ目を左右に開かれ、挿入された指で搔き回され、男達の汚い舌で割れ目やクリトリスをいやらしく舐めしゃぶられてしまった。

『んじや、一番手は俺から行くぜ』

『ひっ!? や、やめて、そんな物入らな……あああああああつ!?』

その後、1人目の男が挿入した事で、処女も呆気なく奪い去られてしまった。こんな屑な男達に自慢の体を穢される事になると思っていなかったクアットロは何度も抵抗しようとするが、二宮によってかけられた手錠はクアットロの戦闘機人としての能力を全て封じており、今の彼女は普通の人間と変わらない身体能力しか発揮できない。そんな状態で屈強な男達に取り押さえられている以上、脱出など到底不可能な状況だった。

『あ、ああ、出るぞ……まずは一発、中に出してやる……!!』

『!? ま、待って、お願い、それだけは……中に出すのだけはやめてえ!!』

『ああ出る、中に出るう!!』

ドピュツビュツビュルツブユルルルウ!!

『待つ……いやあああああああつ!!』

結局、クアットロは男達の手から抜け出せないまま、膣内で盛大に射精されてしまった。膣内に注ぎ込まれた精液が子宮内に到達する中、素性も知らない男に膣内射精されたという現実を突きつけられたクアットロは絶望し、シヨックのあまり泣き出してしまった。

『ひっぐ、ぐす……許さ、ない……アンタ達、だけは……絶対に……!!』

『おいおい、これで終わりじゃねえぞ。次は俺の番だぜ』

『は? いや、いや、お願い待って!? これ以上は……ひぎいいいいいいいい!!』

その後も、クアットロは男達によって長時間に渡って犯され続けた。正常位で犯され、騎乗位で犯され、バックで犯され、対面座位で犯され……クアットロは何度も男達によって穢され、何度も膣内に射精され続けた。

それから時間が経過し、男達が一度休憩に入った時の事。手錠で拘束された両手を天井に吊り上げられ、体中に熱い精液をかけられた状態で放置されていたクアットロは、自身をこんな目に遭わせた張本人である二宮と対峙する。呼吸を整えるのに必死な彼女の股間からは、男達に注がれた精液が今もトロリと流れ落ちて行っている。

『クアットロだったか？ 随分やられたようだな』

『ッ……許、さない……アンタ、達、全員……殺してやる……!!』

『そんだけ元気があるなら、話くらいはできそうだ……なあ、疑問に思わないか？ 何故お前達の計画が、俺達に筒抜けだったのか』

散々犯され続けてからもなお、鋭い目付きで二宮を睨みつけるクアットロ。二宮は特に表情一つ変えず、彼女に残酷な真実を教える事にした。

『わからないか？ 今、お前の力を封じているこの手錠も、ある女が用意してくれた代物だ。お前が一番よく知って……いや、お前が一番尊敬している女だよ』

『……ま、まさか……ッ』

『気付いたか？ お前達の計画を外部へと漏らし、この手錠を俺に提供したのは他にもない……ナンバーズのドゥーエ。お前の姉に当たる存在さ』

『……そ、んな……嘘よ……嘘よッ!! そんなはずない!!』

『信じようが信じまいが、それはお前の勝手だ……さて。そろそろ再開の時間らしい』

そう言つて、二宮が部屋から退出していく。代わりに入って来たのは、先程まで自分を犯していたゴロツキの男達だった。

『そん、な……ドゥーエ姉様、が……裏切った……？ ドゥーエ姉様が……私達を、売った……？』

『やあくアットロちゃん。また楽しもうかあ』

『へッへッへ……!』

『嘘……嘘よ、そんな……あああああああつ?!』

それからまた、陵辱は再開された。二宮から告げられた真実を前に、絶望の淵に叩き落とされたクアットロは先程までと違い、抵抗す

る気力が徐々に失われつつあった。そんな彼女の思いなど露知らず、男達は思う存分彼女を犯し続ける。

『お、おお、また出る……ッ!!』

『あ、あ、やめて、もう……んんんんん?!』

それから更に時間が経過し、現在に至る。あれから既に1時間以上も経過しているが、男達は未だに飽きる事なくクアットロを犯し続けており、クアットロの綺麗だった体は男達の精液で穢れに穢されてしまっていた。そしてクアットロ自身もまた、心の中で何かが折れようとしていた。

(裏切られた……私は、ドゥーエ姉様に、売られたんだ……)

「お、おお、また出そうだ……クアットロちゃん、中にいっぱい出すからね!! 俺のザーメン受け止めてね!! 俺の子供を孕んでね!! あああっ!!!」

ブビウツビユブツビユルルルル!!

「あ、ああ、あ……ッ……!!」

手錠のかけられた両腕を吊り上げられたまま、クアットロは背面座位の体勢で男に腰を掴まれ、またしても子宮内に精液を注ぎ込まれた。肉棒を突っ込まれている秘所からは入り切らなかつた精液がゴポリと流れ落ち、男は射精が終わるまで彼女の腰をしっかりと掴んで離さない。

「ちゅぱ、れろ……へへへ、クアットロちゃんのおっぱい美味しいよ……!」

「今から俺達で、ミルクが噴き出るおっぱいにしてやるからな……!」

「ん、はあ……う……ッ!!」

クアットロの豊かな乳房が男達に揉まれ、舐めしゃぶられた乳首が

汚い唾液で濡らされる。乳首の周囲には男達によって付けられたキスマークがいくつも残っており、男達に穢された証として刻みつけられていた。そんな中、秘所に挿入されていた肉棒が抜けた後、精液がドロリと零れ落ちるのを見た男達は更に興奮し、別の男達が再び勃起した肉棒を突きつけてきた。

「よおし姉ちゃん、今度はこっちにも入れるぜ」

「ひい!? ま、待って、そこは違つ……あがあつ!」

クアットロの制止も聞かず、男達はそれぞれ秘所とアナルの両方に肉棒を挿入し始めた。秘所どころかアナルにまで無理やり突っ込まれた事でクアットロが苦しそうに呻く中、男達は構わずピストンし、膣内と直腸内を欲望のままに穢していく。

「ああ、良い……やっぱ姉ちゃんのマ○コは最高だな……!」

「ケツの穴も良いぜ……こりや長くは持たないかもなあ……!」

(ツ……もう、いやだ……いつになったら、終わるの……?)

秘所とアナルを同時に犯されながら、クアットロは既に抵抗する気を完全に失っていた。男達によつて体を穢され続けたショック。ドゥーエに裏切られていたという現実。それらが積み重なり、クアットロの目にはとうとう諦めの感情が芽生えてしまっていた。

(もう、駄目……私は、このまま……ずっと……犯されて……)

「お、おお、また出すぞ……!!」

「お、俺もだ……なあ姉ちゃん、中にいっぱい出すからな、しつかり孕めよ……うっ!!」

ブビュツビュルルツビュツビュツビュツ!!

「あつ……はああああああああつ!!♡」

膣内と直腸内、その両方で肉棒が同時に射精する。膣内と直腸内、その両方に注ぎ込まれて来る精液の熱さにクアットロは絶頂し、無意識の内に恍惚の笑みを浮かべてしまった。彼女の心は既に、快樂の世界へと陥落してしまっていた。

(あ、熱いのがまた、お腹の中にいっぱい……気持ち良い……♡)

「おし、次はまた俺の番だな」

「あくあ、こんなに出しちやつて。これじゃ誰の子供を孕むかわかん

ねえな」

(孕む……？ ああ、そつか……私、コイツ等に犯されて……赤ちやん、孕むんだ……♡)

彼女を始め、ナンバーズの胎内にはスカリエッティのコピー因子が仕込まれている。もしスカリエッティが滅ぶような事があれば、ナンバーズの内の誰かがスカリエッティの人格に目覚める事になるのだが……陥落していたクアットロは既に、その事を忘れてしまっていた。

(もつと……もつと犯して……ああ♡)

「よおし、まだまだたっぷり犯してやるからな」

そんな願望が叶ったのか、クアットロはまた別の男に挿入されるのを感じ取った。クアットロは歓喜し、いつからか自らの意志で腰を振り始め、挿入している男の射精を促すようになった。

(気持ち良い……!! もつと、もつと私を気持ち良くしてえ……!!♡)

「おら、出すぞ!! 俺のガキを孕みな!!」

ビュルツビュルツビュルツビュルツ!!

「あ、あ、イクううううううっ!!!♡」

こうして、心が折れたクアットロは男達による長い陵辱の果てに陥落。

戦闘機人として……否、人間としても再起不能な状態に成り果てた彼女は、その後も彼女を妊娠させようとする男達によって、1人の淫らな肉奴隷へと堕ちていくのだった。

「どうだ、ドゥーエ？ 自分のせいで妹をこんな目に遭わせてしまった気分は」

「ッ……ごめん、なさい……クアットロ……私のせいで……!!」

そんな彼女の末路を知った姉が、彼女の惨状を見て涙を流していたのだが……今のクアットロにそれを知る術が存在しないのは、もはや言うまでもない事だろう。

T o b e c o n t i n u e d ……?

湯村×ティアナ IF (☆)

「行けって言うてるでしょ!!」

ホテル・アグスタにおける会場警備任務。そこで起こったガジエツトドローンやインペラーとの戦いの中で、ティアナ・ランスターが相棒のスバル・ナカジマを誤射してしまうというアクシデントは発生した。その結果、シヤマルの指示を無視して無茶苦茶な戦い方をした事から、2人は激怒したヴィータから戦力外通告を受ける事となつてしまった。

「……行つて。お願いだから」

「う、ううん！ こっちこそ、ごめんね……」

こうなつてしまったのは、自分が連携をミスしてしまつたから。そう言つてティアナに謝ろうとしたスバルだったが、そのティアナからは強く怒鳴られてしまい、スバルは悲しげながらも必死に笑顔で謝つてからその場を立ち去つて行く。

「……何がごめんよ……謝らなきゃいけないのは、私の方なのに……ツ……!!」

スバルの姿が見えなくなった後、ティアナは左手を目の前の壁に叩きつける。壁に拳をつけたまま、ティアナは下を俯いて涙を流し始める。

『占いで、彼女達に何らかのトラブルが生じる事はわかつていた。なのに、俺はそれをちゃんと伝えなかつた。そのせいで……』

（何よそれ……副隊長達は知つていて、私達には何も言われなかつたとか……最初から、私の腕なんて信用されていなかったってじゃないの……!!）

このような事態になる前に、手塚はティアナとスバルの身に起こる事態を占いで予測しており、その事を隊長陣に通達していた。手塚自身は別にティアナ達の腕を信用してはいないではなく、あくまで今回のトラブルを未然に防ぐ為に伝えただけなのだが、その事を知らないティアナはただ、占いなんかで自分の未来が決めつけられていた事に腹が立った。

「強くなりたい……もつと、強く……ッ!!」

そして何よりも、手塚の占い通りになってしまっている自分の無力さが腹立たしかった。全ては自分が弱いからだと思い、それ故に彼女は力を渴望していた。もつと強くなりたい。ランスターの射撃は本物なのだと、それを証明してみせる為に。

そんな劣等感が……今の彼女に隙を生み出してしまった。

「隙だらけだ、馬鹿が」

「——え?」

ガンツ!!

1人思い詰めていたが為に、ティアナは気付けなかった。近くの窓ガラスから飛び出していたインペラーが、背後から密かに迫って来ていた事に。

気付いた頃には既に、彼女はインペラーの手刀で気絶させられた後だった。

「——よお、よく眠れたかよ」

「ッ……アンタは……!!」

数時間後。インペラーに気絶させられた彼女はそのまま誘拐され、とある廃ビルにまで連れ込まれた。ようやく意識を取り戻した彼女の視界に映ったのは、ニヤニヤ笑みを浮かべながらこちらを見下ろしている迷彩柄ジャケットの男の姿だった。

「さつきぶりだなあ。あの射撃は結構痛かったぜ」

「!? まさか、あなたがインペラー……!!」

「ああそうさ。よくわかったな」

迷彩柄ジャケットの男——湯村敏幸の正体がインペラーだとわかり、ティアナはすぐに起き上がり戦闘態勢に入ろうとした……が、それは不可能だった。ティアナの両腕は配管に手錠で繋がれており、とても仰向けの状態から起き上がれる状態ではなかった。

「魔力錠!? どうしてあなたがこんな物を……」

「さあ、何故だろうな？」

何故、次元漂流者の彼が魔力錠なんて所持しているのか。ティアナの疑問に対し、何も答えない湯村は余裕そうな表情を崩さず、仰向けのまま起き上がれないティアナに馬乗りになる。

「言っとくが、助けを呼ぼうとしたって無駄だぜ。テメエが持っているデバイスも、俺が適当なゴミ捨て場に捨てておいたからなあ。足がつくと面倒だ」

「な、クロスミラージュを……!?」

「ああそれから、抵抗なんざしてくるなよ……俺が従えてるモンスターの数、テメエも忘れた訳じゃあるまい？」

下卑た笑みを浮かべながら告げられた湯村の言葉に、ティアナは表情が固まった。彼女の脳裏に浮かび上がってきたのは、自分達フォワードメンバーやガジェットドローンを翻弄した数々のガゼル型モンスター達。もし自分が湯村を怒らせて、彼が無関係の民間人を襲わせるような事になれば……

「理解したな? 俺が何を言いたいか」

「んぐっ……卑怯者……!!」

「はっは、何とでも言え。ライダーに卑怯は誉め言葉だ」

湯村はティアナが着ている制服の上着に手をかけ、ボタンを外していく。それを見て、ティアナは自分がこれから何をされるのかすぐに理解させられる事となる。

「な、ちよつと……まさか……!?」

「おつと、騒ぐなよ」

バツンツ!!

上着を開かせた湯村は彼女のYシャツを両手で掴み、左右に力強く引っ張る。それによりボタンの弾け飛んだYシャツの中から、黒いブラジャーに包まれた豊満な乳房が露わになった。

「テメエが今やって良いのはただ1つ……大人しくしている事だ。わかったか、小娘?」

「くっ……!!」

魔力錠で魔法を封じられ、おまけに民間人が人質として扱われている。それをわかつている以上、ティアナはただ湯村を睨みつける以外の行動はできず、湯村は小さく舌舐めずりをしてから彼女の黒いブラジャーにも容赦なく手をかけるのだった。

「へえ、なかなか張りのあるおっぱいじゃねえか」

「ん、んむう……ッ……!!」

その後、ティアナは湯村によって様々な辱めを受けさせられていた。豊満な乳房を露出させられたティアナの上に湯村が跨ったまま、彼の太く勃起した肉棒が彼女の乳房の間に突っ込まれている。所謂パイズリの体勢で犯されているティアナの口元には、先程まで彼女が履いていたショーツが丸められた状態で突っ込まれており、今の彼女

は何も喋る事ができない。

「良いねえ、もつと遊ばせて貰おうか」

(ツ……気持ち悪い……!!)

湯村はティアナの乳房を両手で揉みながら、間に突っ込んでいる肉棒を程良く刺激する。柔らかな乳房から感じ取れる肉棒の生暖かい感触に、嫌悪感が湧いたティアナは湯村から視線を逸らす。そんな彼女の気持ちなど知った事ではない湯村は自身の腰を動かし、乳房を動かして肉棒に強い刺激を与えていく。

(耐えなきや……こんな奴に、負ける訳にはいかない……!!)

「お、おお、良いねえ……まずは1発目だ」

ビュルツビュルツビュルウ!!

「ん……!!」

乳房に挟まれていた湯村の肉棒が小さく震えた後、ティアナの乳房に突っ込んだ状態で射精を開始。噴き出される白い精液が乳房を穢し、ティアナは精液の熱さに両目を瞑る。

「ふう、スツキリした……どうだ？ 何もできずに犯される気分は」

1回目の射精を終えた湯村が問いかけるが、口にショーツを突っ込まれているティアナは何も答えられない。仮に喋れたところで、どうせ彼女は何も答えるつもりはなかった。

「つて、何も喋れないんだったな……まあ良いか」

湯村はナイフを取り出し、ティアナのスカートに刃を喰い込ませビリビリに引き裂いていく。それによりティアナの白い太ももが少しずつ見えていき、そしてスカートが完全に破り捨てられる事で何も履いていない彼女の股間まで露わにさせられた。

「はん、やっぱ餓鬼みたいなマ○コだわな」

「ツ……!!」

太ももを無理やり左右に開き、閉じている割れ目を指でなぞる湯村。その際、指先がクリトリスに触れるのを感じたティアナの体がビクンと反応し、それを面白がった湯村は少しずつ指先を割れ目の奥に挿し込んでいく。

「しっかし、あの餓鬼も不幸だよなあ。あの青い髪の毛のガキも」

「……？」

その時、湯村がある事を眩き始めた。

「だってそうだろう？　せつかく相棒の作戦に乗ったのに、その相棒に後ろから撃たれる羽目になっちゃったんだからなあ」

「ツ……!!」

自分がスバルを誤射してしまった時の光景。自分の射撃で落ちていくスバル。その姿が脳裏に浮かび、ティアナの表情に動揺が現れ始める。

「意地を張ってをこの俺に無謀な戦いを挑んだ結果、自分の相棒を撃つ羽目になっちゃってなあ……あん時、相棒が落ちて行くのを見てテメエはどんな気分だったんだ？　ん？　恥ずかしいか？　悔しいか？」

「ん、んむう……!!」

「あん時テメエは言ってたよなあ……『お前なんか私達は負けない』って。この俺に向かってあんな偉そうな事をほざいとぎながら、いざ戦ってみたら自分の相棒を撃つ羽目になっちゃって、ついでお前はこうして俺に犯されるとききた。こりやもう恥ずかしいなんてレベルじゃねえよなあ？」

「んん、んうううう……ツ!!」

ティアナは必死に首を振り、湯村の言葉を聞き入れまいとする。しかし湯村は、ティアナの目元から涙が零れ落ちそうになっている事に気付いていた。湯村の笑いは止まらず、彼女の秘所に指を突っ込んだまま更に掻き回し、強い刺激を与えていく。

「思い知ったかよ。テメエじゃこの俺には勝てやしねえ」

「んう、んん……!!」

「なくにが力を証明するだ……自分で自分の味方を撃ちまうような未熟者が、俺達ライダーに勝とうなんざ10年早えんだよ!!」

「んむううううううううっ!!」

Gスポットを激しく刺激され、絶頂したティアナの秘所から勢い良く潮が吹き出ていく。潮吹きが収まった後、口での呼吸ができないティアナは鼻で必死に呼吸を整えようとする。

(嘘……こんな奴に、私は……ッ)

「んじや、そろそろメインディッシュと行こうか」

湯村はびしょびしょに濡れた右手をペロリと舐め上げた後、再び勃起し始めた自身の肉棒を彼女の秘所にグイッと押し当てる。ティアナもそれに気付くが、今更どうにかできる状況ではなく……

「ん……んんんんんん!」

ズブリと膣壁が抉じ開けられ、湯村の肉棒がティアナの膣内に深く突っ込まれた。その際に処女膜も突き破られており、その痛みでティアナが苦悶の表情を浮かべるも、湯村はそれに構わずゆっくり腰を振り始める。

「はっはあ、凶星かよ! そりやそうだよなあ? 何一つ間違っちゃねえもんなあ!」

「んぐ、ぐうう……ッ……!!」

湯村はティアナの両膝を掴んだまま、激しく腰を振り膣内を蹂躪する。腰を振るたびに割れ目から赤い血が流れ落ちていく中、ティアナは処女を奪われた悲しみと怒り、そして腰を振られる事で感じ取れる気持ちの良い刺激に困惑を隠せなかった。

(嫌だ……痛いだけのはずなのに、どうして……ッ!!)

「うお、すげえ締まる……お前なかなかの名器だな。褒めてやるよ」

そんな事で褒められても何も嬉しくない。しかしティアナが何を思おうと、それは湯村にとってはどうだって良い話であり、彼はティアナの乳房を揉みしだきながら何度も腰を振り、奥深くの子宮口をノックし続ける。

(嘘……何で……どうして、こんなに気持ち良いの……?)

気持ち悪いはずなのに。拒みたいはずなのに。ティアナの意志とは反対に、彼女の体は犯される快感を全く拒もうとせず、全身で受け入れてしまっている。既に彼女の体は、湯村を拒める状態ではなかった。

「何だ、気持ち良いのか? だったら嫌がる事もねえさ。受け入れちゃまった方が楽になれるぜ?」

(受け、入れる……?)

いつからか、先程まで感じていたはずの痛みは消え、全て快感にすり替わっていた。その時点で、ティアナは湯村に負けてしまっていた。その事に、ティアナは疑問を抱かなくなっていた。

(ああ、そっか……これは、私への罰なんだ……スバルを、撃ったから……私に天罰が下ったんだ……)

これは自分への罰だ。

ならばそれを拒む理由はない。

悪いのは自分なのだから。

ティアナの心は、それを罰として受け入れてしまっていた。

「うお!?… また急に締めまりが……ッ!!」

そんな彼女の心境が体に現れたのか、膣内の締めまりが良くなった事に湯村も驚愕していた。そして湯村は少しずつ腰を振るスピードを速め、フィニッシュに至ろうとする。

「ぐ、そろそろか……おら、イクぞ!! たっぷり中に出してやるからな!!」

「ん、んん、んむう……ッ!!」

湯村が両手でティアナの腰を掴み、奥深くまで突っ込ませた亀頭が最奥部に到達する。そして大きく膨らもうとする亀頭が子宮口に合わさった瞬間……

ビュツビュルツブビュビュビュウ!!

「ん……んむうううううううっ!!」

大量の精液が、子宮内に放出されていく。ティアナは湯村に腰ががちり掴まれたまま、まるで電流が流れたかのような激しい快感に全身を震わせるのだった。

ザアアアアアアア……

雨が降り始めたミッドチルダ。

「——ん」

気付けば、ティアナはどこかの路地裏に放り出されていた。上半身はYシャツが開いた状態で乳房が隠れておらず、下半身に至っては靴と靴下以外に何も履いていない状態だった。

(……は……)

体は上手く動かない。両手の魔力錠は外されていたが、体が上手く起き上がろうとしてくれない。そんな彼女の股間からは、熱くて粘稠い液体がトロリと流れ出て行っている。ティアナはそれが、湯村に注ぎ込まれた精液が垂れてきた物なのだと理解した。

(……寒い)

きつと今頃、六課の皆が自分を探している事だろう。しかし連絡を取ろうにも、クロスミラージュは湯村に捨てられたせいで手元に存在していない。今の彼女にできる事は、こうして雨に打たれ続ける事のみ。

(……ま、良いか)

仮に動けたとしても、今の彼女はとても体を動かさそうという気にはなれなかった。

誰かに発見されて、この精液で穢された裸を見られる事になろうとも。

このまま雨に濡れ続けて、永遠に冷たくなっていく事になろうとも。

湯村に注ぎ込まれた精液で、彼の子供を孕む事になろうとも。

それらはもう、今の彼女にはどうでも良い事だった。

湯村に犯されたショックと疲労、そして降り注ぐ雨の冷たさが、彼女からの頭から少しずつ考える力を奪い去ってしまっていた。

(これは罰……スバルを撃ってしまった……私への、罰なんだから……)

スバルを撃ってしまった、弱くて未熟な自分自身への罰。

その罰は、受け入れて当然なのだから。

その思考を最後に、考える事をやめたティアナは瞼をゆっくり閉じていく。

意識が再び闇に落ちるその時まで、彼女の耳は降り注ぐ雨の音を聞き続けるのだった……

T o b e c o n t i n u e d …… ?

二宮×溟 IF

一体、どうしてなのだろうか。

『おら、もっと腰を振れや!』

どうして私は、こんな事をしているのか。

『ああ良いねえ、マジで締まるわコイツのマ○ロ……!』

どうして、私はこんな目に遭わされる羽目になってしまったのか。

『ほれ、俺のもしやぶってくれよな……!』

『へっへっへ……!』

アイツ等にどれだけ穢されたのか、もうほとんど覚えていない。

『お、おお、出すぞ、口ん中に出すぞ……!!』

『いっぱい出すからな、俺の子供孕ませてやるよ……うっ!!』

汚い物を注がれた回数など、覚えてもないし思い出したくもなかった。

それなのに、アイツ等に刻まれた痛みと快楽は、この体からは消えてくれなかった。

『うっはあ、いっぱい出しちまったぜ……!』

『うお、いっぱい出て来てらあ……こりや流石に妊娠したか?』

『ま、妊娠してようがしてまいが、俺達の知った事じゃねえけどな』

『はは、違いねえ』

『『『ぎやははははははは!!』』』

アイツ等が何を言っていたのか、そんな事はどうでも良い。

今はただ、早くこの時間が終わって欲しかった。

こんな奴等に愛されるのだけは嫌だ。

嫌なのに……どうして私の記憶から消えてくれないのか。

もう、こんなのは嫌だ。

お願い……誰か、私を助けて。

誰か……！

「——っは？！」

午前2時。その少女……野崎溟が目覚めたのは、そんな真つ暗な時間帯だった。

「ッ……んんは……」

意識がハッキリしてきた。彼女はそこが、自分がよく知る男の自宅である事を時間の経過と共に思い出した。思い出したくもない出来事を夢という形で思い出してしまった事で、その表情には苦悶が浮かび上がる。いつの間にか体中が汗だくになっており、着ているパジャ

マも体にべったりと気持ち悪く張りついていた。

「……夢、か」

あの忌々しい光景が夢である事に彼女は安堵したかった……が、それは無理な話だった。

何故なら、彼女が夢で見たあの光景は……

『おら、もっとしやぶれよー！』

『まだまだ、たっぷり中に出してやるからな……！』

『俺のガキをしっかり孕めよ……！』

かつて、溟自身が実際に体験した出来事なのだから。

「——ッ!!」

思い出すだけで体中に寒気が走り、彼女は自分自身を必死に抱き締める。あの日、自身の体に与えられた物が蘇って来るような感覚がした。奴等に穢された感触が、今もなお彼女の体に強く残っていた。

「ハア、ハア……い、いや……やめて、お願い……ッ……!!」

好きでもない奴等と、無理やり自身の唇を合わせられた記憶。

奴等に体中を触られ、あちこちをいやらしく舐め回された記憶。  
乳房を揉みしだかれ、乳首を何度も吸いつかれた記憶。

股間の割れ目を指で弄られ、クリトリスを何度も舐めしやぶられた記憶。

奴等の汚い肉棒を見せつけられ、無理やり啜えさせられた記憶。

汚い肉棒を膣内に突っ込まれ、熱い精液を何度も注ぎ込まれた記憶。

その熱い精液を、体中のあちこちにかけられた記憶。

「嫌だ……誰か、助けて……ッ!!」

「——い」

思い出すだけで、今も奴等に穢されているような感覚に陥っている。寒気が収まらず、ぞわぞわした感覚が溟の全身を支配しつつあった。震えが止まらず、彼女は必死に自分の身を守るように包まる事しかできない。

「やめて、やめてよ……お願いだから……!!」

「——おい」

「助けて、助けてよお……ッ……二宮さ——」

「おいっ!!」

耳元で呼ばれ、溟はハッと気付いた。彼女の視界に映ったのは、彼女がよく知る男の不機嫌そうな表情。左目に付けた白い眼帯。それは彼女が今一番助けを求めようとしていた人物——二宮鋭介その人だった。

「あつ……二、宮……さん……?」

「はあ……またか、野崎」

呆れ果てる二宮の表情は、すぐに溟の視界から外れた。彼がそこにいるとわかった途端、彼女はすぐさま彼に抱き着いていた。

「あ、あつ……良かった……二宮さん……二宮さんがいる……ッ!!」

「……また見たのか?」

二宮の問いかけに、彼の懐に顔を突っ込んだ溟は何度も必死に頷いた。その様子に二宮は面倒臭そうな表情で溜め息をつき、何度か彼女の頭を優しく撫でる事で彼女を落ち着かせる。

「……で、少しは落ち着いたか」

「ツ……ごめんなさい……私、また……」

「今に始まった事じゃない。俺もそろそろ慣れてきた」

溟がこのような事態に陥るのは、これが初めてではない。彼女が二宮の自宅に住み着くようになってから、こうして夜中に悪夢を見てはトラウマが再発し、そのたびに二宮が彼女を落ち着かせる。ここまですがワンセットだった。それがこれまでに何度も起こり続けるとなれば、流石の二宮も嫌でも慣れるというものである。

「念の為、夜中まで起きていて正解だったな」

「……こんな遅くまで、起きてたの……？」

「来週に向けて、この土日で終わらせておきたい仕事があるからな。さっさと徹夜で終わらせて、残りの時間をのんびり過ごすのが俺のモットーだ」

こんな夜遅くまでよく起きていられるものだと、溟は二宮に対して一種の尊敬を抱いたような気がした。いつも不愛想な表情の二宮だが、彼が傍にいただけで自分の心が物凄く安らいでいる。溟はそんな気がしていた。

「さて、落ち着いたなら良いな？ 俺は仕事に戻っ……」

立ち上がろうとする二宮の言葉が途切れる。振り返った彼の目には、自分の服の袖を掴み、離そうとしない溟の姿があった。

「……袖が伸びるから離せ」

「お願い、待って……まだ行かないで……お願い……ツ」

「……はあ」

また始まった。そんな思いと共に、二宮が小さく舌打ちする。

「……いつまでだ？」

「寝付くまで……寝付くまでで良いから……だから、お願い……！」

「……手間のかかる奴め」

さっさと仕事を終わらせたいところだが仕方がない。袖を掴んだまま離さない溟の為、二宮は仕方なく仕事を中断して彼女の傍にいる事にした。溟が寝ているベッドに二宮がドサリと座り込み、それに安堵した溟はようやく彼の袖から手を離し、代わりに自身が着ているパ

ジヤマの胸元に手をかける。

「まだ見えるのか？ 過去の夢が」

「ええ……また、アイツ等が出て来て……あの時のように」

溟はパジャマのボタンを外し、パジャマを脱いで上半身の白い肌が露わになる。白いブラジャーのみとなった彼女の上半身は、汗だくだった事でびっしょりと濡れており、それが彼女の体に更なる色気を与えていた。

「アイツ等に弄られた場所が……ぞわぞわしてるの……疼いて止まらないの……ッ……!!」

「……で、俺はどうすれば良い？」

「上書きして……」

ブラジャーも脱ぎ捨て、乳房が露わになる。大き過ぎず、小さ過ぎない彼女のふくよかな乳房がフルンと揺れ、その先端は小さな乳首がチヨンと突き出ている。

「アイツ等に穢された所……二宮さんが、上書きして……お願い……ッ!!」

「……全く」

二宮は着ていたジャージの上着を脱ぎ、上半身が白いシャツ1枚となった状態で溟を抱き寄せる。柔らかな乳房が二宮の胸板に押しつけられる中、溟と二宮の顔が近付き、互いの唇が合わさった。

「んちゅ、れろ……あむ……ッ……!!」

唇の間で、舌と舌が淫らに交じり合う。目を閉じた溟が小さく鼻息を鳴らす一方、二宮は表情を崩す事なく、まるで捕食者のように彼女の舌を徹底的に貪っていく。

「ん、あ……!!?」

舌を交わすだけで性的興奮が高まってきたのか、溟はとろんとした表情を浮かべていた。そんな彼女の乳房に二宮の手が触れ、片方は撫でるように優しく揉み解され、もう片方には二宮が顔を近づけ、乳房の先端から突き出ている乳首に軽く息を吹きかける。

「んっ……ひゃう……ッー」

二宮の唇が、溟の乳首をパクリと啜えた。そのまま二宮の舌が乳首

を突つつき、ぴちやぴちや音を立てながら唾液に塗れさせるように  
蹴つていく中、乳首を弄られた溟は体をピクピク震わせながらも、自  
分が今されている事に興奮が収まらなかった。

「ん、んう……もつと……もつとして……！」

「……注文の多い」

そう文句を垂れつつも、二宮は溟の乳首から唇を離し、乳輪の周り  
に一カ所ずつ順番にキスをしていき、更には彼女の細い首元、胸元の  
鎖骨などにも深いキスの跡を残していく。

(あ、あ……もつと、もつとお……！)

体のあちこちにキスされるたびに、溟は自分の体が征服されていく  
のを感じていた。しかし、あの連中に征服された時とはまるで違つて  
いた。あの時とは違う。今は望んで彼に征服されたいと。心がそう  
思い始めていた。

「背中を向けろ」

「ん……ッー」

キスの嵐は止まらない。肩からうなじに、そこから腰に向かつてい  
くように二宮のキスが続いていく。キスが腰辺りまで少しずつ近付  
いていくたびに、溟はゾクゾクとした感覚の虜にされていく。

「脱がすぞ」

「あつ……」

パジャマのズボンも脱がされ、その下に履いていた白いショーツが  
二宮の視界に晒される。既に何度も見せた事があるにも関わらず、彼  
に見られているというだけで溟は羞恥心でいっぱいだった。

「おい、何故今更隠す？」

「ッ……だ、だって……恥ずかしいじゃない……」

「知らん。良いから手をどかせ」

「ちよつ……ひゃあ!？」

溟の両手をどかした二宮は、彼女のショーツに手をかけて一気に脱  
がし、溟の大事な所を露わにさせた。そのまま二宮は溟の下半身を持  
ち上げてまんぐり返しの状態にさせ、溟が両手で隠せない状態にさせ  
る。

「ッ……や、あ……そんな、見ないで……!」

「いちいち文句は受け付けん」

「んん……あ、あ!? そ、そこは、ああ……ッ!!」

溟の恥ずかしがる声を見せず、二宮の舌が彼女の大事な所をペロリと舐め上げた。そのまま指で左右に広げられた割れ目を二宮の舌が何度も行き来し、クチュクチュと音を立てながら溢れ出る液体を掬い上げ、溟は大事な所を舐められている感覚にゾクゾクと体を震わせる。

(な、舐められ、てる……私の、あそこが、あ……ッ!!)

恥ずかしさと気持ち良さが合わさった溟は、複雑な表情を浮かべながらも両手で口元を押さえ、漏れてしまいそうな喘ぎ声を必死に我慢する。しかし二宮の舌が勃起し始めている小さな突起を突ついたらその瞬間、彼女の全身に大きな痺れが行き渡った。

「んんんっ……!?!」

口元を手で塞いでも、溟は喘ぎ声を抑え切れなかった。一方、二宮はそんな彼女の反応をやはり無視し、ちよこんと勃起している突起を舌で何度も突ついたら後、パツクリ開いた割れ目に人差し指をゆつくり突き入れていく。

「んん、んむう!?!」

「怖がるな。ほんの一瞬だ」

彼の指が引き抜かれるかと思いきや、また奥深く突っ込まれる。それを何度か繰り返すたびに溟の塞いでいる口から喘ぎ声が出し、二宮は割れ目の奥深くを指で掻き回しながら、今なお勃起している突起をもう片方の人差し指で軽く突つつき始める。

「ん、んんん……ッ!!」

膣内を指で掻き回される刺激に溟が体を何度も震わせ、喘ぎ声を必死に抑えようとする。それが数秒間続いた後に二宮が指を引き抜き、指の先端と割れ目の間に淫らな銀色の橋が出来上がる中、溟は下半身から流れて来る刺激がようやく収まった事で荒い息を整えようとする。しかし……

「ちゅ、じゅるるるる……」

「うんんん!!!」

そんな彼女に不意打ちを仕掛けるかのように、プックリ膨らんだクリトリスを二宮が唇に挟み込み、まるでスープを飲むかのように溢れ出る液体を激しく吸い上げる。予期していなかった刺激に溟は体がビクンと大きく反応し、ひと際大きな声を上げながら一気に達してしまう事となった。

「はあ、はあ、はあ……!」

「……そろそろか」

大事な所を散々吸いつかれ、舐め尽くされた溟を二宮はベッドに寝かせ、絶頂に至った溟はその後何度か体をピクピクさせながら呼吸を整える。しかしそれを大人しく待ってくれる二宮ではない。

「後ろを向け」

「……ん」

溟を四つん這いの恰好にさせ、その後ろに二宮が回り込む。溟は赤くなつた顔を隠そうと目の前の枕に顔を突っ込む中、後ろからベルトを外す音を聞き取った。

(あ……また、挿れられる……)

これまで、過去に何度も突っ込まれた事がある男性のそれは、だが今は、それをこの男に入れて貰える事に少なからず期待の感情を抱いている自分がいた。そんな時、彼女の丸い尻が掴まれる感覚がした。

「あ……ッ」

入れられる。そう思った次の瞬間、割れ目に無理やり押し込むように太い肉棒が突き込まれた。

「ん……んんんっ!!!」

膣内に入れられた直後、溟は全身に更なる電流が流れたような気がした。枕に顔を伏せたまま喘ぎ声を抑える事も忘れた彼女を、二宮は後ろから彼女の尻を両手で掴みながらゆっくり腰を動かし始める。

「ん、あ、あ、ああ、あっ……!!!」

グリグリと膣内を抉るような感覚。自分の中が押し広げられていくような感覚。奥深くにある子宮口が何度も突かれる感覚。溟は後ろから何度も腰を打ちつけられながら、下半身から湧き上がって来る

淫らな快樂に身を投じていく。

「顔を上げる」

「あ、やあっ……!?」

二宮が溟の両腕を後ろから引つ張り、彼女の上半身を無理やり上げさせる。それにより溟は赤く染まった顔を枕で隠す事ができなくなり、彼女は「恥ずかしい」という気持ちと「気持ち良い」という気持ちとが混ざり、何とも言えない表情で激しく乱れ続ける。

「あ、やあ、あっ……こ、こんなの……ッ!!」

「嫌なのか? その割には随分と喘いでいるようだが」

「ああ、違っ……ひゃあう!!」

二宮の突っ込んだ肉棒が膣内を何度も往復し、パチンパチンと腰を打ちつける音が鳴り響く。そのたびに溟は、自分の膣内が彼のモノによつてどんどん慣らされていくのを直に感じ取り、その顔には不快感ではなく歓喜の表情が浮かび上がっていく。

(感じる……気持ち良過ぎて、イッチャいそう……ッ!!)

ピストンがしばらく続いた後、いよいよその時がやって来た。二宮は溟の両腕を離れた後、彼女の細くスラリとした腰を掴み、徐々に腰を振る速度を上げていく。それが絶頂に達する合図なのだ。溟は理解していた。

「あ、かは……ッ!!」

二宮が溟の腰をグツと引き寄せ、奥深くに突っ込まれた肉棒の先端が子宮口にズンツと打ちつけられる。溟は自身の子宮が、二宮の肉棒を受け入れようとしているのを感じ取った。

そして……

ビュルツビュルルツドクツドクンドクン!!

「~~~~~ッ!!!!」

溟の子宮口が押し広げられ、亀頭がほんの僅かに侵入する。その直後、二宮が自分の子宮目掛けて射精し始めるのを感じ取った溟は、ベッドのシーツを掴みながら強烈な快樂にその身を震わせ続けた。

(あ、あ、出て……中に出てるう……ッ!!)

広がった子宮口が亀頭を啜え込み、注ぎ込まれて来る精液を受け入

れている。それはまるで子宮が二宮の子供を孕もうとしているかのようで、お腹の中が熱く満たされていく感覚は溟の体に喜びを与えた。

(熱いのが、お腹にいっぱい……あつたかくて、気持ち良い……!!)

ドクン、ドクンと、射精はまだ続いている。自分の膣内に射精される経験はこれが初めてではないが、溟は今までで一番、この長い射精に大きな幸福を感じていた。こんな時間が少しでも長く続いて欲しい。溟はいつからかそう思い始めていた。

(んあ……まだ、出てる……もつと いっぱい……欲しい……♡)

自分が何故そんな事を思ったのか。

この時の溟はまだわからなかった。

誰も信用しないと決めたはずなのに。

深く信用してはいけない相手だと理解しているはずなのに。

自分でも気付かない内に、溟はひたすら二宮に抱かれる事に快感を見出すようになっていた。

だからこの瞬間だけは、幸せなままでいたい。

そう思いながら、溟は二宮の暖かさに包まれるように眠りに落ちていくのだった……

「——たく、やっと眠ったか」

溟が眠りに落ちた後。彼女の下半身から肉棒を引き抜いた二宮は、近くの棚に置いてあるティッシュ箱から数枚のティッシュを引き抜

き、後処理を開始する。引き抜かれた溟のあそこからは、二宮が注ぎ込んだ精液がドロリと溢れ出ようとしている。

(またシーツを変えなきゃならんな……全くもって面倒臭い)

何が悲しくて女子高生を抱かなければならないのか。二宮は目の前で静かに眠っている溟に対し、呆れと苛立ちの混ざり合った鋭い目を向けながら、シーツを汚している精液を丁寧に拭き取っていく。

(まあ良い。例のトラウマで発狂して、人格が壊れるような事があっても困る……)

このガキはまだ使える。今後もライダーの戦いを勝ち残るには、使える手駒は1人でも手元に置いておいた方がいくらか都合が良い。そう思いながら、二宮は溟の前髪を右手でゆっくり掻き上げ、ぐっすり眠っている溟の寝顔を見下ろす。

「精々、俺の為に役立つ事だな。使えないようなら、所詮お前はそれまでだ……」

二宮は決して、誰かに心を開く事はない。

故に、誰かを愛する事もない。

それに気付いているのか否か、溟はその後ろも穏やかな表情で眠り続けていた。

孤独を嫌う者と、孤独を望む者。

たとえ境遇は同じでも、そこに信頼関係など存在しない。

ましてや愛という感情など、決して芽生えるはずがないのだ……

T o b e c o n t i n u e d …… ?

夏希（美穂） I F（☆）

白鳥夏希……またの名を、仮面ライダーファム。

かつては霧島美穂という名前の詐欺師だった彼女は今、手塚海之とカメンライダーライアと共に、モンスターから人々を守るべくミッドチルダで戦いの日々を送り続けていた。

しかし、どれだけ贖罪の為に戦い続けていても、過去に犯した罪が消える訳ではない。

手塚や機動六課の仲間達と出会う前……つまりミッドチルダにやって来たばかりの頃に犯した罪。

その報いがある時……思わぬ形で、彼女に襲い掛かって来る事となった。

「……はあく」

ミッドチルダ首都クラナガン。

電車に乗って街中を移動していた白鳥夏希。現在、彼女はティアナの家に居候させて貰っているのだが、ティアナは執務官補佐としての仕事もあり、しばらく家に不在だった。その為、六課に滞在していた頃は碌に観光もできていなかった夏希は、ティアナが不在の間、少しでもこの街の色んな場所を見て回りたいと思い、こうして電車を利用

し街の色んな場所を巡って回りながら存分に楽しんでいるところだった。

そんな彼女はこの日もまた、買い物を楽しもうと電車に乗って移動していたのだが……ある状況に出くわし、深い溜め息をついていた。一体どんな状況なのかと言うと……

(ああもう……何で痴漢に出くわしちゃうかなあ……?)

そう、痴漢である。電車内の細いポールに左手で掴まりながら立っている夏希の後ろから、彼女が着ているコートの上から尻を触って来ている男がいた。着ているスーツや持っているカバンからして、恐らくサラリーマンだろう。夏希は背後から尻を触って来ている男に苛立ちを募らせていた。

(どうするかなあ……次の駅で「痴漢です」って叫んで駅員に突き出すか、次の駅でさっさと降りて逃げるか……)

今のところ、このサラリーマンの男以外に痴漢を働いている者はいない。それにこの男も、尻を触る以外の行為は特にして来ない為、この程度ならスルーしてやらない事もないだろう。そう考えた夏希は敢えて、今はまだ行動は起こさない事にした。

(それにしても……)

サラリーマンの男の右手は、夏希の尻をコートの上から手の甲で撫でるように触っている。この程度は特にどうという事もないのだが、時々手の甲ではなく、掌で揉むように触る事もある。その尻を揉まれる感触がコート越しでも伝わって来ているのが、夏希に不快な思いをさせていた。

(コイツ、いやらしい触り方して来るなあ……)

夏希の左手はポールを掴んでいる為、代わりに空いている右手を使って男の手をさりげなく払うように動かす。しかし、ここで男は違う行動を取り始めた。

フニヨンツ

「……ッ!?!」

男が夏希の尻ではなく、今度は夏希の左胸を掌で直接触って来たのだ。触られている尻の方に意識が向いていた為か、油断していた夏希

は男の思わぬ行動に驚いた。

(ちよ、胸もかよ……!?)

夏希の左胸に置かれた男の左手は、彼女が着ている白いブラウスの上から揉むように触って来る。まさか胸まで触られるとは思っていなかった夏希は男の行動に驚きつつ、胸を揉まれる感触にほんの少し反応してしまった。

(ツ……くそ、足でも踏んづけてやろうか……!!)

胸を揉みしだいて来る男の手を、夏希は右手で払い除けようとする。しかしそうすると、今度は右手で再び夏希の尻を触って来る。段々イライラが増して来た夏希は小さく舌打ちし、自身が履いているブーツのヒール部分で男の足を踏みつけてやろうかと思いい始めるほどだった。

(……あれ?)

しかしこの時、夏希はある事に気付いた。自分が乗っているこの電車は、今も走り続けている最中だ。他の乗っている客も多いとはいえ、ポールか吊り革にでも掴まっていなければ、このガタゴト揺れている電車の中でバランスを取り続けるのは難しい事のはず。だとすれば何故……

このサラリーマンの男は、両手で自分の体を触りに来ているのか？

(ツ……まさか……!!)

自身の真後ろではなく、左側を見た夏希は嫌な予感的中した。いつの間にか夏希の左隣に立っていた黒いニット帽の男が、夏希の胸を左手で触っていた。そして最初からずっと触って来ているサラリーマンの男は、左手で吊り革に掴まってバランスを取っている。

(嘘だろ……!?)

そう、夏希を狙っている痴漢は2人存在していた。同じ女性をターゲットにしたからか、男達は意気投合して連携を取り始めていたよう

で、彼等は夏希のそれなりに拔群なスタイルの体を存分に楽しもうと  
していたのだ。流石の夏希もこの状況はマズいと判断し、男達から距  
離を離すべく場所を移動しようとしたのだが……

「おっと」

「なっ……!!?」

それを予測していたニット帽の男が、夏希の左手を即座に掴み上げ  
た。そこからの行動は早く、ニット帽の男は夏希の左手に糸のような  
物を巻きつけて、ポールに縛りつける。サラリーマンの男も同じよう  
に糸のような物を取り出し、夏希の右手を掴んでから吊り革に手首を  
通させて糸を巻きつけ、あつという間に夏希の両手が封じられる事と  
なってしまった。

(くそ、どこまでやる気だよコイツ等……!!)

このままだと、どこまでエッチな目に遭わされるかわかった物じゃ  
ない。夏希は何とかして拘束されている両手の糸を引き千切ろうと  
するが、強めに縛りつけられている為か、全く抜け出す事ができない。  
そんな時、夏希の左横に立っていたニット帽の男が、夏希の耳元で話  
しかけてきた。

「悪いけど逃がさないよ、美穂ちゃん?」

「……え?」

美穂。それは自分が詐欺師だった頃の偽名だ。どうしてその名前  
を知っているのか。あの名前を知っているのは元いた世界で出会っ  
たライダー達と、手塚や機動六課の仲間達だけのはず……とまで考え  
たところで、夏希はハッと気付いた様子で男達の顔を見た。

「美穂ちゃんと会うのは久しぶりだねえ。1年ぶりだったかな?」

「元気にしてたかい? 僕達のお金を使って」

「……ど、どうも」

夏希は思い出した。この男達はかつて、夏希が機動六課に保護され  
る前に出会い、生活費を確保する為に彼女が財布を騙し取った連中  
だ。まさかこうして再び対面する事になるとは思っていなかった夏  
希は、彼等がこうして痴漢行為をして来る理由を何となく悟り始め  
た。

「酷いじゃないか美穂ちゃん。僕達の財布を盗むなんて」

「あ、ああく……」

夏希はこれまで、自分に性的な目を向けて来る男達に敢えて擦り寄り、隙を見て彼等の財布を盗んで来た。いくら彼等が変態的思考を抱いているとはいえ、彼等からお金を盗んだのは他でもない自分である。その為、夏希はこの男達に対して強く出る事はできなかつた。

「ねえ美穂ちゃん。僕達は純粋に、行く宛てのない君を心配してたんだよ？ それなのに、どうして僕達の財布を盗んで行っちゃったのかな？」

「えつと、その……その節はどうも、すみませんでした」

「いや、許さないよ……って言いたいところだけど。俺達は別に、財布を盗まれた件についてそんなに怒ってる訳じゃないんだよねえ」

「へ……う？」

ニット帽の男が告げた言葉に、夏希はキョトンとした表情を浮かべる。彼が言おうとしている事の意味がわからない彼女の為に、サラリーマンの男が説明してくれた。

「僕と彼はまだ、金銭面については余裕があるからねえ。財布の1つくらい盗まれたところで、特に生活面での支障はないんだよ。他の連中は知らないけどね」

「けど、それほど怒っていないというだけで、君をタダで許そうと思ってる訳でもない……わかる美穂ちゃん？ 俺達の言いたい事が」

(……なるほど、そう来たかあ)

男達が自分に何を求めてきているのか。この時点で既に夏希は答えに辿り着いていた。何故なら、この男達が今現在やっている事がその答えなのだから。

「へえ、わかってるみたいだね。僕達の言いたい事」

「……何となく」

お金は返さなくても良いから、代わりにその体で支払え。男達が言っているのはそういう事である。この状況をどう抜け出すべきか、頭の中で必死に思考を張り巡らせようとする夏希だったが……彼女を考えを見抜いているのか、ニット帽の男は更なる行動に出た。

「ああちなみに」

「え……ちよ、待つ!？」

夏希が体を振って抵抗するも、それを物ともしないニット帽の男は夏希のブラウスを掴み、ボタンを引き千切る勢いで左右に力いっぱい引つ張ってみせた。そのせいでブラウスの胸元が大きく開き、その下に身に着けていた白いブラジャーが露わになってしまった。

「君に拒否権なんてないよ。だって拒否なんてしたら……」

「ちよ、おい……!？」

男達は自分の通信端末を取り出し、白いブラジャーに包み込まれている夏希の大きな乳房を撮影し始めた。これには夏希も思わず拒否反応を示したが、彼女の抵抗も虚しく、シャッター音と共に夏希の胸元が写真に収められてしまう。

「顔もバッチリ写っちゃったからねえ。美穂ちゃんだって、これをネット中にバラ撒かれたくはないでしょ?」

「それとも、こうした方がもっと効果的かな?」

「!?! や、やめ——」

ニット帽の男がハサミを取り出し、夏希の白いブラジャーにハサミの刃を引つ掛ける。そしてジヨキンという音と共にブラジャーが切り取られ、彼女の乳房が完全に露わになってしまう。

「あらら、見られちゃったねえ」

「……ッ!!」

丸くて柔らかそうな白い乳房と、乳房の先端に存在するプックリとしたピンク色の乳首。それを公共の場で無理やり露出させられた夏希は顔が赤くなり、男達はニヤニヤ笑みを浮かべながら通信端末のカメラに収める。

「ちなみに言っておくと、周りの人達も皆グルだから。助けを求めても無駄だよ」

「!?! そんな……」

そう言われて夏希がしてみると、周りに立っている客達は全員が男性だった。しかも何人かはこちらにいやらしい視線を向けており、こちらを向いていない者達も口元がニヤリと笑みを浮かべている。ど

ここにも、夏希を助けてくれそうな人間は誰もいなかった。

「大人しくしていれば、この写真をネットにバラ撒いたりしないよ。やるとすれば、僕達がオナニーをする時のおかずに使わせて貰うくらいさ。」

「さあ、どうする?」

こうなってしまった以上、もう自分が抵抗する事は許されない。恐らく顔も一緒に撮られてしまった事だろう。もし写真がネット中にバラ撒かれてしまえば、いよいよ自分は街中を出歩けなくなる。自分の親しい面々にも多大な迷惑をかける事になってしまう。

(そんな事は……)

こんな自分を助けくれた手塚。

罪を犯した自分が生きる事を許してくれた仲間達。

彼等に迷惑をかけたくはない。そんな思考に行き着いてしまったが故に……

「……わかった」

夏希にはもう、男達の要求を呑む以外の選択肢はなかった。

「ぴちや、ぴちや、ちゅうちゅう……」

「ん……ん、くうっ……!!」

それから、男達による夏希の陵辱は始まった。両手をポールと吊り革に縛りつけられ、身動きが取れない夏希の露出している乳房を、男達は思いのままに弄っている。

「ああ、良い、良いよ、美穂ちゃんのおっぱい……ちゅるるる……!」

「んん!? くっ……あ、んう……!!」

ニット帽の男は背後から左手を伸ばし、夏希の左胸を存分に揉みだしている。サラリーマンの男は夏希の乳房に顔を近付けて右胸の乳房に吸いつきながら、唇でパクリと啜えた乳首をチュウチュウ吸い上げている。左右同時に乳房を弄られている夏希は、乳房から伝わってくる刺激に何とか耐え続けるも、彼女の体は刺激が来るたびにピクピクと震えており、非常にわかりやすい反応だった。

「感じてるのかい?」

「ッ……誰が……感じて、なんか……!!」

「じゃあこれならどう?」

「え……ひゃん!」

夏希の左胸を揉んでいたニット帽の男が、指先で乳首を軽く摘まむように刺激する。夏希がビクンと体を大きく震わせる反応を見せ、それを見たサラリーマンの男も乳首を啜えたまま、口内で何度も乳首を舐めしやぶる。

「ぴちや、れる、ちゅうちゅう、ずじゅるるる……!」

「ん、んんんっ!!」

乳首を摘ままれ、乳首を勢い良く吸われ、夏希は乳房から伝わってくる刺激に耐え切れず、何度も体を震わせながら達してしまった。それに気付いたニット帽の男が耳元で囁きかける。

「あれ、もしかしてイッちやった?」

「はあ、はあ……ッ……!!」

「へえ、感じてくれてるんだ。じゃあもつと感じさせてあげるね」

乳首から口を離れたサラリーマンの男は、もう1回だけ乳首を啜えるようにチュツとキスした後、顔を離してから夏希の右足を触り始める。黒いストッキングに覆われている太ももをいやらしく触り、その感触に夏希が更に表情を歪める中、サラリーマンの男は夏希の右足を高く持ち上げた。

「!? な、何を……」

「はいはい、そのままジツとしててねえ」

「今度はこつちを触るからねえ」

サラリーマンの男の代わりに、ニット帽の男が後ろから夏希の右太ももに手を回し、右足を上げた状態にする。そしてサラリーマンの男は夏希の履いているスカートに手をかけ、ニット帽の男から借りたハサミでスカートを少しずつ切り刻み始めた。

(ちよ、嘘だろ……!?)

スカートがどんどん切り刻まれていき、黒いストッキングの中に履いている白のショーツが、サラリーマンの男の目に晒される。それだけでも物凄く恥ずかしい事なのに、サラリーマンの男のエッチな欲望は止まらない。

「うくん、ストッキングが邪魔だねえ……つと」

「お、おい!？」

ビリッビリビリッ!!

サラリーマンの男がストッキングを力づくで破き、純白のショーツが露わになる。サラリーマンの男はそのショーツもハサミで切り裂き、夏希の大事な所を丸見えの状態にしてしまった。

(み、見られてる……こんな奴等に……!!)

好きでもない男に、女の子の大事な部分を見られている。それだけでも夏希は大事な所がキュンと締まるような感じがしていた。それに気付いたのか否か、サラリーマンの男はゆっくり顔を近づけていき……

「れろん……」

「んひい!？」

指で割れ目を抉じ開け、クパアと開かれたそこを舌で舐め上げた。大事な所を舐められる気持ちの悪さに夏希が小さな悲鳴を上げ、男は続けて割れ目を上下に舐めしやぶる。

「や、やめ……ひう……ッ!？」

「おつと、こつちも忘れて貰っちゃ困るよ」

「ああ、美穂ちゃんのオ○ンコ美味しいよ……ちゅぱ、れろ、ぴちやぴちや……!？」

サラリーマンの男に股間を舐めしやぶられ、ニット帽の男には再び乳房を揉みしだかれ、夏希は連続して襲って来る快感に何度も体を振

らせる。そんな彼女の反応も楽しんでいるのか、ニット帽の男は夏希の乳首を指で軽く突つつきながら、彼女の首元に顔を近付けてペロリと首筋を舐め上げる。サラリーマンの男は小さく勃起しているクリトリスをパクリと啜えて、舌で転がしながらチュウチュウと吸い続ける。

「あ、あ、ああ……ッ……!!」

両手をポールと吊り革に縛りつけられ、片足を後ろから持ち上げられている夏希。そんなアンバランスな体勢で立たされている彼女は、どのように力を踏ん張れば良いかわからず、そのせいで乳房と股間から来る刺激を我慢するのが非常に難しい状況だった。

「じゃ、そろそろ2回目イッておこうか」

「ちゆる、ずちゆう……じゅずぞぞぞ……!」

「く、う……んはああああああつ?!」

両方の乳首を同時に摘ままれ、クリトリスを激しく吸い上げられた夏希は、あつという間に絶頂に達する羽目になってしまった。床に着いている左足をガクガク震わせながら、夏希は男達を鋭い目付きで睨みつける。

「おお怖い怖い。そんな目で睨まないでよ美穂ちゃん」

「はあ、はあ……ねえ……もう、充分だろ……ッ!!」

「まだだよ。俺達はまだ満足俺達しちやいない」

ニット帽の男は夏希の右足を降ろした後、彼女の両手を縛っていた糸を解き始めた。それにより両手が自由になり、その場にペタリと座り込む夏希だったが、もちろん男達は彼女を逃がすつもりはない。

「まだ休憩は早いよ」

「ッ!」

その時、最初は見ているだけだった周りの男達も数人ほど動き出し、夏希の腕を掴んで無理やり立ち上がらせた。そして2人の男が夏希の着ていたコートを脱がせた後、彼女の太ももに手を回し、M字開脚の体勢で夏希の体を軽々と持ち上げてみせた。

「わかってるよね? 次に僕達が望んでいる事が」

「……ッ!」

気付けばニット帽の男も、サラリーマンの男も、ズボンの開いたチャックから勃起した肉棒を露出させている。その周りで見ていた男達も皆、自分の肉棒を露出させている。男の肉棒を一度にたくさん見せつけられる事など今まで一度もない夏希は、初めて見る男の肉棒を前に体を強張らせた。

「ま、まさか……」

「そう、そのまさかさ」

ニット帽の男が己の肉棒を掴み、夏希の股間にゆっくり近付けて行く。当然、M字開脚の体勢で持ち上げられている夏希は逃げられない。

「行くよ……」

そして……

ズプウツ!!

「ん……く、うううううううつ!!」

ニット帽の男が、夏希の股間に肉棒を挿入させた。初めてを奪われた夏希は、処女膜を破られた痛みと苦悶の表情を浮かべ、両腕と両足に力を入れる事で痛みを耐え抜こうとする。

「力は抜いた方がよいよ。じゃないと逆に痛いだろうから」

「んむう!?!」

痛みを我慢しようとしていた夏希の唇に、サラリーマンの男が顔を近付け、自身の唇を堂々と押しつけた。2つ目の初めても同時に奪われてしまった夏希は顔を離そうとしたが、サラリーマンの男は夏希の顔を掴んで離さず、唇を押しつけたまま強引に舌を突き入れてきた。

(こんな、奴等に……アタシの、初めてが……ッ……!!)

こんな卑劣な奴等に、処女とファーストキスを同時に奪われた。その事実には夏希が悔しく思う中、ニット帽の男は夏希の腰を掴み、肉棒を膣内の奥深くまで突き入れる。

「んぐあ!?!」

「さて。美穂ちゃんのオ○ンコ、存分に味わうとしようか」

ニット帽の男が腰を振り始め、夏希の膣内を肉棒が往復し始める。膣内を擦るたびにグチュグチュといやらしい水音が鳴り響き、最初は

狭かった膣内が肉棒によってどんどん抉じ開けられていく。ニット帽の男が根元まで突き入れると、最奥部までやって来た亀頭が子宮口に到達し、チュツチュとキスするかのようになんども接触する。

「くう、あ、あ、ん、ああ……ツ!!」

「ああ、気持ち良いよ美穂ちゃん……!!」

膣内を激しく蹂躪され、もはや我慢する事も忘れてしまった夏希の口からは、エッチで可愛い喘ぎ声は何度も漏れ出ている。それはニット帽の男だけでなく、自分で肉棒を扱っていたサラリーマンの男や周囲の男達をも興奮させ、彼等の興奮度が更に高まっていく。

「ツ……そろそろ、中に出すでしょうか……!!」

「あはあっ!? あ、ああ、あ、やめ、て、おねが——」

「くっ……出すよ!!」

あまりの膣内の締め具合に我慢できなくなってきたのか、ニット帽の男は夏希の腰を掴む力を強め、肉棒を膣内の最奥部まで力強く突き入れた。それにより子宮口に押しつけられた亀頭が、子宮口の前でほんの僅かにプルプルと震え出し……

ブピュツビュピュツビュルルルルウツ!!

「ん、く……ああああああああああああああっ!!?」

大きく膨らんだ亀頭から、熱い精液が勢い良く放たれ始めた。子宮口の目の前で発射されたそれは、夏希のお腹に新たな命を宿らせようと、子宮内にドクドクと大量に注ぎ込まれていく。

「く、ああ……凄く締まる……!!」

「あ、んあ……ああああ……ツ!!」

射精はすぐには収まらず、ニット帽の男は夏希の腰を掴んだまま離さない。彼が射精の快感に身を震わせる中、子宮に直接精液を注ぎ込まれている夏希もまた、下半身から来る絶頂がもたらす快感に全身を何度も震わせ続ける。

(熱い……中に、熱いのが……ツ……!!)

熱い精液が注ぎ込まれているのを下腹部から感じ、夏希は無意識の内に恍惚の表情を浮かべてしまっていた。そして数十秒ほど経過した後、ようやく射精を終えたニット帽の男が肉棒をゆっくり引き抜い

ていき、ポツカリ開いている割れ目からは精液がとろりと溢れ出ていく。

「ふう……気持ち良かったよ、美穂ちゃん」

「はあ、はあ、はあ……ッ……」

開かれたブラウスからは乳房が丸見えで、男達にM字開脚の状態を持ち上げられ、破けたストッキングから見える股間の割れ目から、溢れた男の精液が下へゆっくり垂れ落ちていく夏希。そんなエロ過ぎる彼女の痴態を見て興奮した男達は、自分の通信端末で何度もその光景を写真に撮り続けた。

「まだ終わりじゃないよ、美穂ちゃん」

「あ、あ……う？」

男達は夏希を降ろして立たせるも、絶頂に達していた夏希は両足に力が入らず、その場に倒れかけたところを男達に支えられる。するとニット帽の男に代わり、サラリーマンの男が肉棒を露出させた状態で近付いて来た。

「次は僕の番だからね」

「はあ、はあ……まだ、やる気……なの、かよ……ッ!!」

「当然だよ。僕だけじゃない、周りの皆だってそうさ」

たった1回の射精で終わらせてくれるほど、男達は甘くない。サラリーマンの男は夏希の左足を高く持ち上げた状態のまま、自身の肉棒を彼女の股間にヌチャリと押しつけ……

ズブリッ!!

「んんんんんんっ!!」

そのまま夏希の膣内に、己の肉棒を挿入してみせた。再び肉棒を挿入された感覚に夏希が体を震わせ、サラリーマンの男は左手で彼女の太ももを、右手で彼女の腰を支えながらピストンを開始する。

「おお、本当だ……凄く気持ち良いオ○ンコだねえ……!!」

「んあ、ああっ……く、あううっ!!」

サラリーマンの男が激しく腰を振る中、夏希は自分の目の前にいるニット帽の男の胸倉にしがみつく事で、右足のみで立っている状態から何とかバランスを取り続ける。しかし肉棒が彼女の膣内を何度も

掻き回し、そのたびに夏希は右足から力が抜けそうになり、ガクガクと右足を震わせている。

(駄目……また、イカされちゃう……!!)

気付けば周りで見ていた男達も、その内の数人が夏希に近付き、彼女の体を撫で回していた。ある男は夏希の下腹部を撫で回し、別の男は夏希の乳房を撫でるように揉み解し、またある男は夏希の太ももにキスの跡を残そうと強めに吸いついている。ただでさえ膣内を肉棒で蹂躪されているのに、一度にそんなたくさんの愛撫をされてしまっている以上、それを耐え切れるほど夏希も我慢強くはなかった。

「く、ああ、出るよ美穂ちゃん……中に出すからねえ……!!」

「あ、あ、あ、あぁっ……!!」

サラリーマンの男もまた、我慢の限界が近付いて来たようだ。少しずつピストンを速めながら夏希の膣内を激しく蹂躪した後、肉棒を根元まで深く突き入れる。すると膣内で亀頭が子宮口にピッタリくっつき……

「ああ出る、出るよ!! 美穂ちゃん……美穂ちゃんのお腹の中にい!!!」

ブビュツビユルツビユツブピユルルルウ!!

「ひや、あ、ん、くううううううう……ツ!!!」

濃くてドロドロした熱い精液が、夏希の子宮内に侵入して来た。夏希が再び絶頂の快感に震えている間も、サラリーマンの男は彼女の腰をグイッと引き寄せたまま腰を強く押しつけ、彼女の子宮内に自分の精液をたつぷりと注入していく。

「ああ、美穂ちゃん……美穂ちゃんの子宮が、赤ちゃん部屋が降りて来てるよお……!!」

「ん、はあ、はあ……ああ……ツ……!!」

サラリーマンの男は射精しながらも夏希の左足を降ろし、後ろから彼女の下腹部をごつい手で撫で回す。熱い精液の注がれている下腹部を撫で回される感触に、夏希は自身の股間がまたキュンと強く締めまりを強めるのを感じ取った。

「くっ……美穂ちゃん、そんなに僕の子供を孕みたいんだね……わ

かった、まだまだいっぱい出してあげるからねえ……!!」

「や、め……あ、あ、ああっ……!!」

男の本能のままに、彼女に自分の子供を孕ませたい。サラリーマンの男が亀頭を子宮口に押しつけたまま、限界まで己の精液を彼女の子宮内に注ぎ込み続けてから数十秒後。ようやく射精が終わったサラリーマンの男が肉棒をゆっくり引き抜き、力の抜けた夏希がその場にドサリと倒れ込んだ。

「あららあ、いっぱい出されちゃったね。これは妊娠しちゃったかな？」

「ん、く……はあ、はあ……ッ」

ニット帽の男がその場でしゃがみ込み、夏希の足を掴んでまんぐり返しの状態にさせたまま、彼女の股間の割れ目を指でクパアと開かせる。割れ目からは注ぎ込まれた精液がトロリと溢れて来ており、それが彼女の尻を伝って床に流れ落ちていくのを、男達が間近でジロジロ眺める。

「さて、これで俺とオジサンは満足した訳だけど……まだ彼等が残ってるんだよねえ」

「ッ……そん、な……!!」

射精した2人以外の男達も、肉棒を露出させたまま倒れている夏希を見下ろしている。まだこんなにも相手をしなければいけないのかと、夏希は絶望しそうになる。

「じゃあ皆、ここからは順番よろしくね」

ニット帽の男がそう告げた直後、男達は一齐に倒れている夏希に群がり始めた。仰向けになっている夏希の両腕を男達が押さえつけ、1人の男が彼女の股の間に割って入る。

「もう、やめ……んはああっ!!」

再び肉棒が挿入され、今度は正常位の体勢で犯され始める。夏希の口から再び喘ぎ声が漏れ出す中、他の男達も夏希の体を舐め回し、夏希の乳房や太もも、ヘソなどが男達の汚い唾液にまみれていく。

(くそ……コイツ等一体、いつまで、続ける気だよ……ッ……!!)

「おお、出るぞ、出るぞお……うぐうっ!!」

ブビュビュツビュルルウツビュツビュツ!!

「やつ……いやあああああああつ!!」

また1人、夏希の胎内に精液を注ぎ込み始める。夏希が必死に体を振って抵抗しようとするも、男達の腕力の前ではとても抜け出す事などできず、挿入している男は夏希を孕ませる為の精液をドクドクと注ぎ込んでいく。

「う、おお、マジで気持ち良いぜ……!!」

「次は僕だ……美穂ちゃん、僕と一緒に、可愛い赤ちゃんを作ろうねえ……!」

3度目の膣内射精が終わった後も、男達の陵辱は一向に止まらな。今度はオタクのような格好をしたデブの男が夏希の股間に肉棒を挿入しながら、出るはずのない母乳を求めて彼女の乳首を舐めしやぶり、チュパチュパ音を立てながら吸いつき続ける。

(畜生……コイツ等、本当に……ツ!!)

この陵辱は果たしていつになったら終わるのか。

どれだけ自分の体を穢せば気が済むのか。

まさか本当に、この男達の子供を孕まされる事になってしまうのか。

「はあ、はあ、イクよ美穂ちゃん、中にいっぱい出すからねえ……!!」

ちゃんと孕んで、僕の子供を産むんだよお……ふぐう!!」

ビュルツビュツドクドクドクン!!

「ん、くううううう……!!」

その疑問が解決するのに、そう時間はかからないだろう。デブの男の熱い精液を子宮内に注入されながら、夏希はそれを思い知らされる事となる。

「ああ出る、出るよ美穂ちゃん……産んでくれ、俺の子供を産んでくれえっ!!」

ゴプツドプツビュツブピュビュルルルツ!!

「ん、んんんんんん……ツ!」

あれから、およそ1時間ほどが経過しただろうか。

あれから男達は、順番に夏希の体を犯し続けていた。何度射精してもまだ足りない、男達は夏希の膣内に肉棒を挿入しては、熱くて濃厚な精液を注ぎ込んでいく。コートを脱がされ、ストッキングを破かれ、ブラウスもスカートもハサミで徹底的に切り裂かれ、ほぼ全裸に等しい格好にされた夏希は、今もこうして騎乗位の体勢で、男の熱い精液を子宮内に注ぎ込まれている。

「ああ、出した出した……これは当分飽きそうにねえや」

「よおし、次は俺の番だぜ」

「く、んううううううっ!!」

男が肉棒を引き抜いたかと思えば、また別の男が肉棒を挿入し、夏希をバツクの体勢で犯し始める。他の男達も待っているだけでは興奮が収まらないのか、自分で肉棒を抜いている者もいれば、夏希を犯したという証を残そうと彼女の体中にキスをしている者もいる。まだまだ、男達の陵辱は終わりそうになかった。

「聞いたぜ? そこら中の男から財布を盗んだってなあ。その報いを受けている気分はどうだよ?」

「はあ、あつん、くっ……む、くい……!」

「先に悪い事をしたのはお前だもんなあ……そりゃあ、こんな目に遭わされて当然だもんなあ!!」

(ツ……報い……)

この世界に来て、機動六課の仲間達に救われてから。

自分は変われたと思っていた。

過去の罪を償っていると、そう思い込んでいた。

(ああ……そっか……)

わかつてはいるつもりだった。

どれだけ償おうとも、自分が犯した罪は決して消えないのだと。死ぬまですつと、その咎をこの身で受け止め続けていく運命さだめなのだ。

(これは、罰なんだ……アタシへの……)

自分がこんな目に遭わされているのも、当然の事だった。

彼等からの『罰』を拒む資格なんて、最初から自分にはなかったのだ。

そういう考えに至った時点で……夏希はもう、この状況を受け入れてしまっていた。

こんな事になって当然なのだ、彼女の心はそう認めてしまっていた。

「ぐう、そろそろ……良いか、中に出すからな……たつぷりとザーメンを注ぎ込んでやるからな……姉ちゃんの子宮に、確実に受精させてやるからなあ……!!」

「ああ、あ、んはあ、あつ……!!」

また1人の男が、夏希をバックの体勢で犯しながらピストンを速めていく。また膣内に射精されようとしているのに。この男の子供を孕まされようとしているのに。夏希の中では既に、この男達に抵抗しようという意志は失われつつあった。

「ああ、すっかり孕めよ……お前は将来、俺の子供を産んで育てるんだ……それが今のお前にできる、唯一の償いなんだからなあ!!」

ブビュウツブビュツブビュツブビュルルウウウウツツ!!

「ん……んんんんんんんんんんんっ!!」

子宮内に流れ込んで来る白濁の液体が。夏希を妊娠させたいという男の本能が。夏希の体に快感を与え、彼女を凄まじい絶頂へと導いていく。膣内射精による快感が、彼女の体に何度も刻み込まれていく。

「俺だけじゃねえぞ……!! 他の奴等の子供も、順番に産んでいつて貰うぜ……それこそがお前の、償いの証だ……!!」

(ツ……償いの、証……)

男達の種子を受け入れ、お腹に彼等の子供を宿す事。  
彼等の子供を産み、子孫を残していく事。

それこそが、彼女が罪を償ったという証明になるのだと。

彼女が咎を受け入れたという事の、何よりも証拠になるのだと。

「はあ、はあ、おじさん達も、美穂ちゃんの償いを手伝ってあげるよお……!!」

「今からいっぱい子供を作らせて、俺達が美穂ちゃんをママにしてあげるからねえ〜」

「ああ、嬉しいなあ♡ 美穂ちゃんが、僕の子供も産んでくれるなんてえ♡」

(そっか……それ、で、良いんだ……ツ……)

男達から何度もそう言い聞かせられながら、夏希はその後も徹底的に犯され続けた。

確実に子供を孕んだと判断されるその時まで、何度も男達の精液を注ぎ込まれた。

男達の醜い欲望のままに、何度も自身の胎内を穢され続けた。

(ツ……お腹、あった、かい……気持ち、い……♡)

そして何度も男達に犯され続けている内に、夏希はそれ以上考える事をやめていた。

膣内で射精される感覚に、夏希の体が快感を覚えてしまっていた。

「ぐ、出る……イクぞ、種付けするぞお!!」

ビュルツブビュブビュツドクツドクツドクン!!

(あ……また、中に……ツ♡)

また別の男が、体力の尽きかけている夏希の体を抱き寄せながら、彼女の胎内で容赦なく射精する。もはや何度目かもわからない気持ちの良い感覚に身を震わせながら、夏希は一時的に意識を闇へと飛ばしてしまうのだった。

男達による陵辱が終わったのは、電車が終点駅に到着してからだった。

「はあ……はあ……ツ……」

電車が終点駅に到着した後。そこでようやく、美穂は男達から解放された。解放されるまでの間、彼女の下腹部には男達の精液が何度も注ぎ込まれ、男達のDNAが彼女の子宮にたくさん刻み込まれた。

『じゃあね美穂ちゃん。運が良かったら、またどこかで会えるかもね』  
『子供ができたら、ちゃんとそのおっぱいでミルク飲ませて育てろよ』  
『いやあ、今から楽しみだなあ。美穂ちゃんの大きくなったお腹を見るのが』

『そんじゃ、俺達の赤ちゃんによろしくなあ？』

解放される前に、犯された後の姿を男達に何度も写真で撮られ続けた。満足した男達が好き勝手な事を言いながら先に電車を降りて行った後、夏希もそれに続くように電車から降りて行った。

「ん……く、う……！」

着ていた服装はコート以外が全て破かれた為、夏希はコートを使って裸を隠しながら、フラフラの状態で駅内を移動する。移動中、股の間から漏れた精液が太ももを垂れて行くのを感じ、また少し股間をキユンとさせながらも女子トイレに到着。個室トイレに入った後、

コートを脱いだ彼女は便座に座り込んだ。

(やつと……やつと、終わった……)

コートを脱ぎ捨てた彼女の裸体は、あちこちにキスの跡が残されていた。男達に撫で回された感触が。男達に舐め回された感触が。体中のあちこちに残っているような気がした。

「ッ……こんなに、出されたんだ……」

股間からは、男達に注ぎ込まれた精液が垂れ落ちて来ており、トイレの水面がポタポタと音を鳴らしている。太ももの付け根辺りには、正の字がマジックペンで4つも書かれていた。

(妊娠……しちゃったかな……?)

それはつまり、夏希は男達によつて20回も膣内に射精された事になる。それだけ精液を注がれてしまった以上、もしかしたら本当に、男達の子供を妊娠してしまっているかもしれない。

(……でも、仕方がないか……)

元いた世界で、自分は罪を犯した。

ミッドに来てからも、自分は罪を犯して来た。

これはその報いとして、受け入れて当然なのだ。

償いの証が刻み込まれたかもしれない自身の下腹部を、夏希は右手で優しく撫で擦りながら、自分にそう言い聞かせ続ける。

「……あれ」

自身の目から、涙が零れ出ている感触がした。夏希はそれを手で拭き取り、必死に泣き止もうとする。しかし涙が止まる気配を見せなかった。

「ッ……おかしい、な……何で……何で泣くんだよ……アタシには、もう……泣く資格なんて……」

その時、彼女はふと思い出した。

自分がかつて、元いた世界で出会った男の事を。

死に至るその時まで、自身の想いを決して伝える事なかった……一番愛していた男の姿を。

「……う、ああ……」

初めては「彼」に捧げたかった。

それはもう、二度と叶う事のない想いだ。

頭ではそう理解していながらも……彼女の心は、それを決して受け入れようとしていなかった。

「うう……うああああああああ……ッ!!」

かつては男を騙し、あらゆる物を奪い続けて来た少女。

そんな少女もまた、望まない形で全てを奪われた。

その変わる事のない現実には、夏希はただひたすら、その場で咽び泣く事しかできなかつたのだ……

T o b e c o n t i n u e d ……?

## スカリエッツティ×フェイト IF (☆)

聖王のゆりかごを起動し、計画を最終段階へと突入させた悪の科学者——ジエイル・スカリエッツティ。

機動六課はスカリエッツティの野望を阻止するべく、それぞれのメンバーに分かれてミッド各地で戦闘を開始した。

フェイト・T・ハラオウンは白鳥夏希／仮面ライダーファムと共にスカリエッツティの研究所<sup>ラボ</sup>に突入。

最奥部で待ち構えていたスカリエッツティやナンバーズ、更には戦いの匂いを感じ取り乱入して来た浅倉威／仮面ライダー王蛇を交えた乱戦となる。

しかし……

「ふむ、こんなものかね」

「ぐう……ゲホ、コホ……ッ!!」

魔導師1人で敵うほど、スカリエッツティは甘くなかった。

斎藤雄一／仮面ライダーブレードの所持しているカードデッキを解析し、オルタナティブ・ネオのカードデッキを独自に開発していたスカリエッツティは、その圧倒的な戦闘力により難なくフェイトを撃破。

敗れたフェイトはスカリエッツティが従えるモンスターガジェットに捕らえられ、バルディッシュも奪い取られてしまった。

もちろんフェイトも、いつまでも捕まった状態のままでは毛頭ない。

隙を見て、何とかモンスターガジェットの拘束から抜け出すつもりでいた。

そんなフェイトの目論見すらも……スカリエッツティには既に見抜かれてしまっていた。

「こちらはルーテシア嬢の母親を手厚く保護している身でね。彼女を無事に助けたいのであれば……どうするべきかは、君もわかるだろう？」

「くっ……!!」

ルーテシア・アルピーノの母親——メガーヌ・アルピーノは未だ、意識不明の植物状態に陥っている。

彼女を無事に助け出すからには、下手に歯向かって相手の機嫌を損ねる訳にもいかない。

わかりやすい人質を取られてしまっている以上……今のフェイトには、スカリエツティの思い通りになる以外の選択肢は存在していなかったのだった。

「良い、実に良いぞ、フェイト・テスタロッサ……！」

「ん、くっ……ああ……ッ……!!」

現在、フェイトは多大な屈辱を味わっていた。診療台に寝かさされた彼女は、ソロスパイダーガジェットが放出した頑丈なワイヤーで縛りつけられた後、スカリエツティが装備するグローブ型デバイスの鉤爪でバリアジャケットをビリビリに引き裂かれ、ほぼ全裸と言っても過言ではない状態にまで剥かれてしまっている。そんな彼女に、現在スカリエツティがやっているのは……

「こんなにも締めりは良いとは……これは気を抜くと、すぐに出てしまいそうだ……!!」

「くう……や、めろ……中に、出す、な……くああ!？」

詳しく語るまでもない、陵辱である。

胴体と両腕をワイヤーで拘束されているフェイトの股を開かせ、ス

カリエツティは脱いだズボンから露出させた自身の肉棒を彼女の秘部に無理やり挿入し、正常位で思いのままに犯していた。スカリエツティはフェイトの両膝を掴んだまま激しく腰を振り、その狭い膣内を存分に堪能している。

「素晴らしい、セックスがこんなにも気持ちの良いものだったとは……こういうのもたまには悪くない……!」

「く、う、貴様……んくう!」

『グゲ、ゲゲツゲツ』

そしてフェイトがスカリエツティに腰を振られている間、2体のゲルニユートがフェイトの丰满な乳房や細く括れた腰などをいやらしく撫で回している。しかもゲルニユートガジエツトの掌の穴からは媚薬効果のある特殊なオイルが噴き出ており、それを乳房や腰、太ももなどに存分に塗りたいくらいれたフェイトは全身が火照っており、そのせいでスカリエツティによる陵辱が嫌でも快感になってしまっていた。

「おやおや、私の玩具達に弄られて感じるとは。君もなかなか淫乱のようだね」

「誰の、せいで……ひゃう!!」

ゲルニユートガジエツトがフェイトの乳房を揉みしだく中、その指先が擦るように乳首に触れ、その快感にフェイトは体をビクンと震わせる。その反応を見て面白がっているスカリエツティは、自身が押さえている彼女の太ももをいやらしく撫で回しながら、自身の肉棒をゆっくり引き抜いていく……ように思わせて、一気に奥深くへドズンと突き込んだ。

「ひぎい!」

「クハハハハ……! どれだけ嫌がっていても、君の体はこんなにも正直だ。諦めて、この私の遺伝子が宿った種子を受け入れてみてはどうかね?」

「ツ……ふぎ、けるな……誰が、貴様の、精液なんか……!!」

「やれやれ……まあ、頭のお堅い君だ。どうせそう言うだろうと思っていたよ。しかし、私は別に君の許可を求めている訳でもないの

ね。好きなようにさせて貰う」

「やめ、ろ……んん……ッ!!」

ゲルニユートガジェットに下がらせた後、スカリエツティはオイルでテカテカになっているフェイトの乳房を揉みしだきながら、彼女の耳元で囁く。

「ああ、君の体は本当に素晴らしい……! プレシア・テスタロッサは君を失敗作と見なしていたようだが、私からすればこの体だけでも充分に価値があると思っているよ……!」

「くっ……どういう、事だ……ッ!!」

「わからないかね? この状況を見ても」

バリアジャケットを破かれ、モンスターガジェットに拘束されている自身の裸体。そんな彼女の体を犯し続けているスカリエツティ。それらの要素からフェイトが理解できるように、スカリエツティが説明する。

「私が生み出した娘達の体には、この私の遺伝子を含んだコピー因子が仕込まれている。私が何らかの形で滅ぶ事になっても、新たなジェイル・スカリエツティが誕生するようにね。しかしそれは、普通の人間が持つ脆弱な肉体ではとてもではないが難しい……しかし、君なら話は別だ」

「ッ……ま、まさか……」

話を聞いている内に気付いたのか、フェイトは表情が青ざめ始める。それを見たスカリエツティはニヤリと邪悪な笑みを浮かべ、彼女の下腹部をさわさわと撫で回す。

「そう、君のその強い肉体なら、私のコピーを産むのに最適だ。今からその為の遺伝子を、君の子宮の中にたっぷりと送り込んであげようじゃないか」

スカリエツティがナンバーズの胎内に仕込んでいるという、第2、第3のスカリエツティをこの世に生み出す為のコピー因子。

スカリエツティがそれを、今から自身の胎内にも送り込もうとしている事にフェイトは気付いた。

この男の遺伝子を、子宮に仕込まれる。

つまり……この男の子供を、孕まされるという事。

「ッ……い、嫌だ、やめろ!! 離せ、離して!!」

それに気付いた途端、フェイトは涙目になりながら必死に拘束から抜け出そうと抵抗し始めた。しかしソロスパイダーガジェットが巻きつけたワイヤーは非常に頑丈であり、とてもじゃないが抜け出せそうにない。おまけにスカリエツティもフェイトを逃がすまいと、彼女の括れた腰を掴んでピストンを速め始める。

「喜びたまえ……今から君も、天才的な頭脳を持つこの私のコピーを孕む事になるのだから……!!」

「やだ、やだあ!! お願い、離して!! いやあつ!!」

「ああ、良いぞお、後少しだ……君の子宮にも、たっぷり注ぎ込んであげよう!!」

スカリエツティは止まらない。フェイトの腰をグツと掴んで離さないまま、自身の肉棒を膣内の奥深くまで一気に突っ込ませる。それにより、亀頭が子宮口にぴったり引っ付き……

ブピュツビュツビュルルルルッ!!!

「ひ……嫌ああああああつ!!?」

フェイトの子宮口が押し広げられた瞬間、スカリエツティはその状態から射精を開始。亀頭から発射された濃厚な精液が、彼女の子宮内に向かって大量に注がれ始めた。

「ぐう、搾り取られる……!!」

「あ、あ、あ……ッ……」

スカリエツティはフェイトの腰を掴んで離さず、最後の一滴まで残さず彼女の子宮に注ぎ込もうとする。彼の肉棒がドクンドクンと脈打ったびに、フェイトは自身の下腹部に熱い液体が侵入して来るのを感じ、彼に膣内射精されてしまった事を嫌でも実感させられる事となった。

(嘘……中に、いっぱい、入って、来てる……こんな、奴の……精液を……ッ)

「ッ……ふう、スッキリした」

フェイトがレイプされた絶望に打ちひしがれる中、スカリエツティは自身の肉棒を引き抜き、彼女の股間をジロジロ眺める。パツクリ割れた彼女の秘部からは、彼が注ぎ込んだ精液がトロリと流れ出て行くのが見えた。

「ククク、これですまは1回目か……感謝するよ、フェイト・テストロツサ。こんなにも気持ちの良いセックスを堪能させてくれて」

「ッ……嫌だ……こんな、こんなのも……」

膣内射精までされてしまったからか、シヨックで震えているフェイトは涙を流し、スカリエツティの言葉も聞こえていない様子。自身の台詞を無視された事に少しだけ苛立ったのか、スカリエツティは不機嫌そうな表情で彼女の両足をグイッと開いた。

「ふむ……私が自分でやった事とはいえ、無視されるのは少し気に入らないね」

スカリエツティは未だ萎えていない自身の肉棒を、再びフェイトの秘部に押しつける。そのまま腰をグイッと押し込み、彼女の膣内に挿入した。

「んはあ!？」

「まあ良い。どの道、1回だけで終わらせるつもりもないからね。君が私のコピーを確実に孕むまで、何度でも種付けしてあげようじゃないか」

「ひっ……い、いや……お願い、もう、やめて……」

「だが断る」

「んあああああつ!？」

スカリエツティはピストンを再開し、フェイトのプルンプルン揺れている乳房を鷲掴みにする。プツクリと勃起している乳首にチュウチュウ吸いつきながら、彼女の膣内を思う存分穢していく。

「じゅるるる、ちゅぱっ……私との戦いに負けた時点で、君の運命は既に決まっていたのだよ。さあ諦めて、私のコピーを孕むと良い」

「ん、いやあ……ッ!!」

スカリエツティの垂らした唾液がフェイトの乳首に垂れ落ち、彼はそれを指先で乳首に塗りたくる。乳首に染み込ませるように唾液を塗りたくられていくその様は、まるでフェイトの体がスカリエツティにマーキングされているかのようにだった。

(嫌だ……誰、か……ッ……)

スカリエツティが腰を振る中、目の焦点が合っていないフェイトは、この場にはいない機動六課の仲間達に助けを求め続ける。しかし、彼女と共にここまで来たファムは今、こことは違う場所で王蛇と戦っている真つ最中で、とても救援は期待できそうにない。

(助け、て……手塚、さ、ん……)

そんな彼女の脳裏に浮かび上がる、自身が一番助けて欲しいと願っている青年の姿。それもまた、スカリエツティの陵辱により儂く消え去る事となる。

「ぐ、そろそろまた……さあ、中に出すぞ、私のコピーを産んでくれたまえ!! フェイト・テストロツサ!!」

ブビュウツビュビュビュビュツビュツビュツ!!

(あ、あ……また、中……に……ッ)

またしても、フェイトの子宮に精液が注ぎ込まれ始める。フェイトは自身の下腹部がどんどん熱くなっていくのを感じ取りながら、静かにその意識を飛ばしていくのだった。

彼女がその後どうなったのか、その結末は深い闇の中である……

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
……?  
!

雄一×メガーン IF

お父さん。

お母さん。

こんな事を言うのも二度目になりますが、元気にしていますか？

俺は今――

「あ、はあっ!! 良い、良いわあ雄一君……もつと、もつと突いてえ!!」  
「メ、メガーン、さん……く、ああ!!」  
「ん、あああああああっ!!♡」

——とうとう、後戻りのできない領域まで来てしまいました。

事の始まりは、雄一がルーテシアやデイエチと初めて交わった時の話。

ルーテシアとデイエチから向けられていた好意を知った雄一は、2人の想いを強く受け止め、その上で2人と熱いセックスに至った。

その後も3人は時間さえできれば、メガーヌに隠れて積極的にセックスを行っていたのだが、それに気付いているメガーヌは楽しそうに3人をからかい、3人は恥ずかしさのあまり赤面する事になったのは言うまでもない。

とはいえ、3人をからかっているメガーヌもやはり女だからか。

3人が場所問わずセックスしているのを盗み見している内に、いつからか彼女もまた、自分の体が熱い何かで悶々とするようになっていった。

そして、ルーテシアが囑託魔導師としての用事でミッドチルダに向かい、デイエチも不在となっている中。

段々疼きを抑え切れなくなってきたメガーヌも、遂に欲望を満たす為に動き出したのである……

「あ、あのお、メガーヌさん……?」

「あら、何かしら」

無人世界カルナージ、ホテル・アルピーノ。

そのホテル内に設計された、ルーテシアがたまたま掘って見つけたという天然温泉。斎藤雄一はこの癒しの空間を存分に満喫しているところだった……のだが。

「……な、何でこんな事をするんですか……?」

「あら良いじゃない。一緒に温泉を楽しみましょう♪」

そんな雄一の背後には、白いバスタオル一枚に身を包み、長い髪を巻いて束ねているメガーヌの姿があった。温泉に浸かる前に体を洗

おうとしていた雄一の為に、メガータは泡立ったボディタオルで彼の背中を洗ってあげている。

「け、けど、それなら俺が上がった後でも良いんじゃない?」

「もう、恥ずかしがらなくても良いじゃない。今はルーちゃんもいないんだし、2人で入ったところで別に減る物もないでしょ?」

「そ、それはそうかもしれないけど……」

メガータが優しい手付きで雄一の背中を洗う中、雄一は必死に両目を瞑ってこの状況を耐え忍んでいた。何せ自分の背後には現在、既に一児の母親であるにも関わらず、美しい容姿と美しい体型を維持し続けているメガータがいるのだ。彼女の裸を見てしまわないよう、雄一はなるべくメガータの方を見ないようにするので必死だった。

しかし、そんな彼の考えはメガータにはお見通しである。

フニヨンツ

「~~~~~ツツ!!?」

「あら、どうかしたかしら雄一君?」

背中から感じ取れた柔らかい感触。雄一はその感触の正体を容易に察する事ができた。何故ならそれは、ルーテシアやデイエチとセックスするたびに何度も味わった感触だからだ。

「メ、メメメ、メガータさん?! なんな何を……!!」

「フフフ♪ どう、雄一君。気持ち良いかしら?」

ちなみにメガータが何をしているのかと言うと、彼女はわざと落としたバスタオルの中から露わになった豊満な乳房を、雄一の背中に密着させていた。バスタオル越しではなく直接乳房を押しつけている為、雄一は彼女の柔らかい乳房の感触、そして乳房の先端の乳首が当たっている感触を直に感じ取り、彼の思考回路はパニックに近い状態に陥っていた。

「凄いでしょ? こんな私でも、おっぱいの大きさはあの子達にも負けてないと思うの!」

「ツ……な、何で急にそんな事を……!!」

「あらあら、私が気付いていないと思ったかしら?」

「へ……うわあ!?!」

メガーヌは雄一の腰元にすりと両腕を回し、雄一が腰に巻いていたバスタオルを無理やり剥ぎ取った。バスタオルが剥ぎ取られたそこには、バキバキに勃起して上方方向を向いている雄一の肉棒が存在していた。

「あ、あらあら、思ってたより凄く大きいわね……でも」

「ちよ、メガーヌさんそれ以上は……いいっ!？」

メガーヌの右手が伸び、雄一の勃起した肉棒を優しく握る。女性の手で優しく握られた感触に雄一が小さな悲鳴を上げる一方、メガーヌは軽く舌舐めずりをしてから肉棒を上下に扱き始めた。

「ふうん、かなり固くなってるじゃない。いけない子……♪」

「く、うあ、メガーヌさ……ッ!!」

メガーヌは右手で雄一の肉棒をシュツシュと扱きながら、左手も伸ばして先端の亀頭を弄り出す。彼女の細い指が滑るように肉棒を撫でる中、肉棒を弄られている雄一は体をピクピク反応させる。

「あら？　ちよつとネバネバしたのが出て来てるわね……私の手で感じてくれているのね。嬉しいわ♪」

「んく、うううう……!!」

亀頭の穴から僅かに粘ついた液体が漏れて来ている事に気付いたメガーヌは、右手を動かすスピードを少しずつ速めていき、それと共に肉棒もピクピク反応する回数が増えていく。雄一も必死に耐えようとしているが、メガーヌの扱き方が気持ち良いからか、喋ろうと思った言葉が自分の悲鳴で遮られてしまっており、そんな彼の反応が可愛らしく思ったメガーヌは彼の耳元で囁いた。

「雄一君、我慢しなくて良いのよ……？　出そうなら、ここで思いつきり出しちゃいなさい……気持ち良くイッて、いっぱいビュツビュしちやいなさい……♡」

「ぐ、メガーヌ、さ……ぐ、あぁっ!!」

ビュルツビュルツビュツビュツビュツ!!

肉棒を扱いていたメガーヌの右手がピタリと止まった事。そして雄一の耳元で囁かれた、甘い熱を帯びた色気のあるメガーヌの声。それらが引き鉄となり、我慢の限界に達した雄一の肉棒は亀頭から勢い

良く精液を射出し、目の前にある鏡を盛大に穢していった。

「まあ、いっぱい出したのね♪」

「はあ、はあ……ッ!!」

鏡にかかった精液の量にメガーヌが驚きと歓喜の表情を示す中、射精が終わった雄一は必死に息を整える。ただでさえ暑い浴場の中で、肉棒を思いきり扱かれて射精する羽目になったのだ。現在の彼は体中がお湯と汗でビッショビシヨになっていた。

「メ、メガーヌさん……どうしてこんな事を……」

「いきなりでごめんなさいね、雄一君。あなた達がヤツてるところを盗み聞きしてたら、何だか私も我慢できなくなっちゃって……♪」

「え、えつと……じゃあ、俺達のせいって事……?」

「冷静に考えてみなさい雄一君。私も最初はね、あなた達がセックスしている件についてはただ素直に微笑ましく思ってたのよ……でもルーちゃんとデイエチちゃんが揃っている日は毎回、あなた達は場所も考えずにあちこち色んな場所でセックスしてるでしょう? その時の声や音が聞こえて来るたびに悶々とさせられる私の気持ち、一体どんな事を考えていたのか雄一君はわかるかしら?」

「色々な意味ですみませんでした……!!」

うん、それは確かに自分達が悪い。3人が場所も考えずに色々な場所でセックスしていれば、メガーヌに見られたり聞かれたりする事が何度かあってもおかしくない。それによってメガーヌもイケない事を考えて下半身が疼いてしまうのも無理はない。もはや何も言い返せる言葉がない雄一は素直に謝罪するしかなかった。

「良いのよ雄一君、私は別にあなた達に対して怒ってる訳じゃないの。でもね、今日はルーちゃんもデイエチちゃんもこの場にはいない……だから」

「……ッ!!」

無理やり振り向かされた雄一の視界に、メガーヌの全裸姿が映り込む。補足しなやかな腕に、綺麗な鎖骨。豊満な乳房と小さな桃色の乳首。むっちりした太ももに薄っすらと見える紫色の陰毛。それらを一度に全部見てしまいゴクリと喉を鳴らす雄一に、メガーヌは彼の頭

を掴み、少しずつ顔を近付けて行く。

「たまにでも良いから……私もあなたの事、食べちゃおうと思っ  
て……♡」

「え、ちよ……んむ……!?」

雄一が抵抗するより前に、メガーン又は自身の唇を彼の唇に押しつけた。大人の色気を持った柔らかな唇が触れた事で雄一は更に顔が赤くなつていくも、メガーン又は雄一の首元に両腕を回している為、離れる事ができない。

「ん、ちゅぱ、ぴちや……!」

「んん、む……ちゅ、れろ……ッ!」

最初は唇を合わせるだけだったのが、途中からメガーンが舌を入れて来た事で2人の舌が交じり合う。舌を絡ませて互いの唾液を交換し合い、ひたすら貪るようにキスをし続けた数十秒後に2人の唇が離れ、舌と舌の間に銀色の糸が繋がった。

「ん……また大きくなつてるわね……♪」

「うっ……!」

気付けば、射精したばかりの雄一の肉棒が再び勃起し始めていた。それを見たメガーン又はにこやかな笑みを浮かべ、彼の体を床へとゆっくり押し倒した。

「もうこんなに回復してるなんて、そんなに気持ち良かった?」

「えっと、その……気持ち、良かったです」

「フフ、そう♪ それなら……」

「んぶ……!?!」

「今度は、私の事も気持ち良くして貰おうかしら」

仰向けに寝かされた雄一の顔に、メガーンが自身の股間を押しつけるように跨つて来た。雄一の目の前に、薄っすらと生えている紫色の陰毛と、その下に見える割れ目が見せつけられる。

「私も興奮してきちゃったの……お願い、いっぱい舐めて頂戴」

「……ッ」

ここまで来てしまった以上、もうやるしかない。おかしいな覚悟を決めた雄一は改めて喉をゴクリと鳴らした後、開いた口から伸ばした舌

先を少しずつ、メガーヌの股間の割れ目に近付けて行き……

ペロンツ

「あんっ！」

ほんの僅かに、割れ目を上下に舐めてみる事にした。メガーヌの口から大人らしからぬ可愛らしい悲鳴が漏れる中、雄一はもう一度舌で割れ目を舐めた後、小さく見えるクリトリスにチュツとキスした後、ピチャピチャ舐めながらクリトリスの皮をめくっていく。

「ん、んん……ッ！　良いわ、雄一君……もつと激しく、舐めて……ひゃん?!」

メガーヌがそう言った途端、雄一は彼女のムチムチな太ももに両手を回して固定し、割れ目に少し強めに吸いつき始めた。舌先で舐めるだけでなく、舌の腹を押しつけるようにしたり、クリトリスに軽く息を吹きかけてからいやらしく舐め啜ったりと、徐々に遠慮がなくなってきた。

(メガーヌさんの、こ……甘酸っぱい……!)

温泉故の暑さ、性行為による体温の上昇、そして先程のメガーヌの色っぽい言葉が引き鉄となったのか。どうやら雄一の中に残っていた僅かな理性は、既に跡形もなく崩壊を始めていたらしい。ザラザラとした舌で割れ目を無理やり抉じ開けた雄一は、割れ目の奥まで舌を深く突き入れながら溢れて来る汁を激しく啜り、その快感にメガーヌの体が何度も震える。

「あ、あ、雄一、く……んんっ!!」

「ん、んぶ……!!」

結果、メガーヌが絶頂に至るまでそう時間はかからなかった。絶頂による衝撃が脳を走ったメガーヌは体を大きく震わせ、それと共に割れ目から潮が噴き出され、雄一はそれすらも飲み干すかのようにジュルジュルといやらしい音を立てながら吸い取っていく。

「ん、はあ……♡」

絶頂による快感で体をピクピクさせながら、メガーヌが雄一の顔の上から降りて床に座り込む。大きく股を開いて座り込んでいるメガーヌの股間は今、雄一の舌に舐めしゃぶられた事で付いた唾液と、

股間の割れ目から溢れている愛液でグシヨグシヨな状態だった。

「だ、大丈夫ですか、メガーヌさん……?」

「はあ、はあ……なん、とか……ッ……」

本当なら、大人である自分が雄一をリードするはずだった。しかし雄一にクンニされた時の快感が予想以上だったからか、彼に絶頂させられたメガーヌは頭の中が真っ白になり、先程までの余裕が完全に失われていた。それが彼女の中で、スイツチが押される切っ掛けとなった。

(挿れたい……雄一君の……!)

メガーヌの目に映る、未だ大きく反り立っている雄一の肉棒。それを見た瞬間、メガーヌの中にあつた理性も少しずつ崩壊を初めていく。

「ッ……雄一君、の……」

「メ、メガーヌさん……?」

「挿れたい……雄一君のオ○ンチン、私のオ○ンコに……!」

メガーヌは雄一の下半身の上に跨り、指先で開いた自身の割れ目に雄一の肉棒を宛がい始める。そして割れ目に亀頭がほんの少しだけ入り込んだ瞬間……メガーヌは自身の腰を一気に降ろした。

ズプウツ!!

「はああん!!♡」

「ぐう……!?!」

雄一の肉棒が膣内に入り込んだ瞬間、メガーヌの体中に電撃のような快感が走る。メガーヌのキツキツな膣内で肉棒を絞めつけられた雄一も、あまりの気持ち良さに体をビクンと震わせる。

「ああ、凄い……奥まで、入ってるう……ッ!!」

「くっ……メガーヌ、さん!!」

「あ、ああ、凄い、凄い……んはあつ!!」

もう自分で自分を抑え切れなくなったのか、雄一は両手でメガーヌの細く括れた腰をガツチリ掴んだ後、下から突き上げるようにメガーヌの膣内を蹂躪し始めた。膣内をゴリゴリ抉るように突き入ってくる肉棒の感触に、メガーヌは我慢する事なく喘ぎ声を上げ、その豊満

な乳房をプルンプルン揺らす。

「ん、あぁっ……!! 良い、良いわぁ、もつと激しくしてえ!!♡」  
「ぐ、くう、締まる……ッ……!!」

メガーヌは無意識の内に腰を前後に動かし、雄一の肉棒に更なる快感をもたらしていく。雄一は獣のようにひたすら彼女の膣内を肉棒で突き上げ、奥深くにある子宮口に龟头をコツコツと何度もぶつけ続ける。そうしている内に絶頂がまた近付いて来たのか、雄一はメガーヌの腰を掴む力を更に強める。

「あ、あ、出る、出る……!!」

「良いわ、出して!! 中にいっぱい、ビュルビュルってしてえ!!」

「出る……ぐうっ!!!」

ブビュウツビュビュツビュルルビュルウツ!!

「んあああああああぁあぁあぁあぁあぁっ!!♡」

そしてメガーヌが腰を落とした瞬間、限界に到達した雄一の肉棒がメガーヌの膣内で射精を開始。龟头から発射された濃厚な精液が子宮口に到達し、子宮がゴクゴクと精液を飲み込んでいく。

「あ、あぁ、出てる……雄一君のが、いっぱい……はぁ……!!♡」

メガーヌは自分の下腹部で、雄一の熱い精液が子宮に溜め込まれていくのを感じていた。それは今は亡き夫とセックスをした時以来の、久しぶりに味わう事となった最高の快感だった。

「はぁ、はぁ……ん、ちゅ、ぴちゃ……!」

下腹部がどんどん熱くなっていくのを感じながら、メガーヌは荒くなった息を少しずつ整え、同じく息を整えている雄一に少しずつ顔を近付ける。彼と再び熱いキスを交わしてから数秒後、2人はゆっくり唇を離れた。

「ん……凄いわ。私のお腹の中……雄一君ので、いっぱいになってる」

「はぁ、はぁ、メガー、ヌ、さん……!」

「ん、まだ出てる……私の体で、気持ち良くなってくれたのね……嬉しいわ……♡」

メガーヌの膣内ではまだ、雄一の肉棒がほんの僅かにビクンツビクンツと震えながら精液を吐き出し続けている。それを感じ取ってい

る内にメガーヌはまた、絶頂に達した時のあの快感を味わいたくなくてきていた。

(感じたい……雄一君と、もつと……!)

そんな考えに至った事で、メガーヌも自分で自分を止められなくなっていた。雄一の中で落ち着いている獣を再び覚醒させる為、彼女は自分の乳房を雄一の胸板に押しつけながら、彼の耳元で囁いた。

「雄一君の……まだ、固いままね……もつと、しちやう?」

「……ッ!」

雄一の耳がゾクゾクと震える。そこにメガーヌは更に追い打ちをかけた。

「良いわよ。雄一君のお〇んぽミルク……私のオ〇ンコの中に、いっぱい注ぎ込んで♡」

「……メガーヌさん!!」

「きゃっ!」

その直後、獣としての本能が再び目覚めた雄一はガバツと起き上がり、逆にメガーヌを床に押し倒した。そして再び勃起して固くなった肉棒で、彼女の膣内を徹底的に犯し始めた。

「あ、あぁっ!! す、凄い、気持ち良いわ雄一君……はあぁっ!」

「メガーヌさん、メガーヌさん……ん、ちゅ、ちゅぱっ……!!」

「んんっ! ん、良いわ……私の、おっぱい、いっぱい吸って……ッ!!♡」

ひたすらピストンを繰り返しながら、雄一はメガーヌの豊かな乳房に顔を埋め、チヨンと突き出ている乳首をパクリと啜えてチュウチュウ吸い続ける。吸いつかれた乳首が舌でピチャピチャ舐められて唾液にまみれる中、メガーヌはそんな雄一の頭を愛おしそうに抱き締め、彼に自分の乳房を堪能させる。

「ちゅぱ、れる……ん、ぐ、メガーヌさん、また……!!」

「あ、ああ、良いわよ、雄一君……!! 好きなだけ、私のオ〇ンコに出して……!! いくらでも、受け止めてあげるからあ……!!」

「ぐ、う……メガーヌさん!!」

ブビュルツビュビュビュウツ!!

「ああ、また中に出て……イク、イクううううううううっ!!!」

雄一が腰を強く打ちつけた瞬間、メガーヌの膣内で三度目の射精が始まった。今度は亀頭が子宮口にピッタリ押しつけられたまま精液を放出し、子宮内に確実に精液を注ぎ込んで行っている。

(ああ、雄一君の、熱いのがいっぱい……気持ち良い……!!♡)

現在、メガーヌの子宮内は雄一の精液でどんどん埋め尽くされていつている。こんなに精液を注ぎ込まれてしまったとなると、もしかしたら本当に雄一の子供を孕んでしまうかもしれない。そんな事を一瞬考えたメガーヌは……それが良いと、強く思ってしまった。

「んん♡ん、はあ、はあ……ねえ、雄一君……」

「はあ、はあ……っ……?」

そこで、メガーヌは更なる火種を投下する事にした。雄一がその気になるよう、甘く蕩け切った声で。

「私と一緒に……ルーちゃんの家族、増やしてみる……?」

「……っ!？」

ルーテシアの家族を増やすという言葉の意味。

自分達が今やっているセックス。

自分がメガーヌのお腹の中に注ぎ込んでいる精液。

そこから連想されたのは、自分とメガーヌがルーテシアの弟か妹を作るという事。

それはすなわち……メガーヌのお腹の中に、自分の子供を孕ませるという事。

「……っ!!」

「ぎゃ、ああん!？」

既に理性が崩壊していた雄一は、その言葉を引き鉄に更なる暴走を

開始。既に3回射精しているはずの肉棒がまた更に固くなり、メガーヌの子宮に再度精液を送り込もうとする。

「あ、ああ!! 凄い!! もっと、もっと激しくしてえっ!!♡」

「メガーヌさん……また、中に出します……また奥に……ッ!!」

「ええ、孕ませて!! 私のお腹の中で……雄一君の赤ちゃん、妊娠させてえ!!!♡」

ビュビュウツビユルツビユルツビユル!!!

四度目の射精に至り、子宮内にまたしても精液が注がれていく。それでも雄一の肉棒は未だ萎えず、すぐに雄一はピストンを再開しメガーヌをひたすら犯し続ける。

(こんなに、いっぱい……私、本当に、孕まされちゃう……雄一君の、赤ちゃん……!!♡)

メガーヌのお腹の中に自分の子供を作ろうと、ひたすら精液を彼女の子宮に注ぎ込み続ける雄一。

雄一の子供を孕まされる事を望み、注ぎ込まれて来る彼の精液を子宮でひたすら受け入れ続けるメガーヌ。

浴場で行われる子作りセックスは、2人の思考回路を滅茶苦茶にさせてしまっていた。

「ぐ、う……また……ッ!!」

ビュビュウツビユルツビユルツビユル!!

(ん、また出てる……赤ちゃんの素……♡)

まだ湯船に浸かっているのに、2人の体は火照りに火照っており、今にもものぼせてしまいそうだった。そんな状況下でも構う事なく、2人はどれだけ時間が経過しているかも忘れ、激しいセックスを長時間に渡って続けていくのだった。

それから数時間後。

ようやくセックスが終わり、温泉から上がった2人は……

「こ、腰が……ッ……!!」

……2人仲良く、腰が砕けるかのような痛みに襲われていた。あれだけ猿のように腰を振り続ければ、腰が痛みに襲われるのも当然の結果であり、2人は四つん這いの状態でプルプル震えながら少しずつ移動する事しかできなかった。

「す、すみません、メガーヌさん……やり過ぎてしまって……ッ!」

「い、良いのよ雄一君……私から言った事だし……途中から、何か変な事まで口走っちゃったし……ッ……」

理性が崩壊していた影響で、言動がおかしくなっていたのは両者共に自覚があるようだ。2人は何とか別々のソファに辿り着き、その上に寝転がって体を休める事に成功する。

「でも、凄く気持ち良かったわ……雄一君。また2人きりの時に、頼んじやっても良いかしら?」

「え、えっと……それは……」

「大丈夫、ルーちゃんとデイエチちゃんには私から説明するわ。というか既に2人纏めてセックスしちゃってるんだし、今更否定しても説得力ないわよね」

「うぐっ……ひ、否定できない……!」

「フフフ」

メガーヌの言う通り、彼女とセックスする前に雄一は既にルーテシアやデイエチとセックスしてしまっている。凶星を突かれた雄一が返答に困る中、メガーヌは楽しそうに微笑みながら、自身のお腹を

そつと撫で擦る。

(けど、本当に気持ち良かったわ……あんなにいっぱい出されちゃつて……)

メガーヌが撫で擦っている下腹部には、雄一に注ぎ込まれた精液が溜まりに溜まっている。もし何の処理もせず放置したら……その時は、本当に雄一の子供を孕む事になるかもしれない。

(それはそれで……悪くないかも……?)

雄一の隣で、お腹を大きく膨らませながら微笑んでいる自身の姿。それを妄想して羞恥心が生まれるくらいには、メガーヌも久々に乙女に戻れたという事なのだろう。

今回の件で、メガーヌは自分がそんな気持ちを抱いている事に驚きつつも、不思議とそれを悪く思っていない自分がいるという事に一番驚かされたのだった。

ちなみにその後……

「ふうくん？　とうとうママにまで手を出しちゃったんだあ？」

「そ、その事は本当にごめ……え、ちよつと待って。今とうとうって言った？　まるで俺が手を出すとわかってたみたいない方だけど……」

「うん、まあ、雄一さんとのエッチって凄い気持ち良いし。メガーヌさんの気持ちもわかるかな……」

「デイエチちゃんまで!?!」

「あら、じゃあ今度は3人でしちやう?」

「ちよ、メガーヌさん!?! いきなり何を——」

「あ、それ良いかも!」

「今度は、この4人で一緒に……!」

「ちよ、そんな一度には相手できな……うわ  
あああああああああああああつ  
!!!?」

……アルピーノ家の自宅にて、そんな会話が行われる事となったのは余談である。

なのは I F (☆)

高町なのは一等空尉。

時空管理局航空戦技教導隊の5番隊2班班長にして、時空管理局の  
エース・オブ・エースと呼ばれる女。

かつて機動六課ではスターズ分隊の隊長を務めていた彼女は、手塚  
や夏希を始めとする多くの仲間達と協力し、スカリエツテイ一味の野  
望を阻止する活躍を見せた。

そして今もなお、なのはは戦技教導官として多くの部下を鍛え続け  
ている。

とはいえ、そんな彼女にも羽目を外したい時はあるようで……

「うおい!! 飲み過ぎだぞお前!!」

「ふひえへへへ、ヴィイタちゃんがいっぱあ〜い……♪」

「うわあ、これだいぶ酔っちゃってますねえ……」

とある居酒屋。この日の職務を終えたなのは、同じ教導隊で副班長を務めているヴィータ、そんな2人の同僚である局員の青年——レクサスを連れて飲みに来ているところだった。次の日は仕事が見みである為か、3人は明日の事を気にしなくて済むのだが、それを差し引いてもなのは台詞も思考も滅茶苦茶になるくらいにまで飲んでしまっており、ヴィータとレクサスの呼びかけにも全く応じていなかった。ちなみに酒を飲んでるのはなのはだけであり、ヴィータは外見年齢的な都合で、レクサスは元々酒が好きではない事から別の飲み物を飲んでる。

「うえ、酒臭ツ!? ああもう、お前がこんなになるまで酔っちゃったらアタシが手塚やフェイト達に怒られちまうだろうが……!!」

「帰りは俺が送って行きますよ。なのはさんの家の場所は知ってますし」

「おう、頼むわ。たく、教導官なんだからしつかりしてくれよなあ本当に……」

その為、この日はレクサスがなのはを車で送って行く事になり、ヴィータと別れを告げたレクサスは泥酔しているなのはに肩を貸しながら、駐車場に止めていた車の助手席に彼女を乗せて移動を開始する。

「にやははあ〜……おほしさまがキラキラア〜……」

「なのはさくん、しつかりして下さ〜い。今日は曇りだから星空は見えてませんよ〜」

レクサスが呼びかけても、なのははすっかり酔っ払っており正常な反応は返って来ない。ヴィータから面倒事を押しつけられたような気がすると、今頃そう思い始めたレクサスは溜め息をつきつつ、信号が赤になっている間になのはの方をチラ見する。

「う〜ん、むにやむにや……」

「……ッ」

チラ見したレクサスの目に映ったのは、助手席で寝ながら体をもぞ

もぞ動かしているなのはの姿。もぞもぞ動いた際に、彼女の豊満な胸が僅かにプルンと揺れ、レクサスは思わず視線を前方に戻した。

(い、いかんいかん！ 冷静になれレクサス！)

揺れるなのはの胸を見た瞬間、レクサスは頭の中でいけない事を考えてしまっていた。今、この車に乗っているのは自分と泥酔中のなのはの2人だけ。他に邪魔者はいないというこの状況が、レクサスにいけない事を考えさせてしまっていた。

「な、なのはさくくん？」

「すう……すう……」

また呼びかけてみるレクサスだったが、なのはの返事は返って来ない。運転中なので横を見る事はできないが、恐らく完全に深い眠りの中に落ちてしまったのだろう。

(完全に寝ちゃってるな、これは……)

レクサスは人の通りがない駐車場に一旦車を止め、エンジンを止めてから改めてなのはの方を見据える。なのははすっかり眠り込んでしまっており、試しにレクサスが頬を指で突っついてみても全く反応がない。その様子を見たレクサスは視線を下げ、なのはの胸をジツと見つめる。

(改めて見ると……大きいな……)

知人から聞いた話によると、なのはは一度泥酔してしまうとなかなか起きないらしい。その事を既に知っていたレクサスの中では、どんな人としての理性が失われようとしていた。

「な、なのはさくくん……？ 起きて下さる……」

レクサスの中に残っている僅かな良心が、もう一度なのはに呼びかけてみる。一度肩に触れて揺すってみても、なのはの反応はない。今度は少しだけ強めに揺すってみても、やっぱり反応は返って来ない。

「……ゴクリ」

この時点で、レクサスの中にあつた良心は消失しかけていた。彼はゴクリと唾を飲み込んでから、恐る恐る右手を伸ばし、なのはの豊満な胸に近付けていく。そして……

フニヨンツ

「……ッ!!」

レクサスの右手が、なのはの右胸に少しだけ触れた。そこからゆっくり指を閉じるように動かすと、柔らかな感触と共になのはの胸が形を変える。その瞬間、レクサスの中で衝撃が走った。

(す、凄い……!)

これまで女性の胸を触る経験なんて一度もなかったレクサスは、その柔らかな感触に感動してしまっていた。彼の右手がゆっくり揉むように動かせば、なのはの胸もそれに合わせて形が歪み、右手を離せばまた形が元に戻る。その光景を見たレクサスは興奮が徐々に高まっていた。

「ちよ、ちよつとだけ……ちよつとだけなら……!」

既に理性のブレーキがまともに機能しなくなっていたレクサスは、自身となのはのシートベルトを外してから、今度は両手でなのはの胸をゆっくり触り始めた。撫でるような手つきでなのはの胸を触りまくり、続けて指を食い込ませてモミモミと揉みしだく。服越しに感じる胸の柔らかさに、レクサスはニヤケ顔が止まらなかつた。

(……まだ、大丈夫だよな……?)

なのははグッスリ眠っており、起きる様子はない。それを確認したレクサスは彼女の胸から一旦手を離し、彼女が着ているシャツのボタンを1つずつ外していき、シャツを左右に開いた。

(おお……ピンクか……!)

開かれたシャツから露わになったのは、ピンク色のブラジャーに包まれた豊満な乳房。レクサスは再び唾を飲み込んでから、今度はブラジャーに指を引っかけ、上にゆっくりズラしていく。

「お、おおおお……ッ!」

そして丸出しにされてしまった、なのはの豊満な乳房。たわわに実った2つの乳房の先端には、小さなピンク色の乳首がチョンと突き出ている。初めて女性の乳房を見たレクサスは更に興奮が高まっていた。

(凄い……これが、女の人のおっぱい……!)

ブラジャーから解放されても形が崩れないなのはの乳房を見て、レ

クサスは自分で自分を止められない。なのはが起きないように両手をゆっくり近付けていき、指先で片方の乳首を軽く突つづいた。その際になのはの体が一瞬だけピクンと反応し、それを見たレクサスは慌てて体を後ろに下げたが、やはりなのはが起きる様子はない。

(あ、焦るな、落ち着け……)

そう自分に言い聞かせているレクサスだが、そんな彼の思考とは裏腹に、彼の両手は早くなのはの乳房を揉みたそうにワキワキ動いていた。彼は再びなのはの乳房に両手を近付け、掌を押しつけるように乳房に触り、掌に当たる乳首の感触を楽しむ。

(あ、固くなってる……?)

乳房を揉みしだかれているからか、なのはの乳首が少しずつ勃起し、固くなり始めていた。もしや自分の手つきで感じてくれているのだろうか、レクサスはちよつとだけ嬉しく思いながらも、固くなった乳首を指先で摘まんだからクニクニ弄り続ける。そうしている内に我慢ができなくなったレクサスは両手を離し、代わりに自身の顔を少しずつなのはの乳房に近付けていき……左胸の乳首に、軽めに吸いついた。

(!! う、美味い……ッ!!)

本当に味を感じている訳ではない。しかし何故か美味しく感じ取れたレクサスは、乳首を唇に挟み込んだまま舌先でチロチロ舐め、チュウチュウ音を立てながら吸い上げる。それにより再びなのはの体がピクツと反応したが、レクサスは構わず乳首を吸い続けた。

(す、すげえ……!! 俺、生のおっぱいを吸ってる……なのはさんの、生おっぱいを……!!)

自分は今、なのはのおっぱいに吸いついている。あなのははさんの乳首を、いやらしく舐めしゃぶっている。それを認識したレクサスの興奮は留まるところを知らず、両手で乳房を何度も揉みしだき、乳房の柔らかな感触を存分に楽しみながら、赤ちゃんのように固くなった乳首を何度も吸い続ける。

「チュパッ……はあ、はあ……!」

唇を離すと、なのはの乳首は唾液にまみれており、いやらしくテ

かっていた。それを見たレクサスは呼吸がどんどん荒くなっていき、今度はもう片方の乳首に吸いついた。舌で何度も舐めしやぶり、チュウツと吸い上げてから唇を離し、また吸いついては離しを繰り返す。そして唾液にまみれた乳首を甘噛みしてから、最後に下乳にキスマークを残すかのように吸いついてから顔を離した。

「ああ、すげえ……！」

レクサスは口から唾液を垂らし、なのはの乳房に落としていく。その唾液を指で掬い上げ、既に唾液にまみれている乳首に更に塗り込んだ。彼女のおっぱいはもう俺の物だとしても言うかのように。ひたすら自分の唾液を乳首に塗りたくり、彼女の乳首に対するマーキングを完了させた。

「んう……すう……すう……」

こんな事をされているというのに、よほど泥酔しているのか。自分の乳房が吸われている事など知りもしないなのはは今もグツスリ眠り込み、夢の中に落ちてしまっている。それもあってか、レクサスは更に暴走していく。

(し、下はどうなってるかな……?)

レクサスは今度はなのはの下半身に狙いを定め、なのはの助手席を後ろに倒してから、彼女が履いているスカートを上に乗る。するとスカートの下からは彼女が履いているピンク色のショーツが露わになり、レクサスは興奮が収まらなかった……が、ここである事に気付いた。

「あれ？ 何か湿ってるような……」

よく見てみると、なのはが履いているショーツは股間の部分の色が濃くなっていた。それが水分を吸収してそうなっているという事がわかり、レクサスはおもひやと思ひ、彼女のショーツを焦らず少しずつ脱がしていく。そして脱がせたショーツを彼女の右足に引つ掛けたまま、露出された彼女の股間を指先でゆっくり触ってみた。

(!! 濡れてる……!?)

なのはの秘所が、僅かに湿り気を帯びていた。指先でそれを直に確かめたレクサスは、自分が乳房を弄った事で彼女が感じてくれていた

んだという事を、ここで改めて知る事となった。

「そうか……感じてくれてるんだね、なのはさん」

その事が、レクサスはとても嬉しく感じた。童貞かつ素人である自分が、彼女を感じさせる事ができたんだと。そんな嬉しさのあまり、レクサスはなのはの体を助手席から後部座席に上手く運んで移動させ、後部座席に寝転がったなのはの股間に顔を近付ける。

(す、すげえ……これが、これがなのはさんのオ○ンコ……!!)

もう我慢ができなかった。レクサスは舌先をゆっくり近付けていき、なのはの秘所を下から上にゆっくり舐め上げてみせた。なのはがまた体をピクツと反応させる中、レクサスは割れ目に唇を引っ付け、膣口から尿道口まで万遍なく舐めしゃぶり、膣肉から溢れ出て来る甘い蜜を啜るように飲み始める。

(美味い……!! これが、なのはさんのオ○ンコの味……なのはさんの味……!!)

僅かに尿の匂いも感じ取ったが、レクサスは気にならなかった。むしろ更に興奮が増した彼は、ジウルジウル音を立てながら蜜を啜り続けた後、プツクリと勃起し始めていたクリトリスの皮を舌先で剥き、唇でパクツと啜えた状態でチュウチュウといやらしく吸い上げる。

「チュパツ……ああ、美味いよなのはさん……もつと、もつと飲ませて下さい……ピチャ、ピチャ、ジウルル……!!」

何度舐めても、何度吸っても、蜜はどんどん溢れ出て来る。レクサスは未だ眠り続けているなのはにそう呼びかけてから、この甘酸っぱい蜜をもつといっぱい飲みたいと、ひたすら彼女の股間に吸いつき舐めしゃぶる。なのはが時折ビクンツと体を震わせても、秘所がどれだけふやけようとも、レクサスは構わず舐め続けていく。

「はあ、はあ……ッ」

それから数十分後。ようやくクンニを終えたレクサスは、荒くなつた息を必死に整えようとしていた。彼にひたすら吸われ、舐めしやぶられたなのは股間は割れ目がふやけており、唾液と愛液でビショビショになっていた。太ももの付け根付近にはマーキングのつもりだろうか、レクサスによつて強くキスされた跡がいくつか残っている。(駄目だ、もう……止められない……!!)

自分の目の前には、靴と靴下以外を脱がされ全裸に等しい恰好となつているなのは。これだけされてもまだ起きないなのはの姿に、レクサスはいよいよ越えてはならない一線を越えようとしていた。

「な、なのはさん……今から、挿れますよ……良いですよね……？」  
泥酔している以上、返事など返つて来るはずもない。それをわかっていたながらレクサスは敢えてそう呼びかけた後、脱いだズボンから勃起した肉棒を露出させ、その亀頭を彼女の股間の割れ目に擦りつける。

「ああ、行きますよ、なのはさん……う、くうっ……!!」

亀頭から感じる割れ目の感触に快感を覚えながら、レクサスはゆっくり亀頭を割れ目に食い込ませ、少しずつ肉棒を奥深くへと挿入していく。そしてレクサスは腰を強く押しつけ、肉棒を一気に起き深くまで突き込ませた。

ブチッ

「ッ……んう、う……」

「!? こ、これって……」

何かが千切れる小さな音と共に、なのはの体がビクンと反応し、彼女の表情にも僅かに苦悶の表情が浮かび上がる。それらの要素から、レクサスは確信してしまった。

(嘘だろ……俺、なのはさんの処女を奪っちゃったのか……!?)

まさか彼女が処女だったとは。そしてその処女を最初に自分が奪ってしまうとは。その衝撃的な事実でレクサスは驚愕した後、その驚きもすぐに歓喜の感情に切り替わる。

（俺が、処女を奪った……なのはさんの初めてを手に入れた……!!）

なのはに憧れている男からすれば、彼女の処女を奪えた事は何よりも喜びである。それは彼女の同僚であるレクサスとて例外ではなく、彼は突っ込んだ亀頭が奥深くにある子宮口まで到達したのを確認し、ゆっくり腰を動かして膣内を蹂躪し始めた。

「あ、ああ、気持ち良い……!! 気持ち良いよ、なのはさん……!!」

「ん、うあ……あ……ッ」

なのはと繋がる事ができた喜びと共に、レクサスはゆっくり腰を動かしながら膣内の感触を楽しみ、それと一緒に両手で彼女の乳房を再び揉みしだく。膣内と乳房の両方から来る快感に、未だ眠っているなのはの口からも僅かに喘ぎ声が漏れ始める。

（ああ凄い、最高の締めり具合だ、なのはさんのオ○ンコ……!!）

レクサスは少しずつ腰を動かすスピードを上げていき、亀頭を子宮口に何度もコツコツぶつけ続ける。それに応じて膣内の締めりも強まったのを感じ取ったレクサスは、徐々に限界が近付いて来た。

「ああ、ヤバイ、もう出そう……あなのはさん、出るよ、中に出すよ、いっぱい出しますからねえ……!! あ、ああ、あ、あ……ああイクッ!!」

ビュツビュツビュツブルルルルッ!!

限界に達したレクサスは、なのはの腰をガツチリ掴んでから肉棒を奥深くに突っ込み、亀頭を子宮口にピッタリくっつける。それを合図に亀頭が勢い良く射精を開始し、亀頭とくっついている子宮口を通じて精液がドクドクと子宮内に注がれる。

「あ、ああ、す、凄い、いっぱい出てる……なのはさんの中に……ッ!!」  
「ん、んあ、あ……う……ッ」

泥酔しつつも刺激を感じているのか、なのはは口元から喘ぎ声を漏らしながら背筋を反り上げ、子宮内で熱い精液を受け止めていく。レクサスは初めての膣内射精にとつてもない快感を味わってから、数十秒ほど経過した後によりやく射精が収まった。

「はあ、はあ、はあ……だ、出しちゃった……」

肉棒を膣内に挿入した状態のまま、レクサスは呼吸を整えながらな

のはの体を見下ろす。彼女のスタイル抜群な体は汗だくになっており、そこから醸し出されている色気は見る者を魅了する。レクサスはまた、その色気に魅了されようとしていた。

「ッ……も、もう一回……！」

肉棒の勃起は収まっておらず、まだ固いままだ。レクサスはなののはの腰を両手で掴み、ゆっくり腰を動かして再びピストンを再開する。「くっ……凄いい、まだこんなにも……!!」

未だ膣口から溢れ出て来ている愛液と最初に注ぎ込んだ精液が混ざり合い、グチュグチュ音を立てながら肉棒が膣内を抉るように行き来する。彼が腰を動かすたびに、なののはの豊満な乳房がプルンプルンと上下に揺れる。レクサスにとって、それら両方がたまらない物だった。

「あ、ああ、ヤバい、また……ッ!!」

一度射精したばかりなのに、もう2度目の射精が訪れようとしていた。それでもレクサスは構わず腰を振り続け、なののはの体に倒れ込みながら一気に肉棒を奥深くに突っ込んだ。

「ああ、で、出る、また出るよ、なののはさん……なののはさあん!!!」

ブビュッビュッビュウウウウッ!!

訪れた二度目の射精。レクサスは自分が倒れ込んだ事で感じるなののはの柔らかい乳房の感触を楽しみながら、彼女の膣内に再び精液をドクドク注ぎ込んでいく。その量は一度目の射精とほとんど変わっておらず、なののはの膣内は彼の白濁の精液により穢され続けた。

「ああ、あ、気持ち良い……ッ!!」

二度目の射精が収まり、レクサスは一度なののはの秘所から肉棒を引き抜いた。それによりなののはの秘所の割れ目からは、処女膜が破れた事による血が混ざったのか、白い精液と混ざってピンク色の液体となつてトロリと零れ出ていく光景が出来上がった。

（だ、出しちゃった、2回も……なののはさんの、オ○ンコに……）

現時点で既に2回、彼女に膣内射精を決め込んでしまっている。ほとんど量の変わらない精液を2回連続で子宮内に注ぎ込んでしまったのだ。もしかしたら精子が卵子に到達して、自分の子供を妊娠する

事になってしまいかもしれない。

(妊娠……?)

彼女が妊娠する？

自分の子供を？

あの高町なのはが、俺の子供を産んでくれる？

(ああ……もう駄目だ)

そんな考えに至った瞬間、もうレクサスの中に自重の単語は消え失せていた。彼は未だ勃起が収まらない肉棒を再び秘所に押し込み、三度目の膣内射精を行おうとする。

「ああ、なのはさん、なのはさん……ッ!!」

なのはの子宮に、大量に注ぎ込まれていく精液。

注ぎ込まれた精子が卵子に到達し、なのはのお腹に宿る新たな命。

月日の経過と共にどんどん膨らんでいく、なのはの大きなお腹。

なのはが子供を産み、彼女のおっぱいから出るようになる美味しい母乳。

生まれた赤ちゃんと一緒に、なのはのおっぱいに吸いつき、その美味しい母乳を飲んでいる自分の姿。

(ああ、最高だ……最高過ぎる……!!)

それらの光景が次々と浮かび上がっていき、それがレクサスを更に暴走させていく。なのはと結婚して彼女の夫になったつもりで、まだ出る事のない母乳を求めて彼女の乳房を吸いながら、レクサスはピス

トンを速めて一気に三度目の絶頂に到達しようとする。

「ぶはっ……ああ、なのはさん、出ますよ、また中にいっぱい出しますよ……!! お、俺の、俺の子供を産んで下さい……くああっ!!」

ビュブツビュルツブビュビュウツ!!!

三度目の絶頂に至り、またしてもなのはの子宮に注がれ始める精液。彼女の子宮は既に精液で白く醜く染め上げられているのだが、レクサスはまだまだ収まりそうになかった。

「くあ、ああ、凄い、搾られてる……!! なのはさん、そんなに俺の子供を産みたいんですね……!! わかりました、俺が今から孕ませてあげますからねえ……!!」

なのはが自分の子供を産んでくれる。

なのはが美味しい母乳を飲ませてくれる。

そんなイカれた思考が、彼の性欲を大きく膨らませていく。

「あ、ああ、あっ……なのはさん、まだまだ出しますよ……!! 俺と一緒に、たくさん子供作りしましょうねえ……!!」

「んう、あ……あは……ッ……!」

レクサスはなのはの体を起こし、座席にM字開脚で座らせてから再び肉棒を挿入。ピストンで腰をパンパン打ちつけながら、レクサスはなのはの唇に自身の唇を押しつけ、いやらしくキスし始めた。

「んちゅう、れろ、ぴちやぴちや、じゆる……!!」

なのはの唇をいやらしく舐め上げ、無理やり押しつけた唇から舌を侵入させる。なのはの口の中をも穢す事に成功したレクサスは、自分の肉棒が更に固くなったような気がした。

「やった……!! なのはさんのファーストキスも、俺が奪ってやったぞ……!!」

処女を奪い、膣内射精も行い、更にはファーストキスまで奪った。自分がなのはの初めてを次々と奪ってやったという歓喜に打ち震えながら、レクサスは四度目の射精に至るべく、M字に開かれたなのはの両足を押さえつけながら腰を振るスピードを上げていく。

「なのはさん、また出しますからね……!! なのはさんのお腹の中、俺の精液でパンパンにしますからね……!!」

「あ、ああ、う……ッ！」

相変わらずなのは反応はない。ここまで来るとやらせなのではないかと疑いそうにもなるが、レクサスからすれば別にやらせでも構わなかった。既に何度も膣内射精を行っているのだ。後々どんな報いを受ける事になるうとも、彼にとつては今更だった。

「どつちが先に産まれるかなあ……男の子かなあ、女の子かなあ……ああ、良いなあ……どつちも産んで欲しいなあ……!!」

なのはを妊娠させるのは自分だと。

俺がなのはと結婚して夫婦になるんだと。

高町なのはの全てを、この俺が支配してやるんだと。

自分にそう言い聞かせながら、レクサスはなのはに自分の子供を確実に産んで貰うべく、再び奥深くに押し込んだ龟头を子宮口に引つけ、射精を開始する。

「なのはさあん……俺の精液、いくらでも中に出してあげますからね……ああ、ああ、孕んでくれ!! 妊娠してくれ!! 俺の子供を産んで、ママになってくれ!! うああッ!!」

ドビュツビュツビュルルルウツ!!

「あ、あ、あう……ッ……い！」

精液を子宮に注ぎ込まれるたびに、なのはの体がビクンビクンと反応し、喘ぎ声が零れ出る。そんな彼女の痴態を愛おしく思ったレクサスは、彼女の前髪を優しく掻き分けながら、またしてもピストンを開始する。

「絶対、絶対に孕ませますからね……!! なのはさん……あなたは、俺の子供を産むべきなんだ……!! 他の誰でもない……俺の、俺の子供だけを……!!」

なのはの返事が返って来ないのを良い事に、レクサスは再び彼女の子宮に精液を注ぎ込もうと、何度も腰を振って膣内を肉棒で穢していく。絶対に彼女を妊娠させてやると。おかしな決意を固めてしまっていた。

「まただ、またいっぱい出してやる……ああ、孕めなのは!! 俺の……俺の子供を孕めえッ!!」

ブビュビュビュウツビュツビュツビュツ!!!

まだまだ終わらないレクサスの陵辱。なのはの名前を途中から呼び捨てにし始めた彼は、その後もなのはの膣内に精液を送り込み、彼女の子宮に自らの遺伝子を刻み続ける。既に精液で満タンになっている彼女の子宮に、レクサスはこれでもかと言わんばかりに射精しようとする。

「まだまだ、まだいっぱい出してやるぞ……なのはのお腹に、いっぱい作ってやるんだ……俺となのはの子供を……これからも、ずっと……ッ!!」

子供は既に就寝しているであろう夜中の10時。

1人の男による陵辱は、その後もまだしばらく続いていく。

長い時間をかけて、1人の女性の体が、男の淫らな欲望によって醜く穢され続けていくのだった。

それからしばらくして……

「う、ううくん……」

あれだけ深い眠りについていたなのはが、ようやく目覚めて意識を取り戻した。うーんと背伸びした彼女は、自分が今いる場所を確かめ

ようと周囲をキョロキョロ見渡す。

「あれ？　ここは一体……」

「俺の車ですよ、なのはさん」

なのはが振り向いた先の運転席では、レクサスがいつもの穏やかな表情で運転していた。彼の姿を見たなのはは自分の記憶を必死に呼び起こそうとして、ようやく自分が眠る前に何をしていたのかを思い出した。

「え？　あれ、レクサス君？　えっと……もしかして私、だいぶ酔っ払ってた？」

「はい、盛大に。ヴィータさんに頼まれて、俺があなたを車で送る事になったんです」

「ほ、本当にごめんなさい!!　レクサス君にまで迷惑かけちゃって……!!」

「いえ、気にしないで下さい。なのはさんの可愛らしい寝顔を見ただけでも俺は満足です」

「うう、できれば忘れて欲しいかも……!!」

「無理な相談ですね。凄かったですよ、なのはさんのよだれ」

「ツ~~~~~~~~!!」

だらしのない所を同僚に見られてしまっていた事を悟り、なのはは真っ赤になった顔を両手で必死に隠そうとする。そんな彼女の姿にレクサスは小さく笑いながら、車をなのはの家の前に停車させた。

「はい、着きましたよなのはさん」

「うう~~~~~本当にごめんね、レクサス君。また今度、何かお詫びするからー!」

「お詫びですか?」

「うん、そうそう!　お詫びお詫び!」

「そうですね……じゃあ、また今度も一緒に飲みに行きましょう。なのはさんと話をするの凄く楽しいですから」

「そっか……うん、わかった!　じゃあまた来週、一緒に飲みに行こ!」

「そうしましょう……あ、また酔い潰れた時は俺が今日みたいに送り

ますんで、安心して下さいね」

「も、もうそんな事はないから！　そ、それじゃまた来週ね！」

「はい。おやすみなさい、なのはさん」

なのはが家の玄関に向かって行くのを見届けた後、レクサスは懐から取り出した通信端末を操作し、とある画像を映し出す。その画像を見たレクサスはニヤリと笑みを浮かべる。

(そう……お詫びなんて、それだけで良いんですよ。俺にとっては) 通信端末の画像。

そこに写っていたのは、レクサスにひたすら陵辱された後のなのはの全裸姿だった。溢れた精液が流れ出ている彼女の股間がドアップで映っており、それを見るだけでレクサスは再び肉棒が勃起し始める。

「来週も楽しみにしてますからね……なのはさん？」

ああ、本当に楽しみだ。

彼女が俺の子供を妊娠する時が。

彼女が俺の妻になってくれる時が。

レクサスは自分が陵辱した時のなのはの痴態を脳内に思い浮かべながら、勃起してしまった肉棒をどうにかするべく、まずはその場から車を走らせるのだった……



## アインハルト IF (☆)

アインハルト・ストラトス。

彼女は古代ベルカ諸王時代の王族——霸王イングヴァルトの純血統だった。

碧銀の髪色。

青色と紺色による虹彩異色。

霸王の身体資質。

カイザーアーツ  
霸王流。

そして、霸王の戦乱時代に関する一部の記憶。

それらの色濃く受け継いでいる彼女の悲願……それは霸王の拳が、何者よりも強いという事をしろしめす事。

その為に、彼女はミッド各所で様々な格闘家達にストリートファイトを挑み、これを倒して回ってきた。

彼女からの挑戦を受けて敗北した格闘家達は皆、敗北を受け入れて被害届を出さなかった。

しかし、これを素直に受け入れられなかった者もいたようで……。

「さて、これで準備完了つと」

ザンクトヒルデ魔法学院、体育倉庫。マットや跳び箱、籠に入ったボールなど、体育の授業で使われる道具がたくさん収納されているこの場所に、2人の人物が籠っていた。

「こうして話をするのは初めてだったかな」

その内の1人は男子生徒、名前はミハイル・エスクード。短い赤髪が特徴的なその少年は今、跳び箱の上に座り込みながら、敷かれたマットの上で仰向けに寝かされている女子生徒を見下ろしていた。

「僕の事知ってる？ ストラトスさん」

「ッ……!!」

女子生徒の名前はアインハルト・ストラトス。ミハイルから見下ろされる中、体操服を着ている彼女は今、縄跳び用の縄で体を縛られ、敷かれたマットの上で仰向けに寝かされていた。黒いブルマから白く

て綺麗な太ももが覗いている一方、上半身は白い体操服が捲られて小さな乳房とピンク色の乳首が露わになっており、アインハルトは羞恥のあまり顔を赤くしながらミハイルを睨みつけていた。

「これは、何のつもりですか……！」

「何のつもりか？ 僕知ってるよ。ストラトスさんがここ最近、夜中に何をしているのかをね」

ミハイルは自分の通信端末を取り出し、そこに映し出された動画をアインハルトに見せつける。その動画を見た途端、アインハルトは表情が一変した。

「例の通り魔事件……犯人は君だよな？」

動画には、敗れて意識を失った格闘家を見下ろしているバリアジャケット姿の女性。その女性はそこから離れた場所に変身を解き、アインハルトの姿に戻っていた。まさか動画に撮られているとは思っていなかったアインハルトは表情が固まった。

「ッ……いつ、この動画を……？」

「僕の兄さんもさ、格闘技の選手なんだ。兄さんは君からの挑戦を受けて立った。そして兄さんは負けた……僕が言いたい事、わかるよね？」

ミハイルは座っていた跳び箱から降り、アインハルトの前でしゃがみ込む。その表情は笑顔だったが、目付きは明らかに笑っていないかった。その鋭い瞳はただまっすぐ、憎しみの感情をアインハルトに向けていた。

「兄さんはそれに納得してたし、た被害届も出さなかった……けど、僕はそうじゃない。僕にとって、兄さんは憧れなんだ……そんな兄さんの経歴に、君は泥を塗ったんだ」

「そ、それは……」

「誰もが、君の事を許してる訳じゃないんだよ」

ミハイルはアインハルトの頬を右手で掴み、無理やり自身の顔の近くまで引っ張り寄せる。彼に頬を強く掴まれた彼女は苦悶の表情を浮かべるも、ミハイルは容赦しなかった。

「理解と納得は違うんだよ。僕が憧れていた兄さんは君に負けた……」

僕は君が許せなくて仕方ない」

「ッ……だからって、こんな事を……!!」

「口答えするなよ」

「ッ!？」

ミハイルはアインハルトを離れた後、彼女の頬を強く引つ叩いた。それにより彼女の頬が赤く腫れていくが、それでもアインハルトは我慢して泣こうとしなかった。

「僕の兄さんだけじゃない。君は他の人達にも散々迷惑をかけてるんだ。この程度じゃ足りないくらいだよ」

「何を……あいつ!？」

「悪い子は、僕がお仕置きしてやる」

ミハイルの右手が伸び、アインハルトの小さな乳房を強く握った。その痛みからアインハルトは口から僅かな悲鳴が漏れるが、ミハイルは構わず彼女の乳房を両手で揉み始めた。

「恨まれても仕方ない事をやってきたんだ。こういう事をされる覚悟もできている、という事で良いんだよね?」

「ん、くっ……!!」

元々乳房は大きくないアインハルトだが、全く揉めないくらい小さいという訳でもなかった。ミハイルは両手で彼女の乳房を撫でるように揉み、指先でピンク色の小さな乳首を突つつくように弄り出した。

「ひゃん!？」

「へえ、ストラトスさんもそんな可愛い声出せるんだ。意外だね」

乳首を突つつかれたアインハルトの体がビクンと反応し、それを見たミハイルは面白そうに笑いながら自身の顔を近付けていく。そして口を開いた彼は舌を伸ばし、その先端でアインハルトの乳首をチロリと舐める。

「あっ!？」 やっ……そ、そこは……!!」

「ちゅぱ、ぴちゅ、れろれろ……」

「あ、んん……ッ!!」

乳首を舐められたアインハルトは身をよじって抵抗するも、ミハイ

ルが彼女の体を押さえつけているせいでほとんど抵抗らしい抵抗にはならなかった。ミハイルは両手で彼女の体を押さえつけながら、舌先で彼女の乳首をペロペロ舐め続け、更には唇に啜えて引つ張るように吸ったりとやりたい放題だった。

「ひうつ!?!」

すると乳首を吸うだけでは飽き足らず、ミハイルは左手をアインハルトのブルマに忍び込ませ、指先で彼女が履いているショーツの股間部分を撫で始めた。乳首と股間を同時に弄られたアインハルトは体を跳ね上がらせ、その反応を面白がったミハイルはわざとチュパチュパ音を立てながら彼女の乳首を舐めしゃぶる。

「んう……や、やめて下さ……!!」

「チュパツ……やめないよ。これはお仕置きなんだから」

「あつ!?!」

アインハルトの乳首から口を離れた後、ミハイルは彼女のブルマの中に滑り込ませていた左手を一旦抜き、ブルマを少しずつ器用にズラしていく。ブルマの下からは白いショーツが露わになり、彼に指で撫でられたショーツの股間部分が既にほんの僅かに湿り気を帯びていた。

「ふうん、もう濡れてるんだ。ストラトスさんはエッチで悪い子なんだね」

「そ、それは、あなたが触るから……ツ」

「そう言ってるって事は、自分がエッチなのは認めてるんだ」

「いや、やめ……ツ!!」

ミハイルはアインハルトのブルマを彼女の右太ももに引つ掛けるように脱がした後、彼女の両足首を掴んで無理やり左右に開く。アインハルトは恥ずかしさのあまり頭を横に向けて視線を逸らす。その間にミハイルは右手で彼女のショーツを横にズラし、露わになった股間の割れ目を指先で触り始めた。クチュクチュ水音が鳴るたびに、アインハルトは体をビクビクさせつつも喘ぎ声が漏れるのを必死に我慢しようとする。

「ん、うく……!!」

「こんなに濡らしてるなんて、ストラトスさんも期待してるんじゃない？」

「ち、違っ……」

「違わないよ。ほら、見てよこれ」

ミハイルが見せた右手は、アインハルトの股間の愛液に濡れていた。ミハイルが指を動かすたびにヌチャヌチャ水音を立てており、それを見せつけられたアインハルトはミハイルの事を睨みつけるも、その目元には少しだけ涙の粒が出来上がろうとしていた。

「泣きそうな顔してるね……泣きたいのはこっちだよ」

「ん……!?!」

ミハイルはアインハルトの股間に顔を近付け、濡れている割れ目部分にフツと息を吹きかける。吐息が割れ目に当たった事でまたアインハルトが体をビクつかせる中、ミハイルは再び舌を伸ばし、割れ目を舌先で抉じ開けるかのようにヌチャリと舐め上げた。

「ひゃっ!?! や、そ、そこは駄目……汚いです……!?!」

「大丈夫、汚くないよ。ここ凄く美味しい……ぴちや、ちゅ、れろれろ……!?!」

「んく、う……んん……ッ!!」

ミハイルに太ももをガツチリ捕まれ、股間を舐めしやぶられるアインハルト。ミハイルの舌は彼女の割れ目を何度も上下するように翳り、皮を剥かれ勃起したクリトリスも舌先でチョンチョン突つつくように弄られる。同級生の男子に自分の大事な所を舐められると思っ  
ていなかったアインハルトは、股間から来る刺激に体が反応し、必死に口を閉じて声を抑えようとする。

「ちゅば、ちゅば、あむっ……じゅるるるるるー!」

「ッ……ん、くう……んあああああつ!?!」

ミハイルがアインハルトの股間に唇を引っ付け、溢れ出て来る蜜を勢い良く吸い上げる。それにより我慢の限界を迎えたアインハルトがとうとう大きな喘ぎ声を漏らしてしまい、体をビクンビクンと震わせながら背中を大きく反らした後、一気に力が抜け落ちてマットに背中を落とした。

「ぶはっ……イツちやっただね、ストラトスさん。今のは結構エロかったよ」

「はあ、はあ……ッ……」

ミハイルの煽るような台詞も、今の息絶え絶えなアインハルトの耳には聞こえていなかった。体が火照り、汗だくになっている彼女の痴態を見下ろしながら、ミハイルはいよいよ自分が履いているズボンとパンツを一気に脱ぎ始めた。

「それじゃ、そろそろやろつか」

ズボンとパンツを脱いだミハイルの股間からは、勃起して上方向に大きく反り立っている自分の肉棒をアインハルトに堂々と見せつけた。12歳の子供が持つような大ききさじゃない肉棒を見て、アインハルトは「ひっ!?!」と怯えたような表情を浮かべたが、ミハイルはその反り立った肉棒を右手で掴み、その先端の亀頭を彼女の股間の割れ目にヌチャリと触れさせる。

「本当のお仕置きはここからだよ、ストラトスさん……!」

「!? いや、いや、やめて下さい、それだけは……」

ズブウツ!!

「ひぎあ……ッ!?!」

アインハルトの拒む声も無視し、ミハイルは自身の肉棒を彼女の股間に挿入し、奥深くまで一気に突き込んだ。挿入された肉棒が膈壁を抉るように突き入れられ、女の子にとって大事である処女膜を簡単に突き破った。その痛みと衝撃から、アインハルトの口からは苦痛の聲が拳がり、ミハイルは初めての挿入で猛烈に興奮していた。

「くっ……狭い……ストラトスさんも、初めてだったんだね……!」

「いっ……ぬ、抜いて、下さ……!!」

「駄目だよ、抜いたらお仕置きにならない……僕が君を恨んでる事、忘れないで欲しいね……!」

「!? や、い、痛い、動かないで……ッ!!」

お仕置きと称するミハイルだが、実は彼も彼でそれほど余裕はなかった。初めて体験する女の子の膈内の感触に興奮してしまった彼は、痛がるアインハルトの言葉を聞き入れず、彼女の腰を掴んだまま

少しずつピストンを開始する。肉棒が膣内を動かすたびに、アインハルトの股間からは処女膜を破られた事による赤い血が流れ出ていく。

(ツ……………どうして……………どうして、こんな事に……………!!)

アインハルトはただ、証明したいだけだった。自分の拳が、霸王の拳が誰よりも強い事を。守りたい物を守り通せるだけの強さを。ただそれだけを貪欲に求め続けた結果……………そんな彼女を待っていたのは、彼女に恨みを持つ者による一方的な制裁だった。

「はあ、はあ……………僕は、僕は許さない……………兄さんを、兄さんを負かした君を……………ツ!!」

「ん、はあ、あ、あぁっ……………!!」

全ては、ミハイルの兄に勝ってしまった事が始まりだった。自分が彼の兄を倒さなければ、こんな事にはならなかったかもしれない。自分の身勝手な行いが、彼をこんな行為に走らせてしまった。

(これが……………私への、罰……………ツ……………!!)

そう考えると、アインハルトは徐々に抵抗の気力が消えようとしていた。ミハイルの陵辱から逃げようとしていた彼女の体が抵抗をやめ、ミハイルにされるがままに腰を振られ、膣内を蹂躪され続ける。先程まではただ痛いだけだった筈なのに、いつの間にか気持ち良さのような物も感じ始めていた。

「くっ……………凄く締まる……………!?!」

「あ、あ、はあ、んんっ……………!!」

自分の肉棒が熱い壁と粘膜に包まれている感触に、きゆうきゆうに締めつけられる。ミハイルもあまりの気持ち良さにほとんど余裕がなくなり、ただ我武者羅に腰を振り続ける。彼が腰を振るたびに、膣内では亀頭が子宮口をコツコツと突つつき、そのたびにアインハルトも喘ぐ声が徐々に大きくなっていく。

「うう、ヤバイ……………ストラトスさん、そろそろイクよ……………中に出すからね……………!!」

「!? いや、な、中は……………ツ!!」

「ああ出すよ、中に出すよ!! あ、ああ、はあ、はあっ……………!!」

ミハイルもそろそろ限界が迫って来ていた。結合部からジユプ

ジユプ音が鳴る中、彼はアインハルトの腰を掴む力を更に強め、絶頂に至ろうとした瞬間に腰を強く押しつけた。そして……

ブビュツビュビュウツビュビュルルルル!!

「~~~~~ッ!!」

子宮口に押しつけられた亀頭から、熱く粘っこい精液が放出された。小さな子宮の中に精液がドブドブと注ぎ込まれていき、それと共に絶頂したアインハルトも背中を大きく反り上げる。

「く、ああ、気持ち良い……ッ!!」

「あ、ああ……あつ……!!」

アインハルトが体を震わせる中、ミハイルも彼女の腰をガツチリ掴んだまま、彼女の膣内に精液を注ぎ込み続けていく。それから数十秒ほど経過した後、ようやく射精が収まったミハイルは一度肉棒を引き抜いた。

「はあ、はあ……凄く良かったよ、ストラトスさん」

「はあ……はあ……ッ」

アインハルトの股間からは溢れた精液が、破れた処女膜の赤い血と混ざってピンク色の液体となってトロリと流れ出ていく。その光景を見て興奮したミハイルは、全身汗だくで呼吸が荒くなっているアインハルトに再び迫り、彼女の乳房に軽くキスをする。

「チュツ……これで君は今日から僕の物だよ」

「ん、う……!」

「絶対に逃がさない……ストラトスさんの心と体は、もう僕の物なんだ……!!」

ミハイルはアインハルトの乳房や腹部など、あちこちにキスを落とされている内に再び肉棒が勃起し始めた。そしてある程度の固さを取り戻したところで、再びその先端を彼女の股間に押しつける。

「ああ、またやるよ、ストラトスさん……!!」

「や、あつ……ッ!!」

アインハルトの膣内に再び挿入された肉棒。既に注ぎ込まれている精液と彼女の溢れ出る愛液が混ざり合ってジユプジユプと泡が立ち、ミハイルは彼女にM字開脚をさせた状態でピストンを再開する。

「ストラトスさん……もつと、もつと気持ち良くなるうよ……!!」

「んう、あ、ああ、やつ……!!」

「気持ち良いよね？ ストラトスさんも気持ち良いよね……!? そうだよね……!!」

ミハイルはもう、兄が敗れた事に対する恨みなど頭から抜け落ちていた。ただひたすら、アインハルトの体を貪る事に夢中になっていた。もつと彼女の体を味わいたい。彼女を自分の物にしたい。そんな思考が彼の頭の中を支配していた。

「ああっ……またいっばい出すよ、ストラトスさん……!!」

「はあ、はあ、あ、ああっ……!!」

「ああ、イク、またイクツ……出すよ、ストラトスさん!! 妊娠して!!」

「僕の子供産んで!! 僕の赤ちゃん産んで!!」

ビュルツビュルルルツビュツビュツビュツ!!

「……ッ!!」

彼女を自分の物にする為に。自分が支配者だという証を残す為に。その証となる種を、彼女のお腹の中に植えつける為に。二度目の射精で吐き出された精液は、アインハルトに自分の子供を妊娠させるべく膣内の奥深くまで突き進み、到達した子宮口からその内部に次々と侵入していく。

「ああ、もつと、もつとだ……ストラトスさん、もつと気持ち良くなるうね……僕と一緒に、いっばい赤ちゃんを作ろうね……!!」

「あ、あっ……はあ……ッ!!」

ミハイルは再度ピストンを行い、既に精液まみれになっているアインハルトの膣内をひたすら蹂躪していく。子種を限界まで注ぎ込み、自分の子供を妊娠させようとする彼の暴走に対し、この時のアインハルトは既に、抵抗しようという意志も消え失せていた。

「あ、ああ凄い、最高だよストラトスさん……!!」

それから数十分後、ミハイルの陵辱は未だ続いていた。現在、アインハルトは武装形態に変身させられ、外見年齢18歳のスタイル抜群な体形を貪られていた。ミハイルは四つん這いになった彼女の背後から肉棒を挿入し、ピストンしながら豊満になった彼女の乳房をひたすら揉みしだく。

(また、こんなにいっぱい……)

精液がお腹の中に溜まっているのがわかる。精液の熱さと重さを下腹部から感じ取りながら、アインハルトは目の前の壁を見つめ、ただ喘ぎ声を漏らす事しかできなかった。

(クラウ、ス……ごめん、な……い……ッ……)

<sup>クラウス</sup>霸王への謝罪。ミハイルに犯されている今、アインハルトが残せる言葉はそれだけだった。そしてそれは、<sup>クラウス</sup>霸王に届く事はない。

「もう二度と離さない……もう誰にも渡さない……ストラトスさんは僕の物だ……ストラトスさんはもう僕の女なんだ……ううっ!!」

ビュブツビュルツビュビュビュツ!!

「あ、あつ……あ……」

もう何度目かもわからない膣内射精。ミハイルの肉棒がドクドク脈打ち、彼の手がアインハルトの下腹部を愛おしそうに撫で回している中、アインハルトは絶頂と共に訪れる快感に身を投じ、二度と抜け出せない快感の渦へと飲み込まれていく。

霸王の血を受け継ぎし少女。

そんなとき自分が果たすべき悲願を、彼女は今の間だけ、完全に忘れてしまっていたのだ……



## 雄一×デイエチ IF

ある時、ルーテシアとデイエチからの愛を受け入れ、彼女達と肉体関係を持つ事となった雄一。

それ以降、3人はよくミッドチルダで仲良くデートをする機会が多くなった。

今回はルーテシアが聖王教会での用事があつて不在である為、雄一はデイエチをデートに誘い、デイエチもそれに快く応じた。

それから2人はミッドの町中に向かい、買い物デートを楽しんでいたのだが……

「うわわ、凄い雨……ッ!？」

「デイエチちゃん、あそこで雨宿りしよう!!」

外を出歩いている最中、突然の雨に襲われる羽目になった雄一とデイエチ。最初はポツポツ程度だったのが少しずつ土砂降りの雨に変化していき、こうなる事を予測していなかった2人は慌てて走り出し、走った先の大きな公園で見つけた屋根付きの休憩広場まで辿り着いていた。

「うう、びっしょりになっちゃった……!」

「どんどん酷くなってきたなあ……雨の勢いが弱まるまで、しばらくここで待つてようか」

何とか雨宿りする事はできたものの、雨宿りするまでにかなり長い時間雨に打たれ続けた事で、2人が着ている衣服はもうすっかりびしょ濡れになってしまっていた。

「デイエチちゃん、大丈夫？ 寒くない？」

「た、たぶん大丈夫……くしゅん!」

「ッ……やつぱり、大丈夫じゃないよね……!」

雨に打たれたせいで体が冷えたのか、寒そうに体を震わせながらくしゃみをしてしまうデイエチ。このままではマズいと判断した雄一は、こうなる事を想定していなかった事から流石にタオルは持ち合わせていかなかった為、せめてと思い代わりにハンカチを取り出す。

「これ使つて。小さいけど、ないよりはマシだと思うから」

「う、うん、ありがとう……」

「どういたしま……ッ!」

デイエチにハンカチを貸した途端、雄一はある物を見て顔を赤くし、すぐに別の方向へと視線を逸らす。その様子を見て、ハンカチで濡れた髪を拭いていたデイエチは首を傾げる。

「雄一さん、どうしたの?」

「え、えつと、その……」

デイエチが雄一の顔を覗き込もうとしても、雄一は頑なに視線を合わせようとしない。何故なのかわからないデイエチだったが、雄一が次に告げた一言でようやく理由に気付いた。

「ま、前……見えてるから……!」

「前……ッ!」

この時、デイエチが着ていたのは無地の白いYシャツと青いジーンズ。それが雨に打たれた事で、濡れたYシャツの下に着けている水色のブラジャーが透けて見えており、顔が赤くなったデイエチはすぐに両腕で胸元を隠し、雄一から視線を逸らして背中合わせになる。

「み、見えた……?」

「うっ……ご、ごめん」

「う、ううん、良いの! 気付かなかった私も悪いから……」

その後、ベンチに座った2人の間でしばらく沈黙が続く。今も外は雨がザーザーと降り続けており、まだしばらく止みそうにない事は2人も何となく察していた。

「……雨、止まないね」

「そうだね……ギンガさん達に、傘持って来て貰うしかないかな」

「……」

そこで会話が途切れてしまう。雄一はデイエチの透けたYシャツ越しに見えたブラジャーが脳内によぎった事から、デイエチは透けたYシャツ越しにブラジャーを見られた羞恥心から、気まずい空気になってそれ以上会話を続ける事ができなかった。

「……あ、あのさ」  
「？」

しかし、このまま何も喋らずにいるのもそれはそれで気まずいと思っただのか。雄一は何とか勇気を出して、自ら会話を再開させる事にした。

「さ、さつきは本当にごめん。うっかり見ちゃって……」

「う、ううん、本当に良いの。それに……」

「それに？」

「冷静に考えてみたらさ。今更、恥ずかしがる必要もないかなって。雄一さんには、その……もう、何回も見せちゃってる訳だし」

「デイエチちゃ……ッ!？」

雄一はドキツとした。デイエチが後ろから、彼の首に手を回すように抱き着いて来たからだ。

「な、何を……」

「ごめん、驚いちゃったよね……こうすれば、2人一緒に温まるかなって」

雄一の背中に当たる事で、デイエチの胸がふにょんと形を変える。それにより雄一は彼女の柔らかな胸と、彼女の心臓の鼓動を同時に感じ取る。

「雄一さん、寒くない……?」

「う、うん、大丈夫。ちよつと温かいかも」

「そっか……良かった」

両者共に、心臓の鼓動が早まるのを感じた。外は今も雨が降り続けており、突然の雨で急いで移動したのか、他にこの公園を通りかかる人もいない。そんな状況もあってか……今この場に、2人の空気を邪魔する者はいなかった。

「私は、まだちよつと寒いかな……」

「！ 大丈夫、デイエチちゃ……ッ」

慌てて振り返ろうとした雄一に、デイエチが今度は正面から抱き着く。そしてデイエチは自ら顔を近付け、雄一と唇を合わせていた。

「ん、う……ッ……」

合わさった唇はすぐに離れる。不意打ち気味にキスをされた雄一がまだ僅かに困惑の表情を示す中、デイエチは恥ずかしそうに顔を赤くしながらも微笑んでみせた。

「だから……温めて欲しいな。雄一さんに」

「デイエチ、ちゃん……」

「お願い……今なら、誰にも見られないと思うから……」

「……わかった」

デイエチは頬を紅潮させ、瞳を潤ませながら雄一の耳元でそう甘く呟いた。それが雄一の中で引き鉄となったのか、雄一も彼女を無理に引き離そうとはしなかった。それどころかデイエチを両手で自身の傍に抱き寄せ、再び彼女と唇を合わせた。

「ん、ちゅ、あむ……」

今度はすぐに唇を離す事なく、舌を絡ませて互いの口内に愛液を送り合う。この短い時間の中で、2人の口周りにはあつという間に唾液にまみれていた。

「あつ……♡」

唇が離れた直後、デイエチの口から小さな声上がる。雄一が右手を伸ばし、透けたYシャツ越しに彼女の乳房に触れたからだ。雄一はそのまま右手の指先を動かし、彼女の乳房を撫でるように優しく揉み始める。

「んう……ま、待って、雄一さん……！」

「ッ……ごめん、痛かった？」

「あ、ううん、違うの。ちよつと待ってね……んしょ」

デイエチは雄一の右手を離させた後、自身が着ていたYシャツのボタンを外していき、その下に着けていた水色のブラジャーも外す。それによって彼女の薄い綺麗な肌色をしたふくよかな乳房と、その先端にあるピンク色の小さな乳首が露わになり、それを見た雄一は自分の

頬が更に熱くなっていくのを感じた。

「ん、もう良いよ……いっぱい、触って」

「……デイエチちゃん……ッ!」

「ひゃっ……!」

昔の自分なら我慢していたかもしれない。しかし恋仲となった今では、彼女からそんな誘惑をされて我慢するような理由もなく、彼はデイエチをベンチに寝かせてから彼女の乳首に優しく口付けした。

「ちゅ、ぴちや、ちゅううう……」

「ん、あっ……それ、良い……ッ!」

雄一の舌が乳首を舐め回し、唾液にまみれた乳首を唇で挟み込んでからチュウチュウ音を立てて吸い上げる。乳首を吸われるたびにデイエチは体をピクピク反応させ、両手で口元を押さえて声が漏れるのを防ごうとしている。

「ちゅ、れろれろ……あむっ」

「んう……ひゃんっ!」

雄一は吸いついていた乳首に軽めに歯を立て、優しく甘噛みする。それと同時にデイエチの体が一際大きくビクンと震え、とろんとした目で雄一を見つめる。

「チュッ……それじゃ、脱がすね」

「あっ……」

デイエチの乳房に優しくキスした後、雄一は彼女が履いているジーンズに手をかけ、ベルトを外してスルスルと脱がしていく。脱がされたジーンズの下からは水色の可愛らしいショーツがその姿を現し、デイエチは恥ずかしさのあまり一瞬だけ両手で隠そうとしたが、彼女は敢えてそれを我慢し、そのショーツも脱がされていくのを静かに眺めていた。

（見られてる……雄一さんに……）

雄一がデイエチの両足を掴み、彼女の股をゆっくり開いていく。女の子にとって大事な所が、好きな人にじっくりと見られている。そんな今の状況はデイエチをより興奮させ、彼女の体をより大きく疼かせていた。

「れろん……」

「んんっ……!」

デイエチの股間に顔を埋めた雄一が、その小さな割れ目に舌を差し伸ばした。舌が上下に動く事で淫らな肉壁が少しずつ掘り進まれていき、デイエチは必死に口元を押さえながら、股間を舐められる事による刺激で体を何度も震わせる。

「ぴちや、ちゅくっ……ちゅぶ……!」

「あんっ!? んう、あ、ひうう……ッ!!」

穴奥から汗がとろりと垂れて来る中、雄一は唇を引っ付けてから舐め啜っていく。ザラザラした舌で股間を嬲られる感覚に、デイエチの股間は割れ目がキュンツと強く締まるも、雄一の舌はそれを無理やり挟じ開け、クリトリスの皮を舌先で器用に剥いてからピチャピチャと舐めしやぶる。そのあまりに強過ぎる刺激は、デイエチを絶頂に至らせるのに長い時間を必要としなかった。

「ちゅ、ずじゅ、ちゆるるる……!」

「ひい!? あ、あぁっ……んううううううっ!!♡」

可愛らしく勃起したクリトリスを見た雄一は、歯を立てないように唇で優しく啜えつつ、溢れて来る甘酸っぱい蜜を勢い良く吸い上げた。その瞬間、電撃のような強い衝撃が全身に走ったデイエチは激しく絶頂し、思わず大きな声が出そうになったのを必死に我慢しながら、電気で痺れたかのような動きで全身を何度も震わせ続けた。

「ん、ごく……デイエチちゃん、大丈夫?」

「はあ、はあ……ん、大丈夫……凄く、気持ち良かった……♡」

雄一は埋めていたデイエチの股間から顔を離し、柔らかな太ももの間から彼女の顔を覗き見る。体が火照ってきたデイエチは荒い息を整えながらも、とろんとした目で雄一と視線を合わせた。

「ん、はあ、はあ……雄一さん……」

「何だい……?」

「もっと……私のここ、いっぱい舐めて……♡」

大事なところを舐め尽くされる感覚が癖になったのか、デイエチは指先で股間の割れ目をクパアと開き、唾液で濡れているその穴の入り

口を雄一に見せつけた。既にクンニで彼女を一度絶頂させているにも関わらず、そのいやらしい光景を見た雄一はゴクリと喉を鳴らし、再び舌先を伸ばして穴を穿るように舐め始めた。

「ちゅび、れる、ぴちやぴちや、じゅるるる……!」

「あ、ああっ!? そ、そこ、良い……もつと、もつとお……ッ!!♡」

雄一は指先で割れ目を左右に開きながら、プツクリと膨らんでいるクリトリスを舌先で突つつき、溢れ出る淫らな蜜をジュルジュル吸い取っていく。デイエチは股間をいやらしく嬲られる感覚に体を震わせながらも、その表情は歓喜の物を示して続けていた。

「はあ、はあ……♡」

それから約10分後。未だに雨が地上に降り注ぐ中、デイエチは痙攣したかのように体をピクピク震わせていた。雄一にひたすら舐めしやぶられた彼女の股間は、唾液と愛液にまみれてふやけてしまっている。

「デイエチちゃん、大丈夫……?」

「ん、大丈夫……ふふ、いっぱい舐められちゃった……♪」

よく見ると、割れ目の周りにもいくつかのキスマークが付けられている。ベンチからゆつくり体を起こしたデイエチがそれを見て嬉しそうに微笑む中、雄一もまた、興奮した様子で自身の履いていたズボンを脱ぎ始めた。

「ッ……そろそろ、良いかな……?」

「あっ……」

雄一が露わにした肉棒は、バキバキに勃起し固くなっていた。それを見たデイエチはその大きさに驚きつつも、その表情はすぐに甘く蕩けた笑顔に切り替わる。

「ん、良いよ……来て……♡」

デイエチは再びベンチに寝転がった後、開いた股の割れ目を指先で開いて雄一を誘惑する。それに引き寄せられていった雄一は我慢など全くする事もなく、肉棒の先端を割れ目にゆっくり触れさせる。

「ん、んう……！」

雄一はすぐには挿入せず、まずは亀頭を割れ目に押し当てたまま上下に擦りつける。入れそうで入れない彼の焦らし行為に対し、デイエチがピクンと体を反応させつつも少しだけ不満そうな表情を浮かべたその時、雄一は不意打ち気味に亀頭を割れ目に食い込ませ、そのまま一気に挿入した。

「んはあっ!？」

「ツ……く、う……!!」

突然挿入されたデイエチは快感に身を震わせ、彼女の狭い膣内に肉棒を締め付けられた雄一は低い声で呻いた。それだけで危うく射精しそうになる雄一だったが、何とか耐え抜いた彼は挿入した状態のまま体を止め、いくらか落ち着かせてからゆっくり腰を動かし始めた。

「あ、はあ、あっ……んん……ツ！」

雄一がデイエチの両膝を押さえながら腰を振っている間、デイエチは肉棒が膣内に擦りつけられる感覚から今まで以上に体の震えが大きくなっていった。しかしそれは痛みや恐怖による震えではない。大好きな人と繋がっている事に対する、喜びと快楽による震えだった。

「ん、あむ、ちゅぱっ……！」

雄一はデイエチの体を抱き起こし、合わさった唇と唇の間で舌を交えながら腰を振り続ける。デイエチも雄一の首元に腕を回して強く抱き着き、何度も雄一と唾液を交換し合う。その間、2人の繋がっている下半身からはジュプジュプといやらしい水音が鳴り響き続けた。

「ふはっ……雄一さん、気持ち良い……？」

「うん、凄く気持ち良いよ……！」

「あんっ……そう、嬉しい……!♡」

対面座位の状態で雄一が腰を振り、デイエチはそんな彼に身を任せ

てひたすら快感を味わい続ける。淫らに鳴り響く水音は、周囲の雨の音で掻き消されている為、誰かに聞かれる心配もない。それが2人をまた更にヒートアップさせる要因となっていた。

「ッ……デイエチちゃん……!!」

「んあ、あ、ひゃん……ッ!？」

雄一の右手がデイエチの頭を抱き寄せ、左手が彼女の丸くぷりんとした尻をムニユンと鷲掴みにする。その状態から雄一は腰を振るスピードが徐々に速くなっていき、それに気付いたデイエチは彼がそろそろ限界に近付いて来ている事を察し、自身も腰を前後に振り始める。

「出る、そろそろ……!!」

「ん、はあ、ああっ……良いよ、出して……中に、いっぱい出して……!!」

「う、くう……デイエチちゃん、デイエチちゃん……ッ!!」

デイエチは雄一の耳元でそう告げてから、細く括れた腰を前後にいやらしく振る事で彼の射精を促した。すると限界に達する寸前だったのか、雄一はそんなデイエチを強く抱き締め、肉棒を彼女の膣内の奥深くにまでドズンと挿し込んだ。そして……

ビュルウツビュビュツビュルルルウツ!!

「~~~~~ッ!!」

亀頭が子宮口に達した瞬間、雄一は込み上げて来た射精感に耐え切れず、濃厚な精液を勢い良く放出。放たれた精液が子宮内に注がれ、デイエチが声にならない声を上げながら絶頂へと達した。

（出てる……雄一さんの……熱いのが……ッ!!）

膣内で肉棒がドクドク震えており、そのたびに熱い精液が下腹部に広がっていくのをデイエチは感じていた。雄一が自分の膣内で気持ち良くなってくれたんだと思い、彼女は心の底から喜びの感情を露わにしていた。

（あったかい……気持ち良い……♡）

いつの間にか涎が出ているデイエチだったが、彼女はそんな事など全く気にせず、今はとにかく膣内で射精される快感に身を投じてい

く。それから少しの時間が経過した後、ようやく射精が収まったのか、雄一はデイエチの股間から肉棒をゆっくり引き抜いた。

「あつ……凄い、垂れてきてる……」

M字に開かれた彼女の股間からは、溢れた精液がトロリと垂れてきていた。それを見たデイエチは幸せそうな表情で溢れた精液を指で掬い取り、それをチュパツと口に咥えて舐め取った。

「ん……雄一さんの味がする……♡」

「……ッ」

そんな彼女の何気ない仕草が、再び雄一の性欲を滾らせた。今のデイエチが身に纏っているのは濡れた白いYシャツのみで、下半身には何も身に着けていない。そんな彼女が開いたYシャツから乳房を露わにし、股間からは溢れた精液を垂らしている。これを見て欲情しないほど、雄一も草食ではなかった。

「デイエチちゃん……もう1回、良いかな……?」

「ん……良いよ……♡」

デイエチはその場から立ち上がり、ベンチの背もたれに手をつけてから雄一に自身の尻を向けてから右手で指を鳴らし、屋根の天井に出現した魔法陣から鎖状のバインドを伸ばした。それを見た雄一は苦笑いを浮かべた。

「あ、今回もそれやるんだね……」

「だ、だって……あれから、癖になっちゃって……」

初めて雄一とセックスした時。その際に行ったチエーンバインドの拘束プレイに、デイエチもルーテシアもすっかりハマってしまった、今では体を縛られた状態でセックスすると、普通にセックスするよりも更に気持ち良く感じるようになってしまったらしい。

「や、やっぱり、変だよな……こんな変態みたいな事……」

自分が変態の領域に片足を突っ込んでしまっている事は、デイエチもちやんと自覚はしているらしい。流石に引かれてしまっただろうかと不安な気持ちになる彼女だったが……そんな彼女の思いとは裏腹に、雄一の肉棒はどんどん固さを取り戻し始めていた。

「大丈夫だよ、デイエチちゃん……正直、俺は凄く興奮してる」

「あつ……！」

そもそも今だって、こうして野外でセックスしているのだから今更だろう。雄一はそう考えながらもデイエチの両腕にチーンバインドを巻きつけ、彼女の両腕を拘束してから彼女の背後へと回り、再び勃起した肉棒を彼女の股間に押しつける。

「雄一さ……んんっ!？」

そして間髪入れずに挿入し、デイエチの腰を掴んで再び腰を振り始めた。雄一が腰を振るたびにパンパン音が鳴り響き、デイエチは後ろから突かれる快感に歓喜の表情を浮かべていく。

「あ、あ、ああ、はあっ!!」

両腕を吊り上げられた状態で、後ろから挿入されて腰をパンパン打ちつけられている。まるで暴漢に陵辱でもされているかのよう。そのシチュエーション自体が、彼女に大きな羞恥心を与え、同時に気持ちの良い快感を彼女に味わわせていた。

「ああ、気持ち良い、気持ち良いよお……ッ!!」

「くっ!? また締まって……!!」

「突いて!! もっと、もっと激しくしてえ!!♡」

さつきまで声を我慢していたのを忘れ、デイエチは1匹の雌としてひたすら鳴き続けた。雄一もまた、1匹の雄としてひたすら彼女を犯し続けた。今この瞬間だけ、2人は理性をなくした獣と化していた。

「ぐ、うあ……また、出る……ッ!!」

「出して!! 中に、中にいっぱい頂戴!!」

「デイエチちゃ……ッ!!」

ビュッビュルッビュルルルル!!

「んんんんんん……ッ!!♡」

そして限界を迎えた雄一は、デイエチの腰をガツチリ掴んでから肉棒を深く挿入し、彼女の子宮に大量の精液を注ぎ込んだ。精液がドクドクと注がれるたびに、デイエチは背中を大きく反り上げながら激しい絶頂に達した。

「あ、はあ、凄い……また、いっぱい出てる……♡」

「ぐ、うう……搾り取られ、て……!!」

デイエチが快感に身を震わせながら色気のある表情で微笑む中、彼女の子宮は雄一の肉棒に吸いついて離さず、精液をたくさん搾り取るうとしていた。雄一は自分の肉棒がまるで生き物に吸いつかれていくかのような感覚に陥りながらも、限界まで精液を彼女の子宮に放ち続けた。

「ん、ああ……♡」

そして再び肉棒が引き抜かれ、デイエチの股間からは入り切らなかった精液がトロリと溢れ、太ももを伝って下に流れ落ちていく。雄一の目の前には現在、開いたYシャツしか身に着けていない20歳未満の少女が、両腕を天井に吊り上げられた状態で拘束されたまま、股間から溢れた精液が流れ落ちていつている。傍から見れば、今のデイエチは性犯罪に巻き込まれた哀れな被害者Aその物であり、もしこの光景を管理局の局員に見られた場合、間違いなく一緒にいる雄一が逮捕される事だろう。

(我ながら、とんでもない事しちやってるなあ……)

いくら外が土砂降りでも周りに人がいない状況だとしても、ここまでぶっ飛んだ事をする人間はそうそういないだろう。というかいたら流石にドン引き物である。尤も、今の雄一達がそれを言える立場ではないのだが。

「はあ、はあ……ち、ちよつと休憩しよつか……」

「うん……流石に、ちよつとやり過ぎちやつた……」

流石に体力を消費し過ぎた為、デイエチはベンチに寝転がった状態で、雄一はベンチに座り込んだ状態でゆっくり休憩する事にした。雨は今も降り続けているものの、先程までに比べると雨の勢いは多少弱まってきた。

「ごめんね、雄一さん……こんな事に付き合わせちやつて」

「ううん、気にしないで。俺も我を忘れてセックスしちやつたし」

「気持ち良かったなあ、雄一さんの……今も垂れてきてるし」

デイエチが股を開いてみると、今もまだ精液がトロリと流れ出て来ている。その光景を見た雄一はまた僅かに肉棒に固さが戻りかかるも、今はそれを我慢してデイエチの体をゆっくり抱き起こす。

「ただ、次からはもう外するのはやめようね。人がいないカルナージならともかく、ミッドの街中だと誰かに見られちゃうかもしれないから」

「う、うん、そうだね……」

今回は周りに人が誰もいなかったから良かったものの、次からはもうこんなリスクの高い事はやめにしよう。セックスを終えてようやく理性を取り戻した2人は、そこら中に脱ぎ捨てられている自分達の衣服を見ながら、心の中でそう堅く誓ったのだった。

それから後日……

「あ、はあっ!! 雄一さん、もつと……もつとパンパンしてえ!!」

「ぐ、くう……デイエチちゃん、また出すよ……ううっ!!」

「あ、ああ、また、また出てる!! 雄一さんのが……んはああああ……っ!!♡」

野外でのセックス、および拘束プレイにハマってしまったのは雄一も同じだったらしい。あれから2人はミッドチルダではなく、無人世界であるカルナージでそういったプレイをするようになり、その日の

2人は長い時間に渡ってセックスを続けていたという……

T o b e c o n t i n u e d …… ?

## ノーヴェエ IF (☆)

ノーヴェエ・ナカジマ。

かつてスカリエツテイによって生み出された元ナンバーズの1人にして、現在はヴィヴィオ達に格闘技ストライクアーツの指導を行っている頼れるお姉さん。

ある日、彼女はヴィヴィオ達に息抜きをさせる為、休日を使ってとある市民プールへと向かった。

そこで彼女を待っていたのは……彼女の心身を蝕む、複数の悪意だった。

「いやあ、本当に嬉しいねえ」

ミッドチルダ、とある屋内市民プール。真夏の猛暑が続く中、冷たいプールを満喫している者達がここには多数存在していた。しかし、中には違う楽しみ方をしている者も少なくな……

「こうして君と楽しくヤレるなんてさあ……ね？ ノーヴェエちゃん」

「ッ……うるせえ……!!」

流れるプールの中、水着姿の少女を取り囲んでいる男達がまさにそうだった。その内の1人がニヤニヤ笑みを浮かべながらそう告げるのに対し、男達に取り囲まれている水着姿の少女——ノーヴェエ・ナカジマは鋭い目付きで彼等を睨みつけていた。

「おおう、本当にでっけえなこのおっぱい。しかも柔らけえ」

「あれ、乳首勃ってきてね？　興奮してるんだあ〜？」

「ん、くう……ッ!？」

1人の男に後ろから羽交い絞めにされたノーヴェエは、他の男達が伸ばしてきた手によって、赤いビキニに包まれた豊満な乳房を揉みしだかれています。ノーヴェエは身をよじって男達を引き剥がそうとしているのだが、自身の乳首がビキニ越しに摘ままれた刺激に体が反応してしまい、思うように抵抗できないでいた。

「お前等……こんな事して、タダで済むと思ってるのか……!!」

「うん、思ってないよ？　だから念には念を入れて、こうして準備してきたんじゃない。あの子達を使ってね」

「……ッ!!」

ノーヴェエ達を取り囲んでいる男は7人。しかし、彼等の仲間はいく人かではない。何人かの男は、ノーヴェエではなく別の人物達に目を付けていた。それが……

「それ、いっくよ〜！」

「うわ、やったなこの〜！」

「きやあ、冷た〜い！」

「いやあ、皆楽しそうツスねえ〜……アタシも混ぜて欲しいツス〜！」

高町ヴィヴィオ、リオ・ウエズリー、コロナ・ティミルの3人と、ノーヴェエ達に付き添いでやって来ていたウエンデイだった。ヴィヴィオ達が子供用プールで水をかけ合い、その様子を見守っていたウエンデイも自らそれに混ざりに行って中、そんな彼女達を離れた位置から監視している男達が数人ほど存在していた。

「わかってるでしょ？　ノーヴェエちゃんだって、あの子達を巻き込みたくはないでしょ？」

「だいいじよぶだいいじよぶ。余計な事さえしなけりや、あの子達には手を出さないよ」

「ッ……このゲス共……!!」

その気になれば男相手でも難なく撃退できるノーヴェエだったが、ヴィヴィオ達が男達に目を付けられてしまっている以上、今の彼女は下手な抵抗が許されない状況だった。悔しそうに舌打ちする彼女に

対し、男達は変わららず下卑た笑みを浮かべ続ける。

「ノーヴェちゃん、たまにあの子達を連れてプールに来てるでしょ？  
何度か姿を見た事あるし」

「その時から俺達、ずっとノーヴェちゃんに目え付けてたんだよねえ  
。ノーヴェちゃん可愛いし、スタイルも抜群だし」

「ツ……お前等に褒められても、何も嬉しくねえよ……！」

「そうそう。そういう強気なところが、これまた俺好みでさあく♪」

ノーヴェが格闘技ストライクアーツの練習の息抜きとして、ヴィヴィオ達をプールに連れて来るのは今回が初めてではない。彼女はこれまでも何度かヴィヴィオ達をプールに連れて来ており、その際にこの男達に狙いを定められてしまっていた。その結果、ヴィヴィオ達の面倒をウエンデイに任せたノーヴェが、彼女達の為にジュースを買いに行こうとしたところを狙い、男達は一齐に彼女を取り囲み、こうして輪姦プレイが始まってしまったのである。

「まあそういう訳で、俺達がいっぱい楽しませてあげるよ」

「!? な、おい、やめろ……!!」

男達がノーヴェのビキニに手をかけ、それを見たノーヴェが慌ててそれを阻止しようとする。しかしヴィヴィオ達も狙われている事を知っているノーヴェは思うように強く暴れる事ができず、結果として彼女のビキニが下にズラされ、露わになった乳房がプルンと大きく揺れた。

「おお、マジでおっぱいでけえな……！」

「んじゃ、早速頂きまあくす♪ あむっ……」

「くっ……やめろ……吸うんじゃ、ねえ……んん……ッ!!」

露わになったノーヴェの乳房に、2人の男が正面から吸いつき始める。小さなピンク色の乳首が男達の舌でいやらしく舐められ、唇に啜えられて激しく吸われるたびにノーヴェは体がビクビク反応してしまいが、それでも喘ぎ声は出すまいと必死に我慢しようとする。

「じゃあ、俺はこっちを楽しませて貰うわ」

「ん……!?!」

その間に別の男がノーヴェに近付き、水中で彼女の尻をビキニ越し

に撫で回す。ノーヴェエは尻を撫でて来た男の事も睨みつけようとしたが、男達に乳房を吸われているせいで体がそつちに反応してしまい、尻を撫でた男はその反応を楽しみながら、ビキニをズラして彼女の股間に右手を持って行く。

「あつ……んむう!?!」

「ほらほら、声出しちゃ駄目だよ。周りに気付かれちゃっても良いの?」

自身の股間が男の指に触れられ、思わず喘ぎそうになるノーヴェエ。その前に男達が彼女の口元を手で押さえ、周りで泳いでいる客達にバレないようにノーヴェエを弄び続ける。

「へえ、もしかしてノーヴェエちゃんも感じちやつてる?」

「だ、誰が……ッ!!」

「強がるねえ。じゃあ感じてるのかそうじゃないのか、確かめてあげるよ」

「なっ……ん、くう!?!」

男の指が股間の割れ目を抉じ開け、膣奥へと侵入して来た。指を挿入されたノーヴェエは全身に電流が走ったかのような快感に襲われ、指を挿入した男はニヤリと笑いながら彼女の膣内を指で掻き回していく。

「お、クリトリスはっけーん♪」

「そ、そこは……あ、ああつ……!?!」

水中でクリトリスを指で弄られ、ノーヴェエは体が何度も震え、喘ぎ声を我慢しようとするも抑え切れない。その間も他の男達がノーヴェエの乳房を揉みながら吸い続けており、3カ所を同時に弄られ続けたノーヴェエはどうとう耐え切れなくなり……

「ほら、イッちゃいなよ」

「ん、くううっ……ッ!!」

膣内を指で激しく掻き回され、乳房を両方同時に強く吸われた瞬間、ノーヴェエは絶頂に達してしまい、全身を大きく痙攣させる。彼女がビクビク体を震わせているのを見て、男達はニヤニヤが止まらな

「あれえ？ ノーヴェエちゃん、もしかしてイツちやつた？」

「はあ……はあ……ち、違……ッ」

「よし、じゃあ今度は俺が気持ち良くさせてあげるよ」

「ッ!？」

ノーヴェエは男達によつて無理やり体勢を変えられ、背後の男に羽交い絞めされたまま、左右の男達に太ももを持ち上げられM字開脚の状態にさせられる。そして1人の男が自身の履いている水着をズラして肉棒を露出し、ノーヴェエのビキニをズラして彼女の股間に肉棒を近づけていく。

「あんまり時間かけてバレたら俺達もマズいし、ちやつちやと済ませよっか」

「ッ……ま、待て、それだけは——」

自身の股間に近付いて来る肉棒を見て、焦ったノーヴェエが拒絶の言葉を発しようとするも……残念ながらそれは聞き入れられなかった。ズプウツ!!

「んぐう!？」

男の肉棒が、ノーヴェエの股間に正面から挿入される。無理やり挿入された痛みからノーヴェエが苦悶の表情を浮かべる中、挿入した男はノーヴェエの細く括れた腰を両手で掴み、ゆつくりピストンを開始する。

「あ、ノーヴェエちゃんやつぱり処女だったんだ。こりやラツキー♪」

「おい、ずりぞテメエ。ノーヴェエちゃんの処女は俺が貰う予定だったのに」

「まあまあ良いじゃん、これから順番にヤツてくのは今までとおんなじだろうに」

「ノーヴェエちゃん、無理やり入れられて辛いでしょ？ 俺達が痛みを和らげてあげるね」

「痛つ……ぐ、くう……んん……ッ!？」

挿入した男がゆつくり腰を動かし、彼の肉棒が膣奥へと侵入していく。そこから更に肉棒の先端が子宮口を何度も突つき、ノーヴェエは無理やり処女を奪われた痛みと、膣内を蹂躪される快感を同時に味合

わされる。その間に男達は彼女の乳房を揉みしだき、彼女の腕や太ももに舌を這わせて舐め上げていく。

(くそ……アタシの、初めてが……こんな奴等、に……ッ!!)

肉棒を挿入されたノーヴェエは苦しそうな表情で呻くも、喘ぎ声が周りの客達に聞かれないよう必死に口を閉じて我慢し続ける。それから挿入している男がしばらくピストンを続けた後、その腰の動きが徐々に速まっていく。

「ああ、やべえ、気持ち良過ぎて……もう出そうかも……!!」

「!? ま、待て、やめろ……中は、中にだけは……ッ!!」

このまま膣内に射精されたら妊娠してしまう。ピストンが速くなっていくのを見て、男の射精が近付いてきている事に気付いたノーヴェエは必死に首を振り、膣内にだけは射精しないよう懇願する。しかし、挿入している男はそれを全く聞き入れようとしなかった。

「ああ、もう出る、出るぞお、中にいっぱい……うっ!!」

ビュブビュツビュビュビュルウウウウツ!!

「あ……んううううううっ!!」

亀頭が子宮口にピツタリ引つ付いた瞬間、熱い精液がノーヴェエの子宮内に放出され始めた。下腹部が精液で熱くなっていくのを感じたノーヴェエは再び絶頂に達し、他の男が彼女の口元を押さええて喘ぎ声を抑え込む。

(う、嘘だろ……な、中に、出されて……ッ)

「お、おおっ……まだいっぱい出るぜえ……!!」

挿入している男は恍惚な笑みを浮かべながら、子宮口に亀頭を引つ付けたまま精液をドクドクと注ぎ込み続けていく。精液を注がれるたびにノーヴェエの体はガクガクと震えており、それからしばらくした後によろやく男は肉棒を引き抜いた。

「ふう、スツキリしたぜ」

男の肉棒が引き抜かれ、ノーヴェエの股間からは処女膜を破られた赤い血と、溢れた白い精液が混ざり合った状態でプールの水の中に溶け込んでいく。ノーヴェエは男達にM字開脚で持ち上げられているまま、息絶え絶えな状態で男達を睨みつけた。

「はあ……はあ……お前、等……絶対、許さねえからな……ッ!!」

「おお怖い怖い。んじや次は俺の番なあ〜」

「!? ちょ、おい、まだやる気か……ひぐうっ!?」

しかし、男達の陵辱がこれで終わる訳ではない。持ち上げられていたノーヴェエは男達に一旦降ろされた後、背後に回り込んだ男によつてバックの体勢で肉棒を挿入され、再びピストンされる羽目になった。

「おお本当だ、マジで締めり良いなこのマ○コ……!!」

「ん、く、ああっ……や、やめ……ッ!!」

水中で後ろからゆつくり腰を打ちつけられ、それが何度も繰り返される。後ろから突かれているノーヴェエは下半身から来る刺激に感じさせられ、力が抜けていき目の前の男にしがみつ়く事しかできない。その際に彼女の豊満な乳房がムニユリと当たり、しがみつかれた男はその乳房の感触を楽しんでいた。

「あ、おっ……俺も、そろそろ……!!」

「んく、ああ、あっ……ま、待て……これ以上、は……ッ!!」

バックで挿入している男もまた、かなり早い段階で限界が近付いて来た。男は後ろからノーヴェエを抱き締めながら何度も腰を振り続け、ノーヴェエの拒絶を無視してから彼女の尻に力強く腰を打ちつけた。その瞬間……

ビュルツビュルルルルウツ!!

「~~~~~ッ!!」

後ろから抱き締められたまま、2人目の膣内射精が始まった。男は強く締まるノーヴェエの膣内を堪能しながら精液を注ぎ込み、ノーヴェエの子宮内が熱い精液でどんどん満たされていく。

「う、ああ……凄え気持ち良かった」

「はあ……はあ……ッ……」

バックで挿入していた男が肉棒を引き抜き、ノーヴェエの股間からは再び精液が溢れてプールの水に混ざっていく。すると今度は2人の男がノーヴェエの前後から挟み込むように近付いて来た。

「よおし、今度は俺だな」

「俺はこつちを使わせて貰うぜ」

「はあ……はあ……何、を……ッ!!」

男達の肉棒が、前後からノーヴェエの股間に近付いていく。その内、後ろから近付いて来た肉棒は、ノーヴェエのお尻の穴……つまりアナルに龟头が当たろうとしていた。

「なっ!? そ、そっちは——」

ズブズブッ!!

「が、はっ……!?!」

男達は前後から同時に挿入し、2本の肉棒を入れられたノーヴェエは一瞬だけ呼吸ができなかった。ノーヴェエの両足が他の男達に抱え上げられ、挿入している男達は同時にピストンを開始した。

「ん、ぎ……あがぁ……ッ!?!」

「あぁ……やっぱ女のマ○コ最高♪」

「ケツの穴も良いぜ、こりゃ。ゴリゴリいつてらぁ」

まさかアナルまで犯されるとは思っていなかったのか、完全に想定外だったノーヴェエは危うく失神しかけるも、男達が腰を強く打ちつける事で強引に意識を戻される。その後も男達はズブズブと何度もピストンを繰り返し、2穴挿しで犯されているノーヴェエは我慢するどころの状況ではなかった。

「んぐ、う……や、やめ、て、くれ……頼、む……!!」

「おいおい、ノーヴェエちゃんが苦しそうじゃねえか」

「ごめんねノーヴェエちゃん。すぐ中に出してあげるからね……うぐっ!!」

「お、俺ももう出すぞ……う、おおっ!!」

ブビュビュウツビユクツブビユルルウウウウツ!!

「あ、が……ッ!!」

まず膣内に挿入していた男が射精し、子宮に再び精液が溜まっていた。それに続いてアナルに挿入していた男も勢い良く射精し、直腸内に精液をドクドクと流し込まれていく。両方同時に射精されたノーヴェエは意識が飛びそうになるくらい大きな絶頂に至った後、力が抜けてその場に崩れ落ちそうになり、肉棒が引き抜かれた秘所とアナルから精液が溢れ出ていく。

「おっと、次は俺の番だよ」

「く、あぁっ……!!?」

その後も男達の陵辱は終わらず、また次の男がノーヴェの膣内に肉棒を挿入。激しいピストンの末に膣内で射精した後、すぐに交代してまた次の男が肉棒を挿入し、また膣内で射精する。そんな状況が、まだしばらく続いていった。

「大丈夫だよノーヴェちゃん。すぐにザーメンを出して、楽しんであげるから」

「もし仮に妊娠しちゃっても、俺達がいずれも可愛がつてやるからよ」

「その時は、ノーヴェちゃんの美味しいミルクも飲ませてね」

「だからノーヴェちゃん、安心して俺達の子供を産んでくれよな……ふぐう!!」

ドピュツビュピュツビュピュルルル!!

(ツ……畜、生……!!)

何度も何度も精液をノーヴェの子宮に注ぎ込み、彼女に自分の子供を妊娠させようとする非道な男達。何も抵抗できないノーヴェはただ悔しそうな表情で目に涙を浮かべながら、今いる場所がプールである事も忘れ、男達による陵辱をただひたすら耐え続ける事しかできなかった。

「いやあくサツパリしたあ!」

「今日もいっぱい楽しんじゃったね!」

「うん！ 次もまた一緒に行こう！」

それからしばらくした後。プールから上がったヴィヴィオ達は、ノーヴェエが買って来たジュースを飲んで一息つき、3人で楽しく談笑しながら帰宅の準備をしようとしていた。その一方、ジュースを買って来たノーヴェエはと言うと、どこか落ち着きのない様子で体をモジモジさせていた。

「ん、どうしたんスカノーヴェエ？」

「ッ……い、いや、何でもねえ。気にすんな」

「？ 変なノーヴェエツスねえ……まあ良いや。それじゃあチビツ子達、これから帰るツスよ〜！」

「二は〜い！」

ノーヴェエの様子を見て首を傾げるウエンデイだったが、その視線はすぐにヴィヴィオ達の方に向き、ウエンデイの言葉にヴィヴィオ達が笑顔で返事を返す。その間、ノーヴェエも4人によく歩いていくが……その足取りは若干覚束ない物となっていた。その理由は……

(ッ……くそ、まだ垂れてきやがる……)

ノーヴェエが身に着けているビキニ……その股間部分から僅かにとろりと垂れて来ている、少量の精液にあった。あれから男達によって膣内と直腸内に精液を注がれ続けたノーヴェエは、秘所とアナルから垂れて来る精液がなかなか止まらず、それを手で押さえようとするので必死だった。

(畜生……アイツ等、絶対許さねえ……いつの日か絶対とっ捕まえてやる……!!)

今も離れた場所からこちらを覗き見ている男達。その下卑た笑みと視線が背後から集中する中、ノーヴェエは羞恥のあまり顔を赤くしながらもプールを後にしていくのだった……

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:  
:  
:

エドガー&吾郎×ヴィクトーリア IF

ヴィクトーリア・ダールグリユン……愛称はヴィクター。

雷帝ダールグリユンの血を（ほんの少しだけ）受け継いでいる彼女は、2人の執事を従えていた。

1人は、ヴィクターが幼少期からの長い付き合いであるエドガー。

もう1人は、最近とある理由からミッドに転生し、新たに雇う事になった仮面ライダーゾルダこと由良吾郎。

……  
2人の有能な執事を従えているヴィクターだが、そんな彼女は今

「ん、あっ……ふああ……ッ！」

ダールグリユン家の屋敷。ヴィクターの自室にて、彼女はエドガーと吾郎から前戯を受けていた。衣服を一切纏っておらず、生まれたままの恰好になっっているヴィクターの美しい体を、同じく衣服を纏っていない2人の執事が丁寧に貪っている。

「フフフ……気持ち良いですか？ お嬢様」

「じゆる、ずちゆ、れろ……」

「ひう!? だ、駄目、そこお……ッ!」

大きなベッドの上で、ヴィクターの背後に回り込んでいるエドガーは、彼女の豊満な乳房を両手で優しく揉みしだきながら、彼女の首元に舌を這わせている。一方、吾郎はヴィクターの開かれた股の間に顔を埋め、彼女の股間の割れ目を舌で優しく舐め上げている。上半身と下半身を同時に弄ばれ、ヴィクターは電流が流れるかのような快感に身を震わせていた。

「お嬢様のここ、固くなってますよ?」

「ひゃ!? こ、こら、あまり調子に乗るんじゃないま……んひいつ!」

ヴィクターの乳房を揉みしだいていたエドガーは、指先で彼女の勃起している乳首を優しく摘み、コリコリした感触を楽しんでいる。そこへ、股間を舐めていた吾郎が唇を押し当てて吸いつき、溢れ出る愛液を啜り取られていく快感にヴィクターの体が大きく跳ね上がる。

「お嬢様、とても気持ち良さそうですね。吾郎さん、そのまま続けてあげてください」

「わかりました……お嬢様、失礼します」

「そ、そんなかしこまられても……んうううううっ!」

ジュールルと大きな音を立てながら、吾郎がヴィクターの股間を吸い続ける。勃起したクリトリスには僅かに歯も立てられ、想像を上回る刺激に耐えられなかったヴィクターは脳に電流が走るかのような絶頂に至り、体中が何度も震えて止まらなかつた。

「おや、もうイッてしまわれたのですか?」

「はあ、はあ……見れ、ば、わかるでしょ、う……ッ!」

「失礼しました。では、今度は私が気持ち良くして差し上げましょう」

「な、何を……きやつ!」

エドガーに背中を預けて呼吸を整えようとするヴィクターだったが、そのエドガーがヴィクターから離れた事で、ヴィクターの体がベッドの上に倒れ込む。そんな彼女の両膝をエドガーが掴み、彼女の股を大きく開かせる。そして彼女の股間の割れ目に、自身の大きくなっている肉棒を触れさせた。

「それではお嬢様。まずは私から行かせて頂きます」

「えっ……お、お待ちなさい！ そんなな大きいの入らな……いいっ!?」

ヴィクターの制止の声を無視し、エドガーは自身の肉棒を割れ目に押し当て、そのまま奥深くまで挿入。ヌルリと入って来た熱くて固い肉棒の感触に、ヴィクターの体は仰向けの状態から背筋が大きく反り上がる。

「か、はっ……!?!」

「では、動きますよお嬢様」

「ち、ちよつと待っ……はひい!?!」

エドガーは両手でヴィクターの両足を押さえながら、ゆっくりと腰を振りピストンを開始。エドガーが腰を振るたびに、膣壁が肉棒をきゆうきゆうと締め付け、先端の亀頭が子宮口をコツコツと何度も突っついている。

「んあ、やつ……い、いきなり、激し過ぎい……ッ!!」

「申し訳ありません。お嬢様の中がとても気持ち良くてつい。吾郎さん、あなたもぜひ」

「わかりました……お嬢様、失礼します」

「ふえ……んぶう!?!」

エドガーが吾郎に呼びかけ、吾郎も大きく反り立った肉棒をヴィクターの口の中へと入れ込んだ。彼の肉棒の大きさに驚くヴィクターだったが、それを口の中に突っ込まれてからは、目をトロンとさせながら舌で吾郎の肉棒をいやらしく舐め始めた。

「ん、じゅぶ、んむっ……!!」

「くっ……お嬢様、フェラがお好きなのですか？ 急に締まりが良くなりましたが」

仰向けに寝転がらされたヴィクターは、吾郎の肉棒を口に突っ込まれ、エドガーには正常位で肉棒を挿入されピストンされている。従えているはずの執事達に成す術なく犯されているという今の状況は、ヴィクターに多大な羞恥心と性的な興奮を与えており、膣内の締まりが強くなった事に気付いたエドガーは腰を振るスピードを少しずつ速めてていく。

「これはすぐに出てしまいそうですね……お嬢様、行きますよ……!!」  
「お嬢様、俺も、そろそろ……ッ!!」

「んむ、んうう……んんんんんんんんっ!!!」

ヴィクターの括れた腰を掴んだエドガーが腰を強く打ちつけ、吾郎がヴィクターの頭を掴んで強く引きつけ、2人は同時に射精を開始。ヴィクターの膣内にはエドガーの、口内には吾郎の精液がドクドクと注がれ始め、それを引き鉄にヴィクターも大きな絶頂へと至った。

「ッ……吸い取られる……!!」

「く、うあ……ッ!!」

「んむうっ……ぐく、ぐく……ッ!!」

ヴィクターは膣内に注がれて来る精液の熱さを感じながら、口の中に注がれる精液を少しずつ飲んでいき、数十秒の時間が経過してようやく射精が終わる。2人の執事がヴィクターから離れ、ヴィクターの口から飲み込み切れなかった精液が垂れる中、彼女の股間からも溢れた精液がとろりと流れ出ていく。

「はあ、はあ、はあ……♡」

「ふう、とても気持ち良かったですよお嬢様……では吾郎さん、交代しましょう」

「……はい」

エドガーと吾郎が場所を代わり、再びヴィクターの背後に回ったエドガーが彼女の体を抱き起こす。一方、吾郎は自らベッドの上に寝転がり、そこにエドガーがヴィクターの体を持ち上げ、未だに精液が僅かに垂れてきているヴィクターの股間を、吾郎の反り立った肉棒に近付けていく。

「お嬢様、失礼します」

「んはあっ!!♡」

エドガーがヴィクターの体を降ろしていき、吾郎の肉棒がヴィクターの膣内に収まった。そのまま騎乗位の状態で吾郎はヴィクターの腰を掴み、下から何度も突き上げてヴィクターを犯し始める。

「さて。吾郎さんが楽しんでいる間、私はまたこちらでも」

「あ、あぁっ!? んや、あぁ……ッ!!」

吾郎がヴィクターを突き上げている間、ぷるんぷると激しく揺れているヴィクターの乳房を、エドガーが両手で再び揉み始める。今度は先程よりも少し強めに乳房を掴み、まるで牛の乳搾りでもするかのように何度もギュツと強く揉む事を繰り返す。

「んはあっ!? いや、だ、駄目えっ!! それ、気持ち良い、気持ち良いのお……!!♡」

乳房を乱暴に揉みしだかれているにも関わらず、それが逆にヴィクターの性的興奮に繋がっているようで、もう既に理性が麻痺しかけていた彼女は喘ぎ声を我慢する事を放棄してしまっていた。そして一方、ヴィクターの膣内に挿入していた吾郎はすぐに限界が来たのか、ヴィクターの腰をがちり掴んで離さない。

「お嬢様、イキます……ッ!!」

「ああ、イクっ……イクううううううっ!!♡」

膣内で亀頭が子宮口に当たった状態のまま、熱く濃厚な精液が子宮に直接注がれていく。肉棒が震えるたびに精液がドクンドクンと注がれる感覚に、ヴィクターもまた、体を何度もビクンビクンと震わせる。

「ん、はぁ……ッ……熱い……♡」

「お嬢様、これで終わりではありませんよ。まだまだいっぱい注いで差し上げましょう」

「んぎいっ!?!」

吾郎の肉棒がヴィクターから引き抜かれた後、今度はエドガーがベッドの上に寝転がり、下から肉棒を挿入。エドガーが騎乗位でヴィクターを犯す中、残った吾郎はと言うと……

「お嬢様……こちらの穴がまだでしたよね?」

「!? え、あの、吾郎さ……あああっ!!?♡」

ヴィクターの小さなアナルに肉棒を押し当て、そのままズブリと挿入。まさか2穴攻めをされるとは思っていなかったのか、ヴィクターは今まで以上に大きな喘ぎ声が漏れ始めた。

「おお、お嬢様。また締めまりが良くなりましたよ」

「ああ、やああっ!!♡ それ、以上はああ……っ!!♡」

2本の太い肉棒に膣内と直腸内を蹂躪され、ヴィクターの口から悲鳴のような喘ぎ声がひたすら溢れ出る。2人の執事は既に1回以上射精しているにも関わらず、その肉棒は未だ固さを失っておらず、すぐにまた射精のタイミングが近付いて来た。

「ではお嬢様、また中に出しますよ……ぐっ!!」

「……っ!!」

「んひひひひひひひひひっ!!♡」

2人が同時に射精を開始し、エドガーの精液が子宮内に、吾郎の精液が直腸内に大量に発射された。下腹部に精液の熱さを感じながら、ヴィクターは蕩けた表情で激しい絶頂に踊らされるのだった。

「お嬢様、お嬢様……う、くう!!」

「あ、ああ、あああっ……♡」

それから数十分後、3人のセックスは未だ続いていた。あれからと  
いうもの、ヴィクターはロープで縛られた両手を上に吊り上げられ、  
アイマスクで目隠しをされた状態から、エドガーに立ちバックの体勢  
で挿入されていた。ヴィクターの腰を引きつけたエドガーが再び射

精を行い、ヴィクターの体がビクビクと震え出す。

「お嬢様。まだまだ、注がせて頂きます……！」

「んんっ!?♡ あ、はあっ……!!♡」

あれからエドガーと吾郎は、2人で交代しながらヴィクターの子宮内に何度も精液を注入し続けていた。既にヴィクターの子宮内は2人の精液でタップアップになっており、いつ受精してしまってもおかしくない状態だ。

「お嬢様。これから私達と一緒に、ダールグリユン家の跡取りを作りますよ」

「ああ、はあっ……跡、取り……ッ……？」

「そうです、お嬢様。あなたはこれから、私か吾郎さんのどちらかの子供を授かり、その子供がこれからのダールグリユン家を引っ張っていくのです。今この場で、確実に孕ませて差し上げますからね」

「お嬢様、また出します……俺の子供、産んで下さい……くっ!!」

「~~~~~ッ!!♡」

エドガーが耳元で囁き、吾郎がヴィクターの腰を両手で引きつけた瞬間。それらが完全にトドメとなったのか、ヴィクターの心は完全に堕ちた。再び子宮に精液が注がれる中、ヴィクターの心は1匹のメスと化してしまっていた。

（跡、取り……2人の、子供……？）

エドガーか吾郎、どちらかの子供をこれから孕まされる。普通なら執事がお嬢様を妊娠させるなど大問題も良いところなのだが……思考力が低下していたヴィクターは、その事に一切疑問を抱いていなかった。それどころか……

（2人の、赤ちゃん……良い、かも……♡）

2人に孕まされる事を、良しと思ってしまうている彼女がいた。2人の子供を産んで、幸せな家庭を築きたいと思ってしまうている彼女がいた。

「ッ……良い、わ……2人共……あなた達の、赤ちゃん、孕ませて……

!! 私が、どっちも……産んで、あげるからあ……!!♡」

「……言いましたね、お嬢様？ もう後戻りはできませんよ」

エドガーがニヤリと笑みを浮かべ、吾郎と交代してヴィクターの背後に回り込む。彼は2人の精液が大量に溜まっているヴィクターの下腹部を優しく撫で回しながら、精液が垂れている割れ目に再び亀頭を押し当てていく。

「楽しみです。お嬢様のここに、私達の子供ができる時が」

「く、んうううう……ッ!!♡」

エドガーの囁く言葉は、今のヴィクターにとって最上級の媚薬だった。エドガーの肉棒が少しずつ膣内に侵入して来る中、ヴィクターはこれから訪れるであろう幸福の未来を想像しながら、再び淫らな快楽の中に身を墮としていくのだった。

なお、それらの一連の出来事は……

「~~~~~ッ!!」

全て、ヴィクターが眠っている間に見た夢に過ぎなかった。

（わ、私はなんてハレンチな夢を……あんな事や、こんな事まで……ッ!!）

「は、恥ずかしいですわあ……ッ!!」

「……?」

よりによって、執事の2人とそんな事をする夢を見てしまうとは。彼女がネグリジェの下に履いている下着も愛液で湿っており、ヴィクターは恥ずかしさのあまりしばらく布団に包まったまま出て来れず、隣で寝ていたイヴはその様子を見て首を傾げていたという。

「お嬢様、どうなさいましたか? 顔が赤いようですが」

「な、何でもありませんわ!!」

「!?」

もちろん、それからしばらくの間、ヴィクターが2人の執事と視線を合わせられずにいたのは言うまでもない。

## ダーイン×アリサ&すずか IF (☆)

JS事件から約1年後。

かつてスレイブ・ダーイン／仮面ライダーベルグという小悪党が起こした盗難事件は、とある泥棒ライダーや手塚達の活躍によって無事に解決へと至った。

手塚達との戦いの中、とあるアクシデントが原因で異形の怪物と化し、人間として死んだ彼はライダー達によって撃破され、ミラーワールドにて葬られる事となった。

そう、既に彼はこの世にはいない……はずだったのだが。

「ク、ククク……クハハハハハハ……!!」

死んだはずの彼——スレイブ・ダーインは生きていた。

ダーイン自身も、最初は自分が生きている事に驚いていたが、今はその驚きよりも「自分はまだ生きている」という喜びの方が遥かに勝っていた。

何より一番大きいのは、異形の力が今も自分の体に残っているという事。

かつて異形の姿に変異した際、ダーインは人間としての自我を失い、ダーインとしては死んでいた。

しかし今はどうだろう。  
彼は自我を保ったまま、あの異形の力を自在に使いこなす事ができていた。

全身から生やした木の根のような触手が、ウネウネと動きながらもダーインの意のままに動いている。

それだけじゃない。

元々使用していた試作型ディエンドライバーの影響なのか、なんと  
ダーインは世界から世界へ移動する力まで手に入れていた。

おかげで彼はミッドチルダだけでなく、地球や他の次元世界に行つ  
たり来たりとやりたい放題である。

こんな上手い話が今まであつただらうか？

喜びに喜んだダーインは、早速行動に移る事にした。

異形化する前と、やる事は変わらない。

人が大切になっている物ほど、この手で奪いたくなる。

奪われた者の泣き顔を、この目で眺めたくなる。

生前よりも更に増幅したダーインのその残虐性は……哀れな事に、  
とある女性達に向けられてしまうのだった。

「ひっ……やめ、て……いやあ……ッ!!」

「んっ……この、離しなさい、よ……くう……ッ!？」

街の外れの森。その森の奥深くに建てられた小さなボロボロの小  
屋にて、金髪の女性と紫髪の女性、その2人が悲惨な目に遭わされて  
いた。

「ひゃん!? いや、そ、そこはあ……ッ……!？」

「こ、こら、搾るなあ……ッ!!」

地中から何本も生えた、木の根のような黒い触手。それが2人の女

性の胴体に巻き付いて離さず、細長い触手が2人の体を辱めている。剥かれた服の下から露わにされた乳房を触手がギユウギユウと搾り、股間から膣内に侵入した触手が膣内をグチュグチュと掻き回す。

(ッ……何で……どうしてこんな事に……!!)

この2人の女性は、あの高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやての友人だった。

金髪の女性はアリサ・バニングス。

紫髪の女性は月村すずか。

この日、2人はいつものように大学生生活を過ごし、いつものように帰宅しようとしていたのだが、2人の背後から何者かが襲い掛かり、2人は意識を失ってしまった。

そして気が付けばこのオンボロな小屋の中で、何が何だかわからなかった2人は目覚めてからすぐ小屋を出ようとするも……そんな2人に襲い掛かったのが、この謎の触手達だった。

触手達はすぐにアリサとすずかを捕らえ、彼女達の着ている衣服を半分ほど剥き、半裸状態となった2人をそのまま犯し始めたのである。

「ククク……楽しめているかな？ お嬢さん達」

その触手達を操っている張本人——ダイインは今、古ぼけた椅子に座りながら、2人の女性が犯されている光景を楽しそうに眺めている。ダイインが下卑た笑みを浮かべるたび、アリサは犯されている快感に悶えながらも彼の事をキツと睨みつける。

「アンタ……んう!? くう……こんな事、して……ただで済むと思わないでよね……んひやう……ッ!!」

「おお、怖い怖い。ではそうならないよう……きっちり仕込んであげなくては」

「んひやあつ?!」

ダイインが指を鳴らすと、数本の触手がウネウネと動きながら、既に別の触手でギユウギユウ搾られているアリサとすずかの豊満な乳房に近付いていく。すると触手の先端が花のようにクパアと開き、そこから現れた口が2人の乳房に吸いついた。



そう言うと、ダーインは自身が履いていたズボンを脱ぎ、その股間にぶら下がっている肉棒を露わにした。大きくギチギチに勃起したその肉棒を見て、アリサとすずかは表情が青ざめていく。

「ま、まさか……」

「そのままかだよ。まずはそちらの紫色の髪の子から……」

「ま、待って!!」

ダーインが舌舐めずりをしながらすずかに迫ろうとした時、アリサが待ったをかけた。

「わ、私が相手をするわ……だからお願い、すずかにはそれ以上手を出さないで……!!」

「ア、アリサちゃん、何言ってるの……!!? それじゃアリサちゃんが……!!」

「ほお、お友達を庇うのか。美しい友情だね。良いだろう、ではまずはそちらのお嬢さんから……」

ダーインが手をかざすと、アリサを捕らえている触手が大きく動き、アリサの乱れに乱れた肢体をダーインの前まで移動させる。その上で数本の触手がアリサの手足を縛り、両足に至っては左右に大きく開かされ、股間の割れ目が大きく露わになる。

「その美味しそうなオ○ンコ……たっぷり味わってあげよう!!」

「くっ……あああああああつ!!」

ダーインの肉棒が正面から、アリサの股間にズブリと挿入された。肉棒は一気に膣内の奥深くまで突っ込まれ、アリサの嬌声上がる。

「おお……これはなかなか、良いキツさじゃないか。気に入ったよ」

「ん、あつ……ア、アンタに気に入られても……んう……嬉しく、ないわよ……ひゃん!!」

アリサは口ではそう言いながらも、膣内を肉棒で挿入された快感に身を震わせる事しかできなかった。ダーインが腰を振るたびに、先端の亀頭が子宮口をコツコツ突いており、そのたびにアリサの口からはエッチな声上がり続ける。その様子を隣で見せつけられていたすずかは、ただ悲しそうに目を逸らす事しかできなかった。

「く、おお……良いねえ、気持ち良くなってきたよ……! これはすぐ

出てしまいそうだ……!」

「ッ……ま、まさか……」

「ああ、この締め具合は予想外だ……く、うおお……!!」

ダーインの腰を振る動きがどんどん激しくなっていく。それを見たアリサは悪い予感的中し、いやいやと首を必死に振り続けるが、ダーインは彼女の豊満な乳房を揉みしだきながら、どんどんスピードを速めていく。

「い、いや!! 中には出さな——」

「ああ、イク!! イクぞ!! 中に出すぞ……あああつ!!」

「ひっ……いやあああああああ!!?」

ダーインがアリサの腰を掴んで引きつけた瞬間、アリサの膣内で精液が発射され始めた。子宮口の目の前まで迫った龟头は何度も震えながら精液を放ち、子宮内に注ぎ込んでいく。

「お、おおっ……これはなかなか……!!」

「あ、あ……う、嘘……中に……出され、て……」

ダーインが快感で身を震わせる中、アリサは絶望の表情を浮かべながら、熱い物をドクドクと流し込まれている自身の下腹部を見つめる。ダーインが肉棒を引き抜いたのは、それから数十秒ほど経過してからだだった。

「ふう、まずはこれで一発だ。気持ち良かったよ、お嬢さん」

「ア、アリサちゃん……ッ」

アリサの股間から溢れて来た精液が、トロリと床に流れ落ちていく。その光景を見てしまったすずかは辛そうな表情で涙を流し、その表情を見たダーインは歓喜の笑みを浮かべる。

「おお、良いぞお、まさにその顔だよ、私が見たかったのは!! だが足りない……もつと、その泣いている顔を私に見せてくれ……!! その為には……」

ダーインの肉棒は未だに萎えておらず、次の標的としてすずかに狙いを定めようとしていた。それに気付いたアリサが叫ぶ。

「なっ……ま、待ちなさい!! すずかには手を出さないって……!!」

「やめると言った覚えはないぞ? どの道、2人共犯す事に変わりはない」

ない」

「何をふざけた事を……んぶう!?!」

「アリサちゃん!?!」

「全く、口うるさいお嬢さんだ。少し黙っていて貰おうか」

ダーインの非道な行いに怒りを露わにするアリサだったが、触手を口に突っ込まれた事でそれ以上何も言葉を発せなくなってしまった。その一方で、ダーインは触手に指先で指示を出し、すずかの体勢を変えさせる。

「さあ、次は君の番だ。覚悟したまえ」

「ッ……!!」

すずかはダーインに背を向け、お尻を突き出した体勢で拘束される。ダーインが背後からすずかの股間に肉棒を突きつける中、すずかはアリサの方に目を向けた。

(アリサちゃん……)

自分を庇おうとして、無惨にも膣内射精されてしまったアリサ。現在は口に触手を突っ込まれ、何も喋れない親友に対し、すずかは精一杯の笑顔を浮かべようとした。

(大丈夫だよ、アリサちゃん……私は、大丈夫だから……!)

しかし、そんな笑顔も……

「ッ……かは、あ……!?!」

後ろから肉棒を挿入された事で、すぐに掻き消されてしまった。

「おお……!! こちらも、かなり締めりが良いじゃないか……!!」

「ひっ……あ、あ、ああっ……!!」

ダーインは恍惚の表情で、すずかの腰を掴みながらピストンを続ける。何度も腰を打ちつけ、すずかの膣内を肉棒が何度も行き来するたびに、すずかの口からは可愛い嬌声が漏れ出す。

「まさかこの世界でも、こんなに素晴らしい名器と出会えるとはな……!! このままずっと、私の肉奴隷にしてやりたいくらいだ……!!」

「ん、く、うう……ッ!!」

ダーインは右手ですずかの乳房をいやらしく揉みながら、彼女の長

い紫髪を左手で掻き分け、彼女の首元にキスしてその跡を残す。そしてまた、彼は限界に近付こうとしていた。

「お、お、また出るぞ……子宮に直に注ぎ込んであげようじゃないか……!!」

「んあ、あ、ああつ……だ、駄目……外に……!!」

「ああ出る、出るぞ!! 私の、異形の子を孕めえ!!!」

「あ、あああああああああつ!!?」

ダーインが腰を強く打ちつけた瞬間、亀頭は子宮口にぴったり引付き、そのまま精液を子宮に注ぎ込み始めた。絶頂に至ったはずだが背中を大きく反り上げる中、ダーインは彼女の腰をがちり掴んで離さず、亀頭から精液を発射し続ける。

「ク、ハハハ……気持ち良いぞお、お嬢さん……!!」

「あ、あああ……ツ……」

すずかの胎内に精液を注ぎ込みつつ、背後から右手を回して彼女の腹部を撫で回すダーインだったが、彼女の子宮があると思われる位置をいやらしく撫で回していたその時……異変は起きた。

「ツ……はあ、はあ……あ、んあああ……!!」

「……ん?」

ダーインと下半身が繋がった状態のすずかが突然、何かの疼きに耐えるかのように悶え始めた。彼女の汗に濡れた体は更に火照り、すずかの全身の震えは止まる様子がない。

「ツ……ん、んぶ、んむうううう……!!?」

そしてそれは、横で拘束されているアリサも同じだった。すずかと同じように、何かの疼きに襲われているのか全身をビクビク震わせており、ダーインは首を傾げる。

(何だ? 何が起きている……?)

その原因はすぐにわかった。ふとダーインが今も繋がっているすずかの背中に目を向けると、そこには思いもよらない光景があった。

「!? これは……」

汗に濡れたすずかの背中……そこにはほんの僅かに、ステンドグラスらしき紋様が浮かび上がっていたのだ。それを見た

ダーインはすぐにアリサの方にも目を向ける。

「まさか……」

アリサの体にも、腕や腹部に緑色の植物の……ような血管が浮かび上がっていた。それらの光景を交互に見据えたダーインは、1つの可能性に辿り着いた。

「そうか、そういう事か……!」

ダーインはニヤリと笑みを浮かべ、すずかの腰を再び強く掴む。既に2回も射精しているにも関わらず未だ萎えていないその肉棒を、すずかの胎内にドズンと突き立てた。

「はがあっ!? な、に、を……ッ!!」

「少し試したい事があったな。私の実験に付き合って貰うぞ」

「ま、待って……ひやううっ!!」

ダーインは再びピストンを行い、抗議の言葉を出そうとしたすずかの口からまたしても嬌声上がる。ダーインは何度も力強く腰を振り、肉棒が挿入されているすずかの股間では、彼女の愛液と溢れ出た精液が混ざり合った液体がジュプジュプと泡立っていく。

「だ、駄目えっ!? い、今だけ、今だけはああ……ッ!!」

「ほお、何が駄目なんだ?」

「おかしくなるっ……おかひくなっちやううううっ!!」

「そうか、ではもっとおかしくなると良い!! その方が私にとって面白い物が見られるはずだ!!」

すずかが必死に懇願しても、ダーインはそれを無視してバックからピストンを繰り返す。そして再び、彼女の膣内に精液を放とうとする。

「さあイクぞ、受け取るが良い!!」

「んひいいいいいいいいいい!!」

ダーインは再びすずかの膣内に精液を放ち、達したすずかは一瞬だけ白目を剥くほどの快感に襲われる。するとその時、彼女の体に再び異変は起きた。

「!? あ、熱いつ……か、体、があ……ん、くううううううっ!」

すずかの体に謎の疼きが襲い掛かる。そして次の瞬間、すずかの右

腕にステンドグラスの紋様が浮かび、それと共に彼女の右腕は貝殻のような形状の物へと変化してしまった。

「おお、やはりそういう事か……!!」

「はあ……はあ……な、に、が……ッ……」

ダーインは予想通りだと言った風の表情を見せ、すずかは違和感の感じた右腕に視線を向け……恍惚としていた表情は一瞬にして、白く青ざめていった。

「え……な、何……これ……?」

貝殻のように固そうな水色の皮膚に、指先から伸びた鋭い爪。自分の腕が、人間の腕をしていない事に気付いたすずかは、数秒ほど経過した後に悲鳴を上げる。

「い……いやああああああああつ!!」

「クハハハハハハ!!」なるほど、これは傑作だなあ!! まさか化物に犯された人間も、同じ化け物として生まれ変わるとは!!」

「な、何で!! どうして、どうしてええええええええええつ!!?」

「面白い、これは実に面白い……さて」

「いやあ!! こんなのムグウツ!!」

悲痛な叫び声を上げる事しかできないすずかだったが、すぐに触手を口に突っ込まれ悲鳴を上げられなくなる。彼女の股間から肉棒を引き抜いたダーインは、そんな彼女の姿を見て楽しそうに笑いながら……今度はその光景の一部始終を見ていたアリサに視線を向けた。

「さあ、次は君の番だよ」

「ッ……んん、んんん……!!」

すずかの異変を見てしまったアリサは恐怖に怯え、涙目で必死に首を振り続ける。しかしそんな彼女の必死な願いも空しく、ダーインは未だ固いままの肉棒をアリサの股間に向け、そのまま深く突き刺してしまった。

「んんんんんんんんん!!」

「おお、まだこんなにもキツいままとは……これは何度やっても飽きんなあ……!!」

ズブズブと肉棒を挿入し、ひたすらアリサの膣内を犯し続けるダー

イン。するとアリサの口に突っ込まれていた触手がズルリと抜け、それによってアリサが喋れるようになった。

「あぐっ……いや、いやあ!! 抜いて、お願い抜いてええええええええっ!!!」

「ハハハハ!!! 今更それは無理な話だよ!! それに君も気付いていないはずだ、既に自分の体がおかしくなり始めている事にねえ!!」

アリサはとにかく抵抗しようともがきにもがいたが、残念ながらそれで解放してくれるような触手ではない。おまけにダーインが左右に開かれたアリサの太ももを掴んでいる為、もはや逃げようがなかった。

「ああ、また来るぞお……君は一体、どんな姿になるのかなあ!」

「ひっ……やめて、やめてえ!! お願い、化け物になんかなりたくない!!」

「出すぞ、中に出すぞ!! 君も化け物になって、化け物の子を産むが良い!!!」

「やだ、やだああああああああああああつ!!」

アリサの悲鳴と共に、ダーインはまたしても彼女の子宮内に精液を注ぎ込み始めた。アリサの願いと裏腹に、彼女の子宮は注ぎ込まれて来るダーインの精液を呑み込んでいく。

「あ、ああ、ああああああ……ッ!!」

再び膣内射精されてしまった事にアリサが絶望する中、彼女の体にも異変は起き始めた。今度は腕だけでなく足や腹部、背中などにも植物のような緑色の血管が浮かび上がり、それらが右腕へと集中していく。そしてアリサの右腕はメキメキと音を立てながら緑色に変色していき……やがて彼女の右腕は、長く鋭い爪の生えた物に変異してしまった。

「クッハハハハハハ!!! おめでとう!! これで君も、晴れて化け物の仲間入りだ!!」

「あ、あは、あはははは……う、嘘……嘘よ……こん、なの……ッ」

変異した自分の右腕を見たアリサは、もはや涙を流しながら笑い続けるだけだった。そんな彼女の絶望している姿を見たダーインは歡

喜に満ち溢れた表情を浮かべる。

「ああ……良い、良いぞお、もつとその顔をよく見せてくれえ……!!」  
ダーインは自分のやりたい事にはとことん貪欲だ。それがアリサとすずかにとつての不幸だった。彼女達の絶望している姿をもつと眺めてみたいと思ったダーインは、まだまだ彼女達を犯す事をやめようとはしなかった。

それから1週間後……

「クハ、クハハハハ……良い、実に良い眺めだあ」

あれからというもの、ダーインは場所を変え、今度はとあるビーチに存在する無人のコテージにやって来ていた。そこで彼が眺めていたのは……

「ん、はあ、あああああ……♡」

「あは、あはははは……♡」

全裸で触手に拘束されている、アリサとすずかの姿だった。触手に巻きつかれた両足を左右に開かされ、股間の割れ目に触手が入り込ん

で臍内を弄り回されている。

「あ、ああ……気持ち良い……もつと、もつとお♡」

「ん……あは♪ また、動いたあ……♡」

彼女達の姿は、誰から見ても酷い有様だった。

すずかは右腕が異形の物になったまま、足や腹部、背中などにもステンドグラスの紋様が浮かび上がり、左足も貝殻のような固い皮膚に変異している。

アリサは右腕が異形の物になったまま、体のあちこちに植物のような緑色の血管が複数浮かび上がり、体の各所から怪しげな植物が生え始めている。

そして両者共に、そのお腹は大きく膨れ上がっていた。2人はダーインによって無惨にも孕まされ、既にこれほどにまでお腹の子供が大きく成長してしまっていたのである。

「この1週間でここまで大きくなるとはなあ……君達は一体、どんな化け物の子を産んでくれるんだろうなあ？」

「んふう……♡」

「あは、ミルク出たあ……♡」

ダーインは2人に近付き、彼女達の乳房をそれぞれの手で揉みしだく。妊娠した事で更に大きくなった2人の乳房からは、白い母乳がブピュツと噴き出している。

「ああ、楽しみだ……今から本当に楽しみだよ……クフ、クハハ、クハハハハハハハハハハ……!!」

この調子なら、出産まで数日もかからない事だろう。

2人がどんな異形の子を産み落とすのか、今からが楽しみだ。

ダーインの下卑た笑いは、その後もしばらく途絶える事はなかった。

それから2日後の事だった。

オギヤーツオギヤーツ

コテージの中から、元気な産声が聞こえてきたのは。



スバル&ティアナ&夏希（美穂） I F（☆）

それは、機動六課時代の出来事だった……

（おい、もう寝たか？）

（ああ、ぐっすり眠ってるぜ）

機動六課の女性寮。時間帯は深夜の1時で、同じ部屋を使わせて貰っているスバル、ティアナ、夏希の3人は既に就寝していた。そこへコツソリ侵入して来た不埒な輩が3人いた。1人はボサボサの金髪が特徴的な青年、1人は茶髪を角刈りにした青年、そしてもう1人は坊主頭の青年だ。

「おお、やっぱ凄えな睡眠薬の効果」

「だろ？ 一度飲んじやえば朝まで起きないぜ」

「寮長さんも今頃ぐっすりだろうしな」

それはスバルやティアナ達と同じ、機動六課に所属する男性局員だった。金髪の青年はエリック、角刈りの青年はダズ、坊主頭の青年はマルコという名前で、彼等は部隊長の八神はやてが指揮するロングアーチの一員として、普段はスターズやライトニングの後方支援を担当している……のだが。

「おお、可愛い寝顔だなあスバルちゃん」

「流石のティアナちゃんも予想外だろうなあ。まさか冷蔵庫の飲み物に睡眠薬が仕込まれていたなんて」

「お、夏希さんもぐっすりだな」

この3人、どうやらスバル、ティアナ、夏希の3人を体目的で狙っていたらしく、スバルとティアナが任務で、夏希がミラーモンスター討伐で3人全員が不在の間に、この3人が密かに彼女達の部屋の冷蔵庫に睡眠薬入りの飲み物を仕込んでいた。ちなみに女性寮の寮長にも「差し入れ」の名目で睡眠薬入りのお茶を飲ませている為、寮長

も今頃はグツスリお休みしている事だろう。

「よし、どうする？ 誰がどの娘を貰う？」

「断然スバルちゃんだ！ ドジっ子大好きなんだよ俺」

「俺はティアナちゃんだな。普段ツンデレな子ほど、犯してやりたくなるもんよ」

「じゃあ残った夏希さんは俺だな。夏希さんも超美人だし、すっごい俺好みだわ」

ダズはスバルを。

マルコはティアナを。

エリックは夏希を。

3人共、狙っている相手が被る事はなかったようだ。早速3人はスバル達の布団をゆっくり捲り、起こさないよう慎重に服を脱がし始めた。スバルは青いジャージ、ティアナは黒いジャージが露わになったが、夏希の布団を捲ったエリックは夏希の姿を見て驚いた。

「うお、マジかよ！ 夏希さん下着だけだぜ！」

「マジで!?!」

どうやら夏希、下着だけの状態で眠っていたらしい。黒いブラジャーとショーツ姿の夏希を見た3人はゴクリと喉を鳴らし、ダズとマルコもそれぞれスバルとティアナのジャージを脱がしていき、2人を下着姿にさせた。

「おお、イチゴ柄か。スバルちゃん可愛いパンツ履いてるねえ」

「ティアナちゃんのは……どっちも白だな。これはこれでシンプルで良いな」

スバルはパンツにイチゴ柄の入ったピンク色の下着を、ティアナは上下共に柄のないシンプルな白色の下着を着ていた。そこからエリック達はそれぞれの下着をゆっくり脱がす事にした。まずは3人共、ブラジャーに指をかけてゆっくり下にずり下げていき、スバル、ティアナ、夏希の綺麗な乳房が露わにされた。

「おお……綺麗なおっぱいしてるじゃねえか……!」

「ていうか、3人共おっぱいデカくね？ まだ未成年なのにこれかよ」  
「未成年でこれなら、将来もつとデカくなるだろうな」

スバルもティアナも夏希もまだ10代の未成年だが、この時点でそれなりに大きな乳房を持っているようで、エリック達は3人の乳房を見る事ができて感動していた。そこから彼等の理性はどんどん消え去っていき、まずは3人同時に彼女達の乳房に吸いついてみる事にした。

「スバルちゃん、可愛い乳首だね……いっぱい舐めてあげるよ……ちゅ、ぴちや、れろ……」

「ぴちや、ぺちや……ティアナちゃん、乳首固くなってきたな。寝ながらも感じてるんだな」

「まさか俺も、夏希さんのおっぱいを吸えるとは思ってもみなかったぜ……ちゅうちゅ……！」

ダズはスバルの乳首をいやらしく舐め回し、マルコはティアナの乳房を揉みながら乳首に何度もキスをし、エリックは夏希の乳首を口に咥えたまま音を立てて吸いついた。乳房を吸われる事で、寝ている彼女達の体も僅かにピクンと反応を示してはいるが、それでも眠りから目覚める様子はなかった。

「ちゅぱ、ちゅぱ、じゆるるる……ああ美味しい、美味しいよスバルちゃん……！　これで、スバルちゃんのおっぱいはもう俺の物だ……！」

「あんまがつつき過ぎて起こすなよ？　それより、俺は下の方も確かめてみたいね」

「よし、じゃあ俺も下を脱がせるとするか」

ダズがスバルの乳房にひたすら吸いついている一方、マルコとエリックはそれぞれティアナと夏希のショーツを脱がし始めていた。ショーツを脱がされた2人は足を左右に開かれ、その綺麗な秘所が露わにされる。

「おおおお……綺麗なピンク色だ……！」

「どう見ても使い込んでるようには見えねえな……こりや間違いなく処女だわ」

2人はそれぞれティアナと夏希の秘所を指でくぱあと開き、ピンク色の中身を確認する。エリックが夏希の秘所を見て冷静に分析する中、マルコはティアナの秘所を覗き込んでいる内に我慢ができなく

なったのか、鼻先でクンカクンカと匂いを嗅ぎ、自身の口を近付け始めた。

「ぴちやぴちや、ちゆる……ああ、ティアナちゃんの、ティアナちゃんのオ○ンコ……れろれろ……！」

「いやお前もかよ……まあ良いや。俺も夏希さんのオ○ンコ味わわせて貰うとするか」

マルコはティアナの割れ目をなぞるように舌を動かして舐め回し、エリックは夏希の開かれた秘所の穴を穿るように舌を挿し入れて愛液を啜る。股間を舐め回されているティアナと夏希は体をピクピク震わせているが、それに構わず2人は股間を舐め続ける。

「ちゅぱっ……ああ、スバルちゃん……スバルちゃんのオ○ンコも、俺がペロペロしてあげるね……！」

先程からずっとスバルの乳房を舐めしやぶり続けていたダズもまた、スバルの履いていたイチゴ柄のショーツを脱がし、スバルの股間に顔を埋めて秘所に吸いつき始めた。ひたすら乳房を吸われ続けた事を感じていたのか、スバルの秘所は既に愛液で濡れており、ダズはそんなスバルの愛液を味わおうと音を立てながら舐めしやぶる。

「ぶはっ……ふう、いっぱい味わってやったぜ」

ダズがスバルの、マルコがティアナの股間をクンニし続けている中、エリックはクンニを中断して夏希の股間から口を離れた。既に夏希の秘所は彼女の愛液とエリックの唾液でベタベタに汚れており、心なしか夏希の頬も少し赤くなっており、彼女の体も汗に濡れていた。(まさか、夏希さんをこの手で犯せる日が来るとは思ってもみなかったな……)

仮面ライダーファムとして、ミッドの平和を守る為にミラーモンスターと戦い続けている夏希。そんな正義の味方と言えるような立場にある彼女を、まさかこんな形で睡姦レイプできる日が来るなど、当初エリックは考えた事もなかった。

「寝ながらも感じてるのか？ もっと気持ち良くさせてやるからな」

しかし今、こうして彼女は目の前で自身に美しい裸体を晒し、その裸体を自身によって成す術なく穢されていつている。そんな今の状

況が、エリックをより興奮させていた。

「んじや、そろそろメインディッシュを頂くとするか」

散々舐め回された事で、既に夏希の秘所はたっぷり濡れている。前戯はもう充分だろうと判断したエリックは、脱いだズボンの下から太く勃起した肉棒を露出させ、その先端の亀頭を夏希の秘所にピトツと引っ付けた。

「行くぜ……く、うおっ……い！」

亀頭が割れ目に食い込むように入り、そこからズブズブと肉棒が夏希の膣内に挿入されていく。その際に何かが膣内で破ける感触があり、眠っている夏希の表情が僅かに歪んだ。

「お、おお……すげえ……夏希さんのオ○ンコ、めっちゃ締まるぜ……!!」

肉棒が挿入された夏希の秘所から、僅かに赤い血が垂れて来ている。それはつまり、エリックが夏希の処女を奪ったという何よりもの証であり、エリックは一種の高揚感を得られていた。

「これは、油断したらすぐに出ちまうな……!!」

しばらくは夏希の膣内を気持ちよく味わっていた。エリックはゆっくりな速度で腰を振り、夏希の膣内の締めりを楽しむ事にした。肉棒がズチユズチユと音を立てながら膣内を蹂躪する中、エリックは夏希の乳房に手を伸ばし、乳房を優しく揉みしだきながら再び乳首に吸いついた。

「よし、俺もそろそろ挿れさせて貰おうか……い！」

「ずじゅるるる、ちゅぱあ……はあ、はあ、スバルちゃん、俺達も今から1つになるよ……俺と一緒に、赤ちゃんを作る練習しようねえ……い！」

エリックが夏希を正常位で犯す中、マルコとダズもクンニを終えてから肉棒を露出し、それぞれティアナとスバルの濡れに濡れた秘所に向かって亀頭を近付けていく。そして2人同時に肉棒を挿入していき、ティアナとスバルの処女もまた、無惨に散らされる事となった。

「うお、これはなかなかの名器だな……!!」

「ああっ……す、凄い、気持ち良いよスバルちゃん……!!」

マルコはうつ伏せになったティアナを寝バックの体勢で腰を打ちつけ、ダズはエリツクと同じように正常位でスバルの膣内の感触を楽しみ始めた。そこから先はしばらくの間、3人の男によって3人の少女が、膣内を肉棒で蹂躪される状況が続いていく。

「あ、ああ、俺もうイッちゃいそう……!!」

「ん、あ……うっ……」

最初に限界が近付いて来たのは、スバルを正常位で犯していたダズだ。彼はスバルの揺れる乳房を両手で揉みしだきながら、腰を振るスピードをどんどん上げていき。そのたびに眠るスバルの口からは僅かに喘ぎ声が漏れる。

「イク、イクよスバルちゃん、中に出すよ……俺と一緒に、可愛い赤ちゃんを作ろうね……ああ出る、イクウツ!!」

「あ、んううう……!」

ダズが思い切り腰を打ちつけた瞬間、我慢できなくなった彼の肉棒はスバルの膣内で大きく爆ぜた。スバルの膣内には彼の熱い精液がビュルツビュルツと注ぎ込まれていく。

「お、おおお……スバルちゃんが、俺の精液受け止めてる……俺の精液で、俺の赤ちゃん作ろうとしてる……!!♡」

相手が眠っているのを良い事に、ダズは好き勝手な事を言いながらスバルの腰を掴んで引きつけ、できる限り精液を注ぎ込もうと肉棒を奥深くに挿し込んでいく。それによりスバルの子宮は彼の精液がどんどん溜まっていき、スバルは体を火照らせながら体をビクビク震わせていた。

「ああ、俺もそろそろイクそうだ……!!」

そんな中、次はマルコが限界を迎えようとしていた。ティアナを寝バックで犯していたマルコは彼女の下半身を掴んで持ち上げ、ティアナの尻が突き出された状態で腰を速く振り続ける。

「ティアナちゃん、家族がいないんだってなあ？ 独りぼっちで寂しいだろお？ 今から俺が、お前の子宮にいっぱい種付けしてやるからな……俺がお前の新しい家族を作ってやるからな……ぐ、おおっ!!」

マルコはそう言つて、ティアナの腰をがっしり掴んで肉棒を奥深く

に突き刺した。その直後、限界に達した彼の肉棒は熱い精液を発射し、ティアナの子宮にドクドクと注ぎ込み始めた。

「ぐう、搾り取られる……何だよティアナちゃん、そんなに俺のザーメンが欲しかったのか……!! ああ良いぜ……気が済むまでオ○ンコに射精して、俺のガキを確実に孕ませてやるからな……!!」

「ッ……ん、ふう……!」

マルコはティアナの子宮に精液を注ぎながら、彼女の長いオレンジ髪を掻き分け、彼女のうなじ辺りに痕が残るように強くキスをする。その間も、ティアナは枕に顔を伏せながら小さく喘ぎ声が漏れ出していた。

「2人共イッたのか……んじゃ俺も、そろそろイかせて貰うとするかな」

現時点で、まだ射精していないのはエリックだけだ。そんな彼もまた、夏希の膣内を味わっている内に段々気持ち良さが頂点に達しようとしており、夏希の細く括れた腰を掴みながらピストンを速め始める。秘所からジュポジュポと卑猥な音が鳴り、夏希の口からエツチな声が漏れ出ている。

「ああ、すつげえ締まる……!! ああ、夏希さん……俺も今から中に出すからな……いつの日か俺の子供を産んで貰うからな……!!」

「ん、あ……はう……ッ!」

仮面ライダーとして戦っている夏希が、寝ているところを無惨に犯され、自分の精液で子供を孕まされる。エリックにとっては夢にまで見た最高のシチュエーションだ。それを現実の物とする為に、エリックは肉棒を膣内の奥深くに到達させ、先端の亀頭を子宮口にディープキスさせた。

「イクぜ夏希さん、たっぷり射精してやるからな……!! 俺のザーメンで受精させてやるからな……ああ孕め、妊娠しろ、俺の子供を妊娠しろお!! おあぁっ!!」

その瞬間、エリックの肉棒も絶頂に至り、精液が子宮内に直に発射される事となった。精液は夏希の子宮内にどンドン注がれていくが、亀頭が子宮口にピッタリ引っ付いているせいで精液は外に出ていく

事ができず、夏希の子宮はエリックの精液でパンパンになっていく。「う、はああああ……ああ夏希……お前はもう俺の女だ……お前のおっぱいも、オ○ンコも、全部俺の物だ……!!」

膣内射精を決めた事で、エリックはまるで夏希の体を支配してやったかのような気分だった。そのせいで理性が遠くに投げ飛ばされてしまったまま、エリックはその後も肉棒を引き抜く事なく、夏希の膣内をひたすら味わい続ける事にした。

「ティアナちゃんも、これだけじゃまだまだ足りないよなあ……？」

今からもつとザーメンを追加して、確実に妊娠させてやるからなあ……!!」

「ああスバルちゃん、まだまだ楽しもうか……俺がスバルちゃんの事、もつと気持ち良くさせてあげるからねえ……!!」

マルコもダズも、まだまだティアナとスバルを犯す事をやめるつもりはないようだ。マルコはティアナを正常位にさせ、彼女の乳房に顔を埋めながら再び腰を振り始める。ダズはスバルの体を起こして対面座位の状態にさせ、スバルの乳房に吸いつきながらピストンを再開する。

「ああ夏希ィ……今から俺が、お前のご主人様だ……!! お前はご主人様のお嫁さんで性奴隷なんだ……ご主人様のザーメンで、俺の子供を孕むのがお前の仕事だぞお……!!」

「ティアナちゃん……俺のガキを孕むまで、何度でも中出ししてやるからな……!! たくさん子供ができれば、家族がいっぱいになるんだ……お前はもう、独りぼっちじゃなくなるんだぜえ……!!」

「スバルちゃん……もし俺の赤ちゃんができたら、俺のお嫁さんにしてあげるからね……いつか結婚しようね……!! 結婚してからも、俺が可愛い赤ちゃんをいっぱい産ませてあげるからね……それから、スバルちゃんのおっぱいミルクも、俺がたくさん飲んであげるからねえ……!!」

男達の暴走は止まらない。目の前の女が、自分の子供を身籠るその時まで。その日の夜はずっと、彼等は3人の少女を犯す事をやめる事はなかったのだった。

そしてしばらくした後。

スバル、テイアナ、夏希の3人は生理が来なくなり、月日の経過と共に彼女達の下腹部はほんの少しずつだが大きくなっていった。

不思議に思った3人がシャマルの検査を受けたところ、なんと3人揃って妊娠していた事が発覚。

それが原因で、六課内は大変な騒ぎに発展してしまうのだが……それはまた別のお話。



## はやて IF

ここはミッドチルダ首都クラナガン、とある旅館の露天風呂。  
ある男達は管理局での仕事の疲れを癒やす為、この温かい風呂に浸かっ  
つてのんびりとした時間を過ごそうと考えていた……のだが。

「ん、じゆる、ちゅぱっ……!!」

「あ、ああ、良い……気持ち良いです、八神さん……ッ!!」

「れる……んふふ、そうやる? もっと気持ち良くなってもええんよ……♪」

その混浴風呂でまさかの対面を果たしてしまった女性——八神は  
はやてによつて、男達はこの日、今までで一番幸せな時間を過ごして  
いた。

「うおっ……!? や、八神さん、そこ、良いです……とても……!!」

「んく? ここなん? ここが気持ちええん? ええよ、いっぱい癒  
されようなく♪」

白い湯気が立つ風呂の中、岩の上に座らされた男の間には現在、は  
やてが顔を埋めていた。大きく勃起した男の肉棒をピンク色の舌で  
いやらしく舐め、その気持ち良さに男は何度も体を震わせる。その様  
子を見たはやては楽しそうに笑みを浮かべながら、ピクピク震えてい  
る肉棒を右手で優しく扱き、先端の亀頭をチロチロと突つつくように  
舐め続ける。

「んっ♡ はあ……良い……そこ、もっと舐めてえ……♡」

「んん、じゆる、ずじゅ、ちゅぱ、れる……ああ、八神さん、美味しい  
です、八神さんのオ○ンコ……!!」

はやてが男の肉棒にフェラチオしている一方で、もう1人の男は四

つん這いの体勢になっているはやての後ろに回り込み、その丸い尻を両手で掴みながらピンク色の秘所に口を付けていた。左右に開かれた割れ目に舌を這わせ、溢れ出て来る愛液をジュルジュル啜るたびにはやての口からも喘ぎ声が漏れ出す。

「や、八神さん、俺もう……」

「んん、出そうなん？ それじゃあ、思いつきり出そうなく♡」

「くあ!? ちょ、それヤバイですって……ッ!!」

フェラチオされていた男は我慢の限界が近付いて来たようで、それを察したはやては自身の大きな乳房を使い、肉棒を器用に挟み込んでパイズリをし始めた。乳房の柔らかな感触に包まれた肉棒は程よい刺激を受け、乳房の谷間から突き出ている亀頭にはやてが舌を這わせる中、パイズリされた男はあつという間に限界に達する事となった。

「や、八神さ……くう!!」

「んぶっ……!?!」

はやてが亀頭を頬張っている最中、男は亀頭から精液を放出。それを口の中で受け止めたはやては驚きつつも、喉奥に流れ込んで来る精液を舌で上手く舐め取り、少しずつだが確実に飲み込んでいく。その間も、後ろからはやての秘所にクンニしていた男は舌を上下に動かし、クリトリスを刺激してはやての全身に快感をもたらした。

「ん、んむううううう……ッ!!♡」

激しいクンニで絶頂に至ったのか、はやては口の中の精液を飲み込みながらもその身を何度も震わせた。クンニしていた男が口を離すと、何度も舐めしやぶられたはやての秘所からは今もなお愛液が垂れてきている。

「はあ、はあ……どうや？ 私のオ○ンコは」

「は、はい、凄く美味しかったです……!」

「そういわれると嬉しいなあ……♪」

クンニした男から自分の秘所を味わった感想を聞き、照れ臭そうに微笑むはやて。そんな彼女は今、顔が少し赤くなっている上に目もとろんとしており、その扇情的な表情から男達はゴクリと息を呑む。

（や、八神さん、やっぱすげえエロいな……!!）

(ああ、まさか混浴で出くわせた上に、エッチまでさせてくれるなんてな……!!)

男達がはやと出会えたのは本当にたまたまである。普段の日常では彼女いない歴〃年齢だった彼等は、ちよつとした好奇心から混浴風呂に入ってみようと考えていた。当初はそう上手く行きはしないだろうとも考えていた2人だったのだが……

『おお〜こんにちはあ〜……♪』

『や、八神さん!?!』

そこにいたのはなんと、バスタオルすら巻かずに完全な全裸で湯船に浸かっているはやであった。流石の彼等もまさか全裸姿のはやと遭遇するとは思わず、慌てて彼女から視線を外そうとしたのだが、ここで彼等はある事に気付いた。

『ん〜、どうしたん? そこにいたら寒いよ〜? こつちに来て温まりいなあ〜……♪』

『……んん?』

裸を見られたにも関わらず、はやては悲鳴を上げたり怒ったりする事もなく、2人に自分達の傍まで来るよう声をかけてきた。

どうやら彼女は湯船に浸かりながら酒も口にしていたらしく、2人が対面した時には既に彼女はべろんべろんに酔い始めていた。

何故はやてが混浴風呂にいたのかまではわからないが、もし自分の意志で混浴に来たというのなら、自分達が裸を見ても罰は当たらない。

そんな考えに至ってから、男達は視線を逸らすどころか、はやての裸をじっくり眺めるようになった。

真っ白な肌、細くしなやかな腕、程よい膨らみの乳房、より引き締まった腰、ムチツとした太もも。

女性との深い付き合いなど全く経験がない2人にとって、はやての体は実に美しく、実にエッチだった。酒で酔っているからか、はやても彼等に裸を見られて恥ずかしがる様子は見せず、それどころか逆にもつと2人に見せつけてきた。

『ん〜? ……なんか大きくなつとるねえ〜……?』

『うつ……』

美人の裸を見てしまった以上、男達の肉棒が大きく反り立ってしまったのは必然だった。それに気付いたはやては2人の肉棒をジーツと見つめた後、悪戯っ子のような笑みを浮かべながら2人の耳元でこう囁いた。

『なんか苦しそうやなあ……なあ2人共』

『な、何ですか……?』

『私の体で……発散しちゃおう?』

色っぽい声で囁いて来たはやてに、男達はもう我慢の限界だった。そこから2人は彼女に肉棒を抜いて貰い、時には2人がはやての体を犯し、それを繰り返している内に、こうして現在に至ったのである。

「ちゅ、ぴちや、ちゅる……!!」

「ん、ああ♡ 2人共、赤ちゃんみたいやなあ……フフフ♡」

その後、今度は男達がはやてを岩に座らせ、左右から彼女の乳房に舌を這わせている。フェラチオやパイズリ、クンニなどの行為を楽しむ中で彼女も興奮したのか、小さかった乳首は固く勃起し、それを舌で舐めている男達にコリコリとした感触を味わわせていた。

(ああ、すげえ、夢みてえだ……八神さんの生おっぱいを吸えるなんて……!!)

(八神さんの乳首、めちやくちや美味え……もつと舐めていたい……!!)

男達は感動していた。かつて機動六課を率いる部隊長としてJS事件を解決に導き、六課解散後も様々な事活躍をしているあの八神はやてと、こうして性行為を行っているのだ。この場にはない他の同僚達に自慢してやりたいレベルだと思いつつながら、2人はまるで母乳を求めめるかのようにはやての乳首をひたすら吸い続ける。

「ん、ふう♡ はあ……2人共、また大きくなってきたなあ……♡」

はやての乳首を吸って舐めている内に、2人の肉棒は再び勃起し始めていた。それを見たはやては、まるで獲物を見つけた獣のような目つきでジュルリと舌舐めずりをし、自身の乳首を吸っていた2人を引き離してから岩壁に両手を付け、自身の丸い尻を2人に向ける。

「なあ2人共……私、もう我慢できないんよ」

「ツ……!!」

2人に向けられたはやての秘所は、今も愛液がとろりと垂れ落ちている。男達が顔を赤くしながらそれをマジマジと凝視する中、はやては自身の尻を左右にいやらしく振りながら告げる。

「遠慮なくてええんよ……? その大きなチ○ポで、私をいっぱい犯してえな……♡」

熱い吐息と共にそう告げるはやてに、男達の理性はとうの昔に吹き飛んでいた。まずは1人目がはやての向ける尻に近付き、大きく勃起した肉棒の亀頭をはやての秘所に押し当てた後、彼女の腰を掴んで一気に引き寄せる。

「ん……ああっ!?!♡」

「お、おお……これ、すごっ……!!」

肉棒をズブリと挿入され、はやての体がビクンと大きく跳ねる。挿入した男もはやての膣内の締め具合に驚き、同時にあまりの気持ち良さに体が震えてしまっていた。

「ああ、す、凄い、八神さんの膣内……!!」

「んあ、ああ、あ、良い……奥に、当たってるう……!!♡」

今回が初めてのセックスになる男は、女性の膣内がこんなに気持ち良い物だと思わなかったのか、圧倒的な快感に酔い痴れていた。はやても固い肉棒を膣内の奥深くまで挿入され、先端の亀頭が子宮口をコツコツと突つつくように押し当てられるたびに何度も全身を震わせていた。

「ああ、ヤバッ……もう、出ちまう……!!」

「んはあ、ああ♡ え、ええよ……んんっ♡ 中に、中に出してえ……

あん♡」

膣内に挿入する快感を初めて味わった男は、射精を我慢する余裕など全くなかった。男がはやての腰を掴んだままピストンをどんどん速めていく中、はやても自身の膣内に出して構わないとアツサリ許可を出した。本人から許可も得られた以上、男はもう自重などしなかった。

「ああ、ああ出る、八神さんの膣内ナカに……ああイ、イクウ!!」

あの八神はやてに膣内射精できる。そう思考しただけで男はアツサリ我慢の限界に到達し、はやての膣内で射精が始まった。膣内の奥深くへと精液がドクンドクンと注がれ、子宮の内部まで大量に流れ込んでいく。

「あ、ああ、出てるう♡ 中に熱いの、いっぱい……んは、ああっ……♡」

子宮口に龟头をグリグリ押し当てられながら射精される中、はやては下腹部に溜まっていく熱い精液の感触に全身を何度も痙攣させ、あまりの快感に歓喜の表情を浮かべていた。

(や、やった……あの八神さんとセックスできた……八神さんのオ○ンコに、種付けできた……!!)

八神はやてのエッチで美しい体を、存分に犯す事ができた。

彼女の子宮に、自身の子種を植え付けてやった。

その喜びを噛み締めながら、男は挿入したまましばらくの間、彼女の膣内で余韻を楽しんだ。それから少しした後、男がようやく肉棒を引き抜き、はやてはその場にペタリと座り込む。

「ん……熱いの、溜まってるなあ……♡」

尻餅をついたはやては自ら股を開き、秘所から垂れて来る精液を見ながら微笑む。するとそこに、2人のセックスが終わるのを待っていたもう1人の男が、次は自分の肉棒を挿入しようとはやてに近付いて来た。

「や、八神さん……お、俺も……!」

「ん、ええよ……遠慮せんと、こっちおいでえな♡」

はやては指先で自身の秘所をクパアと開き、精液が未だ垂れて来るそこに彼の肉棒を招き入れる。男は早く挿入したいと思いつつながら彼女に近付き、割れ目に龟头を押しつけてから一気にズブリと挿し込んだ。

「んんっ!!♡ はあ、ああっ……また、固いの入って来たあ♡」

「お、ああ……すげえ……八神さんのオ○ンコ、すげえ気持ち良い……!!」

M字開脚の体勢で挿入されたはやてが背中を大きく反り上げ、挿入した男ははやての膣内の感触に歓喜しながらピストンを開始する。彼女の膣内を肉棒がゴリゴリ刺激している間、男ははやての乳房を揉みしだきながら自身の顔を近付け、はやてと唇を合わせた。

「ん、ちゆう、あむ……!!♡」

舌と舌が交わり、互いの唾液を交換しながら下半身を繋げ合う2人。そして唇を離すと、舌と舌の間を唾液による銀色の橋が一瞬だけ出来上がり、それが下へと落ち去っていく。

「や、八神さん、俺また……!!」

「んぶ!? ん、むう、ちゆう……ツ!!♡」

すると、先程はやてに膣内射精したばかりの男が彼女の頭を掴み、再び勃起した肉棒を彼女の口の中へと突っ込んで来た。いきなり口に突っ込まれたはやては一瞬だけ驚くも、すぐに口内で舌を淫らに動かし、頬張った肉棒を巧みに刺激し始める。

「あ、ああ、出そうだ……!!」

それからしばらくの間、1人がはやての口に、1人がはやての膣内に肉棒を挿入した状態で行為は続いた。すると膣内に挿入していた男はどうとう我慢できなくなってきたのか、はやてを押し倒してから彼女の両手首を掴み、彼女の膣内で射精を決め込もうとする。

「ああ、八神さん、八神さん、中に出しますね……ああ、で、出る!!」  
「んん、むううううううう……ツ!!♡」

肉棒を奥深くまで突き入れた瞬間、ブルブル震えていた亀頭が精液を放射し、はやての子宮に向かって精液をまき散らし始めた。自身の子宮内に再び精液が注がれたのを感じたはやては全身に電流が走るかのような快感に襲われ、それと同時にはやてにフェラチオして貰っていた男も限界に到達した。

「や、八神さん、また出る……うっ!!」

男がはやての頭を掴んで引き寄せ、彼女の口内にも再び精液が発射される。無理やり口内に発射されたにも関わらず、はやてはそれを拒絶する事はなく、むしろ待ち望んでいたかのように精液をゴクゴクと飲み干す勢いで受け入れていく。

「ん、ちゆる……ぷはあ」

精液を飲み終えたはやてが肉棒から口を離し、はやての膣内に挿入していた男も射精を終えて肉棒を引き抜く。彼女の口周りには僅かに精液が付着しており、彼女の秘所からは溢れた精液がゴポリと流れ出ていた。

「はあ、はあ……や、八神さん……!」

「す、すみません、俺達……!」

彼女を犯し続けた事でいくらか冷静になったのか、ここに来て男達は、はやてを好き勝手に犯してしまった事を後悔した。はやての方から了承したとはいえ、彼女は酒で酔っ払っていた事で思考力が低下しているのだ。本来ならこのような事は許されるはずがない。

「ん……ええんよ、2人共……♡」

しかし、はやては2人を咎める事はしなかった。セックスを終えたばかりでまだ体中が若干ピクピク震えているものの、はやては何とか自身の体を起こしてから2人と向き合った。

「どうやった？ 酒に酔ってべろんべろんな20代ピッチピチの女に誘われて、思いのままにセックスする事ができた気分は？」

「へ?」

はやての台詞を聞いて、男達は思わず顔をガバツと上げた。酒に酔って思考力が低下していたはずの彼女が、このような言い方をするのはおかしい。という事は……

「も、もしかして八神さん、最初から……」

「うん、そういう事なんよ♪」

「……ええええええええええええつ!!」

そう、はやては最初から酔っ払ってなどいなかった。酒に酔っ払っているように見せていたのは全て演技であり、男達はそれに見事騙されていたのだ。

「いやあく、ここまで気持ちの良いエッチができるとは思わなかったよ♪ ほんとにありがとなあ、2人共」

「や、八神さん……何で、俺達と……?」

「うん、それなんやけどね」

それなら、何故酔っ払ったフリをしてまで自分達とセックスしてくれたのか。男達はそれがわからなかったが、はやてはその理由を2人に語った。

話によると、はやては時空管理局海上司令としての仕事が忙しく、時には自分より上の立場の人間から嫌味を言われたりする事もしょっちゅうだという。

露天風呂に通うようになったのも、そういったストレスから解放されたいという思いから来ているらしい。

そして彼女はある時、ある知人の性事情を知った。

つい最近囑託魔導師になった紫髪ルージュヘアの少女と、ナカジマ家の一員となった茶髪デイエチの少女の2人。彼女達がとある青年雄一と「アハーン♡」な事や「ウフーン♡」な事をしてしていると知り、はやてはいつからか男女の性行為に興味を持ち始めた。

そしてこの日、彼女もまたそういった興味本位で自ら混浴風呂に入り、熱くも心地のいい風呂を満喫していたところに彼等がやって来た……という訳である。

「そ、そういう事だったんですか……」

「ほんとにごめんなあ、2人共。自分の興味の為に2人を利用する形になっちゃって」

「い、いえいえ、大丈夫です!! 俺達は別に気にしてませんよ!!」

「そ、そうそう!! 逆に俺等の方こそ、なんかいろんな意味で申し訳ないって言うか……!!」

「もお、だから私は怒ってないよ? それに……2人にはいっぱい、気持ち良くして貰ったしなあ……♡」

はやては今も精液が垂れて来ている自身の秘所に指を入れ、指先に付着した精液を男達に見せつけてからそれを舌先でペロリと舐め取る。その一連の動作を見た男達は自分の肉棒が再び固くなっていくのを感じ、それに気付いたはやてはニヤニヤ笑みを浮かべる。

「あれれえ、また大きくなつとるねえ? そんなに私とセックスしたいん?」

「うっ……」

「……フフ、ええよ」

はやては座っている状態から再び股を開き、精液にまみれた秘所を2人に見せびらかす。

「2人共、もつと気持ち良くなるか……♡」

艶めかしい声で告げられる、はやてからの誘い。

それを強く断れるほどの精神力を、あいにく男達は持ち合わせてはいなかった。

「あ、ああ!! ああん!! もつと、もつと突いてえ!!♡」

「く、ああっ……すっげえ締まる……!!」

その後。これ以上はのぼせてしまう可能性があった為、3人は一度風呂から上がる事にした。そしてはやては自分が泊まっている客室まで男達を案内し、そこで気持ちの良いセックスを再開していた。どうやら今回泊まっているのははやてのみで、ヴォルケンリッター守護騎士の面々は今も仕事中で不在らしい。

「おおっ……八神さんのおっぱい、めっちゃ柔らかけえ……!!」

「あ、んん……フフ、そうやろ? おっぱいも好きにしてええんよお♡」

現在、畳の上に敷いた布団の上にははやてが仰向けになり、1人は先程と同じように膣内に挿入し、もう1人ははやての乳房を使ってパイズリをさせて貰っていた。はやては膣内を肉棒を蹂躪される快感に喘ぎ声を漏らしつつ、自身の乳房で肉棒を扱っている男を微笑ましい表情で見ている。

「う、ああ、また出る……八神さん、八神さあん!!」

「ん、はああ!!♡ また、中にい……♡」

膣内に挿入していた男がまた射精し、はやての膣内に精液を放出する。はやては子宮に精液を注ぎ込まれる感覚に身を震わせ、その数秒後にパイズリをしていた男も限界に達した。

「ああ、八神さんのおっぱいで……イクツ!!」

「んう……!!♡」

パイズリしていた男は、はやての乳房の間に亀頭を挟んだまま精液を放出。はやての乳房が熱く粘っこい精液で穢されていくが、はやてはそれすらも気にしておらず、むしろ彼が自分の乳房で気持ち良くなってくれた事を嬉しく感じていた。

「ああ、八神さん、次また良いですか……!?!」

「ええってええって、好きなように私を犯してえな♡」

その後、今度は部屋の天井に小さな魔法陣を出現させ、そこから伸びた鎖状のバインドではやての両腕を拘束。その状態から1人は騎乗位で挿入し、もう1人ははやての背後から彼女の乳房を何度も揉みしだいた。

「ああ、んん、はあんっ!!♡ ええ、ええよ、もっともっと激しくしてえ

……!!♡」

「うお、すつご……まだこんなに締まりが……!!」

「ああ、おっぱい、八神さんのおっぱい……ちゅ、ぴちや、れろれろ……!!」

下から肉棒で突き上げられ、乳房を揉みしだかれながら乳首を何度も吸われ、はやては風呂で行為をしていた時よりも蕩けた表情を浮かべていた。それは彼女を犯している男達も同じで、彼女が自分達とセックスしてくれた理由を知ってからは、先程よりも更に興奮していた。

「あ、ああ、またイク……八神さん、中に出しますからね……!! 子供がデキたら、俺と結婚して下さい……!!」

「あ、ああっ……ええよ、出して……赤ちゃん、デキてもええからあ……!!♡」

「ぐっ……出る!!」

「んあああああああつ!!」

騎乗位で犯していた男ははやての腰をがっちり掴み、またしても彼女の子宮に精液を流し込む。この子宮に注ぎ込まれた精子が卵子に到達し、やがて自分のお腹に新たな命が宿るかもしれない……そう考えた途端、はやては下半身がキウンと疼き、それにより肉棒を扱っていた膣内の締まりが更に強まった。

「お、ああ、また締まりが……ツ!!」

「ああ、はああああ……!!」

肉棒が引き抜かれ、秘所からまた多くの精液が垂れ落ちる。そこに間髪入れず、彼女の乳房を吸っていた男が再び彼女の背後に回り、彼女の尻を掴んで肉棒を挿入した。

「ひぎい!」

「八神さん……俺、八神さんこうしてセックスできて、マジで幸せです……!!」

「あ、んん、はあんっ!!」

男はバックの体勢ではやてを犯し、後ろから突かれるときにはやての乳房がプルンプルンと上下に揺れる。

「結婚とまでいなくても構いません……代わりに、俺をあなたの愛人にして下さい……!! 俺の子ども、一緒に産んで下さい……!!」

「あ、ああつ……ああああああん!!」

バックで挿入した男も射精に至り、先程までと変わらない量の精液をはやての子宮に注ぎ込む。あまりの気持ち良さに、はやてはひたすら喘ぎ声を上げる事しかできなかったが、内心では歓喜の感情に満ちていた。

（ああ、いっぱい出されてる……私、ここで孕まされようとしとる……!!）

男達は本気で自身を孕ませようとしている。実際、これだけ精液を子宮に注ぎ込まれれば、2人の子供を妊娠してしまってもおかしくないだろう。そして将来、自身のお腹はどんどん膨らんでいき、やがて乳房からは母乳も出るようになる事だろう。

(ああ、それ……ええなあ……♡)

もはや、拒む理由などなかった。はやての心は既に、2人の男に愛される事を受け入れていた。彼等の子供を産む事を望むようになっていた。

「んん……ええよ、2人共……これからも一緒に、いっぱい赤ちゃん作ろうな……♡」

「……八神さあん!!」

「ひゃん!?♡」

その後も、男達はひたすらはやてを犯し続けた。対面座位の体勢で下から肉棒で突き上げたり、立ち上がってから片足だけ持ち上げた状態でピストンしたり、男達は色々な体勢ではやてを犯し、彼女の子宮に自分達の子種を何度も植え付けた。

「八神さん、あなたがいけないんですからね……そんな色っぽい声で誘惑するから、こうやって俺達に何度も種付けされるんですよ……!!」

「もう逃がしませんからね……八神さん、あなたはもう俺達の女だ!! いつの日か必ず、俺達の精子で孕ませますからね……俺達の子供をいっぱい産んで貰いますからね!!」

「ん、ああん!!♡ 孕ませて……2人の精子で、私を妊娠させてえっ!!!♡」

「く、ああ、出る……出るう!!!」

「孕んで八神さん!! 俺達の子供を孕めええええええええっ!!!」

「あああああああああああああつ!!!♡」

その日、男達は丸1日使ってはやてとセックスし続けた。

八神はやてという最高の女を、確実に孕ませる為に。

「ぐ、おおっ……搾り取られる……ッ!!」

「ああ、絶対産ませてやる……俺達の子供を、たくさん……ッ!!」

「あ、あん……嬉しい……♡」

はやてがいつの日か、自分達の子供を産んでくれる日が来る事を願いながら。

男達は彼女の美しい肢体を、これでもかと言わんばかりに穢し続け

るのだった。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
……?  
?

## エイミイ IF (☆)

俺の名はウイリアム・ハーバー。知人からはウイルって呼ばれている。

俺は時空管理局に勤務していて、かつては巡行艦アースラに乗っていた時期もあった。

そんな俺だが、今日は物凄くラッキーな一日を過ごせそうだ。

何故なら俺……いや、俺達の目の前には……

「へへへ、もうすっかり眠っちゃってるな……!」

「聞こえてますかあ? エイミイちゃん?」

「う、ううん……ふみゆう……」

かつて俺達と同じくアースラに乗っていた同僚の1人——エイミイ・ハラオウンという名のご馳走が存在しているのだから。

エイミイ・ハラオウンはかつて、名字は“ハラオウン”ではなく“リミアツタ”だった。

じゃあ何故今はハラオウンなのかと言うと、答えは簡単。ハラオウン姓のある男性と結婚したからだ。

その男性の名がクロノ・ハラオウン。同じくアースラに乗っていた同僚にして、かつての艦長リンディ・ハラオウンの実の息子だ。

彼とエイミイちゃんは学生時代からの友人らしく、傍から見れば2人はまるで本当の兄弟のようだった。そんな彼等がいつしか結婚して夫婦となり、今では子供が2人もいるらしい。

最初に結婚の話を知った時は、もちろん俺も2人を祝福した。

だが内心、その結婚を素直に喜ばずにいる自分もいた。

何故なら、俺もアースラにいた頃からエイミーちゃんの事が好きだったからだ。

そんな気持ちだったのは、俺の友人であるビスタ、ダニエルも同じだったらしい。彼等もエイミーちゃんの事が好きだったが、彼女がクロノと結婚した事で大人しく身を引いていた。

だが俺達は、今でも彼女の事を諦められずにいた。

彼女を俺の物にしたい。

彼女のエロい体を好き勝手してやりたい。

そんな気持ちを抑え切れなくなった俺達は、遂に彼女をレイプする計画を立てる事にした。

ダニエルがどこからか入手してきた睡眠薬をエイミーちゃんに飲ませ、彼女が深い眠りにについている間に3人でレイプしてしまおうという単純な計画だ。

その為にも、まずは俺達3人が休暇を使って地球にやって来たという体でエイミーちゃんに接触し、久しぶりに会えた記念という名目で彼女を飲みに誘う。

もちろん女性がエイミーちゃん1人じゃ怪しまれるので、同じアースラの出身である女性局員のカーリーナちゃんを連れて行く。女性が自分だけじゃないとわかっていなくても、多少はエイミーちゃんの警戒心も薄れるはずだ。

ちなみにカーリーナちゃんは、俺達の計画を知った上で協力してくれているグルだ。何でも、彼女の場合は密かにクロノの奴を異性として狙っていたらしく、彼がエイミーちゃんと結婚した事でエイミーちゃんの事を妬んでいた。要は逆恨みって奴だが、俺達にとっては都合が良いので、ここは素直にカーリーナちゃんにも協力して貰う事にした。んでもって、まずはエイミーちゃんを飲みに誘う事に成功。懐かしの同僚に会えた事でエイミーちゃんもテンションが上がっていたのか、これでもかと言わんばかりにビールをグビグビ飲み続け、気付いた時にはベロンベロンに酔っ払ってしまっていた。

……あれ、これ睡眠薬なくても普通に行けるんじゃないか？

そう思えてしまうくらい泥酔しているエイミーちゃんだったが、万が一の可能性も考慮し、エイミーちゃんがお摘みの枝豆に気を取られている隙に、彼女が飲もうとしていたビールにダニエルが睡眠薬を素早く投入。結果、元々凄い酔っ払っているのもあって、エイミーちゃんはアツサリと深い眠りに落ちて行つた。

そこからはもうあつという間だった。泥酔したエイミーちゃんを俺達が運んでいる間に、エイミーちゃんの自宅にはカーリーナちゃん「帰りは遅くなる」とすぐさま連絡。電話して来たのが女性なのもあってか、エイミーちゃんと同じ家に住んでいるというアルフちゃんとは、カーリーナちゃんの言葉をアツサリ信じたらしい。

その後はこの時に備えて酒を一切飲まなかったビスタがエイミーちゃんの車を運転し、俺達が泊まる予定であるホテルまで直行。カーリーナちゃんは「ビデオで撮った分はアタシにも送ってね〜♪」とだけ言って、部屋に運び終えた後はそのまま普通に帰ってしまった。

だがまあ良い。彼女のおかげで準備は整つた。

後は俺達3人で、目の前にある極上<sup>エイミーちゃん</sup>の獲物を美味しく頂いてしまうだけだ。

深い眠りについていいる無抵抗の人妻を犯す。最高のシチュエーションだ。

「クロノの奴もひついでえよなあ。こんな美人な嫁さんと可愛い子供達を置いて、自分だけミッドで1人働いてるんだからよ」

「エイミーちゃんもきつと、クロノの奴とセックスできなくて相当溜まってるはずだぜ」

「ここは親切な俺達が、エイミーちゃんの溜まった性欲を発散させてあげようじゃないか」

そうして、現在に至る訳である。部屋の大きなベッドに寝かされたエイミーちゃんは今、着ていた服を俺達の手で順番に脱がされていき、ピンク色のブラジャーとショーツのみの姿にされてしまっている。

「やっぱり何度見てもデツカいなあ、エイミーちゃんのおっぱいは」

「エイミイちゃんのおっぱい、超柔らか見え……！」

「ああ、エイミイちゃんの太ももスツベスベだあ……！」

アースラにいた頃からエイミイちゃんのおっぱいはそれなりにデカかったが、今はそれ以上だ。やっぱり結婚して子供を産んだらデカくなるもんなんだなあと思いつながら、俺とダニエルでエイミイちゃんの柔らかなおっぱいをブラジャー越しに揉みしだく。ビスタはエイミイちゃんの太ももに顔を近付け、その真っ白な太ももに頬をスリスリさせている。

「それじゃ、エイミイちゃんの乳首を拝見……つと」

「「おお……！」」

やべえ、思ってた以上だった。デカイ山の上に薄いピンク色の突起がちよんと突き出ているのを見ていて、俺の股間がどどん勃起していくのを感じた。試しに俺が指先で軽く突つついてみたら、エイミイちゃんの体がほんの僅かにピクンと反応した。

「ん、うう……」

「おお、やっぱり寝てても感じるんだな」

「エイミイちゃん♡ 今からエイミイちゃんのおっぱい、俺達がたくさん弄つちやうね♡」

ダニエルがビデオカメラでの撮影を担当している間、俺とビスタでエイミイちゃんのおっぱいを何度も揉みしだくと、エイミイちゃんの口からも「あつ……」とか「んん……」とか小さな声が漏れ出て来る。それを聞くだけでも楽しくなって来た俺達は、小さな乳首を指先でクリクリ動かししたり、親指と人差し指で軽く摘まんでみたり、更には舌先で軽く舐めてみたりした。

「ああ、おっぱい、エイミイちゃんのおっぱい……！」

「おいおい、がつつき過ぎだろ」

ビスタの舌が乳首をピチャピチャ舐め回し、唾液まみれになった乳首を唇でパクツと啜え、チュウチュウ音を立てて吸いついている。その様子がダニエルの構えたビデオカメラに撮られている中、エイミイちゃんの口から漏れ出す声も少しずつ色気が増していく。

「ん……あ、う……ッ」

「乳首が勃起してんな。エイミーちゃんも気持ち良いんだね……♡」  
「チュパ、チュパ、レロ、ピチャ……!」

これがエイミーちゃんのおっぱい。  
赤ちゃんと母乳を飲ませたおっぱい。

そう考えた瞬間から俺も我慢できなくなり、ビスタが吸いついてい  
る方とは逆のおっぱいを揉みながら、先端の乳首を何度も舐めしやぶ  
り、母乳を求めるかのようにひたすら吸いまくった。

ああ、これがエイミーちゃんのおっぱい……!

10年前から、ずっとこうしてやりたかったんだ……!

舐めて吸っている内に、小さかった乳首が勃起して、徐々に固く  
なっていくのを舌先で感じた。俺の舌で気持ち良くなってくれてい  
るんだとわかって、嬉しさのあまり乳首を軽く甘噛みしてあげた。エ  
イミーちゃんの体がちよつとだけベッドから跳ね上がった。

「おいおい、おっぱいも良いけどよ。そろそろ下の方も見てやろうぜ」  
「チュパッ……ああ、そうだったな」

おっぱいに夢中になり過ぎて、下半身の方はすっかり頭から抜け落  
ちていた。エイミーちゃんのおっぱいに跡が残るように少しだけ強  
めにキスしてあげた後、俺達はエイミーちゃんの下半身の方へと注目  
した。ダニエルがカメラで映す中、ショーツの股間部分が僅かに濡れ  
ているのがわかった。

「お、濡れてるねえ〜」

「エイミーちゃん、もっと気持ち良くしてあげるからねえ……!」

ショーツの濡れている股間部分をビスタが人差し指で軽くクニク  
ニと触れると、エイミーちゃんが体を振るように反応する。ずっとニ  
ヤヤが止まらない俺達は、彼女のショーツに指を引っ掛けてから  
ゆっくり下げていき、太ももからショーツを完全に脱がしてから俺と  
ビスタでエイミーちゃんの両足を左右に開かせた。

「おお、すげえ……!」

「これが、エイミーちゃんのお○ンコ……!」

「ダニエル、ちゃんと撮ってるか?」

「おう、バツチリだぜ」

俺が割れ目を左右にクパアと開かせ、ダニエルがすっかり撮影する中、開かれたエイミイちゃんのおそこはヒクヒク動いているような気がした。指で軽く触ってみると、愛液らしきものがニチャリと指に付いた。舐めてみたら何だか美味しく感じた。

「なあ、おっぱいはお前等がやったんだからよ。次は俺にやらせてくれよ」

「はいはい、わかってるっての」

ダニエルから受け取ったカメラで俺が代わりに撮影する中、ダニエルがエイミイちゃんの股間に顔を近付け、割れ目を左右に開いてから舌先でペロリとそこを舐めた。エイミイちゃんがビクツと反応するのも無視し、ダニエルの舌がエイミイちゃんのおそこをピチャピチャ音を立てながら何度も舐め回し、ちよんと突き出ているクリトリスを突つつくように弄り続けた。

「んん、ああ、美味い……美味いよエイミイちゃん……!」

どれだけ舐めても愛液は止まらず溢れ出て来ており、ダニエルは唇を引っ付けてからジュルルと啜るように愛液を摂取していく。深い眠りにについているエイミイちゃんの口がハアハア言っており、それに気付いたのか、ダニエルがエイミイちゃんのおそこに人差し指をゆっくり挿し込み、ナカを弄りながらひたすら舐め続けた。ダニエルの口の中では今、エイミイちゃんの美味しい味が広がっている事だろう。

「ジュル、ズチュ、ピチャ、レロ……ふう、たっぷり舐めてやったぜ」

「うっは、すげえ唾液まみれ。お前も俺の事言えた義理ねえじゃん」

「うっせえ。エイミイちゃんのマ○コがエロいのが悪いんだよ」

「喧嘩してんじやねえよお前等。そろそろ……メインディッシュと行こうぜ」

俺達は改めてゴクリと喉を鳴らした。目の前に広がっているのは、仰向けに寝かされたまま股を大きく開いているエイミイちゃんの恥ずかしい姿。俺とビスタに舐めしゃぶられたおっぱい、ダニエルに舐めしゃぶられたマ○コはこれでもかと言わんばかりに濡れており、より煽情的な光景だった。

「ど、どうする?」

「ここはジャンケンで決めるか?」

「それで良いんじゃない? 最初はグー、ジャンケン……」

ジャンケンの結果、1番目がビスタ、2番目が俺、3番目がダニエルという順番になった。最初の1番手を勝ち取れなかったのは個人的に残念だったが、どの道これから3人で順番に輪姦まわしていく以上、そんなのは些細な事だった。

「よし、じゃあ今から挿れるぜ。しつかり撮っとけよ」

「よっしゃ、俺に任せとけ」

ビスタがエイミーちゃんの股の間に入り、勃起したチ○コをエイミーちゃんのおそこに持っていく。先っぽが割れ目に押し当てられてから、ゆっくり割れ目を抉じ開けるように奥深くへと進んでいった。

「ぐ、おおおつ……や、やべえ、めっちゃ締まる……ツ!!」

「マジで? そんなにやべえの?」

「ああ、こりや名器だわ。気を抜いたらすぐ出ちまうわこれ」

「マジでかく。やべえ、俺も早く挿れてえな」

どうやらエイミーちゃんのマ○コは締まり具合が最高らしい。ビスタがエイミーちゃんの膝を両手で押さえながら腰を前後に振るたびに、エイミーちゃんの体がユサユサと動き、そのデカいおっぱいがプルンプルンと激しく揺れている。まさか生きている間にこんな良い物が見れるとは思ってもみなかった。

「お、おお、やべえ、すっげえ気持ち良い……!」

「ん、んう……あ、あつ……!」

「ああ、気持ち良いかいエイミーちゃん……もつと、もつと気持ち良くしてやるからなあ……!」

まさかエイミーちゃんも、寝てる間に自分のマ○コに夫以外のチ○ポを突っ込まれてるなんて夢にも思っていないだろう。しかもこれからビスタだけじゃなく、俺やダニエルのチ○ポも順番に挿れられていく羽目になるんだからなあ……あ、やべ。想像しただけで俺のチ○ポも勃起してヤバい事になってきた。畜生、俺も早く挿れてやりてえ。

「ああ良い、最高だよエイミーちゃん……あ、ヤベえ、そろそろイキそう……ッ！」

お、ビスタもそろそろ達しそうなようだ。腰を振るスピードがちよつとずつ速くなっていき、エイミーちゃんのおっぱいの谷間に顔を埋めながら強く抱き着き始めた。

「ああ、もうすぐ、もうすぐだよエイミーちゃん……よおし、やるぞお……エイミーちゃんのオマ○コに、いっぱい種付けしちゃうぞお……!!」

「ん、ふっ……んう……ッ……」

もちろん、ビスタはゴムなんて付けちゃいないし、俺達もゴムなんて使うつもりはない。そもそもゴムどころか、アフターピルなんて上等な代物すら俺達は用意しちやいねえ。でもそんなのは知った事じゃないと言わんばかりに、ビスタの奴はエイミーちゃんに抱き着いたまま腰を振りまくって、今にも射精する寸前だ。もはや誰にもそれを止められはしない。

「ああ出る、出るよ、中に出すよエイミーちゃん……ああ、イ、イク、イクウツ!!」

「ん、あ、あ……ッ」

ビスタが腰を強く打ちつけた瞬間、ビスタが何度も体を震わせながら達したらしい。今頃エイミーちゃんの膣内には、ビスタが出したザーメンが並々と注がれていつている事だろう。それが理由なのか、同じく絶頂したようであるエイミーちゃんも全身がビクビク震えていた。

「あ、あああっ……すっげえ……超気持ち良い……ッ!!」

しばらくしてようやくビスタのチ○ポが引き抜かれた後、俺達は3人同時にエイミーちゃんのオ○ンコに顔を近付けてみた。果たして、溢れた精液は外に流れて来るのだろうか……お、そう言っただら出て来た出て来た。

「うお、垂れて来たぞ……やべえ、めっちゃエロいわこれ」

「いやいや、それにしても出し過ぎだろ。エイミーちゃんのマ○コの中ザーメンまみれじゃん。次に挿れる奴の事も考えろよな」

「いやあく悪い悪い、気持ち良過ぎていっぱい出しちまったわ」

やべえ。エイミーちゃんのパツクリ開いたオ○ンコから、白いザーメンがとろりとゆっくり垂れて来ているのがあまりにもエロ過ぎる。もちろんダニエルはこの光景もしっかりビデオに収めていたが、それとは別に俺も自分の端末でこの光景を写真に収めておく事にした。これは一生もののお宝映像になるな。

「うし、じゃあ次は俺の番だな」

さて、いよいよ俺が挿入する番が回ってきた。俺の目の前には、仰向けに寝たまま開いた股からザーメンを垂れ流しているエイミーちゃんの姿がある。勃起し過ぎてバッキバキになっている俺のチ○ポの先っぽを、エイミーちゃんのオ○ンコの割れ目に食い込ませてから、ゆっくり中に挿入して……ッ!?

「う、おうっ……!?!」

あ、危ねえ、挿れると同時に出しちゃうところだった。おいおい何だこのオマ○コは。既にビスタに1回中出しされた後だったのに、締まり具合が半端なさ過ぎる。マジで最高の名器じゃねえかエイミーちゃん。クロノの奴が子供を2人も孕ませたのもわかる気がする。

「ふう……何とか全部入ったぜ……!?!」

ビスタが言っていた通りだ。これは少しでも気を抜くとすぐに射精してしまう。しかし、流石に挿入してすぐ射精してしまうのは男として色々と恥ずかし過ぎる。だから俺は出そうになるのを必死に我慢しながら、チ○ポを奥の方へと少しずつ挿し込んでやった。

「あ、んう……ふあ、あ……っ」

「ッ……ああ、夢みたいだ……!?!」

俺は今、あのエイミーちゃんをレイプしている。

エイミーちゃんのオ○ンコに、俺のチ○ポが入っている。

そう考えただけで今にも射精してしまいそうだ。それを必死に我慢しつつ、俺はゆっくり腰を動かしてエイミーちゃんのオ○ンコの中を味わっていく。腰を動かすたびにズチュツズチュツといやらしい音が鳴り響いて、それが俺の耳には物凄く心地の良い音として聞こえて来る。

(ああ、もつと、もつとだ……もつとエイミーちゃんの膣内<sup>ナカ</sup>を味わいたい……!!)

俺のチ○ポをもつと奥深くまで挿し込んでやりたい。

できる事なら、子宮の真ん前までチ○ポを届かせてから射精してやりたい。

俺のザーメンを一滴残さず、エイミーちゃんの子宮に注ぎ込み、俺の子供を孕ませてやりたい。

あ、ヤバい。我慢しようと思っても、そんな事ばかり考えてしまつて射精感がどんどん込み上がつて来た。どうせ時間はたっぷりあるのだ。これはもう無理に我慢する必要もないだろう。

「ああ、もう我慢できねえ……エイミーちゃん、エイミーちゃん……!!」

その考えに至つてから、俺はもう一切自重するつもりはなかった。エイミーちゃんの生マ○コにたっぷりと射精してやる。子宮の中を俺のザーメンで満タンにしてやる。3人目の子供を確実に孕ませてやる。そんな変態な事ばかり考えながら、俺は何度も腰を振り続けた。

「ああ、エイミーちゃん、俺もいっぱい出すからな……俺の、俺の子供産んでくれよな……はあ、はあ、あつ出る、出る……ツ!!」

そうして俺は限界に達し、エイミーちゃんの膣内<sup>ナカ</sup>で射精してやったんだが……ヤバい、これはヤバい。エイミーちゃんの子宮が俺のチ○ポに吸いついて、ザーメンを徹底的に吸い出そうとして来る。俺のザーメンで受精して、俺の子供を授かろうとしている。

「ああっ……す、凄い……気持ち良い……!!」

正直、想像してた以上だった。好きな女に膣内射精するのが、こんなに気持ちの良い事だったなんて。俺はその事に物凄く驚いたと同時に、物凄く感動していた。俺が大好きなあおのエイミーちゃんの生マ○コに、たっぷり射精してやったのだ。まるでエイミーちゃんの全てを、俺が支配してやったかのような気分だった。

「はあ、はあ……ツ……す、凄かった」

「な、凄ええだろ? エイミーちゃんのオ○ンコ」

「うわ、また出て来やがったぞ」

ようやく射精が終わって、俺がゆっくりチ○ポを引き抜いていった後。エイミーちゃんのオ○ンコからはまた溢れたザーメンがとろりと流れ出て来ていた。いやホント、今まで自分で扱いた時こんなに出た事はないぞ。やっぱ自分で扱くのと、女の子の中で射精するのは全然違うんだな。改めて思い知った。

「ふう、やっと俺か。待ちくたびれたぜ」

「悪い悪い、だいぶ楽しんじまったわ」

今度はダニエルが挿入する番だ。再び俺がビデオを受け取って撮影する中、ダニエルも俺達と同じようにガチガチに勃起したチ○ポをエイミーちゃんのオ○ンコに押し当て、ググツと進めてから一気にズブリと挿し込んだ。その際にエイミーちゃんの体がまたビクンと反応したのを俺は見逃さなかった。

「ぐおっ………た、確かにこりや凄えな………!!」  
「だろ?」

ダニエルもまた、俺達と同じようにエイミーちゃんのオ○ンコの洗礼を受けたようだ。しかし俺達に比べると多少は余裕があるみたいで、ダニエルの奴はエイミーちゃんの体をゆっくり抱き起こし始めた。何をやる気だ?

「ビスタ、ちよいとバインド出せるか?」

「ん? 出せるっちゃ出せるが……ああ、なるほどな」  
「?」

俺はイマイチよくわからなかったが、ビスタはダニエルの言いたい事を何となく察したらしい。ビスタが天井に出現させた魔法陣からチューブ状のバインドが伸び、エイミーちゃんの両腕を縛り付けるように巻きつけてから上に高く吊り上げた……ああ、なるほど。騎乗位で犯ろうって訳か。

「おお、こりや良い眺めだなあ………!!」

ダニエルが仰向けに寝転がった状態から、エイミーちゃんのオ○ンコを下から突き上げるように腰を振り、それによってエイミーちゃんのおっぱいがまた激しく揺れている。ダニエルのチ○ポが入ったり

出たりを繰り返しているエイミーちゃんのお○ンコは今、愛液とザーメンが混ざった状態でジユプジユプ音を立てながら泡立っている。ダニエルの視点から見たら、それはもうさぞかし素晴らしい光景に映っている事だろうなあ……俺も後で騎乗位プレイでやってみようかな。

「ん、あ、あん……ッ」

「気持ち良さそうだねえ〜エイミーちゃん……今頃、一体どんな夢を見てるんだろうなあ……？」

「クロノの奴とセックスしてる夢だったりしてな」

「リアルではクロノと全くセックスできないどころか、赤の他人である俺達にレイプされてるもんなあ……あまりにエイミーちゃんが可哀想だから、俺達が存分に愛してやるよ」

ダニエルがエイミーちゃんの括れた腰を掴みながら何度も突き上げる中、ビスタが背後からエイミーちゃんのおっぱいを両手で揉みしだき、彼女のおっぱいがいやらしく形を変える。その様子も俺がビデオでバッチリ録画しているので、俺達が今後おかずに困る事はない。「く、うおっ……そろそろだな……クロノの奴には悪いが、俺もエイミーちゃんにたっぷり中出しさせて貰うぜ……!!」

「おう、いっぱい出して妊娠させてやれ」

「ああもちろんだ……エイミーちゃん、俺も中に出しちゃうからな……ああ、で、出る、出るぞ、エイミーちゃんの子宮に……うっ!!」

ダニエルも絶頂したらしい。エイミーちゃんの腰を掴んだままザーメンを注ぎ込んでいて、エイミーちゃんも絶頂した事で背中を大きく反り上げている。なんてエロい光景なんだ。

「う、あぁっ……はぁ……はぁ……エイミーちゃん……俺のザーメンもいっぱい、君の中に出してやったからなあ……赤の他人のザーメンを受け入れた君はもう、クロノの女じゃない……これからは俺達の女だからなあ……!!」

これで3人全員、エイミーちゃんのお○ンコへの膣内射精を完了した。エイミーちゃんの子宮は今、俺達が注ぎ込んでやったザーメンでいっぱいになっている。

俺達が存分に犯してやった。

彼女はもう俺達の物だ。

俺達の物なら、俺達が何をしようとする自由だ。

ダニエルのチ○ポが引き抜かれ、ゴポリとザーメンが垂れ落ちるエイミーちゃんのオ○ンコを見ていたら、さつき射精したばかりのチ○ポがいつの間にかまた勃起していた。それはビスタも同じなようで、ダニエルも出したばかりだというのに未だに萎えていない様子だった。

「よし、どうする……？」

「睡眠薬の効果は結構強めらしい。まだ目覚めなはずだ」

「……また犯っちゃうか」

「だな」

ここからはおかわりの時間だ。一度バインドを解除してからエイミーちゃんをうつ伏せにさせ、お尻だけ高く持ち上げてからビスタがバックで二度目の挿入にかかった。

「おおっ……まだ締まるなあ、エイミーちゃんのマ○コ……!!」

既に合計で3回も中出しされているというのに、エイミーちゃんのお○ンコはユルユルになるどころか今もなお程良い締め具合だった。おかげでビスタが二度目の絶頂に達するまでそう時間はかからず、ビスタは彼女の丸いお尻を両手で掴みながら腰を打ちつけ、再び膣内に射精した。

「また俺の番だな。ビスタ、撮影よろしく」

「あいよ」

今度はエイミーちゃんをベッドから降ろし、眠っている彼女の両足を頑張つて床に立たせてから、両腕を天井から伸びたバインドで縛り上げる。その状態からバックで彼女に挿入した俺は、エイミーちゃんのおっぱいが窓に押しつけられて形が歪む中、彼女の未だ変わらない締め具合に感激させられていた。

「ああっ……エイミーちゃん、外の景色が見えるかい？ 外からも俺達の姿が丸見えだよ……エイミーちゃんの裸も丸見えになつてるよ……!!」

ちなみに、俺達が今いる部屋はホテルの15階に位置している。おまけに外は既に真つ暗な夜、外からはとても俺達の様子など見えるはずもないのだが、それでも窓のカーテンを全開にしているのだ。もしエイミーちゃんの意識があつたら、凄く恥ずかしがっていたのである事は想像に難しくない。

「ああ、良いのかいエイミーちゃん？ エイミーちゃんの大きなおっぱいが……スベスベな太ももが……キツキツなオ○ンコが……エイミーちゃんの恥ずかしいところが、外の皆にも全部見られちゃってるよ……!! このまま俺に中出しされて、俺の子供を孕むところまで、しっかり見て貰おうねえ……!!」

「んあ、ああっ……んふ、ううん……!」

俺がエイミーちゃんの耳元でそう囁いた時。気のせいだろうか、彼女のオ○ンコがまた少しキュツと締まったような感じがした。そんなエイミーちゃんがエツチで可愛らしいと思えた俺は、再び彼女の膣内に射精してあげる事にした。

「く、ああっ……また、また中にいっぱい種付けしてやるからなあ……子供ができたら、ちゃんとクロノと一緒に育てるんだぞ……う、ふぐうっ!!」

限界はすぐに訪れた。俺は彼女のエロエロボディに抱き着きながら、彼女の膣奥までチ○ポを突っ込み、先端を子宮口に押しつけた状態で射精してやった。俺が射精するたびに、子宮口が俺のザーメンをゴクゴク飲んでくれているような感じがした俺は、あまりの愛しさにエイミーちゃんの下腹部を優しく撫でてやった。

「う、はあああああ……また、たっぷり中に出してやったから……しっかり孕んで、元気な子供産んでくれよ」

「よし、また交代だ」

俺が射精を終えた後は、またダニエルが挿入する番だ。先程は騎乗位で犯したからか、二度目は普通の正常位でエイミーちゃんを犯し始めた。既に俺達が何度も射精しているもんだから、エイミーちゃんのオ○ンコから溢れたザーメンが床やベッドのシーツを汚してしまっている。

「エイミイちゃんはもう子供が2人いるもんなあ……今更、兄妹が1人や2人増えたって一緒だよなあ……!!」

彼女が妊娠すれば、子供達やクロノの奴だつて大喜びするはずだ。なんとたつて家族が増えるんだからな。家族が増えて喜ばない奴はそうそういないだろう。そう、これも全てはクロノやエイミイちゃん達、ハラオウン一家を幸せにしてあげる行為なんだ。

「俺達はエイミイちゃんとの子孫を残せて、エイミイちゃん達は家族が増える……まさに一石二鳥だな!!」

「ああ、全くだ!! 俺達もつとたくさん子供を産ませて、エイミイちゃん達を幸せにしてやらないとな!!」

「そういう事だからエイミイちゃん……これからも俺達と一緒に、いっぱいセックスして、いっぱい子供作りしていこうなあつ!!」

ダニエルが二度目の射精に到達し、エイミイちゃんの子宮にはまた大量のザーメンが注ぎ込まれる。それでも俺達のチ○ポが萎える事はなく、それ以降も俺達の幸せな時間は続いた。

「ああ、出る、また出るよエイミイちゃん!! 俺の子供を身籠つてくれ!!」

「ぐつまたイキそうだ……よし、俺のザーメンを受け取れ!! 妊娠しろ!!」

「孕め、孕めよ……!! 俺の子供、しっかり孕んでくれよなあ……うう!!」

ダニエルがフェラチオをさせている間に俺がバックで一発、まんぐり返しの体勢になった彼女にビスタがまた一発、その後は俺とダニエルで二穴責めにしてからまた一発射精してやった。エイミイちゃんのエッチで綺麗な裸体は、俺達のザーメンで存分に汚してやった。

「ああ、エイミイちゃん……ちゃんと、俺達の子供を産むんだぞ……!! 君はもう、俺達の女なんだからなあ……君は一生、俺達のお嫁さんなんだからなあ……ぐ、ううっ!!」

「んあ、あ、ああつ……ツ……!」

そしてしばらく時間が経過した後。俺が最後にまた一発出してやったところで、俺達の性欲はようやく収まる事となった。流石にピ

スタもダニエルも、これ以上は限界らしい。

その後は大急ぎで後片付けに取り掛かった。エイミーちゃんの体に付着したザーメンをティッシュで拭き取り、オ○ンコにたっぷり注がれたザーメンもできる限り掻き出してからティッシュで拭き取った。それでもまだ微妙に膣内に残っていたザーメンがショーツを汚す事になったが、まあ少しくらいなら大丈夫だろうと思い、俺達は彼女の下着と服装を元に戻し、彼女の車で自宅まで送って行った。

もちろん、一部始終がビデオで撮影済みだ。この映像をカリーナちゃんに送ってやったら、彼女からは物凄く楽しそうな笑顔でお礼を言ってきた。その時の彼女の笑顔は見てるこっちもゾクツとしたね。さて、今回の一件で俺達はエイミーちゃんをたっぷり犯したんだ。俺達3人の内、誰か1人の子供は間違いなく妊娠してしまっている事だろう。

一体誰の子供を孕んだらうか。

ビスタか。

ダニエルか。

それとも俺か。

もし俺の子供だったら、物凄く嬉しいなあ。

To be continued……?!

## ヴァイス×夏希（美穂） I F

俺の名前はヴァイス・グランセニツク。

元機動六課のメンバーで、今は資格を取得し直した事で再び武装隊  
局員として日々奮闘している。

そんな俺が今どんな状況なのかと言うと……

「ん、ああ、はあっ!! 良い、気持ち良いよお……!!」

「んぐ、くあっ……姐、さん……ッ!!」

……夏希の姐さんとセックスしてる真っ最中だ。

おかしい、どうしてこうなった？

まあまず何があったのかと言うと、俺はこの日、久々に自宅に遊び  
に来た夏希の姐さんを迎え入れ、妹のラグナと一緒にシヨツピングに  
行ったり、ビデオ屋で借りた映画を自宅で観賞したり、出前で注文し  
たいくつかのピザを一緒に食べたりなどしていた。シヨツピングで  
は俺が荷物持ちをやらされたり、俺が食べようとしたピザを夏希の姐  
さんに横取りされたりと色々ありはしたが、俺としては久々に楽しい楽  
しい時間ではあった。

問題はその後だ。ラグナが自分の部屋に戻って就寝した後、俺達は  
まだ寝ないで連ドラを見たりしていたんだが、ここで夏希の姐さん

が、冷蔵庫の中でキンキンに冷やされているビールの存在に気付き、俺と2人で一緒に飲む事になった。飲んでる途中、酔いが回ってきた姐さんはやたら俺に絡むようになって、最初はただただ鬱陶しいだけだったんだが、俺に密着してくるたびに姐さんの柔らかなおっぱいが俺の腕に当たったりしてたから、そこは個人的に凄いラッキーだった。

そう、そこで俺達2人、自分にブレーキをかけようとしなかったのがいけなかったんだ。

「ぶはあ！ ああ〜さいつこ〜つ！」

「おいおい大丈夫かよ姐さん、もうベロンベロンじゃねえか。流石にもう飲み過ぎだつて」

「にへへえ〜……♡」

酔いに酔った姐さんは顔が赤く、その表情はめっちゃ蕩けてやがる。姐さんって普通に美人だから、酒で酔い潰れてる姿も何だかんだですげえ可愛いんだよなつていかんいかん、早く彼女からビールを取り上げなければ。そう思いながらビールを片付けようと視線を逸らしていたせいで……俺は姐さんのやろうとしている事に、すぐには気付けなかったんだ。

「んむっちゅう♡」

「んむうっ!」

……いやまさか、姐さんの方から俺にキスして来るとは思わないつて。

しかも口と口でだぜ？

姐さんの唇、プルンとしてすげえ柔らかい……つていやいや、そんな事言ってる場合じゃねえ!!

「ぶは!? あ、姐さん、いきなり何すんだよ……!!」

「えへへえ……♡」

無理やり引き離しても、姐さんは変わらず笑顔を浮かべている。正直すげえ可愛いんだが、まずはこのバクバクになっている自分の心臓を落ち着かせる事を優先しようとしたんだが……

「暑うい……んしよ、ふう」

「……って姐さん!? ちょ、何してんだ!!」

よりによつて俺の目の前で、白いシャツも黒いブラジャーも脱ぎ捨てた姐さんが、その大きなおっぱいを露わにしてきた時は目ん玉が飛び出るかと思つたぜ。程良い大ききさで形の整つた、薄いピンク色の乳首が魅力的な姐さんのそのおっぱいには俺も思わず見惚れちまつたが、流石にこのままではマズいと思つた俺は慌ててシャツを着させようと思つた。だが、それも無駄な事だつた。

「ヴァイス〜♡」

「姐さ……うおっ!?!」

姐さんに腕を引つ張られた俺はそのまま床に押し倒され、俺の上に姐さんが馬乗りになつた。やべえ、このままだとマジで襲われる。そう思つて抵抗しようと思つた俺の考えは、それより前に姐さんにキスされた事で一瞬にして打ち消された。しかも最初の1回目と違って、今度は舌まで入れて来たもんだ。大人のキスがこんなに気持ちの良いものだとは知らなかつた俺は、いつからか抵抗するのをやめてしまつていた。

「ん、ちゆ、あむっ……」

互いの舌を何度も交えてから唇を離れた後、姐さんの舌から唾液の糸が垂れ落ちて行くのは正直、見ていてすげえエロかつた。この間、俺のズボンのテントは大きくなつていた。

「いっぱい、気持ち良くなるう……♡」

蕩けた表情でそんな事を言われてしまった以上、俺もこれ以上姐さんを拒む理由はない。据え膳食わぬは男の恥とも言ふしな。そう思つて、俺は姐さんと思う存分セックスを楽しむ事にした。

「あ、ああ、んはあっ!!♡」

「くあ、や、やべえ……マジですげえよ夏希の姐さん……!!」

その後、姐さんはホットパンツとショーツも脱ぎ捨て、完全にスツポンポンになった。俺が姐さんのおっぱいを揉んだり吸ったりなどして弄り、姐さんが俺のチ○コにフェラチオしてくれたり、シックスナインの体勢で互いの性器を舐めたりした。

(すげえ……あの夏希の姐さんが、俺のチ○コで乱れてやがる……!!)そこからというもの、俺と姐さんの下半身が繋がるまでそう時間はかからなかった。最初に姐さんのマ○コに挿入した時の感想は……ただ一言、マジ最高だわ。

「ああ、あぁっはぁん!!♡ もつと、もつと突いてえ……!!♡」

いろんな体勢でセックスしていると、姐さんがどれだけエロい体してるかがよくわかる。さつきも言ったちようど良い大きさのおっぱいはもちろんの事、細くしなやかな腰に太過ぎない太もも、ぷりんとした丸いお尻、そのどれもが最高に俺好みだ。そんな姐さんの綺麗でエッチな体を好きなようにヤれるとは、世の中何があるかわからないもんだ。

「ぐ、うおっ……姐さん、出すぞ……中にいっぱい出してやるからな……!!」

「あん、あ、あぁっ!!♡ ああ、良い、出して……赤ちゃんの、素……中にいっぱい、頂戴……!!♡」

「姐さ……ぐっ!!」

四つん這いの体勢になった姐さんをバツクで何度も突いていた俺は、姐さんの腰を掴んで引き寄せてから、要望通りその膣内<sup>ナカ</sup>にたっぷり出してやった。これが俺にとって人生初の膣内射精になる訳だが、俺の精子を求めるかのように、姐さんの子宮が俺のチ○コに凄いチューチュー吸いついてきていて……正直に言おう、めちゃくちゃ気持ち良かったです。

「あああ、いっぱい出てる……お腹の中が、熱い……熱いよお……!!♡」

姐さんの子宮は今、俺の出した精子で白く染め上げられている事だろう。しかし一度射精した後も、俺のチ○コはまだまだ萎える様子はなかったので、次は背面座位の体勢で犯してやる事にした。姐さんの

おっぱいを後ろから揉みしだきつつ、下から強く突いてやるだけで、姐さんの口からエッチで可愛い喘ぎ声が聞こえて来る。

「あん、ああ、はあんっ!!」♡ 気持ち良い、気持ち良いよお……もつと、もつと激しくしてえ……!!♡」

「ッ……ああ、良いぜ……もつとたくさん愛してやるよ姐さん……!!」  
その後も俺と姐さんのセックスは続いた。背面座位の体勢で1発。正常位の体勢でまた1発。立ちバックかつ片足上げた状態でまた更に1発。この時点で合計4回、姐さんのマ○コに膣内射精を決め込んでやった。姐さんのマ○コに入り切らなかった精子が、割れ目からとろりと垂れて来ているのがめっちゃくちゃエロかった。

(やべえ、どうしよう……)

ここまでヤッてしまった後で、俺はようやく理性が戻りかけてきた。4回もゴムなしで膣内に射精して、しかも姐さんはアフターピルなんて物も飲んでいない。もしかしたら今回のセックスで、俺は姐さんを妊娠させてしまっているかもしれないのだ。その事を考えた辺りから流石にヤバいと俺は思っていたんだが……

「ああ……♡ ヴァイスウ……もつと、エッチしよ?♡」  
「……ッ」

仰向けに寝たまま、笑顔で両腕を伸ばして来る姐さんの姿を見ていたら、その思考がまた揺らぎ始めている自分がいた。そして既に4回も射精しているにも関わらず、俺のチ○コはまたムクムクと元氣を取り戻していく。我ながら絶倫だなあと思った。

(にしてもまさか、姐さんの方からこんなにいっぱい甘えて来るなんてなあ……)

夏希の姐さんはかつて自分がいた世界で、浅倉威という男によって実の姉が殺されている。その姉を生き返らせる為にライダーになったという事も、彼女が自分の口で俺達に明かしてくれた。

それから彼女には、かつて想いを寄せていた男がいたらしい。数年前、姐さんが巻き込まれた事件で現れたあの黒いライダーが、まさにその男の偽物だったんだとか。

(……愛情、か)

この世界に来てから、彼女が陰りのある表情を見せる機会は減りつつある。しかしそれでも、内心では誰かとの愛情を今もなお求めているのかもしれない。ならば、俺が彼女にしてやれる事は1つだ。

「……ああ、良いぜ。もっともつとエッチして、もっともつと愛してやる」

万が一妊娠してしまったとしても、その時は俺が責任を取れば良いだけの話だ。幸い、武装隊の仕事は給料も割と高いからな。夏希の姐さんを養うくらいに余裕は充分にある。姐さんと家族の関係になると知ったら、彼女と仲の良いラグナもきつと喜ぶ事だろう。

「姐さん……いや、夏希……今夜はまだまだ寝かせねえからな……!!」  
「ああっ……!!♡」

そう考えたら、もはや姐さんではなく夏希と、名前で呼んであげべきだろう。試しに名前前で呼んでみたら、凄く嬉しそうな顔でニヤけていたので、その後も彼女の名前を呼びながらたくさん愛してやる事にした。

夏希の唇と何度もキスをしてやった。

夏希のおっぱいを赤ちやんみたいに吸ってやった。

夏希のマ○コに俺の精子を溢れるくらい注ぎ込んでやった。

夏希のエッチなこの体を、俺の色でこれでもかと言わんばかりに染め上げてやった。

「安心しろ……もし妊娠する事になっても、俺がお前を一生養ってやるからよ……!!」

「あ、ああ、はあっんん……ヴアイ、スウ……!!♡」

「結婚しよう、幸せになろう……その為にも、俺の子供を産んでくれ!!」

夏希ッ!!」

「ん、あああああああああっ!!♡」

ベランダの窓に夏希の体を押しつけたまま、俺はバックの体勢でまた彼女の子宮に出しながら、右手を彼女のスベスベしたお腹に、左手を彼女の柔らかなおっぱいに持っていく。

今は凹んでいるこのお腹も、いつかは俺の子供を孕んで、大きく膨らむ事になるだろう。

おっぱいはこれ以上に大きくなって、いつか産まれる赤ちゃんの為に、栄養満点の母乳が出るようになるだろう。

そんな未来の光景を想像しながら、俺は夏希のお腹を優しく撫で擦り、おっぱいを優しく揉みしだきながら、彼女の子宮に精子をたっぷり注ぎ込んでいった。

「子供の名前も、一緒に考えていこうな。夏希」

「ん、あぁっ……ちゅ、れろ……♡」

とろんとした目をしている夏希にキスをしながら、俺は再び腰を振り、彼女の体を余す事なく存分に堪能していった。夏希の可愛らしい喘ぎ声も、しばらく鳴り止む事はなかった。

俺達の愛し合う時間が終わりを告げたのは、時間帯が夜中の3時を過ぎてからの事だった。

んでもって、翌日を迎えた訳なんだが……

「~~~~~ツ!!」

「お、お〜い、夏希……いや、姐さ〜ん?」

昨日の出来事、酔いが冷めた彼女は詳しく覚えていない訳ではなかったが、朝起きた時の惨状を見て、自分が俺とセックスしたという事実を認識したらしい。今は俺の部屋でベッドの布団に包まったまま、恥

ずかしがって全く外に出ようとしないう状態だった。

「……………ったの」

「へ?」

「……………昨日、アタシからセックスしようって言ったの?」

「ああ、ええつと……………」

これは正直に言うべきなのだろうか。包まった布団から顔だけ覗かせてこちらを睨んで来ている彼女に、俺はそんな顔も可愛らしいと思いつつ、ここは素直に話す事にした。

「ま、まあ、姐さんからいきなりキスして来た時は驚いたぜ。その後、俺の目の前で服を脱いで裸になって、俺を押し倒した後、『いっぱい気持ち良くなるう♡』って……………」

「もう良いもう良いわかったわかった、それ以上言わなくて良いから!!!」

やっぱり、昨日の姐さんは酒に酔った影響で思考力が大幅に低下していたらしい。自分から知人の男をセックスに誘ったと知った姐さんは、恥ずかしさのあまり今にも爆発してしまいそうなくらい顔が赤くなっていた。

「ううつ……………何でアタシこんな事を……………中にいっぱい出されちゃってるっほいし……………」

「ああ、もしかしたらデキちまつてるかもな」

「だから言わなくて良いってば!!!」

「それとも、姐さんは俺の事が嫌いか?」

「いや好きか嫌いかじゃなくて……………」

「どうなんだよ、夏希」

「ツ……………そ、それは……………」

「なあ、答えてくれよ夏希」

「え、えつと、その……………き、嫌いじゃ、ない……………けど、さ」

俺が名前で呼びながら問いかけてみると、また顔を赤くして布団の中で縮こまりながら、小さい声でそう答えてくれた。どうしよう、いろんな意味でめっちゃ可愛いんですけどこの人。

「……………な、なあヴァイス」

「何だ？」

「その、さ……もし、デキちゃったらさ……責任、取れよな……ッ」  
「……おう、当たり前だ」

その時に夏希が見せてきた顔。

俺はその顔が今までで一番可愛く見えた事を、何かに書き記しておこうと思う。

「お兄ちゃん……夏希さん……ちよつとO☆H A☆N A☆S H Iしましようか？」

「は、はい……」

ちなみに、今回の件はすぐにラグナにもバレてしまい、俺等2人まとめて説教を喰らう羽目になったのは言うまでもない。



## 雄一×クアットロ IF (☆)

時刻は深夜1時……

「ん、あ、ああっ……そ、そこ、良いですわあ……!!♡」

「フーツ……フーツ……!!」

場所はスカリエッティの研究所。既にスカリエッティやナンバーズ一同、ルーテシア達が就寝している中、とある一室ではギシギシというベッドの軋む音、パンパンという肉と肉がぶつかる音、そして若い女の喘いでいる声などが響いていた。

「ああっ♡ 雄一さんのが、奥まで届いてっ……んん♡」

仰向けに寝転がっている青年——斉藤雄一の腰の上で、眼鏡をかけた青いボディースーツの女性——クアットロが馬乗りになり、前後にくねらせるように腰を振っていた。クアットロの身に纏っているボディースーツは胸元と股間部分が破けており、腰を振るたびに彼女の丰满な乳房がたゆんたゆんと揺れ、雄一の肉棒が入っている秘所はジュプジュプと水音を立てている。

「グッ……ウウッ……!!」

クアットロが頬を紅潮させ、蕩けた表情でセックスを楽しんでいる一方で、雄一の目は瞳に光がなく、虚ろな表情をしていた。その上で本能のままにクアットロを騎乗位で犯しており、彼女の腰をがっちり掴んだまま肉棒で彼女の胎内を激しく突き上げ続けていく。

「ん、ふう……また、出ますの……？ 良いですわ……思いつきり、中に出しちやつてえ……!!♡」

「フーツフーツ……グ、ウウッ!!」

「あ、ああっ♡ また、雄一さんのが、私の中に……はあああああ……♡」

クアットロの腰ががちり固定され、雄一の肉棒が彼女の膣奥まで深く突き入れられた瞬間、ビュルツと射精が開始された。子宮口の目

の前で放たれた精液はそのまま、彼女の子宮内までドクドクと入り込んでいき、射精されるのと同じタイミングで絶頂したクアットロが背中を大きく反らす。

(そう、これだわ……男の人に、膣内で射精されるこの感覚……最高に気持ち良い……♡)

精液の熱さが胎内に広がっていくのを感じながら、クアットロは恍惚とした表情を浮かべた。それから数十秒ほど経過した後、彼女は雄一の肉棒が未だに固さを失っていない事に気付く。

「ん……まだやり足りないんですかあ……？」

「グ、ウア……ッ」

「良いですわよお……まだまだいっぱい、付き合って差し上げます……♡」

もつとこの快感を味わいたい。

もつと気持ち良くなりたいたい。

そんな想いから、クアットロが上半身を起こした雄一と正面から抱き合い、対面座位の体勢でセックスを再開。雄一と熱いキスを交わしながら、膣内で彼の肉棒の熱さを感じ続ける。

何故クアットロがこうして雄一とセックスしているのか、それには理由があった。

この時、雄一は既にガルドサンダーと契約し、仮面ライダーブレイドとしての活動を行っていた。彼はミラーワールドでモンスターと戦いつつ、時にはスカリエッティが行う研究に被験体として協力したり、時にはルーテシアの母親を目覚めさせる為にレリックを探したりと、忙しい日々を送り続けていた。

もちろん、中には雄一のライダーとしての実力に疑問を抱く者も少

なくなかった。出会ったばかりの相手にすら甘いところがある彼に、果たして戦士としての強さがあるのかと。トーレやクアットロがまさにその考えだった。

そこで、スカリエツティの監視下で雄一に模擬戦を行わせてみる事にした。相手はもちろんナンバーズ一同で、一対多の戦闘になる以上、流石の雄一もこれはどうしようもないだろうとスカリエツティは考えていた。

しかし、結果は全く違っていた。

『こ、これは……ッ!?!』

模擬戦終了後、トレーニングルームには異様な光景が広がっていた。雄一が変身したブレードを囲むように、ナンバーズの面々は床に倒れ伏すか、もしくは膝を突いた状態で必死に呼吸を整えている。そんな中、部屋の中央では同じく呼吸が荒くなりつつも、ガルドバイザーを床に突き立て、何とか両足で立ってみせているブレードの姿があった。

これにはスカリエツティやナンバーズ、ルーテシア達も驚きを隠せなかった。まだ仮面ライダーになってから1年も経過していないはずの青年が、こうして戦闘慣れしているはずのナンバーズ達を相手に、互角の戦いを繰り広げてみせた。その光景を見て、スカリエツティ達は気付かされたのだ。戦いにおいて、雄一は天性の才能を秘めているという事に。

『これは……使えそうね』

そしてそれは、クアットロに良からぬ企みをさせる結果に繋がった。彼女はスカリエツティにも内緒で、雄一を利用して独自の計画を立て始めたのだ。

スカリエツティが死亡するような事態が起きた時に備え、ナンバーズのメンバーは皆、子宮内にスカリエツティのクローンを生み出す為のコピー因子が植え付けられている。それはクアットロも例外ではない。

そこでクアットロは、そのコピー因子が植え付けられている子宮内に、雄一の精子を取り込む事を考えたのだ。

ジエイル・スカリエツテイの優秀な頭脳。

斎藤雄一の非常に高い戦闘力。

それら両方が合わされば、最強のクローンを生み出す事ができるのではないか？

そう考えたクアットロは早速行動を開始した。雄一が腕に着けているリングに細工をする事で、彼の体内に埋め込まれているレリックを介して洗脳を施し、瞬く間に雄一はクアットロの命令に忠実な操り人形へと変貌した。後は誰にも見られない場所まで雄一を誘導し、彼の精液を採取しようと考えていた……のだが。

『ッ!? お、おお……思ってたより、凶暴なのをぶら下げてたわね……』

雄一の勃起した肉棒が想像以上に大きくなったのを見て、流石のクアットロも衝撃を受けていた。男女の性行為についての知識はあるものの、こうして実際に間近で肉棒を見るのは初めてだったからか。クアットロは女としての本能が刺激され、ゴクリと喉を鳴らしてから肉棒に触れてみる事にした。

『熱い……ピクピクしてるわね……それに変な味……』

クアットロは雄一の肉棒をジーツと見つめながら、片手でゆっくり扱き始める。時には先端の龟头を舌先でチロチロ舐めてみたり、カリ部分を刺激してみたり、時には龟头を口で直接頬張ってみたりなど、フェラチオで雄一の肉棒にひたすら快感を与え続けた。そして……

『ウウ、グ……アアッ!!』

『んぐ……ッ!?』

クアットロが啜えている最中に雄一が絶頂し、彼女の啜内で精液が放たれた。突然の事態に驚いたクアットロはすぐに吐き出そうとした……が、何故か彼女は肉棒を啜えたまま、精液を啜内で受け止め続けた。

『ん、んぐ……むう……ッ♡』

生暖かく、苦くてとても飲めたものじゃないはずの精液を、クアットロは舌で絡め取り、少しずつだがゴクゴクと飲み込んでいった。自分が何故こんな事をしているのか、クアットロ自身も理解できていな

かった。

『ん……はあ、はあ……』

クアットロのボディスーツの股間部分も、気付けばほんの僅かにだが湿り気があった。クアットロは精液を最後まで飲み込んだ後、空いているもう片方の手で自分の股間を弄り出した。指先が股間部分に食い込んでクチュリと水音が鳴り、クアットロが時々体をビクンと反応させる中、雄一の肉棒は一定の大きさを保ったままだった。

(まだ、大きい……)

この時点で既に、クアットロは最強のクローンを生み出す事よりも、性的な快感を味わう事へと目的が徐々に変わり始めていた。クアットロもまた、1人の女として雄一の肉棒を求めるようになっていた。しかしプライドが高いクアットロは、そんな自分を認められずにいた。

『ッ……良いわ、来なさい』

クアットロはその場に座り込んでから両足を開き、自身の股間を雄一に見せつけた。クアットロが自分の指で弄った股間部分は、愛液で湿り気を帯びていた。

『雄一さん。あなたのそのぶつといぺ○スで、私とセックスしなさい……!』

雄一の精液を採取するには、こうして自分の子宮内に直接注入して貰うのが手っ取り早い。あくまで自分にそう言い聞かせ続けていたクアットロは、雄一に自分とセックスするように命令を下した。すると……

『え……ひゃあっ!?!』

雄一の両手がクアットロの両肩を掴み、彼女を床に押し倒した。そしてレリツクによる魔力で腕力が強化されている雄一は、クアットロのボディスーツの股間部分を両手で無理やり破き、サーモンピンクのような色をしたクアットロの秘所が露わになる。

『ちよ、そんないきな……りい!?!』

直後、雄一の固い肉棒がクアットロの秘所に押し当てられ、一気に膣奥へとズブリと挿入された。いきなりの挿入にクアットロが全身

をビクンと反応させたが、既に愛液にまみれていた彼女の秘所は、雄一の肉棒を案外すんなりと受け入れてみせた。

『あ、はがぁ……ッ……!?!』

『ウウ……アアッ……!!』

『あ、ちよ、待つ……ひぐう?!?!♡』

その後はクアットロが命令するより前に、雄一が腰を振ってピストンを開始する。そのせいで「一旦ストップ」という命令も下せなかったクアットロは、雄一にされるがままに犯されていく。

『あ、あぁっ?!? な、何、これ、凄過ぎ……ひゃあんっ!!♡』

初めて膣内に挿入された感触と快感に、クアットロは頭の理解が追いつかず、ただ雄一に犯される事しかできなかつた。その間に雄一はクアットロの胸元部分もビリビリ破き、露わになった乳房に顔を埋めてから乳首をチュウチュウ音を立てて吸いついた。

『んあぁ?!? あぁ、だ、駄目えっ!! そんな吸っちゃ……あぁ、んん!!♡』

乳房を吸われながらピストンされている内に、クアットロの表情も次第に蕩けていき、とろんとした目を見せるようになっていた。そんな状態が数十秒ほど続いている内に、雄一はピストンの速度が徐々に速くなっていき、クアットロの腰を掴んで腰を強く打ちつけた瞬間、2度目の射精に達した。

『あ、あぁっ……あ、熱い……雄一さん、のが、お腹の中に……!!♡』

膣内射精を初めて体験する事となったクアットロ。胎内に熱い物が注ぎ込まれていく快感に、彼女の理性は呆気なく打ちのめされた。セックスがこんなに気持ちの良いものだとは知らなかったが故に、彼女の心はいとも簡単に屈服させられてしまったのだ。

『あぁ、まだ、出てる……ん、あぁ……♡』

子宮内にたっぷり射精された後、肉棒が引き抜かれたクアットロの秘所の割れ目からは、溢れた精液がとろりと垂れていく。クアットロは自身の股間から垂れ落ちていく精液を指で掬い取り、チュパツと口に啜めるように舐め取った。

(ん……やっぱり苦い……)

そのはずなのに、不思議とまた味わいたいと思えてしまう味だった。クアットロは雄一の肉棒がまだ固さを失っていない事に気付いた。

『あら、まだやりたいのかしら……？』

『フーツ……フーツ……』

『ウフフ……良いわ。私がこれから、限界まで搾り取ってあげる……♡』

精液が垂れ落ちる自身の股間の割れ目をクパアと開きながら、クアットロは蕩けた表情で雄一を誘惑した。それにより、雄一が再びクアットロの両足を左右に開かせ、彼女の股間に肉棒をズプリと挿し込むまでには、ほとんど時間を必要としなかった。

「あ、あぁっ……はぁん!!♡」

「ウウツ……ハア、ハア……ツ!!」

それ以降、クアットロはスカリエツテイ達の目を盗み、誰にも見られないタイミングで洗脳した雄一とセックスするようになった。なお、雄一は洗脳されている間の記憶がなく、自分がクアットロと性行為を体験してしまっている事には全く気付いていない。

「ああ、あ、あんっ!!♡ ああ、良いわ雄一さん……もつと、もつと激しく突いて頂戴ツ!!♡」

今もこうして、ベッドの上で四つん這いになったクアットロに雄一が後ろから挿入し、激しいピストンを繰り返して彼女を喘がせている。他者をいたぶり、支配する側としての残忍性を持っていたはずの

彼女はいつしか、他者に辱められる事に強い快感を見出すようになっていた。

「グ、ウウ……アアツ……!!」

「ん、ああ、また出そうなのね……あん!!♡ はあっ……良いわ、出しなさい……!! あなたの精子で、この私を妊娠させなさい……!!♡」

雄一が射精に至ったのは、クアットロがそう告げてから数秒後の事だった。雄一がクアットロの腰を引き寄せ、その膣内で亀頭を子宮口に強く密着させた瞬間、熱い精液をビュルツビュルツと勢い良く放ち、子宮内を白く染め上げていく。

「ああっ……また、種付けされてる……!! 雄一さんの赤ちゃん、孕まされちゃってるう……ツ!!♡」

自分が支配する操り人形に犯されて、操り人形の子供を孕まされる。そのシチュエーションからもたらされる圧倒的快感に、いつしかクアットロ自身が支配されるようになっていった。今となってはもう、最強のクローンを生み出すという目的はどうでも良くなってしまうていた。

「ん、はあ……雄一さん……もつと、もつと精液、いっぱい頂戴……♡」

そして彼女はまた、雄一と対面座位の体勢でセックスを再開する。何度射精しても萎える事のない雄一の絶倫ぶりに、クアットロは再びエッチな鳴き声を出し続けた。

「チュウチュウ、ピチャ、レロ、ズチュ、ジュルルルル……!!」

「あん♡ ン、フフ……そんなに、私のおっぱいが好きなのね♡ 良いわ、好きなもの、私のおっぱいミルクを飲みなさい……!!♡」

雄一が吸いついたクアットロの乳房からは、白い母乳が噴き出るようになっていた。まだ妊娠している訳ではないが、クアットロが自分で自分の体に改造を施し、乳房から甘くて美味しい母乳が出るようにしたのだ。クアットロが雄一の耳元でそう囁くと、雄一は彼女の乳房への吸いつきがより一層強まり、母乳を飲みながら彼女を激しく犯していく。

「あ、ああ、いく、いっちゃう……雄一さんに、おっぱい吸われながら、子宮に種付けされちゃう……赤ちゃん妊娠しちゃう……はああんっ

!!  
♡」

そしてまた訪れた、もはや何度目かもわからない膣内射精。雄一はクアットロの乳房を吸いながら彼女の体を強く抱き締め、彼女の子宮内にこれでもかと言わんばかりに精液を放ち続ける。

（ああ、駄目……雄一さんとのセックス……気持ち良過ぎて、やめられないわ……!!♡）

クアットロもまた、甘く蕩けた笑顔で雄一を強く抱き締めながら、自身の下腹部が雄一の精液でたっぷり満たされていくのを感じ取る。彼女の頭の中は今、雄一と気持ちのいいセックスをする事と、彼の子供を妊娠する事でいっぱいになっていた。

「フッフ……雄一さん、まだまだいっぱい、私とセックスしなさい……私の子宮に、いっぱい種付けして、私にあなたの子供をいっぱい産ませるのよ……!! 雄一さんの子供なら、私が何人でも産んであげる……!!♡」

クアットロの囁く甘い言葉に、雄一の肉棒がまた元気を取り戻していく。膣内の感触からそれを察したクアットロは、雄一の顔を引き寄せながら彼と唇を合わせ、舌を交えながら彼のピストンを受け続ける。彼女の子宮に雄一の精液が再び注ぎ込まれたのは、それから数分後の事だった……

T o b e c o n t i n u e d ……?

成瀬  
×????

——世界とは、とにかく理不尽だ。

「ん、ああ、あ……はあっ……!!」

「くっ……アネットちゃん、アネットちゃん……ッ!!」

私とその少年と出会ったのは、JS事件からおよそ半年ほど経過した時だった。

幼少期に母親を失い、父親の消息がわからなくなった。

1人になった私はとにかく荒れた。

荒れていたが為に、地元の不良達に目を付けられ、女として暴力の限りを受けそうになった。

そんな私を救ってくれたのは……他でもない「彼」だった。

『君、大丈夫かい』

『ッ……あなた、誰なの……?』

『僕は成瀬章って言うんだ。章で良いよ。君の名前は?』

『……アネット。アネット・ブライアンよ』

『そっか。よろしくね、アネットちゃん』

なるせあきら  
成瀬章。

彼は「仮面ライダー」という不思議な力を持っていた。  
ライダーの力で、私を襲おうとした不良共を難なく叩きのめしてみ  
せた。

それでも負けを認めず、彼に仕返しをしようと企んだ奴は、例外な  
く「ゴリラみたいな怪物」の餌食となった。

私には、彼が救世主のように見えていた。

孤独だった私に、手を差し伸べてくれたような気がした。

その時点で私は、あつという間に彼に惚れてしまっていた。

「あ、んん、はあつ!! ア、アキラ、アキラア……ツ!!」

「く、凄っ……アネットちゃん、気持ち良い?」

「ん……気持ち、良い……気持ち良いよお……ああん!!♡」

彼——アキラ君からは色々な話が聞けた。

彼は元々は地球にいたという事。

彼が持っているライダーの力は、ライダー同士で殺し合いをする為  
に存在していたという事。

調べてみたところ、このミッドチルダにも何故か、鏡の世界の怪物  
が存在しているらしいという事。

そして……戦わなければ、生き延びる事ができないという事も。

他に行く当てがないとわかり、私は彼を自分の家に住まわせてあげ  
る事にした。

このミッドチルダに関する事を色々教えてあげた。

ミッドの言語についても教えてあげた。

それから彼に……助けて貰ったお礼をたっぷりとしてあげた。

「ツ……アネットちゃん、出すよ……中に出すよ……!!」

「あ、はあ、んう……良いよ、出して……アキラの精子、いっぱい出して……!!」

「アネットちゃん……う、ぐう!!」

「んんっ!!♡ あ、ああっ……出て、る……中に、いっぱい……!!♡」

私は彼に、自身の初めてを捧げた。

その一件を経てから、私とアキラは恋人同士の関係になった。

「はあ、はあ……気持ち良かったよ、アネットちゃん」

「ええ、私もよ……あ、まだ出てる……フフツ♡」

彼との情事はこれで終わりではない。

それ以降、私達は何度も愛し合うようになった。

私の家はもちろんの事、時には公衆トイレや路地裏など、人気のない場所でセックスをする事もあった。

「ツ……ごめん、アネットちゃん。もう1回、良いかな……?」

「んっ……良いよ、いっぱいやろ……♡」

彼は地球にいた頃、セックスの経験はなかったらしい。

だから彼の初めてを、私が貰った事になる。

彼の初めてになってあげられた事が、私は嬉しかった。

私の初めてを彼に捧げられた事が、私はとてつもなく嬉しかった。

「ん、ちゅ、ぴちや、じゆるる……!!」

「んんっ! フフ……アキラ、大きな赤ちゃんみたい……♡」

初めてセックスをした時。

まだ経験がなかった頃の彼は凄く初心<sup>ウッブ</sup>で、やり方もかなり拙<sup>ウッブ</sup>かった。

そんな彼がどことなく愛おしくて、最初は私がリードしてあげた。

一心不乱に私のおっぱいに吸いついていた頃の彼が懐かしい。

「ん……私のおっぱい、美味しい?」

「ちゅ、ちゅぱっ……ん、凄く美味しい」

「そっか、フフフ……♡」

経験を積んでからは、彼は私の事を優しく愛してくれるようになった。

彼と舌を交えてキスする時。

彼に体中をキスされている時。

彼に体中を触られている時。

彼におっぱいを揉まれている時。

彼に乳首を舐められ吸われている時。

彼の指で大事なあそこを弄られている時。

彼の舌で大事なあそこを舐めしやぶられている時。

彼の大きなチ○コをフェラチオしてあげている時。

彼の大きなチ○コを大事なあそこに挿入されている時。

彼にその状態で激しくピストンされている時。

彼にそのまま膣内で射精して貰っている時。

性行為が終わってから彼とまたキスを交わす時。

それら全てが、私にとって何よりも至福な時間だった。

「愛してるよ、アネットちゃん」

「私も。大好きよ、アキラ」

彼の精子を子宮に浴びるたび、お腹の中が暖かくなって気持ち良かった。

心も体も征服されているような感じで、凄く幸せな気分になれた。

彼にいっぱい種付けして貰いたい。

彼の子供を産んであげたい。

彼と幸せになりたい。

そんな想いを胸に、私と彼の熱く淫らな日々は続いた。

これからも続いていくと、そう思っていた。

それなのに……

「——アキラ？」

ある日、彼は私のいないところで活動していた。どうやら自分以外のライダーを見つけたらしく、私達の平穩を守る為に始末しなければならぬらしい。

彼以外のライダーに興味を湧いた私は、彼に同行する事を願った。でも、彼からは断られた。

『君に血生臭い光景を見せる訳にはいかない』……と。

そう言つて、彼は手下にした不良共を連れて、街中へと向かつていった。

私が彼の姿を見たのは……それが最後だった。

「アキラ……どこ……？……どこにいるの……？」

いくら探しても、アキラが見つかる事はなかった。

彼もまた、父親と同じように突然姿を消してしまった。

私はまた、孤独に戻つてしまった。

「嫌だ……会いたい……会いたいよお、アキラ……ッ!!」

1人になるのは嫌だ。

彼に会いたい。

また彼に愛して貰いたい。

そう思つて、私は必死に彼の行方を探した。

もしかしたら、彼以外のライダーに殺されてしまったのだろうか。

それとも、モンスターにやられて喰われてしまったのだろうか。

いや、そんなはずはない。

そんな事はあり得ない。

大丈夫、彼はきっと生きている。

そんな希望を抱いて、私は何度も探し続けた。

しかし、現実是非情だった。

いくら探しても、どれだけ探しても、彼が見つかる事はなかった。

私の中で、希望がどんどん小さくなっていく気がしていた。

それでも、希望が完全に消える事がなかったのはきつと……今の私

が、本当の意味で1人ではなかったからなのかもしれない。

そしてある時……私は、ある物を手に入れる事となった。

「ッ……これは……」

そう……彼の物と同じ形状の、1つのカードデッキだった。

そこから、私の運命はまた狂い始めた。

「ひい!? ま、待て、やめろ!! 助けてく——」

『ギシャアッ!!』

私は蠍スカルピアツサのような怪物と契約し、仮面ライダーとなった。

その力を使って、私は彼の行方を探し続けた。

私に色目を向けて来た奴や、私を襲おうとした奴は皆、この子の餌スカルピアツサ食にしてやった。

現れたモンスターをこの手で倒し、この子に餌スカルピアツサとして提供してあげた。

「ど……どこにいるのアクラ……!!」

そんな日々を送っている内に、私の体は少しずつ変わっていった。

以前よりも、おっぱいが少し大きくなっているような気がした。

以前よりも、お腹が少しずつ膨らんできているような気がした。

それ自体はとても喜ばしい事だった。

いないはずの彼が、何となく私の中にいるような気がしていたから。

それだけが、今の私にとって何よりも希望だった。

「待っててアクラ……必ず見つけるから……!!」

でも、それは誤りだった。

私にとってその事は、希望でも何でもなかった。

私はその事を強く思い知らされる羽目になったのは……あるライダーと遭遇した時の事だった。

「——がはあっ!？」

「はん、弱え。弱過ぎるぜお前」

鏡の中の世界。

左右が反転したどこかの公園で、私は死にかけていた。

あるライダーに、私は殺されかけていた。

「たぶんだがお前、まだ未成年だろ。そんな奴がよくもまあこの俺に喧嘩を売って来たもんだよ」

「ッ……黙、れ……!!」

「口だけは達者だな。メスガキの癖によ」

「うぐっ!？」

左腕に鋏を装備したオレンジ色のライダーの右足、私のお腹は強く蹴りつけられた。

なんて事をするんだこの男は。

この子に何かあったらどうするんだ。

そんな私の気持ちなど知った事じゃないとばかりに、そのライダーは私にトドメを刺そうとしていた。

「んじやま、短い間だった……さよならだ」

《FINAL VENT》

『グオオオオオオオッ!!』

「くっ……っ、のお……!!」

あのライダーが高く跳躍した。

両腕に鋏を持った怪物が、奴を高く跳躍させた。  
マズい。

このままでは殺られる。

何とか避けなければ。

動け。

動け私の体。

そんな私の焦りを嘲笑うかのように……奴の繰り出して来た攻撃は、私の体に炸裂した。

「きやあああああああああつ!!?」

避ける暇もなかった。

私は成す術なく吹き飛ばされた。

私の体は地面に叩きつけられ、何度も地面を転がって、仰向けの状態でようやく止まった。

体を全く動かさそうになかった。

辛うじて動かしたのは首だけだった。

辛うじて首を横に向けた時、私の生身の右手が見えた。

今の一撃で、変身が解けてしまったらしい。

「がは、っほっ……!!」

苦しい。

体中が痛い。

呼吸も上手くできない。

それでも、何とかして体を動かさなければ。

でないと私だけじゃない、この子の命も危ない。

駄目だ。

この子の身に何かあつてはならない。

この子は私の希望なんだ。

決して失われてはいけないんだ。

『ギシャアアアアア……!!』

「!? スカル、ピアッサ……?」

そうだ、その手があった。

スカルピアッサ  
この子の力を借りて、この世界から出して貰えば良いんだ。

そうと決まれば話は早い。

「お願い……私を、外に……!!」

今はこの子だけが頼りだった。

スカルピアツサ

その願いを汲んでくれたのか、この子が私に近付いて来た。

スカルピアツサ

良かった、これで帰れる。

この子の命だけでも助けられる。

そんな私の想いは……一瞬にして踏み躪られた。

ドスウツ!!

「——え」

私がそれに気付いたのは、鈍い音がしてから数秒後の事だった。

スカルピアツサ

この子が伸ばしてきた尻尾の毒針。

その先端が、私の胸元に深く突き刺さっていた。

「……ぐ、がはっ!? な、なん……で……!!」

スカルピアツサ

何故この子が私を刺したのか。

その理由は、私の近くに落ちているそれを見たらすぐに理解できた。

「ツ!? そ、そん、な……」

そこに落ちていたカードデツキは、バラバラに砕けた状態だった。かつて、彼に聞いた事があった。

ライダーにとつて、カードデツキは生命線のような物。

それが失われたライダーがどうなるのか。

その結末も、私は彼から知らされていた。

「ツ……いや……やめ、で……!!」

『ギンシャアアアアアアアア……!!』

私の体がどんどん引き寄せられていく。

スカルピアツサ  
この子は今、私を食べようとしている。  
嫌だ。

やめて。

助けて。

まだ死にたくない。

この子まで死なせる訳にはいかない。

お願い、助けて。

その想いは……この子には届かなかった。  
スカルピアツサ

『ギシャアツ!!』

「ひっ……あ、がっ……ア、アアアアアア……ッ!?」

ああ、痛い。

痛い。

やめて。

食べないで。

足のつま先が、太ももが、少しずつ齧られていく。

下半身から、上半身にまで及んでいく。

そしてこの子の鋭利な牙は、とうとうこの子にまで到達してし  
スカルピアツサ

まった。

「あっ——」

たった今、最後の希望が消えた。

今度こそ、私は1人になってしまった。

その瞬間から、私がこの世を生きる理由がなくなってしまった。

「あっ……あ……」

意識が遠のいていく。

視界も真っ暗になっていく。

もはや痛みすらも感じなくなってきた。

あとほんの数秒で、私自身の命も消えるだろう。

ごめんなさい。

あなたの事……見つけてあげられなかった。

「ごめ、ん……ね……ア、キ……ラ……」

そして、私の意識は完全に途切れた。

「——あくあ、散々な目に遭ったぜ」

アネットの死後。ミラーワールドを抜け出したそのライダーは、変身を解除して人間の姿に戻った。その姿は、青と白のスカジャンを身に纏った茶髪の青年だった。

「出会い頭にいきなり襲って来るとはなあ。こつちの話も碌に聞こうとしなかったし……クソツ」

スカジャンの青年は舌打ちした後、懐から取り出した通信端末を繋げ、ある人物に連絡を取り始める。数秒ほど経過した後に、通信先の相手は端末越しに声を発して来た。

『お前か。どうした』

「また1人、ライダーに出くわしたぜ。つっても、もう死んじまったけどな」

『……殺したのか?』

「向こうから襲い掛かって来た上に、話すら聞こうとしなかったんだな。正当防衛って奴だよ。お前だって言ってただろ? 言う事を聞かないライダーは殺して良いって」

『……そうか、わかった。今後も引き続き、ライダーの捜索は頼んだぞ』

「おう、任せとけ……にしても、本当に良かったのかよ? 殺した後で言うのも何だが」

『強かろうと弱かろうと、言う事を聞かない奴は邪魔なだけだ。数年前、俺が殺したライダーもそうだった』

「ああ。湯村……つつたっけか? そいつも本当に馬鹿だよなあ。命令に従いさえすりゃあ、思う存分ライダーを甚振れる……こんな楽しい仕事は他にないってのによお?」

『湯村もそんな事を言っつて、あの結末を辿った。お前まで、同じ道を辿ったりはしないだろうなあ?』

「へっへ、安心しろよ。俺は絶対そんなハマはしねえから」

スカジャンの青年はそう言いながら、ポケットから取り出したカードデッキを見てニヤリと笑みを浮かべてみせる。

その黒いカードデッキには、蟹のような金色のエンブレムが刻み込まれていた……

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
……?  
?

## 18 禁版キャラ設定&キャラ解説①（ネタバレ注意！）

アネット・ブライアン／仮面ライダーポイズン

詳細：仮面ライダーポイズンの変身者。17歳。ジェームズ・ブライアンの実の娘に当たる人物。

幼少期に母親を病で亡くしており、自身を育ててくれた父親を敬愛していたが、その父親が二宮に暗殺された事で天涯孤独の身となる。当初は孤独に耐えられず荒れていたが、地元の不良に目を付けられたところを成瀬章／仮面ライダーアスターに助けられ、彼に惚れて恋人関係になる。

成瀬と何度も性行為を行った事で彼の子供を妊娠したが、後に成瀬も鏡像の城戸真司／仮面ライダーリュウガに殺害されてしまう。その事実を知らないまま成瀬の消息を追い続け、偶然見つけたカードデッキでスカルピアッサと契約した事で自身も仮面ライダーポイズンとなる。

それ以降はライダーの力を使って成瀬の捜索を続け、自身を襲おうとする不良をスカルピアッサに捕食させるなど殺人すらも厭わなくなっていたものの、戦闘経験の少なさが災いし、初めて遭遇した仮面ライダーには手も足も出さず敗北。カードデッキが破損した事で契約破棄となってしまう、最期はスカルピアッサに跡形もなく捕食され死亡した。

彼女自身は愛する成瀬の子供を産む事を望んでいたが、その願いが叶う事はなかった。

仮面ライダーポイズン

詳細：アネット・ブライアンが変身する仮面ライダー。イメージカラーはメタリックワインレッド。後頭部から前方に伸びている突起

は蠍の尻尾を模しており、両肩には蠍の鋏を模した形状の装甲を持つ。

スカルピアツサと契約しており、猛毒を駆使して相手を苦しめる戦法を得意とする。しかし変身者であるアネット自身の戦闘経験が少ない為、実力はあまり高い方とは言えない。

ビクしょうたいごう  
毒召腿甲スカルバイザー

詳細：蠍型の召喚機。右足の太ももに装着されており、蠍の長い尻尾が右足全体に巻き付いている。上部のスロット部分にカードを挿し込むように装填する。

スカルピアツサ

詳細：アネット・ブライアンと契約している蠍型ミラーモンスター。全長10メートルを超える巨体を持ち、両腕の鋏や尻尾の毒針を武器にして戦う。ボディを覆う甲羅は並の攻撃では傷1つ付かないほど頑丈だが、腹部のみ甲羅で覆われていない為、腹部が弱点となっている。

アネットが戦いに敗れた後、契約破棄となった彼女を獲物と見なし、て捕食・殺害したが……。

4000AP。

ソードベント

詳細：スカルピアツサの尻尾を模した槍『スカルスピア』を召喚する。先端部分の毒針を突き刺す事で、標的に猛毒を注入する。2000AP。

ストライクベント

詳細：スカルピアツサの鋏を模した武器『スカルシザー』を召喚する。2000AP。

ファイナルベント

詳細：スカルピアツサが尻尾の毒針で刺した標的を振り回し、投げ飛ばされて来た標的をポイズンがスカルスパイアで刺し貫く『ステイングエグゼキューション』を発動する。5000AP。

さて、ここからはアネットのキャラ造形についての簡単な解説です。

Q. アネットを登場させようと思った切っ掛けは？

A. 彼女を出そうと思った切っ掛けは、かなり前にやったオリジナルモンスター募集で「九拾九さん」が考案して下さいましたスカルピアツサの設定を見た事が始まりです。

そして設定を何度か確認する中で「これライダーも出せるんじゃないか？」と思い、アネットのキャラを作成していく形になりました。なのでぶっちゃけます、アネットは完全に後付けキャラです（ドーン

Q. アネットのキャラを作り上げた経緯は？

A. スカルピアツサのモチーフである蠍は、七つの大罪においては【色欲】を象徴する動物です。その為、変身者のアネットにも【色欲】の要素を何かしら与えようと思った結果、気付いたら成瀬章／仮面ライダーアスターと恋人関係になっていて、気付いたらこんなにもセックス狂いなキャラクターに仕上がっていました↑

そんな彼女の父親は誰かと言うと、本編第1部にて、局員でありながら麻薬密売組織とも裏で繋がりを持ち、白鳥夏希（霧島美穂）／仮面ライダーファムを陥れようとしたジェームズ・ブライアン少将。

意外にも、彼は自分の娘に対しては裏の顔を見せず、普通の優しい父親をやっていました。もちろん、アネットは父親の裏の顔を知りません。

その父親が二宮によって秘密裏に暗殺され、1人になってしまったアネットは孤独に耐え切れず、危ないところを助けてくれた成瀬に愛情を求めるようになりました。

エピソード・ファムにおいて、自分にとって邪魔な存在を徹底的に始末しようとしていた成瀬もまた、アネットにだけは心を開いていました。かつて虐められっ子だった分、内心では他者からの愛情にひたすら飢えていたのかもしれませんがね。

まあ読者からすれば、「あの成瀬が童貞を卒業していた」という事実の方が一番衝撃だったかもしれませんが↑

Q. 仮面ライダーポイズンの設定はどのようにして完成したの？

A. デザインモチーフは『仮面ライダーカブト』に登場する仮面ライダーソードですね。必殺技の名前は『仮面ライダーゼロワン』に登場する仮面ライダー滅、『仮面ライダードライブ』に登場する魔進チエイサーの技名から引用してみました。

実を言うと。設定自体はほんの短い時間で完成しちゃいました。まあ戦闘らしい戦闘は何にも描写していない為、これを載せたところで何になるんだって話にもなりますが（オイ

もしかしたら、何らかの形で設定を再利用する機会があるかもしれません。

Q. 変身ポーズも決まっているの？

A. カードデッキを鏡に向ける際、カードデッキは左手で持ち、左手の上に右手を添えるようにして構えます。そこから両手を左右に大きく離してから「変身」の掛け声を発した後、カードデッキを装填する動作と、胸の前に持つて行った右手で拳を握り締める動作を同時に行い、変身完了……という流れになります。

胸の前で拳を握り締める動作は、『仮面ライダーOOO』に登場する伊達明／仮面ライダーバースの変身ポーズが元ネタです。

こちらにも【CLAWs サソリ】という蠍の要素があったので。

Q. アネットは魔法は得意じゃないの？

A. 父親共々、リンカーコアはありません。ライダーになる前は普通の一般人でした。

その為、彼女は戦闘においては完全に素人で、そもそも劇中では妊娠中だったが故に全力を出せる状態ではありませんでした。

妊娠しておらず、長きに渡って戦い続けていったならば、それなりに実力は付いていたかもしれませぬ。

Q. 成瀬に従っていた不良達は、アネットの事は知っていたの？

A. 手下の不良達の間でも一応、「成瀬さんに彼女がいる」程度の認識はありました。

もちろん、不良達がアネットに会おうものなら即座にスコングナツクラアの胃袋行きです↑

Q. 彼女の結末はどのようにして決まったの？

A. アネットにキャラ付けする上でテーマとなった【色欲】とは、生物としての「種を存続させよう」という本能から来る欲求を指します。

その強い性的欲求を抱えた彼女は、成瀬の行方がわからなくなっただけから、彼の子供を産む事で【愛する成瀬が存在していた証をこの世に残したい】と考え、同時に【成瀬がいない寂しさをなくしたい】という目的を持つようにもなりました。

しかし忘れてはいけない、これは龍騎を題材にした物語です。成瀬と同じく人を殺めてしまっている以上、そんな願いは叶うはずがありません。

結局、彼女は初めて遭遇した自分以外のライダーに敗れ、契約破棄となった事でスカルピアッサにお腹の子供ごと一緒に捕食されるといふ、悲しくも因果応報な結末を迎える事となってしまいました。

【愛する成瀬が存在していた証をこの世に残せず、かつ最期まで孤独なまま死んでいく】……それこそが、彼女が受ける事になった報いなのです。

Q. 彼女を倒したライダーは一体何者？

A. もちろんここでは言いません（チユドーン

とはいえ、このライダーの詳細については、龍騎ファンの方ならすぐに分かる事でしょう。

なお、変身者は「TV本編に登場した『彼』ではありません」。ヒントは【胡椒】です。

という訳で、今回の解説はここら辺で切り上げようと思います。  
それではまた。

## 浅倉×トローレ IF

これは、機動六課が初めてナンバーズやルーテシアと戦ったその日の深夜の出来事。

機動六課、そしてライアやファムとの戦いを途中で中断させられた浅倉威／仮面ライダー王蛇は、苛立ちのままに味方であるはずのナンバーズにまで襲い掛かり、トローレを始めとした一部のメンバーによって、苦難の末に取り押さえられる事となった。

その後、浅倉は研究所<sup>ラボ</sup>の地下に存在する独房に幽閉され、当然カードデッキも没収された。それでも苛立ちが収まる事のない浅倉は、壁や鉄格子などに何度も頭突きするなどしてひたすら暴れ続け、長い時間が経過してからようやく大人しくなったのである。

なお、浅倉がナンバーズ相手に暴れた結果、セインやデイエチの武装も多少だが損傷してしまった。損害を出した責任を浅倉に取らせる為、スカリエツティはトローレにある事を命じたのだった。

それは……

「ん、じゆる、じゆずず……」

「ッ……お、おお……」

地下の独房、とある牢屋。椅子に座らされたまま、上半身は鎖を巻きつけられ、口元はマスクを装着させられ、嚴重に拘束されたまま身動きが取れない浅倉。そんな彼に対し、トローレが現在やっている事は……

「ん、ぷはっ……どうだ浅倉、私の舌使いは。悪くない心地良さだろう？」

「ッ……ああ……悪くない」

そう、浅倉との性行為だった。ズボンとパンツを脱がされ露わになった浅倉の肉棒を、トーレが口と手を使って扱っている。先端の龟头をトーレが口で頬張るように包み込んだ状態から、舌先で龟头を丁寧に舐め回し、いやらしい音を立てて吸い上げる。それと共に、浅倉も心地よさそうな目で天井を見上げ、全身を僅かに震わせる。

「じゅるる……ふう。しかし浅倉。貴様、妙に大人しくやられているな。どういう風の吹き回しだ？」

「ああ……今もイライラは収まつちやいねえ。イライラし過ぎて、とっくにおかしくなっちゃまつてるよ」

「一周回って逆に大人しくなるレベルか……だがまあ、それはそれで都合が良い。私も目的を達成できる」

そう言うと、トーレは浅倉の肉棒から一旦離れて立ち上がり、浅倉の上に座り込むようにして強く密着する。この時、トーレは身に纏っている青いボディースーツの股間部分を既に自分で破いており、露わになった彼女の秘所は愛液に濡れていた。

「ん、くう……い」

「おお……ッ」

トーレは浅倉の肉棒を掴み、自身の股間まで導いてから秘所に押し当て、下半身を一気に降ろした。それにより肉棒が一気に膣内の奥深くまで入り込み、あまりの快感に2人は全身をブルリと震わせる。

「あ、んんっ……全く、何度やっても凄まじいものだな……い」

トーレにとって、浅倉とこうして性的に交わるのはこれが初めてではない。

彼女が何故浅倉とセックスをする事になったのか……それはスカリエッティのちよつとした興味が始まりだった。

ナンバース一同の胎内に仕込まれている、スカリエッティのクロー

ンを生み出す為のコピー因子。

そこに戦闘力の高い人間の遺伝子を組み込んだら、どれほど強力なクローンが誕生するのかわかるか？

スカリエツティがそれに興味を持ち始めたのは、クアットロが仮面ライダーブレードに変身する青年——斉藤雄一を利用して性的な実験を行っている事に、彼が偶然気付いてからだ。

クアットロは雄一とセックスをする事で、スカリエツティの優秀な頭脳と雄一の高い戦闘力が合わさった、より強いクローンを妊娠しようとしている。

その為、スカリエツティはもう一人の仮面ライダーである浅倉を利用し、クアットロとは別のメンバーにもまた、より強いクローンを産んで貰おうと画策するようになった。

そこでお声がかかったのがトールである。

『という訳でトール、ちょっとばかり頼まれちゃってこないかな？』

『は、はあ……』

最初はもちろん、スカリエツティの突然の無茶ぶりにトールも困惑の表情を示した。しかし敬愛するドクターからの頼まれ事である以上、拒否する理由も彼女にはなかった。

そして彼女は、牢屋に幽閉中だった浅倉にもその事を打ち明け、スカリエツティの実験に協力するよう迫ったのである。

それに対し、浅倉の反応はと言うと……

『……頭でもおかしくなったか？』

『それは思っても言うな』

……とまあ、大体こんな反応であったのはトールの記憶に新しい。むしろ浅倉じゃなくても大体同じような反応が返って来る事は想像に難しくない。

しかし一度やると決めた以上、トールは躊躇う事なく実行に移した。もちろん浅倉も暴れて抵抗したが、そのたびにトールが生身の彼に腹パンを決める事で黙らせた。

結果、浅倉を嚴重に拘束した状態でセックスを行う事になり、トールは自らの処女を失う事となった。そして初めて味わう事となった

セックスの快感に、思わず夢中になってしまいそうだった。

一方で浅倉も、今まで経験した事のないセックスの気持ち良さに対し、困惑にも似た感情が生まれ出ていた。驚く事に、この時の彼はいつものイライラが発生する事もなく、不思議な感情を抱いたままトールとの初めてのセックスを終えたのだった。

それ以降、トールはこうして独房にやって来ては拘束中の浅倉とセックスを行い、彼の精液を自身の子宮に溜め込む日々は続いていった。トール自身はあくまで「スカリエッティの命令だから」という理由で行っているだけのつもりだったが、浅倉と行うセックスの快感を味わっている内に、いつしか「悪くない」と思い始める自分も現れるようになったという。

浅倉もまた、拘束されたまま何もできない苛立ちを抱えては、彼女とのセックスによる性的快感で苛立ちを発散するようになっていった。セックスをしている間だけは彼も攻撃的な表情はあまり見せず、ただひたすら彼女とのセックスに没頭し続けている。

「ん、はあっ……相変わらず、奥まで届くほどデカいな……お前のここは……!!」

そして現在。トールは対面座位の体勢から浅倉の首元に両腕を回し、彼に抱き着いて強く密着しながら腰を上下に激しく振り続けた。彼女が腰を振るたびに、肉棒が入っている彼女の秘所はズチュツジュプツと愛液による水音を立てながら、独房内にいやらしく響き渡らせていく。そして浅倉の上半身には、青いボディースーツに包まれたトールの豊満な乳房が押し当てられ、それが浅倉をより性的に興奮させる要因となっていた。

「う、おお……ッ……!!」

「ん……なんだ、出るのか？ ならばそのまま出せ。私の子宮に、一滴残らず注ぎ込め……ん、くう……ッ!!」

射精までそう時間はかからず、肉棒が子宮口に到達すると同時に精液が放出される。胎内で精液がドクドク注ぎ込まれていく感覚に、トールは浅倉に抱き着きながら絶頂に至った。

(ッ……また、この男のが、中に……)

トーレからすれば本来、浅倉は手間のかかる凶暴な肉食獣ぐらいの認識しかなく、むしろ嫌悪感すら抱いていた。しかし彼とこうして情事を行い続けていく内に、不思議と彼に対する嫌悪感は徐々に消え失せていき、今では彼に種付けされる事にも抵抗がなくなっていた。それどころか、自身の肉体で浅倉が興奮している事がわかり、何故だかそんな彼に可愛らしさという物まで感じ始めているほどだった。

「ん……まだ続けられそうだな」

射精が終わってもなお、浅倉の肉棒が萎える様子がない。その事を膣内で感じ取ったトーレは一度浅倉の上半身から体を離し、ボディスーツの胸元部分を両手で無理やりビリビリと破く。それによって、彼女の豊満な乳房が浅倉の眼前に晒され、その薄いピンク色をした乳首は既に固く勃起していた。

「まあ、口だけならば問題はあるまいか」

そう言って、トーレは浅倉の首元に手を回し、彼の口を覆っていたマスクを取り外す。それによって浅倉の口が解放される。

「また少し、胸が張り始めていてな」

トーレが自分の手で乳房を揉みしだくと、乳首の先端から白い液体がピュツと噴き出し始めた。彼女もまた、スカリエツテイに改造処置を施して貰った事で、クアット口と同じように母乳が出る乳房にして貰ったのだ。

「まだやり足りないだろう？ 遠慮はいらんぞ」

トーレは自身の乳房を両手で持ち上げ、母乳が噴き出ている乳首を浅倉の顔の前まで近付けていく。すると浅倉は特に何か言う事もなく、目の前にあつた彼女の乳首をパクリと啜え、彼女の甘くて美味しい母乳をチュウチュウと吸い始めた。

「んっ……全く、そうがつつくな馬鹿者め……！」

口ではそう言いつつ、トーレは満更でもない様子で笑みを浮かべながら、自身の母乳を吸い尽くそうとする浅倉の頭を愛おしそうに撫で続ける。すると彼女の膣内で浅倉の肉棒がまたムクムクと元気を取り戻していき、それに気付いたトーレはまた腰を振り始める。

「ん、あぁっ……良いぞ浅倉……もつとだ……!! お前のその汚らし

い子種を、もつと私の子宮に植え付けて……お前との子供を、この私に産ませてみせろ……ッ!!」

自分が現在こうしているのは。あくまでドクターの命令を遂行する為に過ぎない。

そう、命令を遂行してやっているのだから、少しくらい楽しんだって罰は当たらないはずだ。

トーレは自分にそう言い聞かせながら、浅倉に母乳を吸われる感覚に身を震わせながら、腰を何度も激しく振って彼の精液を求め続ける。浅倉の肉棒が再び射精に至り、トーレの子宮が再び白く染め上げられていったのは、それから数十秒後の事だった……

T o b e c o n t i n u e d …… ?

## ウエンディ IF

俺の名はラッド・カルタス。

時空管理局地上本部で、陸士部隊の捜査主任を務めているが、局員だ。

JS事件から4年が経過し、今なお犯罪の絶えないこのミッドチルダで、俺は忙しく働いている。あまりに忙し過ぎて、現在住んでいるアパートに帰っても、やる事は酒を飲むかベッドに寝転がるか、それぐらいしかない。今となっては酒とベッドだけが俺の恋人だった。

しかし、そんな俺の日常は、ある日を境に突如終わりを告げた。

先ほどは酒とベッドだけが恋人だと言ったが、実はつい最近、俺に真正銘本物の恋人ができたのだ。

その恋人は生まれが特殊で、数年前までは少々複雑な事情を抱えていたのだが、現在は人間社会に上手く適応し、普通の女の子として平穩に生きている。

彼女は今、俺が仕事から帰って来るのを心待ちにしている事だろう。そう思いながらアパートに帰宅し、玄関の扉を開けてみれば……ほら思った通りだ。

「おかえりなさいッス、カル兄♪」

彼女はウエンディ・ナカジマ。

かの次元犯罪者、ジェイル・スカリエツテイによって生み出された戦闘機人「ナンバーズ」の1人にして、現在はゲンヤ・ナカジマに引き取られたナカジマ家の一員……そして、俺の愛しき恋人である。

「ああ、ただいまウエンディ」

数年前まで、彼女は管理局による監視下の元、他のナンバーズの娘達やとある少女、そしてとある青年と共に、更生プログラムを受け続けてきた。一時期は俺も部下のギンガ・ナカジマと共に、そんな彼女達の教育係を務めていた事があった。

そのナンバーズの中でも、ウエンディが一番と言って良いほどノリが軽く、誰とでもすぐに打ち解けられるくらい明るい性格である。当時はまだ気難しい一面があったノーヴェちゃんの事も、彼女がよく

引っ張ってあげていたのは今でも記憶に残っている。

そんなウエンディに欠点があるとすれば、まあ少し言い方は悪く  
なってしまうが……一言で言ってしまうえば「アホの子」である。勉強  
の時はいつも彼女が成績最下位であり、掃除をさせれば更に部屋が散  
らかり、料理をさせればとんでもない激マズ料理が出て来たりと、彼  
女の教育はかなり苦勞させられた。当時、ウエンディ達と一緒にプロ  
グラムを受けていた雄一君もよく手伝ってくれていたが、彼には感謝  
の気持ちでいっぱいである。

その後、ゲンヤさんに引き取られてナカジマ家に加わったウエン  
ディだったが……ある日、俺は彼女の行動に大いに驚かされる事と  
なった。

『ずっと好きでした……つ、付き合ってくださいッス!』

『な……ええっ!?!』

なんと、彼女の方から俺に愛の告白をしてきたのだ。これには流石  
の俺も面食らわされた。

聞いてみたところ、厚生プログラムを受けていた頃から、ずっと自  
分達の世話を焼いてくれた俺の事を強く意識するようになっていた  
らしい。雄一君に対しては好意を抱いていないのだろうか。それも  
彼女に聞いて確認してみたところ……

『もちろん、雄一兄にも感謝はしてるッスよ? でも雄一兄には元々、  
デイエチとルーテシア嬢が目を付けてたっぽいんで、アタシじゃ手の  
出しようがないッス』

……との事だ。何にせよ、ウエンディが俺の事を好きになってくれ  
ていたのはとても嬉しい事だ。その後も何度か「本当に俺なんかで良  
いのか?」と問いかけてみたが、彼女の意志は少しも変わる事はな  
かった。結果、俺達は正式に恋人同士の関係になった訳である。

周りの人達からは祝福の言葉を授かった。ギンガやナカジマ家の  
面々、雄一君達もまるで自分の事のように嬉しそうにしていた。

ただまあ、ゲンヤさんからは祝福ついでに強烈な拳を一発お見舞い  
されたのだが。曰く、父親として絶対にやりたい事の1つだったとい  
う……将来、ウエンディとの間に生まれた娘が彼氏を連れて来る事が

あれば、自分もゲンヤさんと全く同じ事をするんだろうな。

そんな事を思いながら、俺は脱いだ上着をウエンディに預け、首元のネクタイを外す。今となっては、彼女が俺の部屋に泊まる事も当たり前の事になっていた。

「ご飯もうできてるツスよ。それとも先にお風呂にするツスカ？」

「ああ、そうだな……今はかなりお腹も空いてるし、先にお腹を満腹にしたい」

「ご飯ツスね、了解♪」

かつてはダメダメだった家事も、今では掃除、洗濯、料理、どれも完璧にマスターしている。リビングから漂って来る美味しそうな料理の匂いが、俺の食欲をそそってくれる。コンビニ弁当だけで済ませていた頃の生活が、まるで遠い昔のようだ。

「あ、そうだカル兄。ご飯を済ませたら……お風呂入る前に、今日も一緒にどうツスカ？」

「ツ……!!」

そして最近困っているのが、彼女はたまにこうして、俺の腕に抱き着いて来る事がある。そのたびに彼女の大きくて柔らかかなおっぱいが押しつけられて、嫌でも俺の下半身の息子がムクムクと元気になってしまう。そんな誘惑の仕方を一体どこで覚えてきたのか、試しに聞いてみたら……

『前にルーテシア嬢が言ってたツス。こうすれば男は皆イチコロよ☆って』

それを言ったのがまさかのルーテシアちゃんだった事に俺が一番驚いている。昔は無口だったはずの彼女が、一体何をしたらあんな明るくハイテンションな性格になってしまったのか。でもまあ、俺は取り敢えずこう言いたい……ナイスですルーテシア嬢。

「あれ、なんかここが大きくなってるツスよく？」

ぐ、俺の息子が元気になってる事に気付きおったか。今の彼女は黒いタンクトップと青いホットパンツしか身に着けていないから、彼女のおっぱいの谷間が丸見えな上に、白くてスベスベな太ももをさりげなく俺の息子に押しつけて来ている……まずい、このままでは夕飯

を食べる前に彼女を襲ってしまいかねない。

「……後でよろしく頼む」

「了解ッス♡」

うん、駄目だ。やっぱり誘惑には勝てない。むしろ愛しい彼女がこんなにも積極的なのだ。据え膳食わぬは男の恥というもの。ここはしっかり乗ってやろうじゃないか。

しかしそれも良いが、今は空腹を満たすのが先だ。せっかく彼女が作ってくれた暖かい手料理が冷めてしまっただけじゃない。そういう訳で、まずは彼女が今回作ってくれたビーフシチューを美味しく味わう事にした。

「ちゅ、んん、ぴちやつ……」

そしてお待ちかねのセックスである。寝室のベッドまで移動した直後、我慢できなくなつた俺はすぐさまウエンディを抱き寄せ、プルンとした彼女の唇に俺の唇を合わせてキスを開始した。ウエンディもそんな俺のキスを拒む事なく、むしろ待ち望んでいたかのように俺と舌を何度も交差させ、俺達は獣同士が貪り合うかのような熱いキスを数分間ほど続けていた。

「ちゅぱっ……もう、いきなり過ぎるッスよ」

「お前がそのおっぱいで誘惑してきたのが悪い」

タンクトップの上から、彼女の大きなおっぱいを揉みしだくと、彼女も「あん♡」とエッチな声が漏れ出す。俺はそれを何回も聞きたくて、彼女のおっぱいを両手で優しく揉みしだいていく。

「そういえば、ブラジャーは着けてないんだな」

「んっ……今のブラジャーが少しキツくなってきたから、カル兄の家

にいる時は外してるッス」

「ああ、なるほど。道理でおっぱいが前より大きい気がした訳だ」

初めて会った4年前からそれなりに大きかったウエンデイのおっぱいだが、まさかこの4年間で更に大きく成長しているとは。一体何をどうしたらこんなに大きくなるのか……アレか、俺が何度も揉みまくったからか。実際に彼女のタンクトップを上を捲って確認してみたが……

「うん、何度見ても良いおっぱいだ」

「ん、あつ……カル兄、手つきがいやらしいッスよ……♡」

やっぱり直に揉んでみると全然違う。手で優しく揉みしだき、手を離すとプルンと弾んで元の形に戻る。この光景は何度見ても飽きないものだ。おまけに気付いた頃にピンク色の乳首も固くなつてきており、指で突つつくように弄るだけで、頬を紅潮させたウエンデイが全身をビクンと震わせる。俺はそんな様子の彼女をずっと見ていたくて、顔を近付けてから乳首をペロリと一舐めしてやった。

「あんっ♡ そ、それ、良いッス……♡」

ウエンデイが喜んでくれたので、遠慮なく乳首をパクツと啜えてからチュウチュウ音を立てて吸ってやった。その後も舌先で舐めるように舐め続けている内に、ウエンデイもいつの間にか目かろんとし始めていたので、片方の乳首を舐めながらももう片方の乳首を指先でコリコリと摘み、彼女がイクまで徹底的に弄り続けた。

「んう……ッ!!♡」

ウエンデイが一瞬大きく体を仰け反り、全身をビクビク震わせた。どうやら乳首でイッてくれたらしい。続けて彼女の体をベッドに押し倒してから、彼女のおっぱいをひたすら舐めしやぶり続けた。乳首だけでなく、乳輪やその周りも俺の唾液でベタベタになるくらい塗りとくってやった。

「あん……カル兄、大きな赤ちゃんみたいッス……あつ♡」

こんなおっぱいを目の前にして、男が理性を保つ事などできるだろうか。否、できる訳がない。赤ちゃん呼ばわりされようが、こんな綺麗な彼女のおっぱいを好きにできるなら、周りから何と呼ばれようが

構いはしない。

「カル兄、そろそろ下も……」

「ああ、下だな」

ウエンデイから催促されたので、次は下も攻めてやる事にした。彼女が履いていたホットパンツを脱がせると、彼女が下に履いていた白いショーツが露わになる。よく見ると、股間の部分が少しだけ濡れている。

「もう濡れてるな」

「ん……カル兄のせいッスよ♡」

濡れている股間部分を指でショーツ越しに軽く擦ってみると、クチュクチュと水音が立って凄くいやらしい。この時ウエンデイがまたピクンと反応していたので、俺は調子に乗ってショーツの下に右手を入れ、今度は直に指先で弄ってやる事にした。

「ひゃん!? カ、カル兄、そこは……ッ!!」

「もつと気持ち良くしてやる」

割れ目に指を少しずつ入れていき、ウエンデイが何度も体をピクピクさせるのを見ているだけで、俺も興奮が収まらなくなってきた。彼女のおそこに入れた指先をゆっくり動かしながら、彼女のおっぱいを左手で揉みしだき、母乳を求めるかのように乳首を吸ってやると、ウエンデイの喘ぎ声が段々止まらなくなっていく。

「あ、ああ、駄目、カル兄、カル兄い……!!」

「イッて良いんだぞ、ウエンデイ」

「ん、あ……ひゃああんっ!!♡」

乳首を甘噛みし、クリトリスを指先で優しく弄ってやる。それらを同時に行った瞬間、ウエンデイが背中を大きく反り上げながら激しい絶頂に至った。全身素っ裸のまま汗だくになっている彼女の痴態は、いつ見ても美しく、もつと虐めてやりたくなる。

「はあ、はあ……ッ……」

「ウエンデイ……こっちも頼めるか?」

こうしている間に、俺の下半身の息子はこれまたギツチギチに固くなっていった。ウエンデイの目の前に俺の元気になった息子を見せつ

けてやると、ウエンデイは荒い呼吸を整えながらも、小さく笑みを浮かべながら俺の息子に顔を近付けてきた。

「ん、カル兄の臭い……チュツ……♡」

ウエンデイが俺の息子の先っぽに軽くキスした瞬間、思わずイキそうになってしまったが必死に我慢した。しかしそんな俺の思考など露も知らないウエンデイは、俺の息子を手でゆっくり掴んだ後、先っぽを舌先でチロチロ舐めながら優しく扱き始めた。

「ちゅ、れろ……あむっ」

「うお、くっ……!!」

俺の息子がウエンデイの口に啜えられ、啜内で先っぽをいやらしく舐め回されている。しかも時折ジュルルと音を立てて吸い上げようとするものだから、思わず彼女の口の中でイッてしまいそうになる。俺は必死に我慢しながら、彼女の舌技でもっと先っぽを気持ち良くして貰った。

「んん、じゅぽっずじゅるる……!!」

「ぐ、あぁっ……ウエンデイ、そろそろ……ッ!!」

マズい、そろそろ耐えられない。俺は彼女の口の中で1回出してしまおうと思ったが、その前にウエンデイが口を離し、俺の息子をギョツと強く握り締めてきた。

「ぐっ……!?!」

「まだ出しちゃ駄目ッスよ、カル兄」

ウエンデイが息子を握ってくれたおかげで、辛うじて射精に至らずに済んだ。その後、ショーツを自分から脱ぎ捨てたウエンデイは、ベッドに寝転がってから自分の股を大きく開き、濡れに濡れている綺麗なアソコを俺に見せつけて来た。

「出したいなら、こっちにするッス……♡」

サーモンピンク色に輝くアソコを、ウエンデイが自分の指で左右に広げて中を見せつけてきている。それを目の前でされている以上、俺はもう自分の中にあった理性をどっか遠くに投げ捨てていた。

「挿れるぞ、ウエンデイ」

「良いッスよ……く、あぁっ!!♡」

息子の先っぽをウエンデイのアソコに宛がった後、割れ目に食い込ませるようにゆっくり挿し込ませ、そして一気に奥深くまで突き込んだ。これまで既に何回か侵入した事があるウエンデイの膣内<sup>ナカ</sup>だが、何度やっても飽きないくらい彼女の膣内<sup>ナカ</sup>は締めりが凄かった。

「ん、あ、あん、はあっ……!!♡」

俺がゆっくり腰を動かし始めると、彼女の膣内<sup>ナカ</sup>が俺の息子をキュウキュウ締め付けて来る。まるで俺の子種を早く搾り取ろうとしているかのようで、少しでも気を抜けばあっという間に射精させられてしまう。

「ああ、気持ち良い……気持ち良いぞウエンデイ……!!」

「ああんっ!!♡ カル兄、カル兄イ……!!♡」

ウエンデイが俺の首元に両腕を回してきたので、俺は彼女と唇を合わせてキスしながらピストンを続けた。もっと彼女の膣内<sup>ナカ</sup>を味わっていたかったが……ああ、駄目だ。やっぱ耐えられない。

「ぶはっ……ああウエンデイ、出すぞ……中に出すぞ……!!」

「ん、ああっ!!♡ 出して、カル兄の……中に出して……あ、あ、あ、ああっ!!♡」

「ウエン……ッ!!」

俺はウエンデイと体を密着させ、腰を強く打ちつけてから彼女の膣内<sup>ナカ</sup>で絶頂した。俺の息子がドクドクと小さく震えるたびに、その先っぽから放たれた白くて粘っこい子種が、膣内<sup>ナカ</sup>の奥深くにある子宮へと注ぎ込まれていく。

「ん、ちゆ、んむう……♡」

射精が収まるまでの間、どれだけの時間が経過したかは覚えていないが、俺とウエンデイはその後も飽きずにキスを続けていた。そしてようやく唇が離れた後、ウエンデイがとろんとした熱い視線を俺に送ってきた。

「はあ、はあ……カル兄、気持ち良かったッス♡」

「はあ、はあ……ああ、俺も凄く気持ち良かったぞ。ウエンデイ」

「ん……お腹の中、凄く熱いッスね……♡」

ウエンデイの下腹部は今、俺が注ぎ込んだ子種でいっぱいになって

いる。子宮に届くんじやないかってレベルでたくさん注ぎ込んだのだ。もしかしたら受精して、彼女を妊娠させてしまうかもしれない。そう思っただけで、俺の息子がまた元気を取り戻し始めた。ウエンデイも膣<sup>ナカ</sup>内の感触で何となくそれに気付いたのか、小さく微笑みながら俺に問いかけて来た。

「まだ続けたいツスカ？ アタシはいくらでも付き合えるツスよ……♡」  
「ッ……」

本人がそう言うて来た以上、もはや自重する理由はない。俺はまた腰を動かし、再び元気になった息子で彼女の膣<sup>ナカ</sup>内を蹂躪し続けた。

「あ、ああっ!!♡ 良い、気持ち良いツス!!♡ もつと、もつとお……ツ!!♡」

明日から2日間ほど休みだったからか。その後も俺達は飽きる事なく、何度も体を重ね合った。正常位で2発目を決め込み、3発目はバックで、4発目は騎乗位で、5発目は背面座位の体勢で膣内射精を決め込んだ。

「ウエンデイ、出すぞ、また出すぞ……!!」

「ん、ああっ♡ また、出てるツス……熱いのが、いっぱい……♡」

そして風呂場に来てからも、体を洗うどころかまだセックスを続けていた。立ちバックの体勢で彼女の腰を掴み、彼女の子宮内に何度目かもわからない種付けを行った。

「はあ、はあ……カル兄の……お腹がもう、たぶんたぶんツス……♡」

「そうだな。もしかしたら、これで俺の子供を妊娠したかもしれないぞ」

「あんっ……カル兄の、赤ちゃん……?♡」

「そうだウエンデイ……お前にはいつの日か、俺の子供を産んで貰うからな。まずはここで、1人目の赤ちゃんを孕ませてやる」

ウエンデイのお腹を撫で擦ってやると、彼女の膣<sup>ナカ</sup>内がまたキュツと締まるのを強く感じた。どうやら彼女の体も、俺の子供を孕みながっているらしい。これはぜひとも彼女の期待に応えてやらねばなるま

い。

「カル兄……カル兄の赤ちゃん、欲しいツス……!!」

「ああ任せろ……俺が必ず、お前をママにしてやるからな……!!」

ウエンデイがママになれば、この大きなおっぱいから栄養満点の母乳が出る事になる。彼女に授乳しながら手コキして貰うのも最高かもしれない。それができるようになる日が来るのを楽しみにしながら、俺は湯船の中でウエンデイと対面座位の体勢になり、再び子作りセックスに没頭していくのだった……

それから数カ月後……

「うし、準備完了……それじゃあ行って来るよ」

「行ってらっしゃい。あなた」

あるアパートにて、1組の男女が玄関前で軽いキスを交わしていた。それから扉を開けて出かけていく男性の後ろ姿を、微笑みを浮かべながら見届けた女性はその後、自身のお腹を優しく撫で擦った。

「また待ってるツスよ……2人で、一緒に」

かつては凹んでいたはずのお腹が、丸く膨らんでいた。

……  
そのお腹の中ではまた1つ、小さな鼓動が鳴り続けていたのだった

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
……?  
.

アリサ&すずか IF (☆)

色々な音が、眠っていた私を目覚めさせた。

「う、あ、ああ、はあっ……!!」

ベッドの軋む音。

男の荒くなつた呼吸音。

腰を何度も打ちつける音。

一体どれだけ長い時間これらの音を聞いた事か、私はもう全く覚えていない。覚える気にもならないくらい、私は聞き飽きていた。

「あ、ああ、気持ち良い……お前のオ○ンコ、マジで最高だぜえ……ツ!!」

下半身から強い刺激が襲つて来るたびに、仰向けに寝かされている私の裸体は、快感の震えを抑えられない。

男を押し退けようにも、両手は鎖でベッドに繋がれていて使えない。

足を閉じようにも、両足をM字に開かれたまま縄で縛られていて閉じれない。

助けを呼ぼうにも、ゴムボールのような何かを啜えさせられていて何も喋れない。

成す術がなかった。何も抵抗できない私を犯している男は、私の腰を掴んだまま決して離さず、これでもかと私の体に気持ちの良い刺激を与えて来る。

そしてそれらの音は、私の隣からも聞こえて来た。

「ん、あ、ああっ!! は、激しい……もつと、もつと突いてえ……ツ!!」

「ああ、良い、良いぞお……もつと気持ち良くしてやるからなあ……ツ!!」

私と同じように、付き合いの長い親友が今、隣のベッドで別の男に犯されている。彼女の場合は口を自由にして貰っている代わりに、アイマスクで視界を封じられていた。

口が自由に使える以上、彼女は助けを呼ぼうとする事くらいはでき

るはず。それをしないのはやはり、この時点で彼女の心が壊れてしまっているからなのだろう。

親友がそんな酷い目に遭わされているというのに、私の思考は至って冷静だ。もはや他人事のように見ているだけの自分がいる。それもきつと、私の心もとつくに壊れてしまっている事を証明しているのだろう。

「あ、ああ、出る、出るぞ!! 中にいっぱい出すからな……あ、ううつ!!」

また、私を犯していた男が達したらしい。彼の性器が膣の中で震えるたびに、私のお腹の中に熱い物がじんわりと広がっていくのが感覚でわかった。

「ククク、気分はどうだあ? お嬢さん達」

別の男が、こちらの顔を覗き込んでいる。背後に複数の化け物を引き連れながら、その男は憎たらしい笑顔で語りかけてきた。

「さて、これでもう何体目になるんだろうねえ……ククク、クハハハハハハ……!!」

私の名前はアリサ・バニングス。

親友の月村すずかと共に……誘拐された私達は今もなお、母親の役目を背負わされていた。

「う、ああつ……す、凄い……これが、バニングスさんのオ○ンコの感触……!!」

「夢みてえだ……月村とセックスできる日が来るなんて……!!」

場所はどこかの島で、ここは人のいない寂れた小屋。

あの日、ダーインとかいうゲス野郎に犯されてからというもの、私とすずかは毎日と言って良いほど、肉便器として扱われ続けた。あの

男に穢された私達の体は、あの男と同じ化け物へと変えられてしまった。

いつしかあの男は、自分で犯す事に飽きてしまったのか。ある時、街中から誘拐して来たという男達を利用し、彼等に私達を思う存分犯すように命ずるようになった。

男達は歓喜していた。彼等の視界には、ダーインに穢れに穢された私達の裸が映っているのだ。よほど理性を保っている人間でない限り、これに食いつかないはずがなかった。

それでも、中には私達を犯す事に抵抗がある者も数名ほどいた。その内の1人はかつての高校時代、私達と同じクラスで過ごしてきた男子生徒だった。

名前は確か、青山君だったか。彼は化け物へと姿を変えたあの男に怯えながらも、私達を助ける為に勇気を振り絞って、あの男に挑みかけた。その結果……返り討ちにされた彼はあの男に洗脳され、他の男達と同じになった。

「ああ、はあっ……バニングスさん……君のオ○ンコ、凄く気持ちが良いよ……!!」

今、こうして私を犯しているのがその青山君だ。隣ですずかを犯している男は確か、同じクラスだった窪谷君だろうか。昔、すずかに告白して振られてたのは私もまだ覚えている。

「ほら、どうだ月村、気持ち良いだろお？ なあ？」

「あ、ああ、良い!! 気持ち良い、気持ち良いよお……ツ!!♡」

青山君も、窪谷君も、本来は無理やり女の子を襲うような最低な人間ではなく、むしろ女の子を気遣えるとても優しい性格だ。

そんな彼等ですら、あの男の洗脳を受けてしまえばあつという間に、目の前の獲物を本能のままに貪り喰らう凶暴な獣と化してしまふ。

他の男達もそうだ。あの男に洗脳されるまでもなく、己の性欲を剥き出しにして私達に襲い掛かって来る。自分が満足するまで、体力が続くまで、飽きる事なく私達を犯し続けた。

そんな事を続けていれば……私達の体に異変が生じるのも、そう不

自然な話ではなかった。

「わかるかあ、月村ア……？　今ここに、俺達の愛の結晶がいるんだぞお……!!」

窪谷君が、ずずかのお腹に両手で触れている。彼に撫で摩られている彼女のお腹は、大きくポツコリと膨らんでいた。大きくなった彼女のおっぱいは、乳首の先っぱから白い液体が噴き出していた。

そして私も今、僅かにだがお腹が膨らみかけている。ここには既にまた1つ、新たな命が宿っているのだが、青山君はそれに気付いていない様子ではなかった。

そう、私達が子供を孕まされるのは、これが初めてではない。

かつてあのゲス野郎に犯された後、私達は最初にあのゲス野郎の子供を身籠り、そして出産した。産まれた子供達は産声を上げ、私達のおっぱいから母乳を求めた。

問題はその後だった。

私達の母乳をある程度飲み終えた赤子達は、凄まじい速度でスクスクと、大人の体に成長し始めた。そしてある程度成長したその直後、子供達はその姿を変え、化け物に変異していた。

ゲス野郎の子供を産む羽目になり、一度は正気を失いかけていた私達も、その光景には思わず目を疑った。それに気付いたのか、あのゲス野郎は殺してやりたいくらいムカつく笑顔で私達に告げた。

『これからお前達には、異形の子を産み続けて貰うぞ……私だけの軍団を作る為になあ……!!』

そう告げられてから、私達は再び抵抗し、必死に泣き叫んだ。けど無駄な事だった。その後も私達は何人かの子供を孕まされ、出産し、あの野郎の思うままに化け物を増やし続けていく羽目になった。

既に私とすずかの体が化け物になっていくからか。普通の人間の男性に孕まされた場合でも、産まれてくる子供は例外なく化け物に変異してしまうらしい。それを知ったあのゲス野郎は、他の人間の男達と子作りセックスをするよう私達に命じて来た。

そして誘拐して来た男達に私達を襲わせ続け……今に至る。

「はあ、はあっ……バ、バニングスさん……んむ、ちゅう、ちゅう……」

!!

青山君は私の膣内を堪能しながら、私のおっぱいを揉んで母乳を絞り出そうとしている。乳首の先端から噴き出たその母乳を、彼は音を立てて吸っている。まるで赤ん坊のように、美味しそうに味わっている。

今の彼は正気ではない。あのゲス野郎に洗脳された事で、心の奥底に閉じ込めていた欲望を解き放った。最初は私達を助けようとしてくれていた彼も、内心では裸で捕らわれている私達に対し、ああしてやりたい、こうしてやりたいという欲望が少なからず存在していたようだ。

「ぶはっ……ああ、好きだよ……俺、君の事が好きなんだ、バニングスさん……!!」

知っている。こう何度も犯されていれば、彼が私に好意を抱いていた事など嫌でも理解させられる。

「結婚しよう、幸せになろう……俺と一緒に、いっぱい子供を作ろう……!!」

その言葉は、これまで何度も聞いてきた。その言葉を聞いたたびに、私は何度も子供を孕まされ、この世に産み落としてきた。というか今もお腹の中に赤ん坊がいるのだから、あんまり激しくされるとお腹がキツイ。もちろん、口を塞がれているのでそれを伝える方法はない。「ああ出る、出るよバニングスさん……俺の、俺の子供を産んでくれ……ッ!!」

ああ、またこの時がやって来た。私の膣内で、彼の性器がブルリと震えた。そして私の胎内に、彼の熱い精液がドクドクと流れ込んで来た。それに呼応するように、私の心と体にも、電気のような衝撃が走り抜けた。

「く、ああっ……し、搾り取られ、る……ッ……!!」

私の膣内が、彼の性器をキュウキュウ締め付け、彼の精液を限界まで飲み込もうとしている。私の体はこんなにもいやらしく育ったのかと、自分で自分の体にちよつと引きそうになった。

「ぐ、あ、ああっ……出すぞ、中に出すぞ月村!!」

「ああん、来て、来てえ!! 私の中に、いっぱい注いでえっ!!!♡」

私の隣でも、さすがに窪谷君に膣内射精されたらしい。窪谷君がすずかの両足を押さえつけながら、彼女の膣内に精液を送り込む中で、すずかの口元は幸せそうな笑みを浮かべている。アイマスクで見えないが、きつと彼女の目は蕩けた瞳をしている事だろう。

「はあ、はあ……き、気持ち良かったよ、バニングスさん」

それを見ている間に、青山君の射精が終わったらしい。しかし射精を終えてもまだ、彼は私の膣内から性器を抜き取ろうとはしなかった。

「バニングスさん……俺、まだまだいけるから……バニングスさんが、俺の子供を産んでくれるまで……いくらでも種付けしてあげるから……!!」

青山君もまだまだ、私とのセックスを終わらせるつもりはないらしい。彼はもう一度私の腰を掴んで、セックスを再開しようとしている。

でもまあそんな事をしなくても、私はもう既に別の男の子供を妊娠している。その子供を産んだ後、今度こそ私は青山君の子供を孕ませれる事になるだろう。もしかしたら1人じゃ飽き足らず、青山君だけで何人もの子供を作る事になるかもしれない。

私はそんな先の未来に、何の恐怖もなかった。化け物の子供を産む事に、もう何の抵抗もなくなっていた。

どうせもう逃げられないのだ、せっかくだからこの状況を楽しんでしまおう。救われる事を諦めた私は、気付けばそう思うようになった。

「く、ああ、凄い……バニングスさん、凄く締まるよバニングスさん……!!」

そう思いながら私は、青山君が私のおっぱいを揉みしだきながら必死に腰を振っているその姿を、まるで他人事のようにジッと眺め続けた。

今度は何分で射精するのだろうか。そんな呑気な事を考えながら、私は青山君に体を委ねていた。

「ほほお、もうこんなに数が増えたとはなあ……！」

それから何日が経過しただろうか。

次に意識が覚醒した時、またあのゲス野郎がこちらを覗き込んでき  
ていた。

「凄まじい性欲だ……人間の欲望というのは、これだから面白いんだ  
……!!」

あのゲス野郎の後ろには、既に何体もの化け物が蠢いている。

灰色の体色をした化け物。

緑色の昆虫みたいな化け物。

ステンドグラスのような模様を持つ化け物。

星座の模様が体にある化け物。

全身が機械でできている化け物。

それらは全て、私とすずかがこれまでに産み落としてきた子供達  
だ。増え過ぎた子供達はいつしか、小屋の中に入り切らず、小屋の外  
に溢れ出すようになっていた。

あの後、私は青山君の子供も産んであげた。

すずかも、窪谷君の子供を産んでいた。

しかしこれだけ産んであげたにも関わらず、このゲス野郎はもっと  
子供の数を増やして欲しいと頼み込んで来た。

仕方ないから私達は、それを了承してあげた。この日もまた、私達

は別の男達に犯され続けた。

「う、ああ、やべえ……マジですつげえ締まるわ、アリサちゃんのマ○コ……!!」

「あ、ああ、幸せだ……僕のオ○ンポが今、すずかちゃんの、オ○ンコの中にい……!!」

今回もまた、見覚えのある顔ぶれだった。私を犯しているのが、高校時代にやたらブイブイ言わしていた不良生徒の山西君。すずかを犯しているのが、雰囲気やたら暗くて、眼鏡をかけたオタクっぽい顔つきで……ええつと、田中君だったっけ。確かそんな名前だった気がする。

「ああ、ああん!!♡ もつと、もつと激しくしてえ!!♡」

「んもお、本当に欲しがりだなあすずかちゃんは……!!♡♡ よおし、僕がまだまだいっぱい、すずかちゃんを気持ち良くしてあげるからねえ……!!♡」

対面座位になっただすずかが、田中におっぱいを吸われながら腰を何度も振られ、凄く気持ち良さそうな表情で喘ぎ声を上げている。かくいう私も、山西君にバックの体勢にされて、後ろからおっぱいを揉まれながら何度も激しく突かれている。

気付けば私達は、手足の拘束具、それからアイマスクもゴムボールも外されていた。もう私達が逃げないと判断したからなのだろう。これまでに何回か、自由になったこの口で男達の性器を啜えさせられた事がある。

「どうよアリサちゃん、俺のチ○コで狂わされる気分は?」

私の耳元で、山西君がそんな事を囁いて来た。彼は私以外にも複数の女子を抱いてきたらしく、悔しい事に彼とのセックスは凄く気持ちが良いと思っていた。だからそう伝えてみたら、気を良くしたのか更にヒートアップし、私を絶頂に導こうとしてきた。

「おら、中にたっぷり出してやるからな……俺のガキ、しっかり孕めよ……!!」

「ああ、はあ、ああっ……すずかちゃん、中にいっぱい出すからね……絶対、僕の可愛い赤ちゃん産んで貰うからねえ……あ、ああ、出る!!!」

そうして間もなく、彼等の種付けが始まった。私とすずかの子宮には、彼等の遺伝子が詰まった精液がたつぷりと注ぎ込まれ、内側が真っ白に染まっていく。

これで私は山西君の、すずかは田中君の子供を妊娠する事だろう。凹んだお腹は再び大きく膨らみ、そして新たな化け物の子供が産まれ落ちる。そうなれば、またあのゲス野郎が汚い笑顔を浮かべるに違いない。

ただまあ、そんな事はもうどうだって良い話だ。

今頃、家族や友達は行方不明になった私達を捜索している事だろう。

それに対して私は、誰にも見つからないで欲しいと思っていた。

もし見つかったら、こんなにも気持ちの良い事がもう二度とできなくなってしまう。

これからも、終わって欲しくない。

こんな幸せな時間が、ずっと続いていけば良い。

「あ、はあっ……お腹の中、熱いよお……田中君、もつと……もつといっぱい、中に頂戴……♡」

すずかもきつと、そう思っている事だろう。現に田中君に種付けされながら、幸せそうな表情でそんな事を口にしてるのだし。

だから私達は、彼等とひたすらセックスを続けていく。

次の子供を妊娠するその時まで、彼等の精液をひたすら胎内に浴び続けた。

「よおしアリサちゃん、俺がまだまだ種付けしてやるからなあ……何度でも孕ませてやるからなあ……!!」

「ああ、すずかちゃん……君はもう僕の女だ……僕のお嫁さんなんだ……これからもそのエッチな体を使って、僕の子供をいっぱい産んで貰うからねえ……!!」

何度でも孕ませてやる。

子供をいっぱい産んで貰う。

ああ、なんて良い響きだろうか。ただ聞くだけで、体中のゾクゾクが止まらない。

私達の体が渴望している。早く種付けして欲しいと。早く次の子供を孕ませて欲しいと。

そんな私達の想いが伝わったのだろうか、彼等が腰の動きがピタリと止まった。それと共に、私達のお腹の中でまた、熱い物がじんわりと広がっていくような感じがした。

「これはもう落ちたな……さて、次は誰を使って楽しもうかな……」

私達の耳に、その言葉が届く事はなかった。お腹の中が熱くなって更に気持ち良くなっていく中で、私達の意識は再び、深い闇の中へと落ちようとしていた……

T o b e c o n t i n u e d ……?

## ジークリンデ IF (☆)

ある理由から、僕は格闘技に興味があった。

インターミドルチャンピオンシップといった魔法戦技大会は、よほどの事がない限りは観客席で観戦するようにしている。観客席で見れない場合はテレビで視聴し、録画を絶対に忘れない。

僕が格闘技に興味を持つようになった切っ掛けは、格闘技の試合が見ていて純粹に面白いから……というのものもあるにはあるが、それ以外にもう一つ、かなり不純な理由がある。

それは試合に出る女性選手が、どれも美少女ばかりだからだ。

《バスターヘッド砲撃番長》ハリー・トライベツカ。

《雷帝》ヴィクトリア・ダールグリユン。

《結界魔導師》エルス・タスミン。

《天瞳流》の居合い剣士ミカヤ・シエベル。

どれも可愛らしく、美しい娘達ばかりだが、その中でも僕が特に可愛いと思っている選手が一人。

ジークリンデ・エレミア。

インターミドルチャンピオンシップで優勝経験があり、格闘技においてその名を知らない者はいないと言っても過言ではないであろう最強選手。

正直に言うと、僕は初めて彼女の容姿を見た瞬間に一目惚れした。

あらゆる強豪選手を退ける、僕と同じ年代とは思えない圧倒的な戦闘力。

それでいて、周りから注目されるのを好まず、人付き合いにも慣れていない恥ずかしがり屋な性格。

そのギャップに惹かれ、いつしか僕はすっかり彼女の虜になってしまっていた。

それ以来、彼女の試合だけは何がなんでも絶対に見るようにしている。塾などの用事が重なるものなら、仮病を使って休むほどだ。

エレミアさんのサインが欲しい。

彼女と握手したい。

あわよくばお近付きになりたい、そんなもって恋人同士になりたい。

彼女を想うと、人が考えてはいけない不純な事を色々考えてしまいが許して欲しい。僕だって男なのだ、可愛い女の子とあんな事やこんな事をしたという気持ちは少なからずある……まあ僕の場合はその不純な理由の方が割合は大きいのだが。

でも悲しいかな、彼女は超が付くほどの人見知り。それを差し引いても、インターミドル最強の選手である彼女に、こんなクソ雑魚な戦鬪力の自分は到底釣り合わない。エレミアさんとお付き合いをするなど、夢のまた夢の話。

だから僕は、こっそり盗撮したという友人から高値で買い取ったエレミアさんのバリアジャケット姿の写真を使って、隠れてオナニーするしかないのが現実だった。

しかし……それはもう過去の話。

今日この日……人が踏み越えてはならない一線を、僕は踏み越えようとしていた。

「……マジで?」

時刻は夕方。この日の授業を終え、家に帰ろうとしていた僕は、今まで近道しようと裏道を通ろうとした。そこで僕は見つけてしまったのだ……空腹のあまり行き倒れてしまっていた、エレミアさんの姿を。

「う、ううん……お腹、空いた……」

正直、最初に目撃した時は夢かと思っただが、何度も確認してみたところ、エレミアさん本人で間違いなかった。まさかこんな所で本物のエレミアさんに会えるとは思ってもみなかったから、僕は内心滅茶苦茶テンションが上がっていた。

実はここ最近、僕は暑くて眠れない日が続き、若干寝不足な状態だった。睡眠薬はその為に購入したのだが、そんな時に出くわしたのがこの状況である。またとないチャンスだと思った。

僕はすぐに近くのコンビニで弁当を購入してから、まだお茶の量が残っている自身の水筒に睡眠薬を投入。そしてそれらをエレミアさ

んに渡したところ、エレミアさんは歓喜の表情でコンビ二弁当に食いついた。弁当を美味しそうに食べるエレミアさんはやつぱり可愛かった。

そして睡眠薬入りのお茶を口にしたエレミアさんは、満足した様子で僕にお礼を言ってきたので、僕は「困ってる人がいたら助けるのは当然ですよ」と返しておいた。これから彼女に酷い事をしようとしている僕が言っただけの良い台詞じゃないのは自覚している。

その後、睡眠薬の効果が抜群だったからか、エレミアさんは大きな欠伸をしてから、数分も経たない内に深い眠りに落ち、その場で丸まって眠り込んでしまった。

ひとまず、第一段階はクリアした。後はグースカ眠っているエレミアさんをおんぶで背負い、近くの公園の大きな遊具の中まで運び終えてしまえばこちらの物。

汗拭き用に持っていた何枚かのタオルを遊具内に敷き、エレミアさんをその上に寝かせる。枕なしは流石に可哀想だと思い、僕のカバンを彼女の枕代わりにする。

これで準備は整った。後はこの状況を存分に楽しむだけだ。

「……ゴクリ」

僕の視界に映っているのは、敷かれたタオルの上に仰向けの状態で眠る、エレミアさんの姿。僕は小さく喉を鳴らしてから、彼女の頬を指先で軽く突っついてみた。しかし起きる気配は全くない。

続けて、彼女の寝顔から下の方へと視線を移す。視線の先にあるのは、ピンクのラインが入ったジャージに包まれた、彼女の大き過ぎず小さ過ぎない胸。僕は恐る恐る右手を伸ばし、彼女の左胸を触ってみた。

柔らかい。初めて女の子のおっぱいに触った、最初の感想がそれだった。ジャージ越しでも伝わってくる心地良いおっぱいの感触に、僕は思わず感動してしまった。

そこからは左手も使い、両手でエレミアさんのおっぱいを揉み始める。あまり強く揉むと痛がって起きてしまう可能性もある為、優しくゆっくり揉みしだく。

ジャージ越しでこの柔らかさなのだ。もし生で揉んだらどれだけ最高だろうか。早く彼女の生のおっぱいが見たいと思いい、おっぱいを包み隠しているジャージのフアスナーを指先で摘み、ジジジとゆつくり降ろしていく。それと共に、彼女がジャージの下に着込んでいた白いシャツが現れる。

シャツ越しに揉んでみると、先程よりも柔らかい感触が両手に伝わって来るような気がした。続けてシャツも上へ捲り上げると、何とも可愛らしいピンク色のブラジャーが姿を見せる。ここまで来るともう我慢し切れない自分がいて、すぐにブラジャーも上にズラし……遂に見たかった物が露わになった。

(おお……！)

美乳とはまさにこの事を言うのだろう。ぽよんと膨らんでいる山の頂点に、薄いピンク色の小さな突起がちよんと突き出ている。僕は遂に、あのエレミアさんの生おっぱいをこの目で見る事ができたのだ。

これが、エレミアさんのおっぱい。いつもはバリアジャケットを纏っている時でしかほんの一部分しか見る事ができないエレミアさんの生おっぱいが、こうして目の前に存在している。普段あんなに強いエレミアさんが、無防備に自分のおっぱいを曝け出している。

ニヤケ顔が止まらなかった。指先で乳首を一回だけ軽く突つつき、その後も数回に渡ってチョンチョンと突つついてみると、ほんの僅かにだがエレミアさんの体が振るように動いた。ヤバいと一瞬思ったが、これでもエレミアさんが起きる様子はない。

僕は自身の通信端末を取り出し、エレミアさんの寝顔と、彼女のおっぱいを一枚の写真に収めた。その後、僕は指先で乳首を摘み、引っ張っては離し、引っ張っては離しを何回か繰り返した後、いよいよその乳首に自身の舌を近付けていく。舌先が乳首に触れ、一度舌を引っ込めた後、舌を乳首に押し付けるように伸ばし、そこからゆつくり舐め回していく。

これが、これがエレミアさんの乳首の味。もちろん本当は味などしないのだが、それでも何だか美味しい味がするような気がして、僕は

舌を何度も上下させながら乳首を舐め回した。唇で乳首を挟んで、まるで母乳を求めるかのようにチュウチュウ音を立てて吸いつき、エレミアさんの生おっぱいをひたすら味わい続けた。

そして気付けばあつという間に、エレミアさんのおっぱいは唾液まみれになり、乳首は舐められたり吸われたりが続いた事で若干だがふやけてしまっていた。これを僕がやったのかと思うとますます興奮し、また顔を近付けてから彼女のおっぱいと乳首に何度もキスをしていった。

その後はようやく彼女のおっぱいから顔を離し、次の段階に進む事にした。彼女が履いているズボンに手をかけ、彼女が起きてしまわないうように静かに、かつゆつくりとズボンを下ろしていくと、その下からピンク色の花柄のショーツが現れた。

(エロ過ぎる……)

僕はエレミアさんの両足をゆつくり左右に開き、ショーツの股間部分の人差し指で触れてみた。エレミアさんが一瞬だけピクンと体を揺らす中、股間部分を布越しにシュツシュツと擦ってみると、少しだけ湿気を帯びている事に気付いた。

もしかして、おっぱいを吸われた事で感じたのだろうか。何度も股間部分を指で擦っていると、ほんの小さな突起物に到達した。恐らくこれがクリトリスだろう。ショーツを横にズラすと、遂にエレミアさんの大事なアソコが僕の目の前に出現した。

陰毛はちよっぴり生えている程度で、女の子にとって一番大事なアソコは、割れ目がぴったり閉ざされている。僕が指先でゆつくり開いてみると、その開いた先から綺麗な薄いピンク色の内部が見えるようになった。

(こ、これがエレミアさんの……)

もちろん、僕はすぐに通信端末で写真に収めた。片手の指で器用に割れ目をくぱあと開いたまま、僕はその綺麗なアソコを何枚も激写する。既にパシャパシャとカメラの音が鳴っているのに、これでもエレミアさんが目を覚ます心配はない。

写真を撮った後、僕はその割れ目に顔を近付け、ゆつくり舌尖を近

付けていく。そして彼女の大事なところを、ペロンと舐め上げた。  
美味い。

これがエレミアさんの味。

僕は僅かに残っていた理性を遠くに吹っ飛ばし、彼女のアソコに食らいついた。舌先で割れ目の入り口をペロペロと舐め回し、小さく突き出ているクリトリスを突つつくように舐め続ける。そうしている内に、少しずつ穴の中から蜜のような何かが溢れ始めた。

僕はそれも舌で舐め取り、唇を引っ付けてから一滴も零すまいと強めに吸いついた。ジュルジュルと液体が啜られる音が鳴り、寝ているエレミアさんも「ん……」と小さく喘ぎ声を漏らす。僕はそれらを耳にしながら、ひたすら彼女のアソコの蜜を舐めしゃぶり続けた。

それが数分間続き、愛液と唾液にまみれたエレミアさんのアソコはすっかりふやけ、アソコの周りには僕が付けたキスの跡でいやらしい事になった。彼女のアソコの臭いを嗅いでいる内に、僕は段々我慢ができなくなってきた。

僕の大事なオチンチンは、今もギンギンにまつすぐ伸びている。自慢ではないが、僕のオチンチンは学校のクラスメイトの中でも特に大きい方ではないかと思っっている。そんな大きなオチンチンが、これからエレミアさんのアソコに入る……そう考えた瞬間、僕の中で大事なブレーキが音を立てて壊れた。

「挿れるよ、エレミアさん……」

もしエレミアさんが処女であるなら、それは僕が貰ってしまいたい。彼女に僕の初めてを捧げたい。僕は固くて大きいオチンチンの先っぽを彼女の割れ目に押し付け、そのまま中に入れようとした……のだが、思うように上手く入らない。

焦るな、落ち着け僕。何度も自分にそう言い聞かせながら、僕はオチンチンの先っぽを使って割れ目の入り口を探り続ける。そしてようやく入り口を発見し、先っぽをゆっくり食い込ませるように奥深くへと突き込ませていく。

ああ、凄い。先っぽを入れるだけで、こんなにも気持ち良いなんて。危うく出てしまいそうになったが、僕は必死に我慢した。どうせ出す

なら膣内の奥深くに出してやりたい。

僕は出そうになるのを我慢しながら、オチンチンをどんどん奥の方へと進ませていく。すると先っぽが何かにぶつかってピタリと止まった。まだ僕のオチンチンは全部収まり切っていない。僕は何とかオチンチンを全部中に入れてたくて、少しだけ力を入れて奥深くに突っ込ませた。

何かを破るような感触があった。それと同時に、気持ち良さそうに眠っていたエレミアさんの表情が、今の一瞬だけ歪んだような気がした。

間違いない、これは処女膜だ。

僕は今、エレミアさんの処女を奪った。

僕がエレミアさんを「女」にしてあげたんだ。

内心、歓喜の気持ちに溢れ過ぎてどうにかなってしまいそうだった。まさかエレミアさんも、眠っている間に処女を奪われているなど思ってもいない事だろう。僕は早くオチンチンで彼女の膣内を堪能してやりたかったが、処女膜を破ったばかりでそれをやると流石にエレミアさんも痛くて大変だろうから、僕はまだしばらく我慢する事にした。

そして処女を奪ってから数分。そろそろ大丈夫かなと思い、僕はゆっくり腰を動かし、エレミアさんの膣内を堪能し始めた。先っぽが抜けそうなどころまで引き抜き、すぐにまた奥に突っ込む。それをゆっくり繰り返し、時間の経過と共にその速度を少しずつ上げていく。

ジュプツジュプツと音が鳴る。僕が腰を振る動きも、段々リズムカールになっていく。深い眠りについていてエレミアさんの口からも、小さな声で「あん、あつ……」と声が漏れ出ている。

ヤバイ、めつちや気持ち良い。エレミアさんの膣内がこんなに気持ち良いとは想像していなかった。僕は何度も腰を振りながら、まだやっていなかったエレミアさんとの唇でのキスを試してみる事にした。唇を合わせ、僕は彼女に自身のファーストキスを捧げた。

彼女の唇の間に舌を入れ込み、ピチャツクチャツと舌を交える。キ

スでも感じてくれているのか、膣内の締まりが若干強まっていくのを僕は感じ取った。

「エレミアさん、エレミアさん……!」

そろそろ限界が近付いてきた。このままエレミアさんの膣内で射精した場合、その後に何が起こるかは、学校で受けた授業のおかげで既にわかり切っている。だからこそ、僕はこれからエレミアさんにしようとしている事をやめられなかった。

「出すよ、中にいっぱい出すからね……!」

僕の出した精子で受精させたい。

僕の子供を妊娠させて、一生僕の女にしてやりたい。

その願望に思考を支配された僕は、腰を振るスピードを徐々に上げていく。きつとエレミアさんの体も、僕の子供を孕む準備を整えているところだろう。

「ああ出る、出るよエレミアさん……!」

駄目だ、もう我慢できない。僕はエレミアさんの細くしなやかな腰をがっちり掴み、オチンチンの先っぽを奥深くまで突き入れる。オチンチンの先っぽが壁らしき物に当たった瞬間、僕のオチンチンは限界に到達した。

ああ、凄い。いっぱい出てくる。

僕はエレミアさんの腰を掴んだまま、彼女の膣内の奥深くに大量の精子をぶちまけ続けた。全身をブルリと震わせながら射精するたび、エレミアさんの体も小さくピクッピクッと震えている。僕が射精し始めるのと同じタイミングで、彼女も絶頂に至ったのだろう。

僕は最後の一滴まで精子を注ぎ込み、もう出なくなっただと思っただころでオチンチンをゆっくり引き抜いた。エレミアさんのアソコからは、最初に破った処女膜の赤い血と一緒に、白くて粘っこい精子もとろりと流れ出て来ているのが見えた。

やった、やったぞ。

彼女を最後まで犯してやった。

これで彼女が僕の子供を妊娠すれば、それは彼女が僕の女になったという何よりもの証明になる。

僕は心から歓喜した。同時に、彼女を完全に自分の物にしてやりた  
いという気持ちにも駆られていた。一回出すだけでは飽き足りない  
と思った僕は、まだ僅かに固さが残っているオチンチンを綺麗にして  
貰おうと、その精子で汚れた先っぽをエレミアさんの口元に押しつけ  
てフェラさせようとした。

「んふお……ッ!？」

その時、僕も予想してない事態が起きた。未だ眠り続けているはず  
のエレミアさんが、眠ったまま僕のオチンチンをパクリと啜え始めた  
のだ。僕から無理やり啜えさせるような事はしていないはずなのだ  
が、まさか自分からフェラしてくるとは。僕にとっては嬉しい誤算  
だった。

エレミアさんは僕のオチンチンを頬張ったまま、先っぽを舌でペロ  
ペロ舐め回している。時折彼女の眉がピクツと反応するのは、恐らく  
舐めた精子の味が苦いからなのだろう。そう呑気に解説している内  
に、フェラされているのが気持ち良過ぎてまたオチンチンが固くなっ  
てきたので、彼女には悪いがここでストップして貰おう。

僕は彼女の口からオチンチンを抜き取り、再び彼女のアソコに押し  
当ててからズブリと深く挿し込んだ。一度挿入した後なのに、今もな  
お彼女の膣内は締まりが良いままだ。せっかくだからこの後もまた  
何回かは彼女の膣内で射精させて貰おうとしよう。

彼女の膣内を存分に堪能した僕は、彼女の膣内で二度目の射精に  
至った。既に一度射精しているにも関わらず、吐き出された精子は最  
初の時とほとんど変わりのない量だった。それから僕はまた、彼女  
の子宮内に精子をたくさん注ぎ込むべく、未だ固さを失わないオチン  
チンで膣内を蹂躪し続けた。

「はあ、はあ……エレミアさん……エレミアさん……!？」

今までは到底手が届かない領域にいた、格闘技で最強の座に位置す  
る少女。

そんな彼女が今、僕に成す術なく犯されている。

僕の精子を注がれて、僕の子供を孕まされようとしている。

そう考えただけで、僕の興奮は止まらなかった。一刻も早く彼女を

妊娠させようと、僕は無意識の内に腰を振るスピードがまた更に上がっていく。

「ああ、エレミアさん……孕んでくれ、妊娠してくれ、僕の子供を産んでくれ……ッ!!」

オチンチンを根元まで深く挿し込み、先っぽを子宮口にキスさせる勢いで押しつける。それと共に三度目の射精が始まり、子宮口に先っぽが引っ付いたまま精子を子宮内に直接注ぎ込んでいった。

ああ、気持ち良い。最高だ。

絶対に妊娠させて、彼女を永遠に僕の物にしてやる。

そう意気込んだ僕はオチンチンを引き抜いた後、精子が溢れ出ているエレミアさんのアソコを何枚もの写真に収めてから、再び彼女のアソコに挿入していっぱい楽しんだ。いつの日か出る事になるであろう母乳を楽しみにしながら、彼女のおっぱいをチユパチユパ音を立てて吸い、彼女の子宮に僕の精子を溜め込んでいった。

「元気な赤ちゃん産んでね、エレミアさん」

そう言いながら、僕はエレミアさんの下腹部を優しく撫でてあげた。そのせいかな、一瞬だけ膣内の締まりがまた良くなったような気がして、それが再び僕を射精に導いていった……

ラルゴ  
×????????  
I F (☆)

ラルゴ・クエイス。

年。八神道場に通い、ストライクアーツの練習に励んでいる平凡な少

彼はある時、道端に落ちていたカードデッキを拾ったのをきっかけに、ミラーワールド、モンスター、そして仮面ライダーの存在を知った。

ラルゴは憧れた。

モンスターから人を守る仮面ライダーの存在に。

この力があれば、自分もきつと仮面ライダーになれる。

大切な物を守るくらい、自分も圧倒的な強さを手に入れる事ができる。

ラルゴはそう思っていたが……現実はそう甘くなかった。

彼は知った。

モンスターと遭遇した時の恐怖を。

彼は知った。

ライダー同士が繰り広げる殺し合いの実態を。

現実を思い知らされ、彼の理想は跡形もなく崩れ落ちた。

そして、彼を支えようとする者達の言葉もあって、彼は力を手離す  
決意を固めたのだった。

では、もしもだ。

もしも、彼がカードデッキを拾った事に、周囲の者達が気付かなか  
ったら？

そうなった時点で、彼の……ラルゴ・クエイスの運命は、大きく狂っ  
てしまう事となる——

『グギャアアアアアアッ!?!』

「ッ……はあ……はあ……」

ミラーワールドにて、1体のソロスパイダーが爆散する。爆風が晴れていく中、1人の仮面ライダーが膝を突きながら、右手に持ったレイピア状の剣を地面に突き立て体を支えていた。

黒いアンダースーツの上に、銅色と青色による縞々模様の装甲を纏ったボディ。

首回りに巻かれた白い毛皮のようなマフラー。

両肩の装甲に生えている蜂の毒針のような装飾。

そしてカードデッキに刻まれた、蜂のような金色のエンブレム。

蜂の要素を併せ持ったその戦士—— “仮面ライダーハイヴ”はその手に持ったレイピア状の剣—— “バズフルーレ”を支えにフラフラと立ち上がり、爆風で黒く焦げている地面を見ながら拳を強く握り締める。

「や、やった……やったぞ……怪物を、やつつけた……!!」

歓喜の様子で拳を握り締めたハイヴは、ミラーワールドから現実世界に帰還してからその変身を解き、青年としての姿を露わにする。すると青年の体が一瞬だけ光り、青年から少年へと体が縮んでしまった。

「よし……やった、やったぞ……また、強くなれたんだ……!!」

この少年こそ、八神道場に通っていたあのラルゴ・クエイイスだった。ある日カードデッキを拾い、たまたま彼に襲い掛かって来たバズステインガー・ブロンズと土壇場で契約してしまった彼は、その契約に

よって仮面ライダーハイヴとしての力を獲得。八神道場の面々にも内緒で密かに練習していた大人モードへの変身能力も駆使し、ミラーワールドでモンスターと遭遇しては戦い続ける日々を送っていたのである。

(もつとだ、もつと強くなるんだ……この調子で、もつと、もつと……!!)

自分の力でモンスターを倒したという実感は、ラルゴの心に大きな自信を与えていた。それから彼は毎日のようにミラーワールドに潜り込んで、人を襲おうとしていたモンスターと戦い、倒したモンスターの魂をバズステインガー・ブロンズに与え続けた。

八神道場に通い続けていたのもあってか、それなりの戦闘スキルを身に付けていた彼は、ライダーとしての戦い方を少しずつ把握していき、それが彼に更なる勝利をもたらすようになった。

しかし、魔法で大人の姿に変身できると言っても、彼はまだまだ子供である。それ故から、彼の心に芽生えた大きな自信はいつしか、小さな驕りへと変わり始めてしまっていた。

(そうだ、僕は強くなったんだ……コイツ等にも負けないぐらいに……!!)

同じ八神道場の生徒との練習でも、倒した相手を見下すような態度を少しずつ取り始めるようになった。

当然、その点は先生であるザフィーラやシグナム、ヴィータ達からも注意されたものの、ラルゴは表向きは反省している風に見せるだけ。

反省するどころか、その傲慢な態度はますます増幅していき、一度はミウラにすら勝利した彼の暴走は止まる事を知らなかった。

勝利こそが強さの証。

だからこそ自分は強いのだ。

周囲の人間達の知らないところで、強さと勝利に固執し続けていくラルゴ。

そんな彼はある日を境に……人が超えてはならない一線を、遂に踏み越えてしまった。

「く、うう……ッ!!」

それはある日の出来事。真つ暗な夜の中、ランニングをしていた1人の少女が今、その暴走するラルゴの毒牙にかかるうとしてしまっていた。

「はは、ははははは……!! やっぱり強いなあ、エーデルガルトさんは……!!」

「ッ……お前……何者、なんだ……!!」

褐色肌が特徴的なその少女は、露出度の高いバリアジャケットを身に纏った状態で、傷ついた左腕を押さえながらハイヴを睨みつける。傷の痛みから苦悶の表情を浮かべる彼女に対し、彼女の攻撃を装甲で受け止めたハイヴは余裕そうな態度で笑いながら、その手に構えたバズフルーレの剣先を彼女に向ける。

「でも、僕が勝つ……君を倒せば、僕はもつと強くなれる!!」

バズフルーレで斬りかかられたエーデルガルトは転がって回避し、素早くハイヴの後ろに回り込んでその背中に拳を叩き込む。その強い衝撃によるけるハイヴだったが、やはり装甲に守られているのもあってかそれほどダメージはないようで、すぐさま振り向いて反撃に出る。

「弱い、弱いなあエーデルガルトさん!! 君の力はそんなものじゃないだろう!!」

「うっ……!!」

ハイヴは左腕に装備されている蜂のような形状をしたガントレット型の召喚機——ほしゅうしん 蜂召針バズバイザー”を突き出し、バズバイザーの先端に付いている小さな鋭い針からレーザーのような光線を

放射。その一撃がエーデルガルトの左足を掠め、怯んだ彼女に素早く接近してバズフルーレを振り下ろすが、エーデルガルトが繰り出した回し蹴りで、攻撃の軌道が逸らされる。

「ふ、はははは!! やるねえ、流石U15のチャンピオンだ……!!」  
「ツ……甘く見られたら困るヨ……!!」

エーデルガルトはU15格闘競技の世界チャンピオンとして君臨する強豪選手。ある辺境の部族の生まれである彼女は、選手になる前から様々な猛獣を自分1人の力で仕留めて来た。その培ってきた経験もあつて、彼女は仮面ライダーという未知の存在に襲われてもお、それなりに食らいつく事ができているのだ。

「ハアツ!!」

「なっ……うぐあ?!」

一瞬の隙を突き、ハイヴの装甲を纏っていないアンダースーツの部分にエーデルガルトの拳が打ち込まれる。装甲で守られていない部分を攻撃された事で、思わぬ痛みから流石に苦しげに呻くハイヴに、エーデルガルトは反撃のチャンスを与える間もなく攻撃を喰らわせていく。

（確かに、コイツの力は強い……けど、コイツ自身はそれほど強くはない……!!）

仮面ライダーとしての力を、自分自身の力だと思いついでいるラルゴ。戦う中で、彼のその慢心に既に気付いていたエーデルガルトは、彼を倒せる可能性があるかと判断し、彼にこれ以上何もさせる事なく倒す為に、無駄のない洗練された動きで何度も攻撃を叩き込んでいく。

しかし、彼女の快進撃はそこまでだった。

「——ツ!?!」

ハイヴの頭部目掛けて回し蹴りを繰り出そうとした直後だった。エーデルガルトの全身に突然謎の痺れが襲い掛かり、全身の力が抜けた彼女がその場に崩れ落ちる。一体何が起きたのか。地面に座り込んでしまったエーデルガルトは、自分の身に起きている事がすぐには理解できなかった。

（なっ……体が、痺れテ……!?!）

「……やっつと効いてきたみたいだね」

しかしそれこそが、ハイヴの真の狙いだった。エーデルガルトが謎の痺れで動けないのを良い事に、彼女の顔面に裏拳を叩きつけたハイヴは、バズバイザーの上部にある装填口を開き、カードデッキから引き抜いた1枚のカードをその装填口に挿し込んだ。

《TRICK VENT》

「!? 何ッ……!!」

装填口を閉じた直後、ハイヴの姿を模した鏡像が周囲に広がり、ハイヴの分身が生成される。ハイヴの姿が増えた事にエーデルガルトが驚く中、ハイヴの分身達はすかさず彼女に襲い掛かる。

「くっ……がはっ!」

痺れながらも両腕で攻撃を防ぐエーデルガルトだったが、別の分身が振るって来た拳が彼女の腹部に打ち込まれ、体勢が崩れた彼女の顔をまた別の分身が殴りつける。僅かに血を噴き出したエーデルガルトが地面に力なく倒れ込む中、ハイヴの本体が彼女の腹部を強く踏み付け、彼女の首を掴んで高く持ち上げた。

「どう、エーデルガルトさん? 結構痺れるでしょ?」

この時、エーデルガルトはハイヴのバズフルーレによる攻撃で、左腕を傷つけられていた。実はその傷口に毒が入り込んでおり、それが原因で彼女の体は強烈な痺れに襲われてしまった。途中、ハイヴがエーデルガルトの反撃を受け続けたのも、その毒が彼女の全身に回るのを待っていたのだ。

「ッ……な、にを……しタ……!!」

「君は知らなくても良いよ。こうなった以上、君の負けだ」

「……ッ!!」

ハイヴが掴む力を強め、キュツと首を絞められたエーデルガルトは呼吸できなくなり、意識を飛ばしてしまった。彼女の腕がだらんと落ちるのを見て、彼女が意識を失った事を悟ったハイヴは、仮面の下で笑みを浮かべた。

「は、はは、ははははは……やった、やったぞお!! あのエーデルガルトさんに勝った、勝ったんだあ!!」

エーデルガルトの首を離し、地面に倒れ込んだまま動かない彼女を見下ろしながら、ハイヴはしばらくの間、歓喜の笑い声が続いた。

あの世界チャンピオンを自らの手で倒した。

その達成感から笑いが止まらないラルゴは、ハイヴの変身を解いてからも大人モードのまま、意識のないエーデルガルトを見下ろした。

「……ッ」

意識を失ったエーデルガルトは既にバリアジャケットが解除され、セパレートタイプのユニフォームを纏った露出度の高い恰好に戻っている。その姿に、ラルゴは思わず息を飲んだ。

14歳ながらも、女の子として抜群のスタイルを持つエーデルガルト。胸元までの丈しかないトップス、短いレーシングショーツに包まれたそのスタイル抜群な体は、ラルゴの性癖を刺激するには充分過ぎる破壊力があつた。

「……」

誰も見てないよな？

ラルゴは周囲をキョロキョロ見渡し、誰にも見られていない事を確認してから、倒れているエーデルガルトの体を抱き上げ、その場から移動を開始。誰もいない公園までやって来た彼は、目に入った木製テーブルの上にエーデルガルトの体を仰向けの状態で寝かせてから、改めて彼女の体を眺めた。

（……凄い）

世界チャンピオンとして君臨している少女。それを自らの手で打倒したラルゴは、心の中で危険な思想を抱き始めていた。

（……良い、よね……っ）

自分は彼女に勝利した。

自分は勝者で、彼女は敗者。

敗者は勝者に喰われるのが運命<sup>さだめ</sup>。

つまり……敗者は勝者に何をされようと、決して文句は言えない。

「……ッ!!」

ラルゴはゆつくりと右手を伸ばし、エーデルガルトのトップスに包まれた豊満な乳房へと触れる。フニツとした柔らかな乳房の感触が

手に伝わり、ラルゴはその衝撃に強い感動を覚えた。それが、彼の理性を吹き飛ばす引き鉄となってしまうた。

ラルゴは左手も伸ばし、エーデルガルトの乳房を両手で何度も揉みしだく。両手揉まれるたびに形を変え、手離すたびに形が戻る彼女の乳房を存分に楽しんだラルゴは、彼女の乳房に自らの顔を埋め、その感触を今度は顔で楽しみ続けた。

(よ、よし……)

その後はトツプスと、その下に身に着けられていたスポーツブラと一緒に捲り上げられ、エーデルガルトの豊満な乳房がラルゴの視界に映り込む。褐色肌の中、ピンク色の乳首が突き出ているその光景を前に、ラルゴは我慢する事もせず、すぐさま彼女の乳首に顔を近付け吸いつき始めた。

チュウチュウと音を立てながら、エーデルガルトの乳首を必死に吸い続けるラルゴ。意識のないエーデルガルトが僅かに体をピクリと反応させている中、ラルゴは片方ずつ順番に乳首を吸ってはピチャピチャと舐めしやぶり、あつという間にエーデルガルトの乳房は両方共唾液まみれにされてしまった。

それに更なる興奮を覚えたラルゴは、自身が履いていたズボンを脱ぎ、大きく勃起した肉棒を露出する。大人モードに変身している為、その肉棒のサイズはかなり大きく、ラルゴはエーデルガルトの上半身に跨り、その乳房で肉棒を挟み込んでパイズリを始めた。

(す、凄い、気持ち良い……!!)

柔らかく張りのある乳房に包まれ、肉棒にとつてもない快感を与え続けるラルゴ。彼は無意識の内に自分の腰を前後に動かし、彼女の乳房の感触をひたすら楽しんでいく。そして数十秒ほど経過した後、彼はすぐさま限界に到達した。

「ああ、で、出る……ッ!!」

乳房の間に挟み込んだまま、ラルゴの肉棒が射精を開始する。放たれた精液はそのままエーデルガルトの顔にまで届き、彼女の整った綺麗な顔が、白濁とした粘っこい液体で穢されてしまった。

「はあ、はあ……ッ」

しかし、一度射精しただけでは止まらない。ラルゴは少し呼吸を整えた後、今度はエーデルガルトが下半身に履いているレーシングシューズに手をかけ、その下のシューズごと脱がしにかかる。それによってエーデルガルトの裸体が露わにされ、ラルゴは彼女の両足を開かせてから、未だ固さを失っていない自身の肉棒を彼女の股間の割れ目に近付ける。

「うっ……く、ああ……!!」

乳房を弄られていた事で既にいくら濡れていたのか、エーデルガルトの秘所はラルゴの肉棒をアツサリ受け入れてしまった。それでも処女だったからか、意識はないながらもエーデルガルトの表情が少しだけ歪む中、ラルゴはあまりの気持ち良さに余裕を失い、すぐに腰を振ってピストンを開始した。

(あ、ああ、凄い……これが、世界チャンピオンの……っ!!)

一度射精している為か、まだ膣内の感触を楽しめるくらいの余裕をラルゴは持ち合わせていた。エーデルガルトの膣内の感触をひたすら味わいながら、ラルゴは再び彼女の乳房を揉みしだき、彼女の乳首をチュパチュパ吸いながらピストンを繰り返す。膣内は彼の肉棒で蹂躪され、先端の亀頭によって子宮口が何度も突かれ続ける。

自分は彼女を倒した。

ならば男として、彼女の“体”も支配したい。

彼女を自分の物にしてやりたい。

その為にも、自分がやるべき事は1つ。それは彼女の膣内に種付けしてやる事だった。

(チャンピオン……チャンピオンに中出し……!!)

学院での保健体育の授業から、男女が子供を作る方法については既に把握していたラルゴ。このまま彼女の膣内に射精したら、彼女は自分の子種によって、自分の子供を妊娠するかもしれない。そうなれば、彼女が自分の物になったという何よりもの証になる。

「ああ、出る、出る……!!」

もう迷いはなかった。ラルゴはエーデルガルトに唇を合わせ、何度もキスしながらピストンを速めていく。そして射精に至る寸前で唇

を離れた彼は、彼女の細く括れた腰をがっちり掴んでから腰を強く打ちつけ、亀頭を子宮口に密着させた。

「うっ……!!」

そして二度目の射精に至ったラルゴ。亀頭が子宮口にぴったり密着したまま、その子宮に彼の精液がドクドクと注ぎ込まれていく。膈内射精でもたらされる快感に支配されたラルゴは、天を見上げながらも彼女の腰を掴んだまま決して離す事なく、精液が出なくなるまでの間、彼女の膈内でひたすら射精を続けていった。

こうして、U15格闘競技の世界チャンピオンであるエーデルガルト・バルカスのスタイル抜群な体を、思う存分味わう事ができたラルゴ。

しかし、二度射精したにも関わらず、彼の性欲は未だ収まらなかった。

その後もラルゴは彼女の膈内に肉棒を挿入したまま、彼女の唇や乳房だけでなく、頬や首元、腕や脇などにもひたすらキスをし続けた。自分が支配した証として、首元や乳房には跡が残るよう、より強めにキスしてみせた。

ラルゴに犯され続ける中、意識を取り戻したエーデルガルトはこの状況に困惑の表情を示した後、自分がされている事に気付きすぐさま彼を引き剥がそうとした。しかし、バズフルーレの毒によって未だ痺れが取れていない今の彼女では、ラルゴを引き剥がせるほどの力は残っていないかった。

「抵抗なんて無駄だよ、エーデルガルトさん……!! 君は僕に負けたんだから……!!」

「が……か、はッ……ア……ッ!!」

「弱い奴は喰われて、強い奴だけが生き残る……君ならわかるだろう!!」

両手でエーデルガルトの首を掴みながら、ラルゴは彼女の膈内を何度も犯し続けた。首を絞められたエーデルガルトは苦しそうな表情で呻く中、次第に白目を剥き始め、再びその意識を飛ばしてしまった。その事に気付いているのか否か、ラルゴはピストンの速度を緩める事

なく、またしても彼女の膣内で射精を開始した。

「ああ、孕んでチャンピオン……僕の子を孕めえ!!!」

エーデルガルトの子宮が再び、ラルゴの精液で白く染め上げられていく。ラルゴは射精の快感に震えながらも、意識が飛んで泡を噴き出しているエーデルガルトの乳房に顔を埋め、まるで赤ん坊のように乳房を吸い続けた。

結果として、数時間にも渡ってエーデルガルトを犯し続けたラルゴ。ようやく性欲が収まった彼の目の前にあるのは、木製テーブルの上で褐色肌の裸体を晒し、泡を噴いたまま白目を剥いているエーデルガルトの姿。その顔は精液で白く穢されており、M字に開かれた股間の割れ目からは、ラルゴによって注がれた精液がとろりと流れ落ちていた。

「やった……やったぞ……!!」

世界チャンピオンである彼女を倒すだけでなく、そこからセックスまで行う事ができたラルゴ。

これ以降も、彼は格闘競技の選手である少女に夜な夜な襲い掛かっ  
ては、ライダーの力で叩きのめし、敗北した少女の体を存分に味わっ  
ていくようになった。

彼の毒牙にかかった多くの少女が、その心身に大きな傷を負わされ  
ていった。

こうして、仮面ライダーの力を手に入れた少年は、瞬く間  
にその強力な力に溺れていき、凶悪なレイプ魔へと変貌していつてし  
まったのである。

そして……

「はあ……はあ……せ、先生……ッ!!」

そんな彼の悪意の矛先は今……彼がよく知る人物にまで、向けられ  
ようとしていた。



## シグナム(?) I F (☆)

仮面ライダー達との戦いに敗れ、滅びたはずのスレイブ・ダーイン。異形の存在として生き延びていた彼は、再び己の欲望のままに動き出し、それによって2人の女性が毒牙にかかってしまった。

ダーインの欲望は留まるところを知らず、次の女性がその犠牲になるうとしていた……

「はあっ!!」

「ギユルウ!?!」

ミッドチルダ、とある路地裏。そこに現れた緑色の昆虫のような異形を斬り伏せたのは、バリアジャケットをその身に纏ったシグナムだった。一刀両断された緑色の異形が爆発し、緑色の爆風でシグナムの綺麗なピンク色のポニーテールが靡いていく。

「ふう……全く、いきなり襲って来るとはな」

異形の消滅を確認したシグナムは、その手に構えていたレヴァンテインを鞘に納める。せつかくの休日、外出して穏やかな時間を過ごそうと思っていた。

しかしその道中、謎の殺気を感じ取った彼女は、敢えて人のいない路地裏まで移動し、その直後にこの異形の襲撃を受けたのだ。もつとも、相手はそこまで強くない怪物だった為か、シグナムの紫電一閃に

より呆気なく斬り捨てられてしまった訳なのだが。

「それにしても、モンスター以外の怪物がまだ存在していたとはな……主はやてに、手塚達にも一刻も早く伝えるべきか」

少し前に発生した盗難事件。その事件の犯人は、モンスター以外の怪物を使役していた。もしや、その時の怪物達が今もまだミッドチルダに残っているのではないか。そう思ったシグナムは、はやてや手塚達にこの事を報告するべく通信を繋げようとした……その時。

「「シヤアアアアアツ!!」」

「ツ……!!」

突如、どこからか現れた丸い球体のような体躯をした灰色の怪物が3体、シグナムに向かって飛びかかって来た。寸前で殺気に気付いたシグナムは素早く後ろに下がり、再びレヴァンティンを抜いて戦闘態勢に入る。

「まだいたのか、面倒な……ツ!?!」

その時、シグナムの背後から複数の植物が伸び、シグナムが構えていたレヴァンティンの刀身に巻きついた。そのまま植物に引っ張られたレヴァンティンが、シグナムの手元から離れてしまう。

「しま……がつ!?!」

レヴァンティンが引っ張られていった方向にシグナムが振り向いたその直後。何者かがシグナムの顔面をガシツと掴み、彼女を高く持ち上げた。その人物はフードを被り、白い仮面で素顔が見えなかった。

「ツ……貴様、何者だ……!!」

「知る必要はない」

「!?　ぐ、があ……ツ!?!」

仮面の人物はそう告げた後、彼女の顔を掴んでいた右手の握力を強める。すると仮面の人物は空いている左手の掌から、赤いゲル状の物質がグジュグジュと湧き出るように発生し、動き出したそれはシグナムの口の中へと突っ込むように入り込んで来た。

「あ、が……お(お)お……ツ……」

口の中に入り込んで来た異物が、シグナムの喉奥にどんどん侵入し

ていき、シグナムが苦悶の表情を浮かべる。それを見た仮面の人物はシグナムの顔を離し、シグナムは自身の喉元を苦しそうに押さえながら、その場にドサリと倒れ伏した。

「……さて」

付けていた白い仮面を外したその人物——ダーインはニヤリと笑みを浮かべ、倒れたままビクンツビクンツと痙攣しているシグナムを見下ろす。

「今度は、この女を使って楽しむとしようか」

ダーインが指をパチンと鳴らすと、倒れて痙攣していたシグナムの動きがピタリと止まる。それから数秒後、シグナムの右手の指先がピクリと僅かに動き、彼女の体がゆっくり起き上がっていく。

「気分はどうだね？ お嬢さん」

「……ああ、最高だ」

起き上がったシグナムは、先程までの苦悶の表情が消えていた。代わりに、その表情はどこか恍惚としたものになっていた。その瞳は金色に怪しく光り、頬には血管のような赤い紋様が浮かび上がった。た。

「おめでとう！ 君は見事、私の分身として生まれ変わったのだ！」

「フ、フフ、フハハハハハハハハハハ……!!」

ダーインが祝福の言葉を述べ、シグナムは両手で自身の頬に触れながら歓喜の笑い声を挙げる。ダーインの卑劣な罠に嵌められた彼女は今、ダーインの忠実な手駒へと変貌してしまったのである。

「ん？」

それから数十分後。たまたま路地裏の近くを通ろうとしていた一般人の男性が、ある事に気付いた。それはたまたま視線を向けた先の路地裏に立っていた、1人の女性の姿。その女性の姿を見た男性は、思わず呆気に取られた。

「え……ええっ!？」

その女性——シグナムはなんと、その身に衣服らしい衣服を何も身に纏っていないかった。細くしなやかな腕、スラリとした綺麗な太もも、さらにはその胸に実っているたわわな乳房、丸く形の整ったお尻などが、男性の目の前で晒されていた。

「な、な、な……ッ!？」

「——見たな？」

赤面しながら動揺する男性に、シグナムは金色の瞳をギラリと光らせ、笑みを浮かべながら男性に接近。思わず後ずさる男性だったが、それより前に至近距離まで迫って来たシグナムに正面から抱き着かれる。彼女の豊満な乳房が男性の胸元に押し付けられ、男性は思わずゴクリと息を飲んだ。

「見たんだろう？ 私の裸を」

「え、あ、あの、その……ッ」

「フフ、緊張しているな。安心しろ……今から私が、とても気持ちの良い事をしてやる」

シグナムはそう言って、男性を路地裏まで引っ張り込む。動揺のあまり、逃げる間もなく彼女に引っ張られた男性は壁に押し付けられた後、その唇にシグナムから熱い接吻を受ける事となった。

「ん、むっ……ちゅ、ぴちや、ちゆる……」

舌まで入り込んで来た事で、男性は成す術なく彼女との熱いデーブキスをさせられる。淫らに動くシグナムの舌に翻弄され、男性は段々と理性が薄れていき、気付けばシグナムを抱き締めてひたすらキスを続けていた。

「ぶはっ……お前のこゝこ、大きくなっているな。そんなに興奮したのか？」

男性のズボンが、テントのように大きく張っていた。シグナムは妖艶な笑みを浮かべながら、そのテントを張っている部分を右手で優しく触り、掌で上下に撫でるように愛撫する。

「ならば、もっと気持ち良くしてやろう」

舌舐めずりをしたシグナムはその場にしゃがみ込んだ後、彼の履いていたズボンのチャックを下ろし、そこから大きく勃起した肉棒をボロンと露出させる。彼女はそれを右手で優しく握り、ゆっくりと扱き始めた。

彼女の手握られた肉棒がピクピクと震える中、それを面白そうに見ていたシグナムは肉棒へとゆっくり顔を近づけていき、その先端の亀頭部分に唇で軽めのキスを試みさせた。

そのまま舌先で亀頭をチロチロ舐め始め、そこから肉棒を全体的にいやらしく舐めていくシグナム。その間も、肉棒の根元からぶら下がっている玉袋を左手で掴み、男性が痛みを感じないよう力加減を調整しながら優しく揉みしだく。そうしている内に、男性はハアハアと呼吸が荒くなっていき、肉棒だけでなく全身がビクビクと反応し始めていた。

「ん、イキそうか？ それなら……」

するとシグナムは一度肉棒から顔を離し、男性を近くの木箱の上に座らせる。そして男性の股の間に割って入った彼女は、その豊かな乳房で肉棒を器用に挟み込み、パイズリの体勢で肉棒を扱き出した。

「気持ち良いだろう？ 我慢しないで良い。お前の欲望を、思う存分解き放つてしまえ」

柔らかな乳房に挟み込まれ、そこからもたらされる快感によって、男性は絶頂に至るまであと数十秒といった状態だった。そしてシグナムがパイズリをしながら、その亀頭部分を舌で上下に舐め続けた結果、遂に我慢できなくなった男性が射精に至った。

「おっと……い！」

ビュルツビュルツと精液が発射され、それがシグナムの顔と乳房を白く穢していく。予想よりも多めに精液が発射された事に驚くシグナムだったが、自身の乳房にかかった精液を見て満足そうに微笑み、

乳房の精液を指で掬ってからチュパツと舐め取った。

「さて、次はお前の番だ。私の体で、好きなように楽しんでくれ」

シグナムは男性の耳元でそう囁いたその瞬間、男性の理性は完全に消し飛んだ。男性はシグナムを壁に押し付けてから、精液で穢された彼女の乳房を両手で揉みしだき、その先端の乳首に吸いつき始めた。男性はチュパチュパ音を立てながら乳首を舐めしやぶり、その快感にピクンと体を震わせたシグナムは、赤ちゃんのように乳房を吸い続ける男性を抱き締め、愛おしそうな表情で彼の頭を撫で始めた。

「ん！ フフ、そう慌てるな。そんなに吸ったところで、まだ母乳は出ないぞ？ ああそれとも……」

シグナムは一旦男性を離れさせ、今度は自分が木箱の上に座り込む。そこから自身の両足を左右に開き、その股間の割れ目を男性に見せつけた。

「お前のその生殖器で、母乳が出るおっぱいにするか？ それでも良いぞ」

この時、既にシグナムの股間は愛液で濡れに濡れていた。そこに男性がかぶりつくように顔を近づけ、彼女の股間の割れ目をいやらしく舐めしやぶり始めた。男性の舌が上下に動き、開かれた割れ目の奥深くまで舌が入り込んでいく。女の大事な部分を舐められたシグナムは、その刺激に何度も体を震わせた。

「ん、くっ……はあ……そうだ、良いぞ……もっといっぱい舐めてくれ……！」

シグナムが男性の頭を手で押さえつけ、彼に自身の股間を舐めさせ続ける。ピチャピチャといやらしい水音が路地裏に響いていく中、およそ10分が経過した頃には、シグナムの股間は自身の愛液と、男性の唾液によってベタベタになってしまっていた。

「そろそろだな……さあ、来ると良い。私の腔内<sup>ナカ</sup>へ」

自身の股間をM字に開き、男性の肉棒を迎え入れようと両手を差し伸べるシグナム。それに誘導されるように男性がシグナムの股間に肉棒を近付けていき、先端の亀頭部分が割れ目に密着し、そのままグツと割れ目を抉じ開けるように入り込んでいく。

「ん、くう！ ああっ……っ……っ……！♡」

肉棒を膣内に挿し込まれ、恍惚な表情を浮かべるシグナム。肉棒が全体まで入り込んだ後、男性はシグナムを抱き締めながら腰を前後に振り始める。ジュプジュプと水音が鳴り響き、激しいピストンによってシグナムの口から淫らな喘ぎ声が溢れ出す。

「あ、んん、ああっ……！ もっと、もっと突いてくれ……んあ♡」

シグナムがそう言うと、男性は更にピストンの速度を上げていく。シグナムの膣内では肉棒が激しく動いており、肉棒が奥深くまで突き込まれるたびに、先端の亀頭部分が子宮口に熱いキスを行い、それが何度も繰り返される。

「ん、はあ、ああ……そろそろ、んんっ……限界、か？ ああ♡」

その間も、男性はシグナムの乳房を揉みしだきながら乳首に吸いつき、段々と二度目の絶頂に近付いていく。それに気付いたシグナムは、ただひたすら腰を振り続ける男性を抱き寄せ、彼の耳元でいやらしく囁いた。

「出して良いぞ」

それが引き鉄だった。男性はシグナムを強く抱き締めてから腰を強く打ちつけ、彼女の膣内で射精を開始した。亀頭から放たれた熱い精液が、その奥にある子宮口目掛けてドクドクと注ぎ込まれていき、その快感を下腹部から感じ取ったシグナムもまた、全身を震わせて絶頂した。

「んんっ!!♡ はあ、はあ……いっぱい、出してくれたな……フッフ」

男性がまだ膣内で射精している中、シグナムは蕩けた表情で男性と唇を合わせ、再びディープキスを行う。するとその時、シグナムの頬に浮かんでいた血管のような紋様が、頬から首元に、首元から胸元にかけて少しずつ大きくなっていく。

「チュパッ……どうする？ まだ続けるか？」

その問いかけに、男性が答える事はなかった。シグナムの細く括れた腰を掴み、またピストンを開始したのが彼の答えだった。

「ん、くうっ……良いだろう……お前が満足するまで、私の体を使え……！」

シグナムはそう言った後、自身の髪を結んでいた紐を解いた。ポニーテール状に結ばれていた彼女の長い髪が下ろされ、より一層妖艶な雰囲気醸し出される。

「さあ、もっとだ、もっと私に、お前の子種を寄越せ……!!」

シグナムの要求に応えようと、腰を振っていた男性が二度目の射精に至る。彼女に自身の子供を産ませようと、その子宮内に大量の精液が注入されていく。

「あ、あぁっ……良いぞ、もっとだ……お前の子種で、私を孕ませてみる……!!♡」

その後も2人のセックスは続き、結果としてシグナムの膈内には4回、男性の精液が注ぎ込まれる事となった。それでもシグナムは飽きた様子をまるで見せておらず、セックスで疲れて動けなくなった男性をその場に放置し、次の獲物を求めて移動を開始した。

「はあ、はあ……!!」

「ああ、そこだぁ……いっぱい、中に出してくれえ……!!♡」

その後も、シグナムはミッドチルダ中のあちこちで男性に呼びかけでは、その魅惑のボディで誘惑し、熱いセックスに持ち込んでいった。誘惑された男性達は皆、それに抗う事なく彼女と激しいセックスを行い、彼女の子宮に何度も種付けしていく。

その男性達の中には、シグナムと同じ局員の姿もあった。

「ああ、夢のようだ……あのシグナムさんと、こうしてセックスできるなんて……!!」

「んんっ……そうか、良かったな……あぁっ!♡ お前の願いは、こうして叶ったぞ……あん!♡」

その局員もまた、他の男性と同じようにシグナムと激しいセックスを繰り返し、彼女に自分の子供を孕ませようと何度も膣内射精を決めてみせた。

そうして子宮に精液を受け入れるたびに、シグナムの体に浮かび上がっていた赤い紋様が更に大きくなっていき、遂には手足など全身にまで及んでいった。

「ああ、出る、出ますよシグナムさん!! 俺の……俺の子を産んで下さい!!」

「ん、はああっ!!♡」

立ちバツクで腰を振っていた男性局員が、再度シグナムの膣内で射精を行い、その子宮に精液をドクドクと注ぎ込んでいく。これまで何度も膣内射精されてきたのもあってか、シグナムの下腹部はまるで妊婦のように少しずつ膨らみ始めていた。

「ああ、良い……最高だ……もつと、もつと私を愛してくれ……♡」  
その後も、シグナムは様々な男性に声をかけ、熱くて激しいセックスの時間を楽しみ続けた。

男達と交わるたびに、かつての誇り高き騎士としての面影は、彼女の中から消え失せつつあった。

「おやおや、これはこれは……」

「ッ……ああ、はあっ……んあ……!!」

それから数日後。様子を見に来たダーインの視界に映ったのは、とあるホテルの一室にて、大きなベッドの上で数人の男性を一度に相手しているシグナムの姿だった。1人の男に騎乗位で犯されている間も、2人の男達が彼女の豊満な乳房を揉みしだき、乳首に強く吸いついていた。

「ん、ああ……全く、赤ちゃんがたくさん、いるみたいだな……ん、くう！♡」

乳房が揉みしだかれるたびに、乳首からは母乳がピュルツピュルツと噴き出しており、乳房に吸いついていた男達はその母乳を残さず飲み干そうとチュウチュウ吸っている。その間も騎乗位でシグナムを突き上げていた男が、彼女の細く括れた腰を掴んでから肉棒を強く突き立て、彼女の膣内で射精に到達した。

「ああっ!!♡ ん、んう……まだ、出せるとはな……嬉しいぞ……はあっ♡」

熱い液体が入り込んで来る感覚に、シグナムは色っぽい表情を浮かべながら自身の下腹部を撫で回す。彼女の全身に浮かび上がっていた赤い紋様は、彼女の下腹部にはハートマークを模した紋様が形成されており、男の射精に呼応しているのかハートマークが赤く点滅していた。

「はあ、はあ……まだだ……もつと、もつとたくさん、中に注いで……お前達の子を、私に産ませてくれ……♡」

それに応えるように、男達はシグナムをベッドに押し倒す。1人は彼女の口に、1人は彼女の豊満な乳房の間に、また1人は彼女の膣内に肉棒を無理やり突っ込んでから、男達は何も語らぬままシグナムの体を貪り続ける。

「ククク……あの烈火の騎士が、墮ちたものだな」

その一部始終を見届けていたダーインは満足した様子で、次の獲物を探すべくその場から姿を消す。彼がいなくなった後もしばらくの間、シグナムと男達による乱交セックスは続いていった。

「ん、んむう……ぶはあっ!!♡ ああ、もつとお……もつと激しくう……ッ!!♡」

消息がわからなくなった彼女を、仲間達が搜索している事など、シグナムは知る由もなかった。

そんな事など、今の彼女にとってはどうでも良い事だった。

そこにはもう、厳しくも優しい剣士としての姿はない。

そこにあっただのは、肥大化した己の性欲に溺れた、淫らな女の姿だけだった……

「これは良い物を見せて貰った。さて、次は誰を使って楽しもうか……ククク、クハハハハハハハ……!!」

次に彼の毒牙にかかるのは、果たして誰なのか……？

それはまた、次の機会に語る事にしよう……



夏希（美穂） & ウェンデイ I F（☆）

「ぷはあーっ!! もうさいっこう!!」

「いやーほんとツスねえ!! ラッド兄、もう一杯下さいッス!!」

「いやおいおい、いつまで飲んでるんだお前等」

「しかもここ俺ん家だぞオイ」

ある日の出来事。グランセニツク家の自宅にやって来た夏希とウェンデイは、家の冷蔵庫から引っぱり出した缶ビールで存分に酔っぱらってしまった。そんな彼女達に同行してやって来たカルタスと、この家の家主であるヴァイスは、そんな2人の酔っ払い女を前に呆れた様子を見せていた。

「2人共、そんなに飲んだら明日に響くぞ。あの子達が友達の家にお泊まりしてるとはいえ」

「ええ〜良いじゃ〜ん別に〜? アタシ達だって飲みたい時があんのよお〜♪」

「そうッスよお〜♪ ヴァイス兄にラッド兄も一緒に飲んだらどうッスか〜?」

「はあ、全く……」

ヴァイスとカルタスが注意しても、2人の酔っ払い女が聞く耳を持つ様子はない。男衆は溜め息をつく事しかできなかった。

「君の妻も、かなり大胆なようだね。ヴァイス君」

「アンタも、嫁さんの面倒見るの大変そうっすね。カルタスさん」

ヴァイス・グランセニツクと白鳥夏希。

ラッド・カルタスとウェンデイ・ナカジマ。

彼等はある経緯から恋人関係となり、そこから夫婦の関係にまで発展した。

夏希は苗字が変わり、夏希グランセニツクに。

ウエンデイも苗字が変わり、ウエンデイ・カルタスに。

この2組の男女は肉体の関係を築き、それにより夏希とウエンデイが子供を身籠った為、そのまま夫婦として結ばれる形になった。その後、2人は無事に子供が生まれ、立派に母親として幸せな時間を過ごしている。

なお、そんな夏希とウエンデイでも、時には子供抜きで息抜きしたい時があるようで……。

「うーん、むにやむにや……」

「結局寝ちまったよ……」

「ははは、お互い大変だなあ」

この日、子供が友達の家にお泊まりで不在だからか、夏希とウエンデイはひたすら酒を飲みまくり、酔い潰れて眠りについてしまうほどにまで楽しんでいた。グッスリ眠り込んでしまった夏希とウエンデイをそれぞれ2カ所にあるソファに寝かせたヴァイスとカルタスはようやく落ち着けるからか、こちらも缶ビールを取り出しているのんびり寛ごうとしていた。

「しかしお互い、まさかこんな形で結婚できるとは思わなかったなあ」

「本当つすよねえ。まあ俺の場合、酔っ払った夏希に襲われたのが切っ掛けっすけど」

「はは、話には聞いてるよ。大変だったみたいだね」

酔っ払った夏希に襲われたヴァイスが、彼女と繰り返しセックスを行った夜。あの時、コンドームも使わずにセックスし続けた事で、夏希はヴァイスの子供を妊娠してしまっていたのだ。その責任を取るべく、ヴァイスは夏希との結婚を決意し、こうして夫婦になったのである。

「そういうカルタスさんは、ウエンデイから告白されたんですっけ？」

「ああ。彼女から告白してくれた時、俺は凄く嬉しいと思ったよ」

カルタスもまた、ウエンデイから告白を受けて同棲するようになった後。彼女と何度もセックスしている内に、彼女もカルタスの子供を妊娠し、無事に一児の母となった。産まれた子供の顔を見たゲンヤ

は、それはもうデレデレとした表情になっていたという。

「てえ事は、やっぱゲンヤさんから一発殴られたりしたんすね」

「なかなか強烈な一発を貰ったよ。俺も娘が将来彼氏を連れてきたら、同じ事してみようと思う」

「ははは、未来の彼氏君はドンマイっすね！」

何気ない会話が盛り上がっていく男2人。ビールを飲んでる内に、2人のテンションも徐々に上がっていったのだが、それも数十分後には……

「うへへへ……♪」

「うくん、もう食べられないぜ……」

結局、彼等も女性陣と同じように酔っぱらってしまった。顔を赤くしてベロンベロンになった2人は、フラフラしながらそれぞれ夏希とウエンデイが寝ているソファの方へと向かっていく。

しかし、ここで問題が発生した。

「うう〜頭痛いい〜……夏希い〜……」

「ううん、むにやむにや……」

夏希に抱き着いて癒されようとするヴァイス。しかし彼がソファに寝転がって抱き着いたのは、彼の嫁である夏希ではなく、カルタスの嫁であるウエンデイだった。ヴァイスはウエンデイが包まっていた毛布をはぎ取り、仰向けに寝ている彼女の胸元に顔を埋め、顔と両手で乳房の感触を楽しみ始める。

「うへへへへえ、ウエ〜ンデイ〜♪」

「すぴい〜……」

一方でカルタスも、自分の嫁であるウエンデイではなく、ヴァイスの嫁である夏希に抱き着き始めていた。しかも彼の場合は、ただ毛布をはぎ取って抱き着くだけでなく、夏希が身に纏っていた白いTシャツと、その下に着けていた黒いブラジャーを一緒に捲り上げ、露わになった彼女の乳房に吸いつき始めた。

「フへへへ、夏希のおっぱい、柔らかい〜……♪」

「おっぱい、ウエンデイのおっぱい……ちゅうううう……！」

ウエンデイの乳房に顔を埋め、両手で彼女の乳房を揉みしだくヴァ

イス。

夏希の乳房に吸いつき、ひたすら彼女の母乳を味わうカルタス。そう、この2人。酔っ払って思考力が低下しているせいで、自分の顔をちゃんと認識できていなかった。そして現在、この異常事態を止められる人間はこの場には一人もいない為、酔っ払った2人は自分の嫁ではなく、他人の嫁を犯し始めたのだ。

ウエンデイの乳房に顔を埋めていたヴァイスは、彼女の着ていた寝巻きのボタンを外し、ピンク色のブラジャーも上にズラしてから改めて乳房に顔を埋める。生の乳房の感触にヴァイスがニヤけた表情で楽しむ中、ウエンデイは今もお気持ち良さそうに眠り続ける。

カルタスはと言うと、これまでもウエンデイの母乳を求める事があったのか、夏希の乳房に吸いついて母乳を飲み続けていた。乳首の先端から噴き出る母乳をカルタスが口に含み、乳首をひたすらピチャピチャ舐め回す中、寝ている夏希の体が僅かにピクンと反応する。

「ああ……夏希い……！」

「ウエンデイ、ウエンデイ……！」

もちろん、これだけでは終わらない。ヴァイスはウエンデイの乳房を揉みしだき、母乳がピュッピュッと噴き出る光景を目で見ても楽しむ。カルタスは夏希の乳房を片方ずつ順番に吸いつき、母乳を飲み干す勢いで何度も乳首を吸い上げる。その後、2人は彼女達の乳房から顔を離し、次は彼女達の下半身に狙いを定める。

ヴァイスはウエンデイが履いていた寝巻きのズボンを脱がし、ピンク色のショーツをガン見しながら指先でショーツの股間部分を擦り始める。乳房を揉みしだかれている内にウエンデイも感じ始めたのか、ショーツの股間部分はほんの僅かに湿り気を帯びていた。

カルタスは夏希が履いていたホットパンツを脱がし、露わになった黒いショーツを横にズラし、彼女の股間を露わにさせる。ヒクヒクとしているそこをジッと見ていたカルタスは、そのままそこに顔を近づけていき、舌と唇を使い丁寧に舐めしやぶり始める。

酔い潰れて眠っているウエンデイと夏希も、僅かにだが体がピクツピクツと反応し、口から小さな喘ぎ声が漏れ出している。男2人が

すっかり性欲を剥き出しにする中、ヴァイスはウエンデイの股間を指で弄るのをやめ、彼女の股間をショート越しにいやらしく舐め始める。逆にカルタスは一旦口を離してから、唾液まみれになった夏希の股間の割れ目に指をゆっくり挿入し、膣内を搔き回し始める。

数十秒後、股間を舐め回され続けたウエンデイと、膣内を指で弄られた夏希が同時に全身を震わせ、快感の絶頂に到達させられた。眠りながらもハアハアと熱い吐息が漏れる彼女達を前に、酔っ払っている男2人は遂に、越えてはならない一線を越えようとしていた。

「ああ、夏希い……お前のオ○ンコは、俺だけの物だあ……！」

「ウエンデイ……俺と一緒に、いっぱい気持ち良くなるうなあ……！」  
着ていた服を脱ぎ捨て、勃起した肉棒を露わにしたヴァイスとカルタス。ヴァイスはウエンデイの股間に、カルタスは夏希の股間に自分の肉棒を近付けていき、先端の亀頭を股間の割れ目にググツと押し付ける。そして2人は同時に肉棒を一気に押し込み、彼女達の膣内にズブリと挿入してしまった。

「ああ、すっげえ良い……！」

「おお、締まる……！」

ウエンデイに挿入したヴァイスは、腰を振りながら彼女の乳房に顔を近付け、乳首に吸いついて彼女の母乳を味わい始める。夏希に挿入したカルタスは、彼女をうつ伏せにさせた状態でピストンを開始し、彼女の尻をがちり掴んで離さない。未だ深い眠りにについているウエンデイと夏希も、まさか夫以外の男性に肉棒を挿入されているなど思いもしない事だろう。

一方で男2人もまた、いつもとは違う膣内の感触に強く興奮していた。普通なら流石にここで気付いても良さそうな物なのだが、これでも男2人は気付く様子はない。そして数分ほど腰を振り続けた2人は、遂に射精の時がやって来ようとしていた。

「ああ夏希い、中に出すぞお……また、孕ませてやるからなあ……うっ!!」

「イク、イクよ……ウエンデイ、俺の子供を、2人目を産んでくれ……ああっ!!」

ヴァイスはウエンデイの膣内で、カルタスは夏希の膣内で、思い切り射精を開始してしまった。ヴァイスの放った精子がウエンデイの子宮に、カルタスの放った精子が夏希の子宮に届き、ドクドクと注ぎ込まれていく。夫以外の男性に胎内で射精された女性2人は、眠りながらも快感に襲われ、全身を何度も震わせる。

この時、彼女達の子宮内では注ぎ込まれた無数の精子が、奥の卵子目掛けて必死に泳ぎ続けていた。

その内、ほとんどの精子は卵子に到達する事なく終わってしまうのだが、ほんの一部の精子だけは、途中で脱落する事なく卵子へと無事に到達。

生き残った精子達が卵子を取り囲み、卵子の表面に何度もぶつかり、その中へ入ろうとする。

そして遂に……1匹の精子が、表面を突き破って中へと侵入する事に成功。

男と女の遺伝子が混ざり合い、受精が成立した事によって……その胎内で、新しい命は誕生してしまった。

しかもそれが、ウエンデイと夏希の胎内で同時に行われていた。

2人の女性は酒で酔い潰れている間に、夫以外の男に犯され、夫以外の男の子供を孕まされてしまったのだった。

もちろん、犯した相手が自分の子供を妊娠してしまった事など、男2人は知る由もない。彼らは一度射精しただけでは性欲が収まらず、その後も2人は目の前の女性をひたすら犯し続けていった。注いだ精子が溜め込まれているであろう彼女達の下腹部を、2人は愛おしそうに優しく撫でさすった。

「夏希い、夏希いっ……もつと、もつと中に出してやるぞお……ッ!!」  
「ああウエンデイ……まだまだ俺と、いっぱい子作りしようなあ……ッ!!」

スワッピング睡眠姦によって、他の男の子供を托卵させられてしまったウエンデイと夏希。彼女達を犯していたヴァイスとカルタスもまた、目の前の女性を自分の嫁だと勘違いしたまま、自分の子供を孕んでしまった目の前の女性をひたすら犯し続け、また膣内で射精を

決め込んでみせたのだった。

それからしばらくした後。

酔いが醒め、自分達がやらかしてしまった事を把握したヴァイスとカルタスは青ざめた表情を見せ、大急ぎで穢れに穢れたウエンデイと夏希の体を綺麗にし始めたのだった。

後日、2人目の子供を妊娠した事で喜びの反応を示す夏希とウエンデイの前に、男2人はとてつもない罪悪感をその胸に抱き続けたという。

なのは&フェイト&はやて&アリサ&すずか&その他 I F (☆)

とあるホテルの宴会場。

ある金持ちの男性により、完全に貸し切り状態となったこの宴会場で……淫らな「宴」が繰り広げられていた。

「すつげえな、この状況」

「ああ。マジで夢のようだぜ」

この場にいるのは、かつて私立聖祥大学付属小学校に通っていた元クラスメイトの一同。立派な大人に成長した彼等は同窓会を開催し、都合の付いた元クラスメイト達が集まっていた。かつてのクラスメイトとの再会に、心を躍らせる元クラスメイト達だったが……

「」「すう……すう……」「」

「ほんとすげえよ柏木。お前よくこんな状況作れたな」

「ふふん。僕の方さえあれば、この程度なんて事ないさ」

男子生徒達がニヤニヤと下卑た笑みを浮かべる中、和式の畳の上で眠りこけている人物達がいた。

高町なのは。

フェイト・T・ハラオウン。

八神はやて。

アリサ・バニングス。

月村すずか。

この5名を中心に、かつてクラスメイトだった美しく可愛らしい女子生徒達が皆、飲み物に仕込まれていた睡眠薬によって眠らされていた。この状況を作り上げる為、金持ちである男子生徒・柏木かしわぎが会場を完全な貸し切り状態にさせたのである。

彼等がわざわざそこまでした理由はただ1つ……かつてクラスメイトだった彼女達の、美しく育った極上な体を楽しむ為である。

邪魔者のいない状況下で、男子生徒達は抵抗のできない彼女達を犯し始めた。着ていた衣服を脱がされ、その瑞々しい柔肌を露わにされ

てしまった女子生徒達の体は、男達の醜い欲望で穢されていく事となった。

「ちゅぱ、ちゅぱっ……ああ、美味しいよ、高町さんのおっぱい」「フェイトちゃんのおっぱいも良いぜ、見ろよこのデカ乳……!」

なのはとフェイトは畳の上に仰向けで寝かされ、男子生徒に正常位で犯されていた。肉棒が彼女達の膣内を激しく蹂躪する中、彼等は2人の乳房に顔を埋めていた。ちよこんと突き出たピンク色の乳首を、彼等はまるで母乳を求める赤ん坊のように必死に吸い続ける。

「お、おおっ……八神さんのマ○コも気持ち良い……ッ!」

「バニングスさんのもすげえぞ。俺のチ○コに食いついて離れねえ」

「ああ、すずかちゃんあん……もっともっと気持ち良くなるうねえ……!」

少し離れた場所では、はやて、アリサ、すずかの3人も同じように犯されていた。畳の上にうつ伏せに寝かされたはやてを男子生徒が寝バックで楽しみ、2人の男子生徒に支えられたアリサを別の男子生徒が騎乗位で下から突き上げ、M字開脚の体勢にされたすずかの膣内に挿入した男子生徒が必死に腰を振る。

「ちゅぱ、じゅる、れる……ぷはあ! 芦川さんにたっぷりキスしてやっただぜ」

「山下さんも良いおっぱいしてるよなあ。すっげえ柔らかい」

「桜さんはおっぱいは小さいけど、これはこれで悪くねえよな」

「美佳ちゃんはケツの張りがあって最高だぜ……!」

この5名以外にも、他の女子生徒達も同じように、男子生徒達によつてその肢体を存分に貪られている。強めの睡眠薬を飲まされている女子生徒達は、自分の体が男子生徒達に犯されている事など知る由もない。

「お、おお、イク、イクぞ高町さん、ああイク……!!」

「ああフェイトちゃん、イクよ、中に出すからな……うっ!!」

「おお、出すぞお……八神さんのオマ○コに中出し……あ、ああ!!」

「バニングスさん、受け取れ……俺の精子を受け取れえ!!」

「すずかちゃん、すずかちゃん、すずかちゃん……ッ!!」

限界を迎えた男子生徒達が、女子生徒達の膣内に次々と射精を決め込む。彼女達の膣内を男達の醜い子種が流れ、彼女達の子宮内が白く埋め尽くされていく。

「ふう……高町さんの中にいっぱい出してやったぜ」

「俺もフェイトちゃんに種付けしてやったぜ。これで俺の子を孕んでくんねえかな」

「うし、交代しようぜ。次は俺が八神さんのを使わせてくれよ」

「じゃあ俺はバニングスとやらせて貰うぜ」

「俺は安本さんの体を味わってやるぜ！」

「美佳ちゃんのアナル、俺も興味あるなあ」

「お、俺はまだ、すずかちゃんと繋がっていたい……！」

「悪いが、山下さんはもう俺の女だからな。お前等にはやらねえぞ」

「おい、俺にもやらせろよ！」

「独り占めすんな！」

女子生徒達の膣内から肉棒が引き抜かれ、彼女達の股間から白い精液がとろりと流れ出ていく。射精を終えた男子生徒達は、他の男子生徒と交代して別の女子生徒を犯したり、射精した後も同じ女子生徒を独り占めしたり、射精し終えて休憩したり、まだ挿入していない男子生徒がようやく参加したりと、全員がやりたい放題だった。

「ん、じゅぶ、んう……」

「おお、なのはちゃんの口も良いぜえこれ……ッ」

「八神さんの膣内、マジ気持ち良い……!!」

「美佳ちゃんのケツの穴も良いぜ……すっげえ締まる……ッ!!」

「すげえや加奈ちゃん！ マ○コとアナル、両方に入ってやがる」

眠るなのはの口で無理やりフェラチオさせる者や、はやてを対面座位で犯す者もいれば、中には女子生徒のアナルに挿入して楽しむ者、前後の穴両方に挿入して楽しむ者もいる。

「フェイトさあん……今からフェイトさんのお腹の中、俺の精子で満たすからね……！」

「昔、俺に向かって随分偉そうな態度取ってやがったよなあバニングス……今から俺のザーメンで、俺のガキ孕ませてやるからなあ……」

!!

「ああすずかちゃん、妊娠したら、俺と結婚しよう……!! 俺と一緒に、いっぱい子供作っていこう……!!」

それぞれ好みの女子生徒が異なる男子生徒達だが、彼等の中で、共通している思いが1つだけある。それはこの場にいる女子生徒達を、1人残らず妊娠させる事だった。

「み、美月さん、中に出すよ……お、俺の、俺の可愛い子供を産んでくれよな……うっ!!」

「山下さん、君の体はもう僕の物だ……このデカくて柔らかいおっぱいも……この締まりの良いオマ○コも……全部が俺の物だ……!!」

「な、なのはちゃん、中に出すよ!! ああ、俺の子を産んでくれ、俺の子を産んでくれ、俺の女になつてくれえっ!!!」

代わる代わる交代しては、女子生徒達の膣内に精液を射精し、次々と種付けを決める男子生徒達。この時にレイプされた事が原因で、女子生徒の中には男子生徒の子供を妊娠してしまった者もいるのだが、この時点ではまだ、膣内射精を繰り返す男子生徒達も、種付けされ続けている女子生徒達も、その事を知る由はない。

「おお、めっちゃ気持ち良いよ芦川さん……羨ましいぜ木村の奴、いつもこんな気持ちの良いマ○コを使わせて貰ってたんのかよ……!!」

「美月さん、俺がいっぱい種付けしてあげたからな……俺の子供がデキたら、渡辺の奴と一緒に育てるんだぞ……!!」

「で、出る、また出すからね安本さん……!! 佐々木よりも先に、俺が安本さんを孕ませてあげるからね……ううっ!!」

「フェイトちゃんのオマ○コ、俺のザーメンでいっぱいだな……これはもう俺の子供孕んでるでしょ」

「何言ってるんだお前、フェイトちゃんは俺の子を産むんだよ」

だからこそ彼等は、自分の子孫をこの世に残そうと、彼女達の体を満足するまで味わい続けた。既に恋人や婚約者がいる女子生徒が相手であっても、彼等は一切容赦はしない。誰一人例外なく、女子生徒達はその子宮に男子生徒達の子種を注ぎ込まれていった。

「ああ、まだ出る……や、八神さん、俺の子種で、俺の子を産んでくれ

……ッ!!」

「見ろよこれ。美佳ちゃんのケツマ〇コ、俺の精子が溢れ出てるぜ」  
「す、すげえ……倉橋のマ〇コから、俺の精子が垂れてきてる……」  
「バニングス、てめえはもう一生俺の肉便器だ……お前はこれから先、俺のガキを産み続けるんだ……!!」

「すずかちゃん……また中にいっぱい出してあげるからね……ちゃん  
と責任は取ってあげるからさ……妊娠したら、ちゃんと俺の子供を産  
むんだよ……ああ、出る、出ちゃう、すずかちゃんの中に、ザーメン  
いっぱい出ちゃう!!」

男子生徒達の欲望は、留まる事を知らない。女子生徒達は知らず知  
らずの内に、男子生徒達の醜い欲望を、その体で受け止め続けていく  
事となるのだった……

t o b e c o n t i n u e d ……

## 二宮×ドゥーエ IF

「——ふう」

真つ暗な夜のミッドチルダ。某リゾートハウスの中庭にて、プールの水面からアビスが飛び出し、変身を解除して二宮の姿に戻る。首をコキコキ鳴らす二宮を出迎えたのは、マグカップにコーヒーを淹れて待っていたドゥーエだった。

「お疲れ様、 鋭介」

「ああ……まだ熱いな」

「そろそろ戻って来る頃だろうと思って。タイミングばっちり良かったわ」

ドゥーエから受け取ったマグカップから熱さを感じた二宮。わざわざ用意して待っているとは律儀なものだと、彼はそう思いながらもマグカップから漂う香りを楽しみつつ、静かにコーヒーを口にする。よく好むブラックな味わいが、この日忙しく動き回って疲れていた二宮の精神を幾分落ち着かせた。

「それで、ジャック・ベイルは死んだんですって？」

「ああ、直接トドメを刺してきた」

「良かった。マジで気色悪くて嫌いだったものアイツ」

ジャック・ベイル。仮面ライダーリッパーとなって世間を騒がせていた凶悪な殺人鬼は、二宮によって人知れず始末され、この世から消える事となった。現時点でそれを知っているのは、二宮達以外ではウェイブ・リバーこと仮面ライダーアイズのみであり、それ以外の面々はまだジャック・ベイルの死を知らない。

「あそこまで制御の利かない奴を使い続けるのは、俺にとっても面倒だったからな。フローレンスには悪いが」

「誰から見ても厄介以外の何物でもないでしょ、あんなド変態。でもま、本当に死んでくれて良かったわ。これで鋭介も肩の荷が1つ下りたんじゃない？」

「奴に關してはな……どつちにしろ、事件はまだ終わらんだろうが」

「？ どういう事？」

「今回の殺人事件だが……」

二宮はドゥーエに、ある真実を語り明かした。その内容の一部始終を聞いたドゥーエは、驚いた表情で二宮に問い返した。

「それ、本当なの？」

「今のところ、ネヴィア・ルーチエが動向を探っている最中だ。ひとまずは奴からの報告が来るのを待つ……今日はもう、これ以上働くのは面倒だ」

マグカップを近くのテーブルに置いた後、着ていたコートを脱いだ二宮はビーチチェアに座り込み、薄っすらとかいた汗でベタついたシャツも脱いで上裸姿となる。そんな時、隣のビーチチェアに座り込んだドゥーエが、程よい筋肉がついた二宮の右腕に抱き着き、彼女の豊かな乳房がふよんと形を変える。

「おい、いきなり何だ」

「せっかく汗を流すんでしよう？ 私も一緒に良いかしら」

「またか？ やたら求める事が多くなったな」

「もう、最近はそのままで求めてないでしょ。こうして2人きりになる事も最近減ってきちゃったから、たまには羽目を外しても良いかなって」

ドゥーエが身に着けていた衣装は、上半身が黒いビキニ、下半身が青いホットパンツのみ。おまけにホットパンツはわざとらしく黒いパンツが見えている辺り、初めから二宮を誘う気満々だったようだ。ドゥーエの指先が、二宮の首筋をツーツとなぞるように触れる。

「それとも、駄目かしら？」

「……この数年で、随分卑しくなったものだな」

「あなたが私をこうしたのよ……ね、良いでしょ？」

「フン……」

二宮が小さく鼻を鳴らす中、ドゥーエは履いていたホットパンツをするりと脱ぎ、身に着けていたビキニをも脱ぎ捨てて。彼女のその煽情的な動作が、2人の熱い時間が始まった事を知らせる合図となった。

「ちゅ、あむ、ぴちやつ……」

数分後。一糸纏わぬ姿となった2人はプールに浸かり、熱い快樂に身を投じていた。プールの水面が波打つ中、身長が高い二宮にドウエが背を伸ばすように顔を近付けてから、互いの唇を合わせて接吻を繰り返す。

「ん、ふう……ちゅ、じゅるう……ッ」

最初は唇を押し付け合うだけだったが、二宮がドウエの口内に舌を侵入させたのをきっかけに、舌を絡ませ合う熱くて深い接吻になっていく。目を閉じながらも僅かに喘ぎ声を漏らすドウエを、二宮は獲物を貪る獣のような目付きのまま強く抱き締め、接吻だけで彼女の淫らな感情を高ぶらせていく。

「んっ!? んむ、ううっ、んん……!」

そんな状態が続く中、二宮の右手がドウエの乳房へと伸びていき、掌で包み込むかのように揉み始める。乳房を揉まれたドウエは驚いて目を開くも、そんな二宮の行いを拒む様子は全く見せず、彼と舌を交わいながら乳房を揉まれ続ける。次第にとろんとした目をするようになった彼女は、二宮との接吻をやめて一旦顔を離れた。

「はあ、はあっ……フフツ♪ 冷たいプールの中なのに、火照ってきちゃった……♡」

「なんだ、もう我慢できないのか? 辛抱のない奴だ」

「当たり前でしょ? こんな状況で我慢なんて……できる訳ないじゃない」

ドウエは二宮に密着しながら、水の中で二宮の肉棒に右手で優しく触れる。彼の肉棒が大きくなっている事に気付いた彼女はイヤ

しく微笑んだ。

「あら。鋭介のこころ、もうこんなに硬くなってる」

「……俺とて男だ。こればかりは自分じゃどうしようもない」

「こういう時でも意外と素直よねあなたって……でも、嫌いじゃないわ」

ドゥーエは二宮と正面から抱き着いた姿勢のまま、彼の肉棒を優しく掴み、自身の股間へと近付けていく。肉棒の先端が股間の割れ目に密着したのを確認したドゥーエは、そのまま自らの腰をゆっくり押し付け、膣内に彼の肉棒を迎え入れた。

「んん……あ、はあっ……入ってる……鋭介のが……あっ♡」

「……動くぞ」

強く抱き締め合った状態から、二宮が腰を振る事で2人は快楽を味わい始める。チャポンチャポンと水面の波が激しくなる中、下半身から来る快感にドゥーエは頬を紅潮させ、乱れに乱れた表情で喘ぎ声を漏らす。

「はあ、ああつ、良い、良いわ、鋭介！ もつと、もつとお……！」

ドゥーエがプールの壁に背を付けた体勢に変わり、彼女の柔らかくむちむちとした太ももを片方持ち上げた二宮がピストンを繰り返す。彼の肉棒で膣内を蹂躪される快感に、ドゥーエは蕩けた表情を浮かべながら更なる快感を求め続けた。

あの堅物な二宮が、自分と熱いセックスを行っている。

今もこうして、自分の体を求めてくれている。

自分という存在に、利用価値を見出してくれている。

その事が、彼女は嬉しく感じていた。

それは本当の愛情ではない事など、ドゥーエは既に頭で理解していた。

むしろ、それで構わないとすら思っていた。

今はただ、彼に利用されたい。

彼に対する依存だけが、今の彼女にとって一番の支えだった。

「ああ、ん、はあ、ああつ、んああつ……!!」

何度も腰を打ちつけられ、膣奥をこれでもかと言わんばかりに突か

れ続けるドゥーエ。既にその頭は、二宮と情欲を満たす事だけでいっぱいだった。彼女の蕩けた目は焦点が合っておらず、二宮の顔を正確に見据えているかどうかすら疑わしい状態だった。

「ドゥーエ」

そんな時、二宮の顔がドゥーエの耳元まで近付いた。突然名前を呼ばれたドゥーエは心臓がドキンと反応し、また彼女の膣内がキュツと締まる。

「どうに欲しい？」

「……ッ!!」

感情のない、どこまでも冷たい言葉。

ドゥーエにとって、それは最高の媚薬だった。

全身をゾクゾクと震わせた彼女は、それだけでも骨抜きにされてしまいそうだった。

「……出して……中に、いっぱい頂戴……!!」

強く求めるドゥーエに応じるかのように、二宮の腰を振る速度を上げ始める。その膣奥では肉棒の先端が子宮口を何度も突いており、更に激しくなっていく快感にドゥーエの喘ぎ声も大きくなっていく。

「ああっはあっ!! 出して!! 鋭介の……中に、いっぱい出してえっ!!」

そして二宮がドゥーエを抱き寄せ、腰を強く打ち付けた次の瞬間。膣内で彼の肉棒が勢い良く爆ぜ、その先の子宮口に向かって白濁とした熱い精液が放たれ始めた。それを直に感じ取ったドゥーエは絶頂に達し、全身をビクビクと痙攣させた。

「ああ、で、出てるっ、鋭介のが、熱いのが中に……はああああああ……ッ!!」

絶頂したドゥーエは背中を大きく反らし、夜空を見上げながら熱い快感に浸り続ける。その後も二宮の肉棒は射精はしばらく続き、彼女の子宮内には彼の精液がドクドクと注ぎ込まれていく。

「はあ……まだ、出てる……気持ち良い……あ、ああ……♡」

荒くなった呼吸を整えながらも、余韻に浸り続けるドゥーエ。そんな中、ようやく射精が収まった二宮は肉棒を引き抜き、彼女の股間か

ら溢れ出た白い精液が水中を漂っていく。

「はあ、はあっ……」

「どうする、もう終わるか?」

射精を終えたばかりであるにも関わらず、既に呼吸を整えつつある二宮。ここでお開きにするか否か。彼の問いかけに対し……ドゥーエの答えは決まっていた。

「……もつと、して頂戴……お願い……♡」

「あ、ああつ、はあん!! 良い、そこ、そこおっ!!」

それから数十秒後。プールの手すりがある場所まで移動したところで、2人の行為は再開された。

手すりを掴んだドゥーエが背中を向ける中、後ろから肉棒を挿入した二宮が、立ちバックの体勢で彼女を犯し始める。彼女の丸い尻に二宮の腰がパチユンパチユンと水音を立てながら打ちつけられ、再び子宮口を肉棒に突かれているドゥーエは快感のあまり、自分の口から涎が出ている事すらも全く気付いてはいなかった。

「すっかり夢中だな。そんなに俺のが良いのか?」

「ああつ、はあん!! だ、だってえ、んんっ……き、気持ち良過ぎて……ア、アタシ、もう……!!」

「そうか……まあ良い、まだしばらくは付き合ってやる」

「あ、ああ、はああつ!!!♡」

ドゥーエの乳房を揉みしだきながら、二宮が後ろから腰を強く打ちつける。それからしばらく時間が経過してから2度目の射精が始まり、ドゥーエは下腹部に注ぎ込まれて来る精液の熱さに、再度絶頂へ

と達したのだが……それでもまだ、2人の熱い時間が終わる様子はないかった。

「ん、ちゅ、んぶう……!」

一度プールから上がった後、ビーチチェアに座り込んだ二宮の股の間にドゥーエが顔を埋め、フェラチオまで行われた。彼の精液を欲しているが故に、ドゥーエは肉棒を咥えたまま口内でその先端をチロチ口舐め回し、精液を吸い出そうとジュズズと音を立てて吸い上げる。「出すぞ」

「んぶつ?! ん、んむう、んぐ……ゴク、ゴク……♡」

二宮がドゥーエの頭を強く押さえつける中、彼女の口内で行われる3度目の射精。いきなりの射精でドゥーエは危うく咽そうになるも、何とかそれに耐え抜いてから、幸せそうな表情で彼の精液を喉に流し込んでいく。

「ぶはっ……ねえ、鋭介……まだ良いかしら……?」

「……ったく」

精液を飲み干したドゥーエは、舌舐めずりをしながら二宮に問いかける。一体いつになったらこの時間は終わるのかと溜め息をつく二宮だったが、すぐに思考を切り替えた彼はドゥーエの体を抱き寄せ、対面座位の体勢で再び交わり始める。

「あ、んんっ!! はあ、ああつ、鋭介、鋭介えっ!!♡」

「聞こえてる、いちいち名前を呼ぶな」

二宮がそう言っても、ドゥーエは彼の名前を何度も呼びながら快楽に身を投じていて聞こえていない。二宮は仕方ないと言いたげな表情で彼女を強く抱き締めつつ、下から彼女の体を突き上げ続ける。

「ああ、奥にいい!! 奥に当たってえ……んん、んぶうううううっ!!!♡」

下から何度も突き上げている内に、4度目の射精に至った二宮が彼女の子宮に精液を注ぎ込み、またしてもドゥーエの全身が強い快感に襲われる。それ以降も、ビーチチェアの上で仰向けになったドゥーエを二宮が正常位の体勢で犯したり、四つん這いになった彼女を後ろから何度も突いたり、2人は何度も体を重ね合い続けた。

(また、中に熱いのが……気持ち良い……♡)

こんな時間が、まだまだ続いてくれたら良いのに。

ドゥーエがそう思った回数は、一度や二度どころではない。

それでも、いずれは終わりの時がやって来るのだ。

「ドゥーエ」

「ん、鋭介……ちゅ、んむ、れろ……ッ」

だからこそ、今のこの熱い時間を、思う存分楽しんでいたい。

彼に、利用価値のある存在として見て貰えている内に。

精液を子宮に注ぎ込まれている間、快感に震えるドゥーエはそう思  
いながら、二宮と再度熱い接吻を交わしていく。

2人の熱い時間が終わりを迎える頃には、ドゥーエが二宮の為に淹  
れたコーヒーマも、とつくに冷め切って温くなってしまうていたのだっ  
た。

T o b e c o n t i n u e d ……？

## スバル IF

下半身が妙にムズムズする。

僕の意識が目覚めたのは、そんな感触が切っ掛けだった。

朝の眩しい日差しに照らされる中、ゆっくり目を開いた僕の視界に、見慣れた天井が映る。

視線を少し下に向けてみると、僕の体を包み込んでいるはずの布団が、何故か異様に大きく盛り上がり山のようにようになっていた。

その山が揺れるように動くと共に、僕の下半身……というか僕の股の間に存在する一本の棒に、気持ちの良い刺激が襲い掛かる。

まだ眠気が覚め切っていない僕でも、それだけで何が起こっているのか容易に理解できてしまった。

ああ、またなのか。

僕は下半身から来る気持ちの良い刺激にピクンと反応しつつ、やれやれと言った様子で布団を大きく捲り上げる……ほら予想通りだった。

「んちゅ、じゅる、んむ、ぷはっ……あ、おはよう〇〇君♪」

布団を捲り上げたそこにいたのは、一糸纏わぬ姿で僕のまま僕のチ○コを弄っている青髪の女性。

彼女の名前はスバル・ナカジマ。

時空管理局の局員として働いていて、かつては機動六課の一員として、J S事件の解決に奮闘した少女。

機動六課解散後は特別救助隊に移り、レスキュー隊員として多くの人の命を救っている。

僕もまた、彼女と同じくレスキュー隊員の一人として、スバルちゃんと共に人命救助に励んでいる……もつとも、スバルちゃんとはそれぞれ違う分隊に分かれて動いている為、一緒に活動する機会はあまりない訳だが。

それでも、共に人の命を救う者同士として意気投合した僕とスバルちゃんは、いつしか仕事だけでなく、プライベートでも関わりが増えていくようになった。

関わりが深くなつていく内に、僕はいつしかスバルちゃんに対して好意を抱くようになっていった。

そんなある時、僕達の関係が大きく変わる事態が発生した。

それは僕がスバルちゃんの住むマンションに招かれた時の事。

僕達は2人でテレビを見ながら、僕が買つて来たお菓子を一緒に食べていたのだが、そこで僕は1つの見落としをしてしまっていた。

僕が買ったお菓子の中にチョコレートが含まれていたのだが、このチョコレートがなんとアルコール入りだったらしく、それに気付かず食べたスバルちゃんはもの見事に酔っ払ってしまった。

あつという間に出来上がってしまった彼女は、なんといきなり僕に熱いキスをかました後、そのまま僕を押し倒してきたのだ。

アルコールを摂取した事で熱く火照っていたスバルちゃんの体に、僕は己の性欲に抗えないまま、彼女と体の関係を築く事となつてしまった。

スバルちゃんと熱い一夜を過ごした翌日、目覚めたスバルちゃんは慌てて僕に謝罪してきた。

話を聞いてみたところ、実はアルコール入りチョコを食べた酔っ払っていた間も、まだ辛うじて意識は残っていたらしい。

スバルちゃんはその状況を利用して、僕との距離を一気に縮める為に、あのような行動に出たようだ。

本当ならもっと違う方法で気持ちを伝えるべきだったはずなのに、そのような行動に出してしまった事を謝罪する彼女だったが、僕はそんな彼女を優しく抱き締めてあげた。

そこで僕は、初めて自分の気持ちを彼女に伝える事ができた。

僕も君の事が好きだ、と。

僕がなかなか告白する勇気が出なくて、そのせいで君にこんな事をさせてしまったんだ、と。

辛い思いをさせてしまつてごめんね、と。

それを聞いたスバルちゃんは、こんな事になってしまった罪の意識と、自分達が相思相愛だった事による嬉しさの感情が入り混じった表情で、大声で泣き出した。

僕は彼女が泣き止むまで、ずっと優しく抱き締めて続けた。

その一件を経てから、僕とスバルちゃんはカップルとして本格的に付き合い始めた。

普段はレスキュー隊員として活動し、仕事がない日は2人きりの時間を存分に楽しんだ。

翌日が休みの時は、今回のようにまたエッチな時間を過ごす事も増えていった。

こうして、僕達の関係は今に至る訳である。

「ごめんね○○君。○○君のこれが大きくなってるのを見てたら、また我慢できなくなっちゃって……」

高く反り上がっている僕のチ○コを、スバルちゃんはその大きなおっぱいの間に挟み、先っぽを何度もキスしたり舌先で舐め続けていたらしい。

彼女の舌で舐められるたびに、僕のチ○コはピクピクと反応し、射精に導かれようとしている。

「あ、ピクピクしてきた……そろそろ出そう？　じゃあ、いっぱい出しちゃお……♪」

スバルちゃんは悪戯っ子のような可愛らしい表情を浮かべながら、その柔らかなおっぱいを使って僕のチ○コをマッサージュするかのように刺激してくる。

ムニユンとした彼女のおっぱいの感触が溜まらなくて、僕は我慢できずにあっさり射精してしまった。

チ○コの先っぽから飛び出した精液が、スバルちゃんの顔や髪の毛、おっぱいにも降りかかって、彼女の姿がまた更にエロい事になっていく。

「ふふ……いっぱい出たね♡」

おっぱいにかかった僕の精液を指で掬い、微笑みながらペロリと舐め取ってみせるスバルちゃんの行動が、僕の性欲を更に強く掻き立てる。

おかげで、朝一で射精したばかりであるはずの僕のチ○コは、未だ硬さを失っておらずピンと上を向いている。

「わ、まだ硬い……もっとして欲しいの？」

首をコテンと傾げながら、スバルちゃんが僕にそう問いかけてきた。

うん、正直に言うともっとして欲しい。

昨日の夜も散々やりまくったけど、まだまだ僕の性欲は尽きそうにない。

彼女にそう伝えると、彼女もまたペロリと可愛らしく舌舐めずりしてから、僕に体を密着させてきた。

「良いよ。今日明日は仕事も休みで、特にこれといった予定もないし……いっぱいしょっか♡」

元々、スバルちゃんもそうする気満々だったようだ。

それでもなきや、こんな風に自分のおっぱいを僕の体に押し当てて、僕の性欲を刺激してくるはずがない。

僕はそんな彼女を優しく抱き寄せてから、お互いの唇を合わせて熱いキスを行う。

スバルちゃんもとろんとした目をしながら、僕と何度も舌を交える。

僕達は体勢を変え、スバルちゃんがベッドに仰向けに寝転がり、その上に僕が覆い被さった状態になる。

その状態からも僕達は何度もキスを繰り返し、時には彼女のおっぱいを優しく揉みしだきながら、お互いの何度も体を重ね続ける。

そうしている内にスバルちゃんは準備が整っているようで、彼女のあそこは既にいやらしい液体に濡れていた。

「ねえ……○○君の、早く挿れて♡」

そんなエッチなお願いをされては、断れるはずもない。

僕は自分のチ○コの先っぽを、彼女のあそここの入り口にクチュリと押し当ててから、その奥深くにゆっくり押し進めていった。

少しずつ入っていく中、僕はそのキツキツな締めまり具合に耐えながら、何とかその奥深くの子宮口まで到達させてみせた。

「あんっ……○○君のが、届いたあ……ッ！」

膣内に挿入され、蕩けた表情を浮かべるスバルちゃんの腰を掴み、

僕は彼女の膣内を堪能し始める。

パンツパンツと腰を打ちつけながら、僕は彼女の揺れるおっぱいに顔を近付け、乳首を何度も舐めしゃぶった。

スバルちゃんのおっぱいはもう僕の物なんだと。

そう示すかのように、まだ母乳の出ない彼女のおっぱいを、僕は赤ちゃんのようにひたすら吸い続けた。

「あつ、あん、ああつ、やつ、気持ち、良い、気持ち良いよお……!!♡」  
ハッキリ言おう。

スバルちゃんの体は凄く気持ちが良い。

この大きなおっぱいはもちろんの事、レスキュー隊員として鍛えてきた彼女の体は程よく引き締まっており、それでいて筋肉が付き過ぎている。

そんな理想的な体型をしたスバルちゃんが、僕にチ○コで突かれるたびに甘い吐息と喘ぎ声を漏らし、激しい快楽によがっている姿を見ていると、もつと可愛がってやりたい気持ちになる。

おっぱいから口を離し、スバルちゃんの首元にもキスを落としてあげると、彼女は嫌な顔一つせず笑顔でそれを受け入れてくれる。

スバルちゃんもまた、これほど僕に体を求められているのが凄く嬉しいようだ。

心なしか、また膣内の締めりが強くなったような気がして、我慢の限界を迎えた僕は腰を強く打ちつけた後、彼女の膣内で射精に至った。

ブルリと震えた僕のチ○コが、スバルちゃんの膣内で熱い精液をドクドクと放出し、その先の子宮口に向かって流し込んで行く。

「ああ、出てる、中にいっぱい出てるう♡」

下腹部に熱い物を注ぎ込まれる感覚が気持ち良いのか、スバルちゃんは背中を大きく反り上げ、全身をピクピク震わせながら快感に身を任せていた。

それからスバルちゃんが再びベッドに背を付けた後、射精を終えた僕がチ○コを引き抜くと、彼女のあそこから僕の精液が僅かに流れ出て来るのが見えた。

そう、この光景が何度見ても飽きない、溜まらないのだ。

おかげで僕のチ○コは未だ硬さを失う様子がない。

スバルちゃんもそれに気付いたのか、ハアハアと荒い息を整えながらも、ニコツと笑みを浮かべてこちらに問いかけてきた。

「まだ、する……？♡」

そう聞かれた瞬間、僕はまた彼女の膣内に挿入していた。

そんな事を言われてしまったら、それを断る理由なんて僕にはない。

その後も正常位の体勢で一発。

体を起こし、対面座位の体勢になってから一発。

今度は自分が仰向けになり、騎乗位で彼女に腰を振って貰って一発。

それからまた体勢を変え、四つん這いになった彼女を後ろから突きまくって一発。

汗を流そうと風呂場に向かう彼女に付いて行き、後ろから挿入して立ちバツクの体勢でまた一発。

僕はただひたすらに、本能のままにスバルちゃんのエッチな体を味わい続けた。

そんな尽きそうにない僕の欲望を、スバルちゃんは拒む事なく、全てを全身で受け止めてくれた。

「あぁっ、まだこんなにいっぱい……お腹、もうタプタプ……○○君の赤ちゃん、妊娠しちゃうかも……♡」

これまで、僕は彼女の膣内に生で射精してきた。

過去に何度かゴムを使った事もあるにはあるのだが、ゴムを使ったセックスは何だか味気なく感じて、スバルちゃんもあまり満足はしていなかった。

その為、ゴムはほんの数回使っただけで、それ以降は一切使わなくなってしまった。

ちなみに収入に関しては、僕もスバルちゃんも特にこれと言った不安はない。

なのでスバルちゃんにはいつの日か、僕の子供を孕んで産んで欲し

いと思っている。

スバルちゃんもまた、いつ妊娠しても構わないと思っっているようで、僕との子作りセックスに積極的な姿勢を見せていた。

「ねえ、○○君……子供は何人欲しい？」

それはもうたくさん。

可能な限り、僕の子供をたくさん産んで行って欲しい。

たくさん子供を作って、スバルちゃんと大きな家庭を築いていきたい。

それを聞いたスバルちゃんはキョトンとした表情を浮かべた後、プツと小さく嘖き出してから、僕に抱き着いて頬にキスを落としてきた。

そして彼女が、僕の耳元でいやらしく囁いてきた。

「じゃあ……まずは一人目の赤ちゃん、作らなきゃね？♡」

それを聞いた瞬間、僕の理性は再び遠くに吹き飛んでしまった。

再びスバルちゃんを押し倒してから、彼女の膣内にチ○コを挿入し、獣のように何度も腰を振り続ける。

孕ませてやる。

今ここで、一人目の赤ちゃんを作ってやる。

僕の赤ちゃんを孕ませて、スバルちゃんをママにしてやる。

そんなとてつもなく大きな欲望を、僕はひたすらスバルちゃんの体にぶつけ、スバルちゃんはそれを何度も受け止め続けた。

気付けば時間帯は、朝から昼に変わってしまっていた。

それからしばらくした後の事だった。

「生理が来ない」というスバルちゃんの報告があつたのは。

T o b e c o n t i n u e d . . . . ?

## 後日談集①

・『湯村×ティアナ IF (☆)』の場合

「ああ、はあ、んう……ッ」

仮面ライダーインペラーこと湯村敏幸の襲撃を受け、抵抗空しく彼にレイプされてしまった少女、ティアナ・ランスター。

犯し終えて満足した湯村によって、どこかの路地裏に捨て去られた彼女は、雨が降り注ぐ中、半裸の状態で地面に横たわっていた。

彼女のデバイスであるクロスミラージュはどこかに捨てられてしまい、機動六課の面々との連絡もできない彼女は、この現状に対し、恐ろしい程に落ち着いていた。

彼女はこの状況を、自身への天罰だと思っていた。

ホテル・アグスタでの任務中、彼女は上司の命令を無視し、そのせいで相手のスバルを誤射する事態が発生してしまった。

そうなってしまったのは全て、上司の命令を無視して無理を押し通そうとした自分の責任。そう考えたティアナは、湯村にレイプされた事すら、当然の報いとして受け入れてしまったのである。

そんな彼女は今……

「へへへ……どうだお嬢ちゃん、気持ち良いかあ？」

「ああ、もっと気持ち良くしてくれよ……!!」

……とある公園にて、ホームレスの男達によって無惨にも陵辱されてしまっていた。路地裏に半裸で倒れていたティアナを偶然発見した1人の男が、彼女を連行してからホームレス仲間と共に輪姦し始めたのである。

「おおっ締まる……出すぞ、中に出すぞ!!」

「はあ、あっ……!!」

ホームレス達が建てたオンボロな小屋の中で、正常位でティアナを犯していた男がティアナの腰を掴み、彼女の膣内で遠慮なく射精する。下腹部に熱い物が流れ込んで来る感覚にティアナが体を震わせ、射精し終えた男が肉棒を引き抜いた後、また別の男がティアナの股間

に肉棒を挿入。自分勝手にティアナを犯し始めた。

「ああ、久々の女の体だあ……存分に楽しませて貰うぜ……！」

「なあ嬢ちゃん、こっちは手で扱いてくれよ」

「俺はこのおっぱいを使わせて貰うぜ」

「ん、くう、ああつ……！」

1人は正常位でティアナの膣内を堪能し、1人はティアナの空いた手で肉棒を扱かせ、またもう1人はティアナの乳房を使ってパイズリを行っている。住む家を失い、女にも飢えていたホームレスの男達はまたとないチャンスと言わんばかりに、抵抗してこないティアナの体を存分に楽しんでいた。

「おお、俺も出る……あ、ああ、イクぞ、イクツ!!」

「んん、はあ、ああつ……!!」

再び膣内に射精され、体中をビクビク震わせながら絶頂するティアナ。汚い恰好で匂いも臭いホームレスの男達に犯されているにも関わらず、彼女は抵抗の意志をまるで見せようとしなかった。

「今度は俺の番だぜ嬢ちゃん……！」

「なあ、俺のも口でしゃぶってくれよ……！」

「じゃあ俺はこっちの穴も使わせて貰おうかあ……！」

その後も、性欲が未だ衰える事を知らないホームレスの男達は、3人がかりでティアナを犯し始める。1人は膣内に、1人は直腸内に、1人は膣内に肉棒を突っ込み、3人がかりでティアナの体を穢している。3つの穴を同時に犯されているティアナはと言うと、その表情は快感に溺れ、蕩け切っていた。

(あ、これ……気持ち良い……)

「ああ出る、出るぞ、また出すからな!!」

「俺もだ……俺のザーメンで孕めよ嬢ちゃん!!」

「お、俺のザーメン、全部飲んでくれ!!」

「んぶ、むううううう……ッ!!」

男達はほぼ同時に射精し、ティアナの体内に精液がどんどん注ぎ込まれていく。ティアナは今まで以上の快感に身を震わせた後、グツタリした様子で倒れ込んだ。

「ぶつはあ……いっぱい中に出してやったぜ」

「俺もだ。こんだけ出したんだ、流石に孕んじまつてるだろ」

「なあお嬢ちゃん、お前はもう俺達のペットだ。これからもいっぱいセックスして、俺達の子供をいっぱい産んで貰うからなあ……!」

「はあ……はあ……ツ……」

男達の台詞を聞いた時、ティアナは既に思考を放棄していた。

こんな気持ち良い状況が続くのなら、もうどうだって良い。

今はとにかく、自分に罰を与え続けたい。

「兄の射撃の腕を証明したい」という目的すらも見失い始めていたティアナは、再び自身に覆い被さろうとする男の姿を見て、僅かにだが歓喜の笑みを浮かべてしまっていた。

「まだまだ中にたっぷりと出してやるからな……しっかり孕めよ」

「おじさん達と、いっぱい子作りしようねえ……!」

「何人産まれるか、楽しみだなあ……!」

男達はそれぞれ好き勝手な事を言いながら、その内の1人が再びティアナの膣内に肉棒を挿入していく。熱くて固い肉棒が侵入してくる感覚に、ティアナはまたしても体を振るわせた。

(ああ……気持ち良い……もつと、もつと……♡)

挿入した男が腰を振り、他の2人がティアナの乳房に吸いつき乳首をしやぶる。乳首を強く吸われ、膣内を乱暴に蹂躪される凄まじい快感に体が吞まれていき、ティアナはあまりの気持ち良さに再び意識を飛ばしてしまうのだった。

機動六課の面々が彼女を発見したのは、それから数日後の事だった。

・『アインハルト I F (☆)』の場合

「やあ、アインハルトさん」

「……………」

アインハルトが体育倉庫で陵辱されてから1週間後。あれ以降、彼女を犯した張本人であるミハイルは、彼女の自宅に平気で上がり込んで来るようになった。アインハルトが嫌そうな表情で睨みつけても、彼は何の遠慮もなくズカズカと部屋に入り、机で宿題をしている彼女の隣に座り込む。

「何の用ですか。私は今忙しいのですが」

「宿題なんて後でもできるでしょ？ それより……………わかってるよね？」

「……………」

ニコニコ笑いながら顔を近づけて来るミハイルに対し、アインハルトは露骨に嫌悪感を示しながらも、その表情は少なからず赤く染まっていた。するとアインハルトはその場からスツと立ち上がり、自身を着ていた白いワンピースのスカートを掴み、高く捲り上げた。

「うん、今日もノーパンでいてくれてたなんて嬉しいなあ♪」

「ツ……………あまり、見ないで下さい……………」

この時、アインハルトは下着を身に着けていなかった。体育倉庫で

の一件の後、「レイプされた後の写真をばら撒かれたくなければ」というミハイルの脅しを受け、彼女は今後、いつ如何なる時も下着を身に着けないで過ごす事を強いられるようになったのだ。

「あれ、もう濡れてない？ やっぱ期待してたんじゃない？」

「ち、違います！ これは……」

「何が違うのかなあ？ ねえ、教えてよ」

「ん、くう……ッ！」

スカートを捲り上げているアインハルトの股間にミハイルが手を伸ばす。彼の指先がアインハルトの股間の割れ目に入り込み、クチユクチユといやらしい水音が鳴り響く中、アインハルトは僅かに体をピクンと震わせた。

「ねえアインハルトさん。今からでも良いよね？ 僕の願い、聞いてくれるんでしょう？」

「……わかり、ました」

その後、ミハイルの願いを聞き入れたアインハルトはワンピースを脱ぎ、部屋のベッドに仰向けに倒れ込んだところにミハイルが覆い被さった。すると彼は自身のカバンから取り出したバイブを起動し、アインハルトの開かれた股に押し当て始めた。

「んん!? あ、いや、押しつけない、で……はうっ!?」

「そう言ってる割には気持ち良さそうじゃん」

ミハイルはブブブと振動しているバイブを、アインハルトの股間にグリグリと押し付け続ける。振動によりクリトリスを強く刺激されたアインハルトは何度も体を震わせており、絶頂に至るまでそう時間はかからなかった。

「あ、あ、だ、駄目、やめて下さ……はあぁっ!!!」

「うわっつと。すぐ、潮吹いてる……」

絶頂に至ったアインハルトの股間から潮が噴き出るのを見たミハイルもまた、ズボンの股間部分もっこりとし始めていた。もはや我慢する必要もないと、ミハイルも履いていたズボンを脱ぎ捨て、ガツチガチに勃起した自身の肉棒をアインハルトの股間にヌチャリと押し付ける。

「ああもう我慢できないや……行くよ、アインハルトさん」

「ん……ぎいつ!？」

ミハイルは肉棒の先端が股間に割れ目に少し食い込んだのを確認し、一気に奥深くまで突き入れた。一気に挿入されたアインハルトが苦しそうに呻く中、ミハイルは彼女の腰を掴んでからピストンを開始する。

「ああ良い、気持ち良いよ、アインハルトさんのオ○ンコ……!？」

「あう、あつ……も、もう少しゆつくり……ひぐう!？」

「ごめん無理、止められないよ……!？」

ミハイルは正常位で腰を振りながら、アインハルトの胸元に顔を近づけ、彼女の小さな乳房を舌先でペロリと舐め上げる。そのまま乳房を全体的に舐め回した後、ぷつくりと勃起している乳首の先端を舌先で突つつき、チュパチュパと音を立てて吸いつき、何度も舐めしやぶっていく。

「チュパツ……ああ、アインハルトさん、アインハルトさん……ツ!!」

「くう、ああ、はあつ!？」

限界が近付いて来たのか、ミハイルは腰を振るスピードをどんどん速めていく。そこからアインハルトの顔に自身の顔を近づけ、お互いの唇を合わせてキスをし始める。

「ん、ちゅつ、あむつ……!!」

アインハルトと舌を交えたキスを繰り返しながら、我慢の限界に到達したミハイルは腰を強く打ちつけ、肉棒の先端を子宮口まで行き届かせた。その瞬間、肉棒から精液がビュルリと発射され、アインハルトの子宮内にドクドクと注がれ始めた。

「ん、んんっ……んむう……ツ!!」

胎内に精液が注ぎ込まれているのを感じ取ったアインハルトは涙を流しつつも絶頂に至り、全身が激しい快感に襲われる。ミハイルは彼女と何度もキスしながら、意地でも彼女のお腹に子供を宿してやろうと、自身の腰を彼女の股間に押し付け、出せる限りの精液を流し込み続けた。

「ぷはっ……いっぱい出たよ、アインハルトさん。このままだと、いつ

の日は妊娠しちゃうね」

「はあ……はあ……駄目、です……私には……やるべき、事が……」

「君のやるべき事は、僕の赤ちゃんを産む事だよ。確実に妊娠するまで、何度でも中に出しちゃうからね」

「あ、そんな、駄目……いや、はっ、ああ……ッ!!」

その後も、ミハイルとアインハルトの体の関係は続いた。

年月が経過し、アインハルトの体は大人の女性へと成長していった。そんな彼女の体を、ミハイルは飽きる事なく何度も味わい続けた。家でのセックスはもちろん、時には人に見られるかもしれないような場所でセックスを行う事もあった。

そんな関係が長期間に渡って続いた以上……当然、アインハルトの体にも異変は起こった。

「ッ……嘘……そんな……」

ある日、アインハルトは生理が来なかった。

彼女のお腹には、ミハイルとの子供が宿ってしまったのである。

「嬉しいよアインハルトさん！ 本当に僕の子供を孕んでくれたなんて……!!」

「ん、ああっ!? ら、乱暴にしないで……あ、赤ちゃんが……ッ!!」

「ああ、ごめんごめん！ 僕と君の愛の結晶だもんね！ 大事にしないで……」

子供を妊娠し、ほんの僅かにお腹が膨らみ始めているアインハルトを、ミハイルは変わらず犯し続けた。豊満になった彼女の乳房を揉みしただけは、その乳首からは白い母乳が噴き出るようになっていた。

「アインハルトさん……君はもう、僕のお嫁さんなんだ!! 結婚しよう!! これからもずっと、僕とたくさん子供作りしようね!! 可愛くて

元気な子供をたくさん産んでいってね!!」

(ッ……ごめん、なさい……クラウス……私は、もう……)

それから数カ月後。アインハルトはミハイルと結婚する事となり、彼の子供も無事に出産した。しかし、その後もミハイルはアインハルトと何度も子供作りセックスを行い、彼女の子孫をこの世に残し続けて

いったという。

霸王としての彼女は死んだ。

そこにいたのは、産まれた子供達に母乳を与える、母親としての彼女だった。

・『アリサ&すずか IF (☆)』の場合

「どう、気持ち良い？」

とある廃墟。そこで1人の男性が、金髪の女性に押し倒されていた。男性のズボンの下から露出させられた太い肉棒が、金髪の女性の膣内に深く挿入され、金髪の女性は騎乗位の体勢で腰を振り続けている。男性は両腕を手錠でベッドに繋がられている為、抗う事すらできずにいた。

「遠慮しないで良いのよ。私の中に、熱い精子をいっぱい出しちゃいなさい」

金髪の女性——アリサ・バニングスは妖艶な笑みを浮かべなが

ら、豊満な乳房を自身の手で持ち上げるように揉みしだきつつ、腰を激しく振って男性の肉棒を刺激し続ける。その圧倒的快感に耐えられなかった男性は、アリサが腰を深く下ろしたその瞬間、彼女の膣内に精液を勢い良く発射してしまった。

「んんっ！ はあ……また来たあ♡」

下腹部に精液が流れ込んで来るのを感じ、アリサはゾクゾクと身を震わせながら恍惚な笑みを浮かべる。そんな彼女の頬には怪しげなピンク色の紋様が浮かび上がっており、精液を注がれている下腹部にもまた、ハートマークの紋様が怪しげに光を発していた。

「気持ち良い……もつと、もつとあなたの精子を頂戴……♡」

スレイブ・ダーインに陵辱されて異形化し、更に複数の男と子作りさせられてから数週間後。現在のアリサは既にかつての気高いお嬢様としての一面は鳴りを潜め、いろんな男性と子作りセックスを楽しむ淫乱な女性へと変貌してしまっていた。今もまた、異形化した事で手に入れたオーロラのような物で別世界に転移する能力を使い、別世界で出会った男性を誘惑しては、無理やりセックスに持ち込む日が続いていた。

「ん、はあ、ああっ♡」

そしてそれは、アリサの親友である紫髪の女性——月村すずかも同じだった。

「良い、良いよそこ♡ もつと、もつと突いてえ♡」

アリサが騎乗位で男性とセックスしているベッドから少し離れた場所で、すずかは別の男性と立ちバツクの体勢で子作りセックスに励んでいた。石柱に寄りかかっているすずかの背後から、別の男性は彼女の乳房を揉みしだきながら何度も腰を打ちつけており、そのたびにすずかの口からはいやらしい喘ぎ声が漏れ出していた。

「あ、ああん♡ 出そうなの？ 良いよ、出して♡ 中にいっぱい出してえ♡」

そしてこちらも限界が来たのか、バツクで突いていた男性はすずかの腰を掴み、自身の腰を強く打ち付けた状態で固定する。その直後、男性の肉棒が射精を開始し、すずかの膣内に濃厚な精液が流れ込んで

いく。

「あぁっ来たあ!!♡ 熱いのがあ……あぁっ気持ち良いよ……!!♡」

膣内射精されている感覚に、すずかは蕩け切った表情で快感を味わっていた。男性はすずかの尻に腰を密着させたまま限界まで精液を流し込み続けた後、ゆつくりと肉棒を引き抜き、すずかの股間の割れ目からは溢れた精液がとろりと流れ落ちていく。

「はぁ、はぁ……気持ち良かったあ……♡」

長時間セックスを続けて流石に体力が尽きたのか、とろんとした目をしたすずかはその場に座り込む。一方、すずかとセックスしていた男性も同じようにその場に座り込んだが、そこにアリサが近付いて来た。

「そのあなた。すずかも疲れてるみたいだし、今度は私とセックスしなさいよ」

アリサは舌舐めずりをしてから、すずかとのセックスが終わったばかりの男性にもセックスを迫る。既にだいぶ疲れていた男性は首を横に振ろうとしたが……その直後、アリサの右手の爪が伸び、その先端が男性の首元にグサリと突き刺さった。

「ねえ、良いでしょ? 私の子宮にもいっっぱい……種付けして頂戴♡」

爪の先端から何かを注入されたのか、爪で刺された男性は徐々に目の色が赤く染まっていき、その表情からは理性が失われていく。すると正気を失った男性はアリサを強引にベッドに押し倒し、再び勃起した肉棒を彼女の股間にズブリと挿入してみせた。

「あんっ♡ 良い、良いわっ……あなた達の精子で、私達を孕ませてえ♡」

正気を失った男性は激しくピストンしながら、アリサの豊満な乳房に吸いつき始めた。乳首から噴き出る母乳を飲みながら腰を振る男性の頭を、アリサはまるで子供をあやす母親のような表情で優しく撫でていた。

「あん♡ もお、そんなにがつついて、仕方のない子ね……良いわ♡」

私のおっぱい、好きなだけ飲みなさい♡」

乳房を吸われる快感で、アリサの膣内がまた強く締まったからだろうか。男性はまた限界が近付いてきたようで、一度乳房から顔を離してからアリサと唇を合わせる。アリサもそれを拒む事なく、男性と激しいデーパーキスをしながら、男性が射精する時を待ち続けた。そして……

「ん、ちゅっ……んんんんんん……ッ!!♡」

男性が腰を強く打ちつけた瞬間、再び射精が始まり、アリサの膣内が白濁とした精液で染め上げられる。アリサは男性と激しいデーパーキスを続けながらも、胎内に熱い精液を受け止め続けた。

「ちゅ、んはあ……こんなにいっぱい出しちゃって……赤ちゃん、デキちゃったかも……♡」

アリサの股間から肉棒が引き抜かれ、入り切らなかつた精液がコポリと溢れ出す。その様子を眺めていたアリサは赤みを帯びた顔で微笑みながら、男性との子供を宿してしまったかもしれない自身の下腹部を優しく撫で回す。

「もお、アリサちゃんばつかりズルいよお……!」

その時、先程まで休憩していたさすがが、四つん這いでアリサに近付いて来た。さすがは不満そうな様子でアリサの股間に顔を近づけ、精液の流れ出ている股間をペロリと舐め始めた。

「私にも頂戴……ちゅ、ぴちゃ、れろ……」

「あんっ♡ ちよ、駄目よすずか、それは私のよ……ああん♡」

すずかにクンニされたアリサが喘ぐ中、すずかは流れ出て来る精液を吸い取ろうと、アリサの股間に口付けては舌を上下に動かし、いやらしく舐めしゃぶり続けた。それはアリサの股間から精液が出て来なくなつてからも、数分間ほど続いた。

その後も、アリサとすずかは別世界に移動しては男性を誘惑し、子作りセックスを繰り返した。当然、そんな行いを繰り返していれば、再び子供を孕んでしまうのは当然の話であり、2人のお腹は子供を宿してポッコリと膨らむ事態となつた。

「あは、またお腹を蹴ってる……♡」

「楽しみだなあ……どんな子が産まれて来るんだろう……♡」

お腹の子供が産まれて来る事を楽しみにしながら、2人は次の獲物を求めて世界を彷徨い続ける。

理性を失い、淫乱の化身となった彼女達を止める者が現れる時は来るのか？

それは誰にもわからない……

T o b e c o n t i n u e d …… ?

## ミカヤ IF (☆)

ズバアアッ!!

「——天月・霞」

夏場のとある廃車工場。そこで1台の小さな廃車が、1人の剣士によつて一閃された。真つ二つに分かれて地面に落下し、音を立てて倒れる廃車に背を向け、その剣士は静かに刀を鞘に納める。

「いよ、流石だなミカヤちゃん!」

「はい、今回もありがとうございます!」

その剣士はなんと、まだ未成年の少女だった。夏らしく軽装に身を包んだその少女——ミカヤ・シエベルは廃車場の作業員である男性に対し、礼儀正しくペコリと頭を下げて礼をする。

「相変わらず切れ味が良いねえ。ミカヤちゃんの刀は」

「いえ、これでもまだまだですよ」

クレーンで吊り上げられた廃車を、彼女の愛刀である晴嵐せいらんを用いた居合いの一撃で両断する。天瞳流居合いの使い手であるミカヤは、剣術を鍛える為の修行の一環として、この廃車工場を利用して貰っているのである。

「せっかくだミカヤちゃん。ちようどお昼だし、うちで昼飯でも食つてくかい?」

「え、良いんですか? 流石にそこまでして貰う訳には……」

「おう! うちの女房が作った握り飯がやたら多くてな。俺らもこんな歳だ、もうそんなに量は食えなくてな」

「そういう事でしたら……じゃあ、お言葉に甘えまして」

そういう訳で、ミカヤは廃車工場の事務所まで案内して貰った後、作業員達から分けて貰った握り飯を美味しく頂く事にした。鮭や昆布、梅干しなど色々な具が入った握り飯を口に頬張り、彼女は幸せそうな笑顔を浮かべる。

「うん、美味しいです!」

「そうかい、そりゃ良かった。お茶もあるから飲んで行くと良い」

「はい、ありがとうございます!」

作業員から手渡されたお茶のペットボトルを受け取り、お茶を喉に流し込んでいくミカヤ。その後もミカヤは握り飯をいくつか食べた後、昼食を終えた事で今度こそ帰ろうとしたのだが……

「——すう、すう」

十数分ほど経過した後、気付いたら眠りに落ちてしまっていたミカヤ。事務所の一室にて、机に突っ伏した彼女がグツスリと寝息を立てている中、1人の作業員が部屋に入り込み、ミカヤの傍まで近付いた。「おっい、ミカヤちゃん？」

作業員が肩に触れて揺さぶるが、ミカヤが起きる様子はない。それを見た作業員はニヤリと笑みを浮かべると、部屋の扉を開けて他の作業員達を室内に招き入れた。

「寝てるか？」

「ああ、もうグツスリだぜ」

実はミカヤが飲んだお茶の中に、よく効く睡眠薬をこっそり混ぜていたのである。作業員達はニヤニヤと下卑た笑みを浮かべ、複数がかかりでミカヤの体を持ち上げた後、事務所に置かれている大きな机の上へと寝かせる。

「ゴクリ……」

1人の作業員が息を飲む。この時、ミカヤの恰好は巫女服の意匠がある薄い白シャツに黒のホットパンツといった露出度の高い服装だった。それに加え、白シャツを押し上げている豊満な乳房と、太過ぎず細過ぎないムチムチとした太ももが、作業員達の性欲をより強く刺激していた。

「ミカヤちゃんが廃車をぶった斬った後、その後片付けをするのも大変だからな」

「たまにはミカヤちゃんに、俺達の疲れを癒して貰うとしようか」

作業員の1人がミカヤの服に手を伸ばし、白シャツのボタンを1個ずつ順番に外していく。最後の1つを外してからシャツを左右にガバツと開き、豊満な乳房を包み込んだ黒いブラジャーを露わにさせた。

「いやほんと、いつ見てもでっけえおっぱいだ」

「昔はここまで大きくなかったよな。やっぱり俺達が何度も揉んでやったからか」

「そうそう。ミカヤちゃんのおっぱいは俺達が育ててやった、と言っても過言じゃねえ」

実を言うと、作業員達が眠るミカヤを犯すのはこれが初めてではない。これまでも何度か、彼等はこうしてミカヤをグツスリと眠らせては、彼女のナイスバディな肉体を味わって楽しんでいた。それ故、ミカヤの大切な純潔はもう既に、この卑劣な輩によって奪われてしまっているのである。

「ああっこれこれ。大きくてハリのある揉み心地がマジ最高……」

「また俺達で、ミカヤちゃんのおっぱいをでっかく育ててやらないとな」

ブラジャーまで剥ぎ取られ、作業員達の眼前に曝け出されてしまったミカヤの乳房。作業員達によって何度も揉みしだかれてきた彼女の豊かな乳房が、またしても彼等の手でいやらしく揉みしだかれ始める。

「お、乳首固くなってきたな。寝ながらも感じてるのか？」

指先で乳首をコリコリと摘まみ、ミカヤの体が僅かにぶるりと震える。作業員達はその反応を楽しみながら、2人の作業員が乳首を口も含んでチュウチュウ吸いつく一方、他の作業員達がミカヤの履いていた黒いホットパンツに手をかけ、ゆっくり脱がしていき黒いショーツを露わにさせる。

「相変わらず下着の色は黒か。ほんとアダルティで最高だよ」

作業員達がミカヤの足を左右に開かせ、1人の作業員がミカヤの股間をショーツ越しに人差し指で触れる。指先を股間に押しつけながら下になぞると、クチュクチュと小さな水音が鳴る。

「濡れてるねミカヤちゃん。感じてくれてるんだ」

「おじさん達がもつと感じさせてあげるよ……」

ショーツを横にズラし、露わになった恥部にゆっくり指を入れていく。作業員が膣内でグチュグチュと掻き回し、他の作業員達がミカヤの乳房を吸いながら揉みしだくと、ミカヤの体がビクビクと震え出

す。眠りながらも、その呼吸は少しずつ荒くなり始めていた。

「うお、めつちや溢れてきたぜ……！」

「やっぱ凄えな、お前の指テク」

「だろ？ 伊達に女房を抱いちゃいないぜ」

「つうか既婚者のお前が参加してる事にびっくりだよ。まあもう今更だけどさ」

作業員達に体をひたすら弄られ続けた事で、眠りながらも絶頂に至ったミカヤは全身を何度もビクビク震わせ、肌が紅潮し呼吸もかなり荒くなっている。その反応を見て楽しんだ作業員達は、いよいよ本番行為に入り始めようとしていた。

「うし、そろそろ良いだろ。今日は誰からだっけ？」

「まずは俺だ。今回もたっぷり楽しませて貰うぜ」

剥ぎ取ったショーツがその辺に放り捨てられ、作業員達がミカヤの体を押さえつける中、1人目の作業員が彼女の両足を左右に開き、固く勃起した自身の肉棒を彼女の恥部の割れ目に押し当てる。そしてその先端の亀頭をズブズブと割れ目の中へと挿し込んでいく。

「う、おおっ……やっぱ締まるぜ、ミカヤちゃんのマ○コ……！」

「マジか、早く出して代わってくれよ」

「待て待て慌てるなって、順番はちゃんと守れよ」

ミカヤの両足をM字の状態で押さえながら、挿入した作業員は腰を動かし、彼女の狭い膣内を堪能する。過去にもこうして膣内に挿入されている為、既に処女膜も失われているのだが、もちろん行為中は眠らされているミカヤがそれを知る由はない。

「見ろよ、腰振るたびにおっぱいが揺れてんぞ」

「ああ、良いもん見せて貰ってるぜ」

挿入していた作業員がパンパンと腰を振る中、ミカヤの豊満な乳房が上下にぷるんぷるんと揺れており、他の作業員達はその光景を楽しそうに眺める。

「ああ、気持ち良い、気持ち良いよミカヤちゃん……！」

作業員は腰をパンパン打ちつけながら、ミカヤの唇に自身の唇を押しつけてキスを始める。彼女の口を無理やり抉じ開けた彼は、彼女

と互いに舌を絡ませ、その感触をたつぷりと味わい続ける。それから数分ほど経過した後、作業員は唇を離した後、腰を振るスピードを少しずつ上げ始める。

「ああ、そろそろ出そうだ……今日もミカヤちゃんの中に出してやるからな……!」

腰を振る速度を速めながら、作業員はミカヤの細く括れた腰をがちり掴み、射精の瞬間を迎えようとしていた。

「ああ出すぞ、出すぞお、ミカヤちゃんの中に……うっ!!」

作業員は腰を強く打ちつけ、亀頭が頭腔内の奥深くにある子宮口まで到達。その直後、亀頭が子宮口にググツと押しつけられたまま、彼の肉棒が射精を開始した。脈動と共に、子宮内に彼の濃厚で熱い精液がドクドクと注ぎ込まれて行き、同じく絶頂に到達したミカヤは頬を紅潮させながら全身を強く震わせる。

「お、ああっ……ミカヤちゃんに種付け……すっげえ気持ち良い……ッ!!」

作業員はミカヤの体に抱き着きながら、彼女の子宮に精液を限界まで注ぎ込もうとする。それから少しした後、ようやく射精が終わった作業員は肉棒を引き抜き、ミカヤの恥部から精液がとろりと流れ出る。

「ふはあく……いっぱい出してやったぜ」

「おいおい、出し過ぎだろお前。めっちゃ溢れて来てるじゃねえか」

「で、次は誰だっけ?」

「次は俺だ。俺もミカヤちゃんのマ○コを楽しませて貰うぜ」

ミカヤの恥部から流れ出る精液をティッシュで拭き取った後、2人目の男が挿入体勢に入り、自身の肉棒をミカヤの恥部に挿入し始める。

「うわすっげえ、めっちゃ締まり良いわあこれ……!」

「なあ、俺ら待ってるの退屈だからさあ。手や口でやって良いか?」

「俺おっぱい使って良い?」

「いやちよつとくらい我慢しろよお前等……まあそれくらいだったら別に良いけどよ」

2人目の作業員が膣内に挿入して楽しむ中、待ち切れない他の作業員達も同じように勃起した肉棒を露出し、ミカヤの手や口、乳房などを使って楽しみ始めた。1人はミカヤの手で扱かせ、1人はミカヤの口に突っ込み、また1人はミカヤの乳房に押しつけるなどして、ミカヤの体を上手く使って自分の肉棒に快感を与えていく。

「ああ凄え、ミカヤちゃんが、俺のチ○ポを啜ってる……」

「うおっ……おいおい、急にまた締まりが良くなったぞ……!」

「ミカヤちゃん、こうされるの気持ち良いんだろうな」

「ひよつとしてミカヤちゃん、エッチな夢でも見てんじゃねえか?」

「はは、あり得るかもな」

ミカヤは口内に突っ込まれた肉棒の亀頭を、少し苦しげに表情を歪めながらも舌を這わせているらしく、フェラチオをさせていた作業員はその快感に身を震わせる。その影響で膣内の締まり具合が強まり、挿入していた作業員は何度も腰を前後に振り、貪るかのように快感をひたすら味わい続ける。

「くっ俺もそろそろ出そうだ……ミカヤちゃん、俺も中に出しちゃうからな……ああイクツ!!」

そして作業員が腰を強く押しつけ、肉棒を深く突っ込んだ瞬間、絶頂に至った彼は膣内射精を開始。既に1人目の精液が溜まっているミカヤの子宮内に、2人目が放った精液も注ぎ込まれて行く。

「はあ、はあっ……すっげえ出たわ。マジ最高」

「よし、今度は俺の番だな。俺もミカヤちゃんにたっぷり種付けしてやるぜ」

射精を終えた2人目が肉棒を引き抜いた後、3人目が精液まみれになったミカヤの恥部に肉棒を押しつけ、これまたズブリと遠慮なく挿入。3人目が腰を振って楽しみ始めた一方、他の作業員達も射精に至ろうとしていた。

「ああ、俺ももう出ちゃう……!!」

「俺もだ、俺のザーメン飲んでくれミカヤちゃん……!!」

「おっばい、ミカヤちゃんのおっばいに……出るツ!!」

手で扱かせていた者、口でフェラチオさせていた者、乳房に押しつ

けていた者もまた、ほぼ同じタイミングで絶頂に到達した。手で扱かせていた者はミカヤの掌に精液を吐き出し、フェラチオさせていた者はそのままミカヤの喉奥に向かって射精を行い、乳房に押しつけていた者はそのまま乳房に精液をぶっかけていく。結果、ミカヤの口内には精液が注がれ、手や乳房は作業員達の精液で白く汚される事となった。

「ああ、ミカヤちゃんが俺のザーメンを飲んでる……ッ!!」

「ぬおっ!? いきなり締まりが強く……やべっもう出ちまう!!」

3人目もまた、ミカヤの腰を掴んで固定したまま膣内で射精し、作業員達に注ぎ込まれた精液がミカヤの子宮内でドロドロに混ざり合う。その精液の中に含まれていた大量の精子達が、ミカヤとの間に子供を作るべく、卵子に向かって一斉に泳ぎ出していく。

「ああ〜出た出た……めっちゃ搾り取られちまったぜ」

「待ってました、やっと俺の番だぜ!」

その後も、作業員達による陵辱の時間はしばらく続いた。次に挿入した作業員は、四つん這いの体勢にさせられたミカヤの後ろから挿入し、バツクで存分に堪能した末に射精してみせた。別の作業員は、近くの椅子に座り込んでから背面座位の体勢でミカヤを犯し、これまた膣内で射精。また別の作業員は、椅子に座らせたミカヤをM字開脚させながら挿入し、その子宮内に躊躇いなく射精した。その場にいた作業員達は皆、己の欲望のままにミカヤの体を堪能し、彼女の体を穢していく。

「ああミカヤちゃん……今から俺が、ミカヤちゃんを孕ませちゃうからね……!」

「おいおい、既婚者がとんでもねえ事を言い出しやがったぞ」

「お前はもう奥さんを何度も孕ませてきたじゃねえか」

「女房は4人目を妊娠中なんだよ。だから次の5人目は、ミカヤちゃんに産んで貰おうと思ってな」

「俺らが言うのも何だがやべえなコイツ……」

「ああ、出るぞおミカヤちゃん……孕んでくれ!! 俺の、5人目の子供を……ウツ!!」

中には既婚者であるにも関わらず、ミカヤを妊娠させようとする者までいる始末である。しかしこの場にそんな最低な所業を止めようとする者は1人もおらず、既婚者の作業員はミカヤの膣内で射精に至り、彼女を妊娠させるべく限界まで精液を注ぎ込んでみせた。

「はあ、はあ、いっぱい出たよミカヤちゃん……君は将来、俺の子供を産むんだ……！」

「あくあ、可哀想なミカヤちゃん。こんな浮気野郎の赤ちゃんをお腹に仕込まれるなんてなあ」

「ひつでえ奴だぜ。俺達が急いでミカヤちゃんを救つてあげなきや」

「そうだな。こんな浮気野郎のじゃなくて、独身である俺達の子供を孕ませてあげようじゃないか」

「そういう事だからミカヤちゃん。今からおじさん達がまだまだいっぱい種付けしてあげるからね。おじさん達の子供をしつかり孕んでくれよな」

「最高かよ……あの強くて美しいミカヤちゃんが、俺達の子供を産んでくれるなんて……！」

「はあ、はあ、ミカヤちゃん……俺達が今から、ミカヤちゃんをママにしてあげるからねえ……♡」

彼等はミカヤへの陵辱行為を続行し、彼等は飽きる事なくミカヤの膣内に肉棒を挿入し、何度も、何度も、自分達の子種を彼女の子宮内に植え付けていく。気付けば衣服を全て剥ぎ取られていた彼女の瑞々しい素肌には、彼女が自分達のものになった証として、小さな赤い痕がいくつも残されていた。

「ああ出る、また出るよミカヤちゃん!! 元気な赤ちゃん産んでね!!」

「ミカヤちゃん……君はもう俺達の女だ……このデカくて柔らかかなおっぱいも、狭くてキツキツなオマ○コも全部……ミカヤちゃんの体はもう、俺達の物なんだ……ッ!!」

全ては、ミカヤとの間に自分達の子孫を残す為。留まる所を知らない男達の邪悪な欲望によって、ミカヤのまだ若さの残る体は今、より淫らで大人らしい体へと育てられようとしている。当然、深い眠りに落ちている今のミカヤには、それを知る術など存在しなかった。

「ああ、もう我慢できない……!! ミカヤちゃん、まだまだいっぱい出してやるからな……これからいっぱい子供を産んで貰うからな……ああ出る、出るよミカヤちゃん!! 中に出しちゃうよ!! 孕んでくれ!! 妊娠してくれ!! 俺の子供を産んでくれええええっ!!」

またしても、無抵抗なミカヤの子宮内に、熱くて濃厚な精液がドクドクと吐き出されていく。それが限界まで子宮内に注ぎ込まれようとした……その時。

ドクンツ……

ある異変が、ミカヤの胎内で起こった。

それは彼女の若い体がまた1歩、大人の女へと成長した瞬間でもあった。

しかし作業員達が、そしてミカヤがその事実を知るのには、まだまだ多くの時間が必要になる事だろう。

To be continued……?

## 男複数×白鳥姉妹（☆）

彼女は、己の運命を呪った。

（あ……また、来た……）

「おお、すつげえ気持ち良い……ああイク、中に出すぞ!!」

「俺も出るぞ!! 姉妹揃って孕みな!!」

聞こえて来るのは、興奮した男達の雄叫び。体内に熱い物が流れ込んで来るのを感じながら、彼女は何も言葉を発さず、視線の先にいる人物をただジツと見つめていた。

（お姉、ちゃん……）

大好きな姉が。

たった一人の大切な家族が。

複数の男にその体を穢されながら、自身と同じように虚ろな目を浮かべていた。

「夏希、そろそろ帰るよ〜」

「は〜い、お姉ちゃん!」

事の始まりは数時間前。

その日、白鳥夏希は大好きな姉である「白鳥エレナ」と一緒に、ショッピングを楽しんでいた。しかし、二人が買い物を終えて帰宅しようとしたその時……一台の白いハイエースが、二人の近くを通り過ぎる前に停止した。

「え、何……きやあつ!?!」

「夏希……むぐ!?!」

ハイエースから伸びて来た複数の手に捕まり、二人は抵抗する間もなくハイエースに連れ込まれる。二人が手に持っていた買い物袋が

地面に落ちたまま放置され、二人を乗せたハイエースはそのままどこかに移動してしまう。

「おら、入れ」

「ききゃあ!？」

それから数十分後。どこかの無人の倉庫に連れ込まれた白鳥姉妹は、両腕を縄で背の後ろに縛られ、倉庫の床に座らされた。そこには複数の男達が待ち構えていた。

「痛っ……な、何なんだよ一体!？」

「誰ですか、あなた達は……!？」

「いやあ、ごめんねえお嬢さん方。ちよつとき、こいつらの遊び相手になってあげてくれない?」

ビデオカメラを手に持った青年「芝浦淳」しほつらじゆんはニヤニヤ笑いながら、周囲の男達に指で合図を出す。すると男達は下卑た笑みを浮かべながら、白鳥姉妹に襲い掛かって来た。

「な!?!は、離せよ……んむう!？」

「夏希!?!妹から離れなさい!!」

夏希は猿轡で口も封じられ、床に押し倒される。エレナの叫びが無視される中、夏希を床に押し倒した男達の内、「石橋健太郎」いしばしけんたろうはナイフを取り出し、その刃先を夏希の顔に近づける。

「暴れんじゃねえよ。顔に傷がつくことになるぜえ?」

「んん、んっ……!!」

ナイフを向けられた途端、夏希は傷つけられる恐怖心から抵抗をやめてしまう。石橋はニヤリと笑ってから夏希の衣服に手をかけ始める。

「んじゃ早速、この邪魔な服を脱いで貰うとするか」

「ま、待って!! 止めなさい!!」

エレナの悲鳴には聞く耳を持たず、石橋を始めとする男達は乱暴に夏希の衣服を脱がし始めた。ナイフで脅され、恐怖で抵抗の意志を失ってしまった夏希はブラジャーすらも剥ぎ取られ、彼女の上半身は完全に露わにされてしまう。

「へへへ……可愛い乳首してるじゃねえか」

「んむう、んん…ッ!!」

石橋の言葉通り、夏希の胸元にある二つの突起は既にピンと立っていた。石橋は夏希の両胸に手を伸ばし、いやらしく揉み始めた。石橋の手が触れた途端、夏希は体を大きく震わせる。

「すっげ、柔らけえ……!」

「おいおい、俺にも触らせろよ」

「んん!! ふぐうう……!!」

「や、やめなさい!! こんな事して許されると思わ…んぐう!?!」

男達が夏希の裸体を触るのを見たエレナは怒りを露わにするも、エレナもまた、妹と同じように猿轡で口を封じられる。

「妹の心配してる場合じゃないと思うよ?お姉さん」

「ん、んんっ!?!」

すると今度は、エレナの着ている服にも男達の手がかかる。当然、エレナも必死に暴れて抵抗しようとしたが、やはり複数相手に取り押さえられてはどうにもならず、エレナも下着以外の衣服を全て脱がされてしまう。

「うおおお……めっちゃ良い体じゃねえか……!」

「妹よりもおっぱいデケえじゃん。こりや楽しめそうだぜ」

「んむ、うう…!!」

下着だけの状態にされながらも、エレナはまだ抵抗するつもりでいた。しかし、エレナを取り押さえていた男の内、とつかけんこ「戸塚健吾」という男が、エレナの顔面を強く殴りつけた。

「それ以上暴れるなら、お前ら二人共殺す」

「……ッ!!」

自分が抵抗を続ければ、自分だけでなく妹も殺されてしまう。自身を殴りつけた戸塚が本気の目をしていると思ったエレナは、それ以上の抵抗をやめてしまった。

「うほ、すっげ……めっちゃ柔らけえじゃん……!」

「妹の方も悪くないおっぱいだぜ……!」

「んん、むう……!!」

「ふぐう、んう……!!」

結局、下着も全部奪われ、一糸纏わぬ姿で男達に体を触られ続ける事態になった白鳥姉妹。夏希は悔しさと屈辱で涙を流し、エレナは怒りを滲ませながら顔を赤く染める。

「良いねえ、その表情……もつと虐めたくなるよ」

「んふう!?!」

夏希の乳房を揉みしだいていた石橋が、ピンと立っている夏希の乳首を指先で摘まんた。夏希は思わず身を仰け反らせる。

「お、反応したねえ。感じちゃった?」

「ん、んぐ……!?!」

否定したい気持ちでいっぱいだった。だが実際に乳首への刺激を受けて、夏希は自分の体が敏感に反応してしまった事を自覚させられていた。

「おい見ろよ。こつちのお姉さんもすげえ乳首勃ってるぜ」

「ん、んううう……!!」

二人の男がニヤニヤ笑いながら、エレナの大きな乳房を左右から揉みしだき、指先でコリコリと乳首を刺激する。エレナの体がびくつと反応するのを、周りの男達もいやらしい目で眺めていた。

「くく……いいねえ、最高だよお二人さん。ああそういえば、お二人の名前は何て言うのかな? 名前くらいは教えてくれるよね?」

芝浦淳はビデオカメラを構え、二人に向かってレンズを向ける。猿轡も一時的に外されるが、喋れるようになっても姉妹は無言だった。「答えないと、綺麗な顔に傷が残るぜ」

石橋が夏希の顔にナイフを近づけると、夏希は「ひっ」と怯えた表情を見せる。エレナの方も、戸塚がエレナの髪を掴んでいつでも殴れる体勢を見せている。こうなった以上、白鳥姉妹は素直に自分達の名前を教えるしかなかった。

「……夏希です」

「……エレナよ」

夏希は自分と妹の名を名乗ると、芝浦達は満足そうな笑みを浮かべた。

「夏希ちゃんに、エレナちゃんね。よろしく。それじゃ皆、続けて良い

よ」

芝浦がそう告げると、再び姉妹は猿轡で口を塞がれる。すると男達は夏希とエレナの両足を掴み、左右に大きく開かせる。

「はい、ぐ開帳〜!」

「んむ!? んうう〜っ!!」

「んっ……!!」

男達に股を開かされた事で、姉妹の使い込まれていない女性器が丸見えの状態にされてしまう。夏希は目に涙を浮かべながら首を左右に振り、エレナも恥ずかしさのあまり目をぎゅつと瞑る。

「おお〜! 綺麗なマンコじゃねえか!」

「間違いねえ、こりや姉妹揃って処女だな」

男達は夏希とエレナの股間に顔を近づけ、目の前にある女性器をジロジロ見る。特に夏希の股間に顔を近づけた石橋は、まるで舌なめずりをするかのように自分の唇をぺろりと舐めていた。

「良いねえ、美味そうなマンコだ」

「ん、う……んうう!?」

石橋は舌先で夏希の女性器をペロリと舐め上げ、夏希が大きく身を震わせる。当然それで終わりではなく、石橋は夏希の女性をピチャピチャと何度も舐め回し、その度に夏希はビクビク震える。

「んう!? ん、ふっ……んんっ!!」

「ちゅ、れろ……んぶ……ぷはっ!」

夏希の愛液で濡れている割れ目の中で、少しずつ勃起してきているクリトリス。それを見た石橋は再び夏希の股間に顔を埋め、舌先でその部分を集中的に攻め始める。

「んふうう……!! んん、んぐう……!」

「んむ……ちゅ、ぢゆるる……! んふう、ちゅば……!」

「んんう……んふう、んんんう!!!」

クリトリスを刺激され、溢れ出て来る愛液を石橋が全部飲み干すつもりで啜り、とうとう夏希は絶頂に達してしまった。何度も体を震わせた夏希が息苦しそうにしている間、今度はエレナも同じ事をされようとしていた。

「押さえつけてろ」

「ああ」

「ん、んふう……っ!!」

男達がエレナの両足を開かせたまま押さえつけ、彼女の股間には戸塚が顔を埋める。夏希がクンニされているのを見て発情したのか、エレナの女性器もほんの僅かに濡れており、それに気づいた戸塚は唇を近づけ、遠慮なく吸いつき始めた。

「ちゅう、ちゅぱ、ちゅぱっ……んむ、れろお……!」

「んむう!? むう、ううううっ……!」

「じゅる、ちゅぱ、ちゅぞおおおっ!」

戸塚に女性器を舐められ吸われ、エレナは必死に耐え抜こうとする。しかし股間に与えられる刺激は想像以上の快感であり、猿轡されているのも相まってエレナは苦しそうだった。

「ちゅぱ、ぴちゃ、じゅるるる……!」

「んちゅ、ずちゅっ……れろれろれろ……!」

「ん、むう……んんんんう!!」

指先でくぱあと開かれた女性器を戸塚が上下に舐めしやぶり、絶頂したエレナが猿轡越しに悲鳴を上げる。白鳥姉妹が揃ってクンニでイカされた後、二人の女性器は唾液と愛液にまみれており、今度は他の男達が彼女達にクンニし始める。股間を何度も舐められている姉妹は、ただ必死に耐える事しかできない。

「ちゅぱ、ちゅぱっ……れろ、あむっ……!」

「ぴちやぴちや、ちゅうううううう……ぷはあ! 美味しいマンコだぜえ、こりゃ……!」

「ぢゅるるるっ、れろお……ああ、良い味だ。いくらでも舐めてられるぜ」

「うう……んふう、んんっ……!!」

「マンコも良いけどよお、おっぱいも最高だぜ」

男達がクンニをしている間、別の男達は姉妹の乳房にも顔を埋めていた。男達は夏希とエレナの乳房を揉みながら乳首を舌で舐め回し、唇で挟んでからチュウチュウ吸いついている。

「うわあ、すっごい光景だねえ」

芝浦は木箱の上に座り、一人のんびりとビデオカメラで撮影を続ける。それからしばらくした後、男達は一度姉妹の体から離れた。姉妹の乳房と女性器は、男達の唾液にまみれてしまっていた。

「ふう……んじや、そろそろ本番と行こうか」

石橋がそう言うと、男達は夏希の両足を開かせた状態で動けなくさせる。すると石橋は自身のズボンを脱ぎ、太く勃起したペニスを夏希に見せつける。それを見た夏希は嫌な予感がした。

「どれ、まずは夏希ちゃんの方から……」

「んん、んんっ……!!」

「ん？もしかして、入れられたくないのか？」

涙目の夏希は、何度も首を縦に振る。それを見た石橋は「そうかそうか」と告げた後……ニヤリと笑みを浮かべ、自身のペニスを夏希の女性器にピタツと接触させた。

「悪いが、そりゃ無理な話だ……なっ!!」

「ん、ぐううっ!!」

石橋は夏希の腰を掴み、一気に挿入した。処女を奪われた痛みにも夏希は顔を歪めるが、石橋はそんな事は知った事じゃないと言わんばかりにゆっくりと腰を振り始める。

「ん、んふう、ううっ……!!」

「うお、やべえ……思った以上に絞まり良いわ、この女……!」

「んん!!んんんっ!!」

夏希が石橋に正常位で挿入されたのを見て、エレナは悲痛な表情で呻き声を上げる。するとそんなエレナの方にも、ズボンを脱いだ戸塚が自分のペニスを近づけてきた。

「お前の相手はこっちだ」

「んん……っ!!」

戸塚もまた、エレナの女性器にペニスを近づけた瞬間、ズブリと膣内に挿入した。処女を破られたエレナはあまりの痛さに声すら出せず、戸塚も同じように腰をゆっくり振り始めた。

「おお、良いねえ二人共。良い顔してるよお」

芝浦が楽しそうに笑う中、夏希とエレナはそれぞれ石橋と戸塚にパンパンと腰を打ちつけられる。太いペニスに膣内を蹂躪される感覚に、二人は苦悶の声を上げ続けた。

「へへへっ！ ほら、どうだい？ 気持ちいいかい、夏希ちゃん？」

「んむう、んふう……!!」

「その様子じゃあ、聞かなくても分かるがな……!」

「んう、うううっ……!!」

石橋は気持ち悪い笑顔を見せ、戸塚も僅かにだが口元がニヤついている。石橋と戸塚が腰を振っている間、他の男達は夏希とエレナの乳房を揉みしだいたり、自分のペニスを露出させて自分で扱いたりしていた。その後、石橋は腰を振るスピードを速め始めた。

「お、良いぞ、そろそろ……!」

「んん、んんん……!?!」

それを聞いて、夏希は察した。このままだと中に出される。夏希は「中には出さないで欲しい」と首を何度も横に振るが、その反応は石橋を余計に興奮させるだけだった。

「ああ出すぞ、出すぞお、中にたっぷり出してやるからな……あ、ああ、出るう!!」

「んっ……んふうううっ!!」

石橋がそう言った直後、彼のペニスから精液が大量に放たれた。それと同時に夏希は体を震わせながら絶頂を迎え、彼女の女性器からは愛液が溢れ出した。

「くうく、最高だぜ……!」

夏希にのしかかった石橋は、自分のペニスを夏希の子宮口にグイグイ押しつけ、精液を可能な限り注ぎ込んでいく。下腹部に熱い精液が流れ込んで来る感覚に、夏希は絶望の表情を浮かべた。

(ああ、嘘……な、中に、出されて……)

夏希の目から涙が流れ落ちる中、射精が収まった石橋はペニスを引き抜き、夏希の股間から精液がとろりと流れ出る。その様子を横目で見ていたエレナは悲痛な表情を浮かべた。

「んん!! んんんーっ!!」

「悪いが、俺も限界だ……!!」

一方で、エレナを正常位で犯していた戸塚もまた、限界が近づいてきたらしい。エレナの括れた腰を掴んだ戸塚は自分の腰を力強く打ちつけ、ペニスを奥深くにある子宮口に強く押しつけた。

「出すぞ……ぐう!!」

「んん!? んうううううっ!!」

ドクン、と大きく脈打った戸塚のペニスから、大量の精液が放出される。その直後、エレナはビクビクと痙攣しながら絶頂を迎え、大きく仰け反った。エレナの子宮内に、戸塚の放った精液がドクドクと流れ込む。

「ん、むふう……ん……っ」

「はあ、はあ……なかなか良かったぞ」

戸塚がペニスを引き抜いた後、エレナの股間からも溢れた精液が垂れ落ちていく。仰向けに横たわった夏希とエレナが、大きく開いた股間から精液を垂らしている光景は、周囲の男達の性欲を更に向上させた。

「よし、次は俺の番だ! 夏希ちゃんもーらい!」

「んん……んむう!」

「なら、俺はエレナちゃんのマンコを使わせて貰うぜ!」

「ふう、ふう……んふう!」

別の男達が夏希とエレナの女性器にペニスを挿入し、腰を振り始める。膣内で愛液と精液、処女膜を破られた血などが混ざる中、ペニスで何度も突かれる快感に夏希とエレナは涙が止まらなかった。

(悔しい……こんな奴らに、好き勝手されてるのに……!!)

(何で、こんなに……気持ちが良いの……!?)

処女を奪われた時の痛みは既になく、今の白鳥姉妹はすっかり犯される快感に支配されてしまっていた。

「んふう、お姉ちゃあん……」

「んちゅ、じゅぷ……んふう」

「くそっ、すげえ絞まるぞこの女!」

「ああ、こつちもやべえ! すぐに出ちまいそうだぜ!」

もはや抵抗の意志はないと判断され、猿轡を外された夏希とエレナは、自分達を犯している男達とキスをする。口内で舌が絡み合う濃厚なキスを交わしながら、男達は腰を振るスピードを速めていき、彼女達とキスをしたまま絶頂に到達する。

「ん、んんんんっ!!!」

キスしながら二度目の膣内射精を体験させられ、男達と唇を離れた夏希とエレナは、とろんとした目を浮かべながらも必死に息を整えようとす。しかし、彼女達に休む暇は与えられなかった。

「次は俺だ!」

「俺にもやらせてくれよ!」

その後も、姉妹は男達に輪姦(まわ)され続けた。四つん這いにされた夏希はバックで犯され、エレナは騎乗位の体勢で下から突き上げられるように犯される。ペニスが膣内を蠢くたびに、腰をパンパン打ちつける音が倉庫内に鳴り響く。

「やべえ、俺も出る!!」

「お、俺もだ!! 中で受け止めてくれ!!」

「ああ、や、やめっ……ああ、ああああっ!!」

「だ、駄目、赤ちゃんできちゃ……ん、くううううっ!!」

夏希とエレナの膣内で、三度目の射精が行われる。男達がペニスを引き抜くと、そこに別の男達が近づき二人の股間にペニスを挿入する。その男達が射精を終えたら、また別の男達がペニスを挿入し、また射精しては次の男達に交代する。男達の性欲は未だ尽きる様子はなかった。

「こんだけ出したんだ。流石に妊娠してるよなあ、これ」

「むしろ、こんだけ出したのに孕んでなかったら逆にびっくりだぞ俺は」

ペニスを挿入している男達は、夏希とエレナの下腹部を撫でながら腰を振る。二人の子宮内には既に、これまで男達に注ぎ込まれた精液でタップアップになっていた。

「俺は夏希ちゃんを孕ませてやりてえな」

「なら、俺の子はエレナちゃんに産んで貰おうか」

「そういう訳だからよ夏希ちゃん、ぜひ俺の子を産んでくれよな？」  
「い、嫌だ……！ 絶対に、あんた達の子供なんて……んむぐう!!」  
「ほらほら、ちゃんとご奉仕しないとなー？ エレナちゃんみたいに  
さ」

夏希の口にペニスを挿入した男が、彼女の頭を掴んで無理やりフェラチオさせる。一方、エレナに挿入していた男は再び射精しようとする。

「ああ、出る!! また出すよエレナちゃん!! 俺の子を産んで、ママになつてくれよな!!」

「なっ!? や、やめなさ……あ、あああああっ!」

またしても、エレナの膣内に大量の精液が放出される。膣内射精されたエレナが嬌声を上げながら全身を震わせる中、夏希の股間に挿入していた男も射精に至ろうとしていた。

「お、俺もまた出そうだ……!! ああ、夏希ちゃん……おじさん達と一緒に、いっぱい赤ちゃん作ろうねえ……!!」

「ぶはっ……。ま、待つて!! やめて、お願い!! これ以上はもう……!!」

啜えさせられていたペニスが離れ、夏希は必死にやめるよう懇願するが、男は彼女に種付けする事で頭がいっぱいだった。

「ああ出すよ、また出すからね夏希ちゃん!! ああ孕んでくれ!! 妊娠してくれ!! お、俺の、俺の子供を産んでくれえ!!」

「ひっ……いやあああああ!!」

夏希の子宮内に、男はこれでもかと濃厚な精液を送り込み続ける。素性の知れない男達の子供を孕まされるかもしれない恐怖に、夏希はただただ涙を流しながら、男の精液を体内に受け入れる事しかできなかった。

「い、いや、ああっ……やめてえ……あ、赤ちゃんできちゃう……!!」  
「ああ、夏希ちゃん……まだまだいっぱい中に出してあげるからねえ……! ああそうだ、今の内に子供の名前も考えておかなくちゃ……!」

「あ、ああ……夏希い……っ」

「おっと、まだ終わりじゃないぜエレナちゃん。お前にも俺達の子供を産んで貰うからな」

男達による陵辱は終わらない。既に抵抗する体力と気力がほとんど失われている白鳥姉妹に、男達は自分の子供を産ませてやろうと、ひたすら精液を注ぎ込み続ける。

「あくあ。こんだけ出しちやったら、もう誰の子供かわかなくなっちゃまうぜ」

「夏希ちゃんが最初に孕むのは誰の子供だろうな？俺の子供だったら良いなあ」

「おいおい、最初に孕むのは俺の子だろ。こんな可愛い子達の子に群がる悪い虫は、一匹残らず駆除してやんねえとなあ……」

「あーあ、こりや完全に俺の子を孕んでるわエレナちゃん。可哀想になあ」

「ちげえよ馬鹿。エレナちゃんは俺の子を産むんだよ」

「まあ実際のところ、誰の子供でも別に構わねえんだけどな俺は……そういう訳だからさ、夏希ちゃん、エレナちゃん。これからいくらでも種付けしてあげるから、しつかり俺達の子供を妊娠してくれよな」  
「絶対に逃さねえぞ。お前らはもう俺達の女だ。何度でも種付けしてやる。何度でも妊娠させてやる。何度でも出産させてやる。お前らにはこれからもずつと、俺達の子供をいっぱい産んで貰うからな」

再びペニスを挿入した男達は、その後も夏希とエレナの体を楽しみ、味わい続けた。二人の乳房でパイズリをしたり、時には二人の尻の穴にもペニスを挿入して射精したりなど、彼女達の体は穢れに穢れられていった。

(あ、ああ……夏希……)

エレナは男達に体を使われながら、同じく男達に体を使われている夏希の方へと視線を向ける。この時、エレナは夏希を守ってあげられなかったショックもあってか、既に心が折れてしまっており、もう歯向かう素振りを全く見せていなかった。夏希の方もまた、快感に身を震わせながらもエレナの方に虚ろな視線を向けていた。

(守って、あげられなくて……ごめん……ね……)

その後も、白鳥姉妹は長時間に渡って男達に陵辱され続けた。既に日が暮れている中、ようやく性欲を満たした男達は、全身が唾液や精液などで穢され切った夏希とエレナを放置し、倉庫から出て行く。最後までずっと撮影しかしていなかった芝浦も、「猿みたいだったねあいつら」と姉妹に笑いながら語りかけた後、二人の無惨な姿がビデオカメラに映っているのを確認してから、倉庫を後にするのだった。

しかし、彼女達の悪夢は終わらない。

「ヤッホー、夏希ちゃん♡」

「エレナちゃんも久しぶりだね」

「っ……!!」

その後も、男達が白鳥姉妹の前に姿を現す機会は何度か訪れた。ある時は、ホテルに連れ込まれてから翌日の朝まで犯され続けた。ある時は、電車などの公共の場で痴漢プレイをされた。またある時は、男達の自宅に拉致されてそのまま数日連続で監禁された事もあった。

「うっはあ！ エレナちゃんの体、やっぱ何度ヤツても飽きないわあ……！」

「ああ気持ち良い、気持ち良いよ、夏希ちゃんの体……俺がもつと気持ち良くしてあげるね……！」

男達の都合が良い時に呼び出されては、白鳥姉妹は男達の欲望の捌け口にされていた。男達の行為は徐々にエスカレートしていき、中には夏希とエレナを縛って目隠しをしてレイプした事もあれば、夏希とエレナを裸にして二人でレズプレイをさせた事もあった。

「おお、また出すからな！ 今度こそ俺のザーメンで、エレナちゃんに俺の子を孕ませてやる！ エレナちゃんは俺の子を産むんだ、俺の子を産んでくれるんだ……ううっ！」

「あ、ああ、いやあ……っ!!」

「ああ、イク、イクよ夏希ちゃん！ 今から俺が夏希ちゃんを孕ませて

あげるからね！ 俺が夏希ちゃんをママにしてあげるからね!! 無事に赤ちゃん産まれたら、俺にも夏希ちゃんのおっぱい飲ませてね……う、うおおー！」

「いやあ!? やめっ……あ、あ、ううう……!!」

男達に、避妊しようという考えは微塵もなかった。そんなマネをしたら、彼女達に自分の子供を孕ませる事ができない。男達は何としても、白鳥姉妹に自分の子供を産んで貰おうと躍起になっていた。そんな日々が続いていけば……当然、姉妹に訪れる結末も決まっていた。

「うっ……おええ……!」

「げほ、(っ)ほっ……ま、まさか……」

ある日の事。いつものように男達によって輪姦された後、吐き気を抑えられなかった夏希とエレナはその場で嘔吐してしまう。その後、生理が未だ来ていない事に気づいた二人の顔からは、みるみる血の気が引いて行き、やがて二人は錯乱し始めた。

「あ、ああ、嘘……いやあああつ!!」

「う、嘘だ……嘘だあ!! 嘘だと言ってよお!!」

二人は妊娠していた。男達に何度も陵辱された結果、父親の分からない子供が、二人のお腹に宿ってしまったのだ。

「おい、どうしたんだお前ら!」

二人の様子がおかしいことに気づいた石橋が声をかけると、夏希は彼に泣きつきながらこう言った。

「ア、アタシ、達……妊娠、したんです……アタシも、お姉ちゃんも……っ!!」

「妊娠? 妊娠って……それ、マジで言ってるのか?」

夏希の言葉を聞いて、石橋はニヤリと笑う。

「おい聞いたかお前ら!! こいつら二人共妊娠したんだとよ!!」

「マジで!? おい、誰の子供だ!」

「なあなあエレナちゃん、俺だよな!? 俺の子を孕んだんだよな!」

「そうかそうか!! 嬉しいよ夏希ちゃん!! 遂に俺の子を孕んでくれたんだね!!」

男達は興奮した様子で姉妹に詰め寄る。彼らの中には、望まぬ妊娠で傷ついた彼女達を心配してくれる者は誰一人としていなかった。「おいお前ら。まさかとは思うが、中絶なんて考えたりしないよなあ？」

「え、は……えっ……？」

「言つとくが、中絶なんかさせねえぞ。お前らにはちゃんと、俺達の子供を産んで貰わないとなあ」

「出産が無事に終わったらさ、その後もまた俺達が次の子を孕ませてあげるからね！ 楽しみにしててね！」

「ああ、安心してね二人共。出産するところもちやくんと撮影してあげるからさ」

姉妹は絶望した。もう駄目だ。自分達は逃げられない。これから先もずっと、男達に性奴隷として使われていくのだと。

それから、年月が経過した。

「……お姉ちゃん」

白鳥家の寝室。椅子に座った夏希の視線の先には……ベッドに寝込んだまま、常に呆けた表情を浮かべているエレナの姿があった。

「ごめんね、お姉ちゃん。あの時、私は何もできなかった……」

夏希のすぐ隣の揺り籠では、二人の赤ん坊がすやすやと眠っている。夏希とエレナの子供だ。あの後、男達が撮影している中で姉妹は子供を出産した。しかし、望まぬ出産をしてしまった事、夏希を守つてやれなかった事などのショックから、エレナは遂に限界が来てしまい、心が完全に壊れてしまったのだ。

「大丈夫……この子達は、私が守るから」

二人が出産を終えた後、男達は一時的に姉妹を解放した。しかし時期を見て、彼らはまた、自分達を陵辱しに来るだろう。しかし、いつ

までもやられてばかりの自分ではない。

「あいつらは私が……一人残らず殺してやるから」

夏希の手が、白いカードデッキを強く握り締める。夏希の心は、憎悪の炎で燃え上がろうとしていた。

(私は勝たなくちゃならない……どんな手を使ってでも!!)

その瞬間から白鳥夏希の……『仮面ライダーフォーム』の戦いが、始まろうとしていた。

# エピソード・??? 1

それは、今はもう誰にも語られる事のない物語……

「ハアツ!!」  
「ガキインツ!!」

ミラーワールド、とある街中。ミラーワールドの環境音だけが聞こえ、白い霧でイマイチ視界が悪いこの場所では現在、人と人が争っているかのような掛け声と、金属同士がぶつかり合っているかのような音がうるさく鳴り響いていた。その白い霧の中、街路樹をへし折る勢いで吹き飛んだのは、白銀の鎧を纏った白虎の戦士だった。

「ぐはあ!?!」  
「ハアアアアア……!!」

へし折れた街路樹がズウンと音を立てて倒れる中、吹き飛んだ白虎の戦士——『仮面ライダータイガ』は地面を何度も転がされ、そこにサーベル状の武器を構えた毒蛇の戦士——『仮面ライダー王蛇』が首を回してゴキゴキ鳴らしながら迫り来る。

「ぐっ……はあ、はあ……!!」  
「おいどうした、もう終わりかあ……?」  
「がっ……!?!」

煙の出ている胸部を押さえながら、何とかその場から起き上がろう

とするタイガ。そんなタイガを見下ろしながら、王蛇はその手に構えたサーベル状の武器——“ベノサーベル”を振り下ろし、起き上がるうとしたタイガの頭部に命中し彼を地面に薙ぎ倒す。

「もつと戦えよ……英雄なんだろう？ お前……!!」

「が、ごはっ……あぐあ!!」

何度もベノサーベルが振り下ろされ、タイガの胸部装甲から何度も火花が散らされる。続けて王蛇の右足がタイガの腹部を力強く踏みつけ、タイガの苦しそうな呻き声上がる。

「はあ、はあ……ぐ、うう……ッ!!」

「……つまらん、その程度か」

王蛇に蹴り転がされ、うつ伏せの状態になったタイガはそれでもなお地面を這いずり、王蛇の目の前から必死に逃げ出そうとする。その様子を見ていた王蛇はタイガをいたぶるのに飽きてきたのか、苛立ちの混ざった溜め息をつきながらベノサーベルを振り上げ、タイガの背中に振り下ろそうとした……その時。

## 《STRIKE VENT》

「うおあっ!!」

「ッ……?」

ベノサーベルがタイガの背中に叩きつけられようとした瞬間。どこからか飛んで来た水流が王蛇を押し流し、近くのビルの壁に叩きつけた。王蛇が吹き飛んだ事に気付いたタイガは、仮面の下で困惑の表情を浮かべる。

「あの、その人!!」

そこに、王蛇やタイガとは別の戦士が姿を現した。両腕に鯨のような形状の手甲を装備した鯨の戦士が、倒れているタイガの傍まで駆け

寄り、右腕の手甲を外してタイガの体を起こし上げる。

「大丈夫ですか!?! しつかりして下さい!!」

「う、う……君、は……?」

「掴まって下さい、私の肩に腕を……ッ!!」

タイガの腕を自身の肩に回そうとした鯨の戦士—— 〃仮面ライダーアビス〃 はすぐに左腕を振り上げ、鯨の手甲を模した召喚機—— 〃アビスバイザー〃 から大きな金属音が鳴り響く。アビスが見上げた先には、ベノサーベルをアビスバイザーで受け止められている王蛇の姿があつた。

「邪魔するなよ……それとも、お前が俺の相手をしてくれるのか……?」

「ッ……浅倉威……!!」

アビスの左足が王蛇の腹部を蹴りつけ、王蛇が後退した隙にアビスバイザーから水のエネルギー弾が放射される。飛んで来るエネルギー弾を王蛇がベノサーベルでしつかり防御する中、アビスはうつ伏せのままこちらを見ているタイガに叫びかける。

「逃げて下さい、早く!!」

「ッ……」

アビスに促されたタイガは、残る力を振り絞って何とか立ち上がり、フラフラと歩きながらどこかに逃げ去って行く。その一方、アビスは再び襲い掛かって来た王蛇のベノサーベルをアビスバイザーで受け止め、2人は互いの肩を掴み合う。

「お前の方が、さっきの奴より楽しめそうだあ……!!」

「させません……あなたにこれ以上、人は殺させる訳には……!!」

「……ハッハア!!」

王蛇がアビスバイザーを蹴り上げ、ベノサーベルの一撃がアビスの装甲に打ちつけられる。アビスは仮面の下で苦悶の表情を浮かべるもすぐに体勢を立て直し、アビスバイザーを王蛇の装甲に叩きつけて怯ませる。2人の戦士の戦いは、ミラーワールドで活動できるタイムリミットが迫るまで続いていく。

「はあ……はあ……」

一方、現実世界。ミラーワールドから帰還したタイガは変身を解除し、青年の姿に戻っていた。額から僅かに赤い血が流れる中、青年は壁伝いにどこかへ歩き去ろうとするが……

「ッ……」

王蛇との戦いで傷を負い過ぎた為に、青年は途中で力尽き再び倒れ込んでしまった。青年は立ち上がろうとするも、今度は腕に力が入らず起き上がれそうになかった。

「……今日は、ちよつと……調子悪かったかな……?」

青年の顔に笑みが浮かび上がる。王蛇に追い詰められてボロボロであるにも関わらず、彼はそんな事を呟いた。

(先生……僕、ちゃんと強くなれた、かな……)

視界がぼやけていく中、青年の脳裏に浮かび上がったのは今は亡き恩師の姿。青年はその後も薄い笑みを浮かべながら、その意識はどんどん闇の中へと沈んでいく。

(これで、また……僕は……英雄、に……)

「……すか——て下さ——」

誰かの呼ぶ声が聞こえるような気がした。

ただそれだけ考えてから、青年は完全に意識を失ってしまうのだった。

それから月日が経ち……

「——う、んん」

青年は静かに目を覚ました。窓の外から照らされる日の光、そして窓の外から聞こえて来る鳥の囀りを聞いて、青年は包んでいたフカフカの布団を捲り、ゆっくり体を起こす。

(……朝か)

ベッドの横の棚に置かれている目覚まし時計。その短針は7時を指しており、今が朝だと認識した青年は少しずつ意識がハッキリしていく。起き上がった青年は部屋を出た後、欠伸をしながらも階段を1段ずつ降りていき、眠気を覚ます為に台所まで移動する。

「♪」

台所には既に先客がいた。花柄模様の可愛らしいエプロンを巻いたその女性は、鼻歌を歌いながらこの日の朝食を作っており、流し台に設置されている三角コーナーに卵の殻がある事、ジュージュー音を鳴らしているフライパンから胡椒の香りがする事から、彼女は目玉焼

きを作ろうとしているのだと青年は察した。

「おはよう、梨花ちゃん」

青年はにこやかに笑いながら、調理中の女性に後ろから呼びかける。青年から「梨花」と呼ばれた女性もまた、青年が後ろに立っている事に気付き、笑顔で振り返りながら挨拶を返した。

「あ、悟さん。おはようございます♪」

青年……名前は東條悟。

これは今ではもう語られる事のない、彼のちょっとした物語の1つである。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:  
:  
:

## エピソード・??? 2

『あの、大丈夫ですか……………?』

次に意識が戻った時。

青年——東條悟の視界に映ったのは、茶髪をポニーテール状に結んだ若い女性の顔だった。

『……………は……………?』

『私の家です。あの後、あなたが道で倒れているのを見つけて、ここまで運んで来たんです』

『あの、後……………』

『まだ無理しないで下さいね? 浅倉にやられた傷、悪化するといけませんから』

女性の言葉を聞いて、東條は自分の頭に包帯が巻かれている事に気付いた。

彼女が巻いてくれた物なのだと、東條はすぐに察する事ができた。

しかし……………頭に包帯を巻かれている理由が、東條にはわからなかった。

『あれ……………何で、僕……………怪我なんて……………』

『覚えていませんか? あなた、あの浅倉にやられそうになつてたんですよ。ほら、このデツキ。あの時の虎のライダー、あなたですよ?』

女性が見せて来た、虎の顔を模したエンブレムのカードデツキ。

東條はそれに何か引っかけかのような物を覚えたが、その理由がわからなかった。

『……………わからない』

『え……………?』

『思い出せない……………それが、一体何なのか……………ねえ』

『僕は、一体誰なのかな……？』

東條悟は、記憶を失っていた。

「悟さん、後ろから来てます!!」  
「わかってる……くっ!!」

そして現在。ミラーワールドで繰り広げられているのはタイガとアビス、2人の戦士による戦いだった。2人を取り囲むように襲い来るのは、何故か少しずつ数が増え始めているというシアゴーストの群れ。タイガはデストバイザーで、アビスはアビスセイバーで対応していた。

「悟さん、伏せて下さい!!」

《UNITE VENT》

『ギャオオオオオオン!!』

「ッ……!!」

アビスバイザーにカードを装填し、アビスが召喚したのは巨大な鮫型モンスターのアビソドン。アビソドンの突き出した両目から弾丸が放たれ、地上にいるシアゴースト達を次々と粉碎していく。しかしそれでもシアゴーストの数が減る様子はなく……

『ブブブツ!!』

「なっ……くう!？」

「!? 梨花ちゃん!!」

シアゴーストから脱皮して成長したレイドラグーンが、構えた槍でアビスを斬りかかって来る。アビスセイバーで防御したアビスが建物の壁まで追い込まれてしまい、それに気付いたタイガがすぐさま駆けつける。

『ブブウ!?!』

「そんな汚い手で、彼女に触れないで欲しいかな……!!」

《FINAL VENT》

デストバイザーで斬りつけたレイドラグーンを無理やり引き剥がした後、タイガはデストバイザーの装填口を開き、1枚のカードを装填する。するとタイガに反撃しようとしたレイドラグーンが、後ろから別のモンスターに取り押さえられた。

『ブブツ!?!』

『グルルルル……!!』

レイドラグーンを押しさえつけた白虎型モンスターのデストワイルダーが、そのままレイドラグーンを引き摺りながらタイガの方へと走り出す。タイガもまた、両腕にデストクローを装備した状態で静かに構え、デストワイルダーが引き摺って来たレイドラグーンの胴体にデストクローを思い切り突き刺す。

「ハアツ!!」

『ブ、ブ……ブアアアアアアアツ!?!』

デストクローで高く持ち上げられたレイドラグーンが、その場で大爆発を引き起こす。必殺技「クリスタルブレイク」が決まり、レイドラグーンが跡形もなく消滅したのを確認したタイガはデストクローを降ろした後、周囲にいるシアゴーストの数を見て驚いた。

「ッ……まだこんなに……!!」

『『『『ヴヴヴヴヴ……』』』』』

シアゴーストの数は減るところか、先程よりも更に増殖していた。このままではいくらタイガやアビスと言えど、その圧倒的数の暴力で押し切られてしまうだろう。

「数が多過ぎます……悟さん、一旦引きましょう!!」

その可能性を考慮したアビスがタイガの手を掴み、タイガがそれに引っ張られる形でその場から逃走を開始。襲い来るシアゴースト達の間を上手く掻い潜り、何とかミラーワールドから撤退する事に成功したのだった。

この時、2人は気付いていなかった。

「やっきの奴、まさかアイツか……?」

その様子を、別のライダーが物陰から見ていた事に。

「怪我はしてませんか？ 悟さん」

「うん、何とか……」

その日の夜。東條はアビスの変身者——二宮梨花と共にミラーワールドから帰還した後、彼女の自宅で休みを取っていた。ベツドの上でシャツを脱いだ東條は、どこにも傷を負っていない事を梨花に確認して貰い、彼が無傷だとわかると梨花はホッとしていた。

「怪我はないみたいですね……良かった」

「ありがとう。こんな僕の事、心配してくれるなんて」

「当たり前です！ 悟さんは私にとって、大切な人なんですから……！」

東條が記憶を失っている事が発覚した後。

梨花は自分の事が何もわからない東條の為に、彼を自身の家に住まわせる事にした。

東條がライダーとしての知識も失っていると知ってからは、自分もライダーである事を明かし、ライダーの事、モンスターの事、そしてミラーワールドの事も、余す事なく教えてあげた。

それからは2人で戦いに出向く事が多くなり、時にはモンスターと

戦い、時には自分達以外のライダーと戦った。

自分1人しかない自宅に素性不明の男性を招き入れるなど、普通なら危険極まりない行動だ。

当初、彼女が何故そこまでしてくれるのか、東條にはわからなかった。

しかし彼女の過去を知ってからは、その理由も理解する事ができた。

「お願いですから、無理はしないで下さいね……東條さんにもしもの事があつたら、私……」

「……ごめん」

東條は知っていた。こんな広い家に、何故住んでいるのが彼女1人だけなのかを。

梨花にはかつて、3人の家族がいた。

父、母、そして兄。

彼女が大好きだった家族は3人共、幼少期の交通事故で亡くなってしまった。

1人残された彼女は、強く生き続ける事を誓った。

遺産を巡って争う人間達の醜さを見せつけられようとも。

誰からも愛されなくとも。

彼女は誰1人、憎しみを抱こうとはしなかったのである。

優しい子である自分を愛してくれた、今は亡き家族の為に。

「ねえ、梨花ちゃん」

「何ですか？」

「僕……梨花ちゃんの事、ちゃんと愛する事ができてるかな……？」

「……もちろんです、悟さん」

そんな彼女が求めている物は何なのか、それも東條はわかっていた。それを示すかのように、東條は自身の顔を梨花に近付けていき、梨花もそれを拒む事なく、目を閉じて彼の顔が近付いて来るのを待つ。そして……

「ん……」

2人の唇が、1つに重なった。最初の数秒間は唇で触れ合うだけ

だった2人のキスは、次第に舌をも交えた濃厚な物へと変わっていき、クチャクチャと音を立てながら互いの唾液を交換し合う。

「……悟さん」

「……梨花ちゃん」

唇が離れ、2人の間にできた唾液の糸が下へと落下する。梨花はそのとろんとした目で続きを促し、東條もそれに応じて再び唇を重ね合わせ、彼女と共に体をベッドに倒していく。

ライダーとして共に戦い続けて来た2人の男女。

いつしかその仲は、肉体関係を築き上げるほどにまで進展していた。

「あ、はあ、ん、ああ……!!」  
「う、くう……ッ!!」

それからというもの、2人の下半身が繋がるまでにそう時間はかからなかった。衣服や下着を脱ぎ捨て、黒のニーソックス以外何も身に着けていない梨花は、同じく衣服を脱いだ東條の上に乗って激しく腰を振り続けた。東條は彼女の膣内を堪能しつつ、下から突き上げる事で彼女を淫らに躍らせ続けた。

「ひゃん!? あ、んんっ……悟さん、もつと……もつとお……ッ!!」

「梨花、ちゃん……ん、んう……!!」

「ん、ぴちや、じゆる……ッ!!」

対面座位で繋がった状態から、2人は抱き締め合いながら再び唇を合わせ、相手の唾液を求め続けた。そうしている間も、2人は腰を振る事をやめず、梨花の膣内を東條の肉棒がひたすら蹂躪していく。

「んん、ふはっ……悟さん、悟さん……!!」

「梨花ちゃん、もう……ッ!!」

「出して、下さい……私の、中に……ん、あ、あ、あぁっ!!!」

2人が強く抱き締め合った瞬間、東條は梨花の膣内で達した。同じく達した梨花もまた、東條の首元に両腕を回して抱き着きながら、自身の腹部の中で熱い物がドクドクと注がれて来るのを感じ取った。

「はあ、はあ……」

2人は互いに激しく求め合った後、荒くなった呼吸を何とか整えていく。そしていくらか落ち着いたところで、梨花の方から東條の唇に軽いキスを試みせる。

「チュッ……悟さん、大好きです……♡」

「……ごめん、梨花ちゃん」

「え……きやつ!!」

まだ下半身が繋がった状態のまま、東條は梨花をベッドの上に押し倒し、正常位の体勢になる。東條に見下ろされる状態になった梨花は、自身の膣内で東條の肉棒がまだ萎えていない事に気付いた。

「まだ、収まりそうにないかも……!」

「……フフ♪ 良いですよ、悟さん……いっぱい、愛して下さい……♡」

梨花のその言葉を引き鉄に、東條は再び腰を振り始め、梨花の口からは淫らな喘ぎ声が漏れ出す。2人の愛し合う時間は、日付が変わってからまだまだ続いていくのだった……

同時刻……

「間違いない、彼女がそうだな……」

ベージュのコートを着た黒髪の青年。彼は一枚の写真を見ながら、どこかに向かおうとしていた。

「急がねえとな……またアイツがやらかす前に……!!」

青年はコートのポケットに写真を収め、代わりにカードデッキを取り出す。

そのデッキには、カメレオンの顔を模したエンブレムが刻まれている。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:  
:  
:

## エピソード・??? 3

恋人同士となった東條悟と二宮梨花。

ミラーワールドでの戦いの中、芽生えた恋心は2人にとって、自分の心を支え合う柱となっていた。

それを証明するかのようになり、いつしか2人はモンスターやライダーとの戦いから生還するたびに、性行為を行うようになっていった。

生きる事とは、求める事。

生きる事とは、愛する事。

自分達は、今もこうして生きている。

それを確かめる為に、2人は互いに強く求め合い、互いに激しく交わり続けた。

「んあ、あ、あ、ああっ!!」

「く、うう……はあ、ああ……ッ!!」

その強い愛欲は、時間すらも選ばない。深夜まで熱い夜を過ごしたにも関わらず、白い朝日が照らされる中で眠りから目覚めた2人はまたしても、ベッドの上で互いの肉体を激しく交えていた。体を仰向けにした梨花の両足が左右に開かれ、その上から東條が何度も腰を打ちつける。そのたびに梨花の嬌声が鳴り、東條はそんな彼女の豊かな乳房を両手で優しく揉みしだき続ける。

「ッ……梨花ちゃん、また、イク……ッ!!」

「あ、ああっ……来て、悟さん……あ、んう、んんんっ!!!」

東條の腰の動きが止まり、梨花が大きく喘ぐと共に体をビクンツビクンツと震わせる。2人の下半身がしつかり密着する中、梨花は下腹部の中を熱い物が広がっていくのを感じ取る。息が荒い東條は梨花の乳房の上に頭を乗せ、その際に彼女の乳房がフニヨンと形を変えた。

「はあ、はあ……ッ」

「ん……悟、さん……♡」

「梨花ちゃん……」

こんなに朝早くから行為に至ってしまうのは、これが初めてではな

い。むしろライダー同士の戦いが進行していくと共に、2人が行為を行う回数は更に増えていつていた。

ライダー同士の戦いは非常に過酷だ。

それどころか、最近はモンスターの数も徐々に増殖しつつある。

そんな状況下でもこうして互いを求め合ってしまうのは、戦いが佳境に入りつつあるからだろうか。

「……ごめんね、梨花ちゃん。こんな朝早くから」

「ううん、良いんですよ悟さん。私もそうしたい気分でしたから。今日は大学の講義も午後からですし」

行為が終わった後、2人は互いに生まれた格好のまま布団に包まり、しばしの休憩タイムに突入する。東條が梨花の前髪を優しく掻き分け、梨花は頬を赤く染めながら東條の胸元に顔を寄せていく。

(東條さんの肌……温かい)

ライダー同士の戦いなど関係ない。

こうしている間だけ、戦いの事など忘れていられる。

この時間こそ、梨花にとっては何よりも一番幸せな時間だった。

こんな日常がこれからも続いていつて欲しい。

それが彼女の切なる願いだった。

しかし、運命とは残酷な物。

ライダーとしての宿命は、そんな2人を決して逃がそうとはしなかった。

「東條悟だな」

それは突然の事だった。

「……誰かな、君は」

「おいおい、俺の事なんか眼中にもないってのか。随分な挨拶だな」

その日、梨花から頼まれた買い出しを終えて帰宅しようとしていた東條の前に、まるで待ち伏せでもしていたかのようにその人物は現れた。

「随分探したぞ。今まで一体どこに隠れてたんだか」

「……？」

その人物……ベージュのコートを着込んだ黒髪の青年は、どこか疲れているかのような口調でそう告げながらも、東條の事を強く睨みつけている。それに対し東條は、いきなり自身の目の前に現れてはこちらを強く睨みつけて来たその青年を前に、困惑の表情を隠せないでいた。

「ッ……いきなり何かな、人違いなんじゃないの？」

「今更とぼけても無駄だ。お前がしでかしてきた所業、俺は今でも忘れてないぞ」

「意味がわからない……君の事なんか、僕は知らない……!!」

「何……？」

記憶を失っている東條からすれば、目の前に立っている青年の事など全く記憶にない。一方で黒髪の青年も、東條の態度を見て何か様子がおかしい事に気が付き始めた。

「お前……本当に何も覚えてないのか？」

「だから知らない……君は、一体誰なんだ……!？」

「……その様子、嘘じゃなさそうだな」

黒髪の青年は「こりや参ったな」とでも言うかのような反応で髪を掻いた後、コートのポケットからある物を取り出して東條に見せる事にした。

「なら、これを見たらわかるか？」

「ッ!? それは……」

黒髪の青年が見せつけたのは、カメレオンのエンブレムが刻み込まれた黄緑色のカードデッキだった。それを見た東條は目を見開き、すぐに目の前の青年がライダーである事を察する事ができた。

「君も、ライダーなの……!？」

「木村大地、仮面ライダーベルデ……お前とは、今まで何度も戦り合ってきた仲さ。仕掛けて来るのはいつもお前の方からだったけどな」

黒髪の青年——「木村大地<sup>きむらだいち</sup>」はそう名乗り、指をクイクイツと動かして東條に促すのだった。

「俺に付いて来い」……と。

「フンフンフフン……♪」

一方、大学の講義を終えた梨花はと言うと。彼女は楽しそうな様子で鼻歌を歌いながら、車に乗って帰宅しようとしていた。

家に帰ったら東條が待っている。

そう考えるだけで、彼女の表情には自然と笑顔が浮かび上がる。それほどもだに、彼女の頭の中は東條の事でいっぱいになっていた。

しかし……そんな彼女の時間もまた、悪意に蝕まれようとしていた。

「フンフフンフ……ッ!?!」

突如、梨花は楽しそうな表情を一変させ、ブレーキを強く踏み込み車を急停止させた。彼女が突然車を止めた理由は、彼女が乗っている車の前方に堂々と立っている、ある男の姿を見たからだだった。

「遊んでくれよ、二宮」

ガラの悪そうな容姿に、ボサボサの金髪、そして上半身に着込んだ蛇柄のジャケツト。それらの特徴は、今もなお逃走中の脱獄犯と全て一致していた。

「ッ……浅倉威……!!」

道路の上で待ち構えていたその男——あざくらたけし“浅倉威”を前に、梨花

は先程までの明るい笑顔が消える。真剣な目付きをしながら車を降りた彼女は、浅倉と正面から相對する。

「やっと見つけたぞ。ここ数日、ライダーに会えなくてイライラして

「ただ」

「……まだ、戦いを続けるつもりなんですか？」

「おかしな事を言うな。ライダー同士は戦うもんだろう……こんな風になあッ!!」

「……ッ!!」

既にベルトを腰に装着していた浅倉は、カードデッキをベルトに装填して王蛇に変身、すぐさま梨花に向かって駆け出していく。梨花も車のフロントガラスにカードデッキをかざし、出現したベルトにカードデッキを装填。アビスの姿になると同時に、王蛇が振るって来た拳を両手でガードしてみせた。

「俺と遊ぼうぜ……なあ？」

「……はあッ!!」

「クハハハハ……!!」

王蛇の拳を振り払ったアビスが掌底を放ち、それを受けながらも高笑いする王蛇がアビスに掴みかかった後、2人は車のフロントガラスを通じてミラーワールドへと突入。誰の邪魔も入らない戦場に立ち、2人は戦闘を開始する。

《SWORD VENT》

「さあ、祭りを始めようか……!!」

《SWORD VENT》

「させない……あなたの祭りは、今日で終わらせる!!」

ベノサーベルとアビスセイバーが激突し、金属音が大きく鳴り響く。そこから2人は激しく斬り結び合い、互いの装甲から火花を何度も散らし合っていく。

「なるほど、記憶喪失ねえ……」

とある公園。木村は東條を連れてここまで移動した後、ベンチに座り込んだ東條からこれまでの事情を知る事となっていた。流石の木村も、東條が過去の記憶を失っている事までは想定外だったらしい。「ねえ。君は僕の事を知ってるみたいだけど……さっき言ってた事、どういう事かな？ 僕の方から、君に何度も仕掛けてたって……」  
「ああ、お前には嫌と言うほど苦労させられた。英雄に相応しくないだの何だのと、な」

「英、雄……？」

その単語を聞いた時、東條の中で何かが引つかかったような気がした。しかし、それで何かを思い出せるような感じはなく、そんな様子の東條に気付いていない木村は話を続けた。

「なあ東條。俺が何で、お前の事を探し続けていたと思う？」

「……？」

「お前が危険過ぎるからだ」

「どういう事かな……？」

「お前は覚えてないだろうから言わせて貰うぞ。お前は既に、人の命を奪っている」

木村の口からストレートに言い放たれた一言。それは東條を驚愕させるのに充分過ぎる威力があった。

「僕が、人の命を……？」

「だからお前を探し続けた。そしてお前の行方を追っている内に、お前が1人の女と一緒にいるっていう目撃情報を手に入れた」

木村が懐から取り出した1枚の写真。そこには青色のドレスを着た梨花の姿が写り込んでいた。

「大学のミスコンで準優勝だったらしいな。こりや確かに凄い美人

だ」

「ッ……梨花ちゃんを監視してたのか……!!」

「俺だって、できる事ならこんな変質者みたいな真似はしたくなかったさ……だが俺は、急いでお前を見つければならなかった。彼女の為にも」

「彼女の為に……?」

「彼女の元を去れ」

木村が続けて言い放った一言。それは今の東條にとって、最も残酷な内容だった。

「それから、お前のデツキも俺に渡せ。デツキを壊した後は、お前が契約しているモンスターも俺が倒す」

「ッ……何でそんな事を……!!」

「彼女を守る為だ。もしお前の記憶が戻る事があれば、お前の身近にいる彼女が危ないからな」

「僕は彼女を襲ったりはしない!! 僕は彼女を愛してる、だから——」

「だからこそ危険なんだ。記憶を失う前のお前は、そうやって大事に思っていた人間を、自分の手で殺めてる。彼女だってきつと例外じゃない」

「勝手な事を言わないでくれるかな!!」

東條は苛立った様子で立ち上がり、木村の胸倉に掴みかかる。

「君の言う事なんか信用できない……彼女は僕が守る!! デツキも渡さない!!」

「……そうか」

木村は胸倉を掴んでいる東條の手を引き離し、コートを整える。激昂する東條を前に、それでも彼は冷静さを失う様子はなかった。

「そこまで言うのなら仕方ない……お前には悪いが、力づくでデツキを奪うだけだ」

「やってみなよ、やれるものなら……!!」

木村は左手でベルデのカードデツキを取り出し、東條も右手でタイガのカードデツキを取り出す。2人は公園の大きな噴水の前に立つ

た後、噴水の水面に向かってカードデッキを突き出し、出現したベルトを腰に装着する。

「変身!!」

木村は正面に振るった右手で指を鳴らし、東條はクロスした両腕を腰に下げてから左手を正面に突き出し、それぞれカードデッキをベルトに装填。東條がタイガの姿に変身するその横で、木村はカメレオンの特徴を持った黄緑色の戦士——「仮面ライダーベルデ」の姿へと変身した。

「……ハッ!!」

タイガとベルデは同時に水面に飛び込み、ミラーワールドへと突入すると同時に戦闘を開始。タイガが振りかぶった拳をベルデが受け流し、タイガに向かってハイキックを炸裂させていく。

アビス vs 王蛇。

タイガ vs ベルデ。

それぞれ異なる場所で、ライダー同士の戦いは再び始まってしまった……

T o b e c o n t i n u e d ……

## エピソード・??? 4

『鋭介の妹さんって、どんな子だったの?』

『……唐突にどうした』

ドゥーエが二宮にそう問いかけたのは、エクシスと対面する前の事だった。

『ほら、あなたって確か妹がいたんでしよう? 妹がいる者同士、どん

な子だったのか純粹に気になっちゃって』

『手を組んでる者同士として、話さなきゃいけない事か?』

『知りたいなく、お姉さん気になっちゃうなく』

『本当に面倒臭えなお前って奴は』

そんな事を知って、この女に一体どんなメリットがあるというのか。それが理解できず首を傾げる二宮だったが、ついさつき彼女に自身の過去を伝えたばかり。後から問われるくらいなら今の内に話しておくべきかと、面倒臭く思いながらも素直に教える事にした二宮だった。

『……少なくとも、妹が俺にベツタリ引っ付いてた事は覚えてる』

『ふくん、お兄ちゃん子だったのね。そんなお兄ちゃん子の妹さんを、

鋭介が面倒見てあげてたんだ』

『手間のかかる妹だったがな……ただ』

『ただ?』

幼少期に家族を失った為、家族との思い出は少ない。そんな二宮でも、明確に覚えていた事があった。

『いつだったか……アイツが俺に言った事があった』

何故そうまでして自分から離れようとしなのか。いちいち引っ付いて来て鬱陶しく感じた自分がそう問いかけた時、彼はこう返されたという。

『1人だと寂しくて死んじやいそうだから……だとさ。全く、俺には到底理解できない話だよ』

そんな彼の妹——二宮梨花が生きていた時間軸では……

「——でやああ!!」

「オラアツ!!」

ミラーワールドでの戦い。川の水がサラサラと流れる川沿いの道

を戦場に、アビスと王蛇は互いの武器で激しく斬り結んでいた。振り下ろされて来たベノサーベルをアビスセイバーで受け止め、そこに王蛇が蹴りを加えてアビスを怯ませる。

「ぐっ……はあぁっ!!」

「おう!? フツ……ハハハハハ!!」

一撃喰らえば一撃返す。その繰り返しで幾度も発生する中、アビスは少しずつ体力を消耗していた。それに対して王蛇は体力を消耗するどころか、むしろ楽しそうに高笑いしながら連続でベノサーベルを振るい、その攻撃の勢いはどんどん増していく一方だった。

「やっぱり楽しいよなあ、ライダーの戦いは……!!」

「ツ……私はちつとも楽しくありません……!!」

アビスの首元にベノサーベルが、王蛇の首元にアビスセイバーが突きつけられた状態で、互いの動きがピタリと止まる。相手の一瞬の間を狙う為に2人がジリジリと動く中、楽しそうな口調で語る王蛇の事が、アビスはまるで理解できなかった。

「どうして……どうしてあなたは、そんなにも戦いを求めるんですか？」

「あ? 急に何だ」

「何故あなたは……そんなにも簡単に、人の命が奪えるんですか!!  
あなたのせいで、今までどれだけ多くの人が辛い思いをしたと……!!」

戦いを貪欲に求める王蛇に対し、怒気の含んだ声で問い詰めるアビス。彼女は知りたかった。彼は何故そんなにも酷い事ができるのか。何が彼をそんな風にしてしまったのかを。

「……お前も。どっかの馬鹿みたいな事を言い出すのか」

もつとも、この男に対してその問答は無意味にも等しかった訳なのだが。

「腹が減るとなあ、イライラするんだよ……イライラして、また腹を満たしたくなる」

「その為に、罪を重ねるといいますか……!!」

「理由なんてそれで充分だ……いちいち俺に理由を求めるな、イライ

ラする!!」

「うあつ!?!」

アビスセイバーを弾き飛ばされ、ベノサーベルを突き立てられたアビスが地面を転がされる。先程までの楽しそうな雰囲気から一変し、苛立った様子で突撃しようとする王蛇を前に、アビスは仰向けに倒れた状態からアビスバイザーにカードを装填する。

《UNITE VENT》

『ギャオオオオオオツ!!』

「何……うおあつ!?!」

アビスを守るようにアビソドンが飛来し、一回転したアビソドンの尻尾で王蛇が大きく薙ぎ払われる。そこにアビソドンの突き出た両目から弾丸が連射され、王蛇の周囲を覆うように次々と着弾させていく。

「チツ……あ?..」

そして煙が晴れた頃には、アビスの姿はその場から消えていた。アビソドンもいつの間にか飛び去っており、王蛇だけが1人取り残される形になった。

「ハッ泣けるぜ……アアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!!」

少しだけ笑い声が漏れた後、すぐに獣のような雄叫びをかます王蛇。戦いへの欲求が収まる事はなく、彼はただひたすら周囲の建物をベノサーベルで殴りつけ、苛立ちのままに破壊の限りを尽くしていく。

場所は変わり、とある公園……

「ハアッ!!」

「フッ!!」

こちらではタイガとベルデの2人が、激しい戦いを繰り広げていた。タイガの振るったデストバイザーをベルデが両手で上手く受け流したり、ベルデが繰り出した蹴りをタイガがデストバイザーでしっかりガードしたりと、互いに一步も譲らない戦いになっていた。

《STRIKE VENT》

「ハッ!!」

「ぐあっ!?!」

一瞬の隙を突いたタイガがデストクローを召喚し、その鋭く長い爪の一撃がベルデに炸裂する。怯んだベルデは後方のジャングルジムに背をつけ、1枚のカードを左太腿に装備した召喚機——バイオバイザーへと装填する。

《COPY VENT》

「!? 何……ッ!!」

電子音と共に、タイガの姿が鏡像としてコピーされ、その鏡像と一体化したベルデがタイガの姿に変化する。ご丁寧なデストクローも再現されており、今この場に2人のタイガがいる状態となった。

「僕の真似しないで貰えるかな……!!」

「悪いな、これが俺の戦い方だ」

タイガ（ベルデ）がデストクローを構えて走り出し、タイガもデストクローを構えて迎え撃つ。互いのデストクローが互いを斬りつけ合う中、タイガのデストクローを自身のデストクローで受け止めたタイガ（ベルデ）が右足でタイガを蹴りつける。

「ぐっ!？」

「お前は言ってたな。彼女を愛してると」

「それが何かな……!!」

「記憶を失う前のお前が言ってたぜ……大事な人を倒せば、自分は強くなれるかもしれないってな」

「ッ……!？」

タイガ（ベルデ）から告げられた言葉に、起き上がろうとしたタイガの動きが止まる。彼が告げた言葉の内容に、僅かに引っかかりを覚えたらだつた。

「何なのそれ……意味がわからない……!!」

「ああ、俺も意味がわかんねえよ。けどな……その意味のわからん事を、お前が自分で言っただよ!!」

「うああっ!？」

起き上がろうとしていたタイガを蹴り倒したタイガ（ベルデ）は近くの滑り台の上まで跳躍し、コピーベントの効果が解除されベルデの姿に戻ってから次のカードをバイオバイザーに装填する。

《HOLD VENT》

「はあ!!」

「くっ……うわあ!？」

ベルデが召喚したヨーヨー型の武器——“バイオワインダー”がタイガの右腕に巻きつき、ベルデが強引く引つ張ると共にタイガの体も引つ張られ、ジャングルジムに叩きつけられる。その拍子にデストクローを手離してしまつたタイガの右腕をベルデが更に引つ張り、タイガの体が大きく回転しながら地面に叩きつけられた。

「デツキを手離せ!! 俺も、お前の命まで奪うつもりはない」

「ッ……嫌だ……僕にはいるんだ……この力が……!!」

「そういう訳にはいかないんだよ……!!」

ベルデが何度そう言つても、タイガは首を横に振って拒絶するばかり。ベルデは頭を抱えそうになるが、バイオワインダーでタイガを引つ張ろうとした……が。

「ッ……こんな時に……!」

バイオウィンダーを装備しているベルデの右手が、僅かに粒子化し始めていた。ミラーワールドでの活動時間に限界が近付いている事にベルデが舌打ちする中、それを隙と見たタイガはデストバイザーを取り出し、右腕に巻き付いているバイオウィンダーを切断した。

「ハアッ!!」

「うお!? くっ……!!」

そのままデストバイザーを投げつけ、命中したベルデが滑り台から落下するも何とか着地。斬りつけられた胸部装甲を右手で払いながらタイガの方を見据える。

「彼女と愛しているというのなら、なおさら彼女から離れる。悲劇が起こる前にな」

《CLEAR VENT》

「待て!!」

タイガが後を追おうとするも、その前にクリアーベントを発動したベルデは姿が透明になり、その場から姿を消してしまった。1人取り残されたタイガは、ベルデから告げられた言葉が頭から離れなかった。

『もしお前の記憶が戻る事があれば、お前の身近にいる彼女が危ないからな』

「ッ……僕は……」

違う、そんなはずはない。

自分は彼女を、二宮梨花を愛している。

それなのに彼女を手にかける理由なんて。

『記憶を失う前のお前は、そうやって大事に思っていた人間を、自分の手で殺めてる。彼女だってきつと例外じゃない』

「……………うるさい」

『お前が危険過ぎるからだ』

『お前は既に、人の命を奪っている』

「違う……………僕は……………!!」

『彼女と愛してるといふのなら、なおさら彼女から離れろ。悲劇が起ころる前にな』

「違う……………違う、違う、違あう!!!」

そんな話とても信じられない。

きっと彼はデタラメを言っている。

彼が自分を揺さぶる為に騙しているだけだ。

タイガは否定しなかった。

彼がこうも強く否定し続けるのには理由があった。

『お前には嫌と言うほど苦勞させられた。英雄に相応しくないだの何だのと、な』

英雄。

そのたった一言が、ずっと彼の頭の中から消えようとしなかった。その引つかかりのせいで、ベルデが言った事が真実なのではないかと。

心のどこかで、そう思ってしまったている自分がいた。

「ッ……違う、僕は……僕はあ!! う

ああああああああああああああああ!!」

不安を晴らしたいが為に。デストバイザーを乱暴に振り回し、ジャングルジムを、滑り台を、ブランコを、周囲にある遊具を苛立ちのまに斬りつけていく。

それでも、彼の中の不安が消える事はなかった。

「あ、悟さん。お帰りなさい♪」

その後。ミラーワールドから帰還した東條を出迎えたのは、自宅で彼の帰りを待っていた梨花だった。先程まで浅倉と戦っていたというのに、それを感じさせないかのような明るい笑顔を浮かべながら、梨花は玄関に立っている東條の元へと歩み寄る。

「……悟さん？」

「はあ……はあ……」

呼吸が荒く、俯いたまま動かない東條を見て、彼の様子がおかしい事に気付いた梨花。彼女が東條の顔を覗き込もうとしたその時……

「……違う、僕は……僕は……ッ!!」

「え……ッ!？」

梨花は目が大きく見開いた。突然東條が顔を上げたかと思えば、いきなり梨花の手を掴んで引っ張り寄せ、彼女にキスして来たからだ。

「ん、ちゅ、んむう……ッ!!」

いきなりの事に驚いた梨花は東條を引き離そうとするも、東條は彼女を抱き締めたまま離そうとしない。無理やり舌を入れ込んだ彼女は彼女と何度も舌を交え、貪るように唾液を求め続けた。

「ぶはっ!! さ、悟さん、一体どうし……ひゃん!?!」

唇が離れた途端、東條が梨花を床に押し倒し、彼女が着ていたシャツが捲られ、下着も無理やり剥ぎ取られた。そうして露わになった彼女の乳房に東條が顔を埋める。

「あん!?! さ、悟さ……んん……ッ!!」

乳房を激しく吸われ、何度もしゃぶられるたびに梨花の口から嬌声が漏れ出す。その間も東條の手は彼女の履いているスカートの中に手を入れ、純白のショーツを脱がせていく。

「ひゃう!?! さ、悟さん、せめてベッドの上で……んひう!!」

ショーツまで脱がされ、スカートを捲られた梨花は東條から離れようとすることも、四つん這いの体勢になったところに東條の固く勃起した肉棒が挿入された。もちろんそれで終わるはずもなく、東條は梨花の腰をがっちり掴み、バックの体勢でピストンを開始する。

「梨花ちゃん、梨花ちゃん……!!」

「ひゃ、んう、ああっ!! 悟、さ……んああっ!!」

梨花は困惑を隠せなかった。自分達はこれまで何度も行為を行っているが、彼がこんなにも乱暴に行為を迫って来た事は一度もなく、行為中もちやんとこちらに気を遣ってくれるくらいには優しかった。だからこそ、彼がこちらの意志を無視して無理やり犯して来るなど、梨花は信じられなかった。

しかし、それでもわかっている事はあった。

「はあ、はあ……梨花ちゃん、好きだ……!!」

「ん、あ、ああっ……!?!」

梨花を犯している東條の呟き。耳元で呟かれる彼の言葉が、梨花の思考を鈍らせた。

彼が自分を愛してくれている。

こんなにも愛してくれている彼を、彼女は拒む事ができなかった。

「梨花ちゃんは、僕のものだ……梨花ちゃんは、僕のものだっ!!」  
「~~~~~ッ!!」

東條がズンと強く突き入れた瞬間、梨花は電撃のような強い衝撃が全身に走り、背筋が反り上がった。彼に背後から強く密着される中、彼女の子宮には熱い物がドクドクと流し込まれていく。

(出てる……悟さんの、熱いのが……ッ!!)

背後から東條に強く抱き締められる中、東條が梨花の首筋に何度もキスをする。梨花もバックで犯されている体勢から首を後ろに向け、彼と熱いキスを交わす。

「梨花ちゃん、梨花ちゃん……ッ!!」

「悟、さん……んん、んう……!!」

一度射精してからも終わる様子はなく、東條は梨花を仰向けにさせてから再びピストンを再開。彼に無理やり犯されているにも関わらず、梨花は「彼に愛されている」という想いから、彼を拒む意志を見せる事もなく、彼の愛をひたすらその身で受け止め続ける。

誰から見ても異常としか言えないであろうこの状況。

しかし、これを止めてくれる者はこの場には誰もいない。

東條の暴走が収まるのには、まだしばらく時間が必要なようだった。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:  
:  
: